六月一日發行

女學世界





美顔水
お化粧上手の方に尋ねよ
素顔特別美しき方に尋ねよ
答はきっと
白粉溶くに
美顔水！
化粧美が
思ふまゝ
朝夕つかふ
美顔水！
素顔美が
思ふまゝ
桃谷順天館製

イヨ〱夏も近づけり！

三越の陳列場もすべて夏らしくなれり。

夏らしい着物、羽織、帯地、半襟などを始めとし、夏らしい洋服、夏らしい洋傘、夏らしい帽子、夏らしい櫛笄、夏らしい化粧品、夏らしい寫眞は、夏らしくなれる三越へ御出で有之候はゞ、早速相辨じ申べく是非〱御來觀のほど奉願上候

中形浴衣地陳列會は六月一日より開會

東京駿河町

三越呉服店

女學世界 第拾壹巻第八號 六月號目次


牛乳で洗ふと
美しくなるといふのは
昔の事！
御料洗粉
初夏の新緑に映えて
美しい素顔を
いとゞ美しくなすのは、
牛乳浴にも増した
この御料洗粉ばかりです。

本書は造花技術の基礎に重きを措き著述せるものにして著者多年の實驗と考案とを網羅し百數十個の解說圖を挿入し染色法、鏝當法、組立法、其他種々の秘法便法を剩す所なく親切叮嚀に且最も平易に說明したるものにして眞に造花秘密の鍵を讀者に提供するものなり故に初學者と雖も一度本書を繙かば忽にして妙技神に入り優美艶麗佳香馥郁たるを疑ふ底の造花は立所に床上机邊を飾り四季の美花は時を撰ばず其欲する所に隨ふて之を得べし

◉跡見玉枝女史畫　◉吉住春子著

實用 造花自在

總クロース仕立
金文字入頗美本
定價金壹圓廿錢
郵稅金八錢

本書目次の概要を下に
掲ぐ以て其全斑を推せ

總論●器具●花瓣の材料●葉の材料●莖枝の材料●蕊蕾實の材料●蕚の材料●染料●藥品及雜品●植物各部名稱◉基礎技術◉染色法●染料配合法●寒冷紗染方●絹物染方●天鵞絨及フランン天染方●木綿及絹布媒染法●葉染法●紙染法●摺込暈及吹暈法●艶出法●絹布糊引法●針金伸し及紙卷法●綿保製作法●花粉製作法●毛蕊製作法●紙蕚製作法●花瓣の手絞り法●葉の手絞り法●瓣及葉の刻み方●瓣型及葉型を作る法●鋸齒狀の葉を切る法●丸鏝瓣鏝菊鏝筋鏝縁鏝馬鏝櫻鏝等の使用法●綿粉及姫糊粉製作法●花瓣を葺く法◉實地製作法◉白梅●菫●蒲公英●八重櫻●桔梗●花菖蒲●山吹●藤●牽牛花●紫苑●蝦夷菊●庚申薔薇●天竺牡丹●亂菊●椿●鹿の子百合●ばら●紫陽花●紅葉●蔦●牡丹●遊蝶花●芙蓉●木蓮等の製作法◉花簪の製作法◉應用製作圖案◉福壽草●シネラリヤ●桃●海棠●葵●けし●紫雲英●芍藥●鈴蘭●葡萄●鐵砲百合●スイトピー●ノーテンハレン●コスモス●ライラック●チューリップ●アネモネ●萩●忽忘草●ホクシャ●山茶花◉撫子●秋海棠●女郎花●水仙●南天●菊●霧島躑躅●菜の花●美女櫻●其他十數種

本書內容見本入用の方は五錢　弊店營業目錄入用の方は四錢　內容見本營業目錄共入用の方は七錢郵券封入東京九段坂吉住商店宛申込あれ

●發行所　東京市九段坂　造花原料商　吉住商店

郵便私書函九段局十番
特長電話番町二五〇六番
振替東京六六七九番

(其の二)

女(いの二)

女(いの三)



入會の最好機

女子大學家政講義學科及講師

▲修養談
▲修身講話
▲教育
▲實驗心理學
▲兒童研究
▲法制大意
▲經濟大意
▲社會衛生
▲家庭理科
▲家事
▲作法
▲日本料理
▲西洋料理
▲裁縫手藝
▲生花
▲家庭園藝
▲自然研究
▲文藝
▲文學評釋

其他科外として地理歷史講話、家庭處生顧問、童話研究、文學美術、生理英詩文、等家庭及婦人問題に關する講話等隨時掲載す

諸名士教育家
日本女子大學校長 成瀬仁藏
日本女子大學校學監 麻生正藏
京都帝國大學文科大學教授 文學博士 松本亦太郎
東洋大學講師 高島平三郎
日本女子大學校教授 法學博士 奥田義人
會計檢査院部長 文學士 中隈敬三
東京帝國大學名譽教授 醫學博士 三宅秀
東京女子高等師範學校教授 近藤耕藏
日本女子大學校教授 井上秀子
日本女子大學校教授 小笠原清務
日本女子大學校教員 笹本幸子
日本女子大學校教授 手塚かね子
日本女子大學校 櫻楓會研究部
日本女子大學校教授 兒島文茂
日本女子大學校教授 東京高等師範學校教授 農學士 佐々木祐太郎
日本女子大學校教員 大橋廣子
日本女子大學校教授 文學士 武島又次郎
日本女子大學校教授 文學士 古村英

會則附き 內容見本申込次第進呈

發行所 東京小石川區久堅町 精美堂 電話番町九三二 振替東京二八三八

女(ろの三)


千代田
香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
價（特製七十錢 大瓶卅五錢 中瓶 廿五錢 小瓶 十七錢）
發賣元 東京市馬喰町 山岸三之助
電話浪花三七九三番
振替東京二〇五〇〇番


純良なる家庭用浮石鹼
▲定價 二個綴（壹本） 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇番
純白
浮き
スワン石鹼

女（ろの四）

親しき友より



肺病患者に警告す

醫科大學藥學專攻
藥學得業士　金澤嚴

肺病は難治の疾病にして病理診斷等の幼稚なる時代に於ては殆ど不治の病と稱せられたり此習慣久しくして今日尚必死と信ずる人多く教育ある醫師と雖も患者が肺病の診斷を以て死の宣告となし失望悲嘆するを恐れ最末期に及び治療の目的なきに至り始めて實を告ぐる事多し故に輕症時代に患者は其覺悟に充分攝生服藥せず又家族は平素消毒豫防せず爲めに一家傳染滅亡する事多し是實に大なる迷信にして此考への爲めに生ずる人生の不幸は極めて多大なりとす不肖往年肺病に罹り一時は不治と決心したるも多數の成書を涉獵し大に悟る所あり現今醫學上の方式を原則として自ら實驗に實驗を重ね攝生療養に力を盡し又藥化學上の原理を應用し一新藥を發明し終に自個の病軀を全治し舊倍の健康を得るに至れりその藥物を**キニトール**と號し發行せるに既に幾千通の全治輕快の報告實證を受領せり爾來十箇年間に於る學界の進歩と實地の經驗を鑑み數次の改良を經て『**第三キニトール**』を發行せり此新藥は少くとも現代に於ける理想的肺病治療藥にして消化器を害せず食氣を進め全身の營養を增加し精神を爽快にし熱を去り痰を切り咳を鎭め肺病の各症狀を寬快し病原菌を擊退し漸次體量を增加し全治に至らしむるもの也同病患者にして一度使用せらるゝ時は自覺するを得べし尚委細は東京市下谷區上根岸町金澤嚴宛御申込ある時は報告と同時に詳細の養生書一冊を進呈すべし（文句の盜用嚴禁）

女（はの一）

羽仁もと子主筆

婦人之友

六月一日發行 第一號 一冊金十五錢 郵税一錢五厘 六冊前金九十錢（十二冊一圓七十五錢）郵税共

◉如何なる結婚が最も幸福なりや
其一 小崎千代子 其二 三輪田眞佐子 其三 栗塚龍子 其四 棚橋絢子
其五 山脇房子 其六 有島幸子 其七 小此木信六郎 其八 金子筑水
其九 海老名みや 其十 木下尚江
（十大家の穏健適切なる意見）

◉夫の放蕩に苦める妻へ……綱島佳吉
◉娘に家事を手傳はせよ……井深花子
◉嬰兒を泣かせずに育てる法……羽仁もと子
◉家を上手に持つ工夫……羽仁もと子

▲私の見た西洋の家
▲唱歌に合ふ新式の舞
▲吉事の訪問と贈物は
▲留守居の心得（女中訓）
▲六月の惣菜（三十日分献立）
▲家政問答（質問隨意）

◉理想の生活（花子の巻）巻頭を飾れる一大文字……羽仁もと子

◉結核は子供に一番多い……醫學博士 加藤照麿
◉袴を恰好よく縫ふ工夫……齋藤春代
◉一圓五十錢で出來る夏の丸帶……柳子
◉甘羹は斯うすれば上手に出來る……

（畫報）
▲初夏の富士（大下藤伯）
▲若き主婦の一日
▲鬼ごつこと隱れんぼ
▲子供の笑顔三十種
▲愛兒の發達（日本と西洋）
▲薔薇の園（今や滿開）
▲養蠶のいろ〳〵
▲女中の仕事いろ〳〵

◉女（雪嶺博士は毎號本誌に執筆せらる）……文學博士 三宅雄二郎
◉夫婦論（結婚の準備時代を如何に過すべきか）……羽仁もと子

▲誰でも出來る懸賞問題
▲臺所改良の工夫を募る
▲寢冷知らずの案を募る
（一等、二等、三等）（十圓、五圓、二圓）詳細本號を見よ

東京市小石川區雜司ケ谷町 婦人之友社 振替貯金口座東京一一六〇〇番

女（はの二）

美術 造花材料

三國屋

▼半製品、鏝、打抜類

関口商店

東京淺草區駒形町十四番地
振替貯金……一一六四二番
電話下谷四〇五一番

（御一報次第定價表進呈）

竹柏會は佐佐木信綱氏指導のもとに清新なる和歌に志ある人々のため添削質疑に應じ又毎月一日雜誌『心の花』を發行す入會規則書は郵券二錢『心の花』見本は郵券十二錢を送られなば直に發送すべし

東京神田小川町一
電話本局二一一四

竹柏會

やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの方に害なく●やせて●中肉美容となる新藥なり試みたき人は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市小石川區第六天町一七

池田製藥所

第十二回

新學期開講

通信教授
産婆看護

講習生募集

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

規則要郵券三錢

東京四谷區内藤町一ほノ七

東京産婆看護婦講習會

産婆科六ヶ月卒業
看護科四ヶ月卒業

美術



果實



造花

通信教授

二ヶ月卒業遠國の自宅に在て誰でも和洋造花●花かんざし六十種の果實標本等は美麗に出來ること保證す販路は擴大にして年中無休相當收益あり●案內書附製品見本は造花でも果實でも郵券十二錢送れば直に送呈す

東京四谷區麴町十二ノ九

美術造花傳習所

女(はの三)



獨逸ライロホーン
ウエルケ會社
東洋總代理店
三光堂
明瞭で丈夫な音譜を持てる人は必ず幸福なる家庭を作る!!!
第一回新着象印スタクトーン兩面盤は世界無比
吉住小三郎ノ長唄
海軍々樂隊ノ新曲樂隊
竹本染太夫
豐竹古靭太夫
竹本叶太夫
竹本朝太夫
竹本小清
ノ義太夫
橋岡久太郎
觀世喜之ノ謡曲
吉原、新橋藝妓ノ小唄
〆子、丸子ノ清元
芝金、貞右衛門の哥澤
重友、圓車ノ浪花節
圓太郎、小さん、小せんノ落語
○廉價なる和製片面盤も多數出來揃ひ申候
本店 東京市銀座一丁目 電京(九七九番
九七八番)
支店 (東京市淺草北木町……長電下九八八番
福岡市博多下西町……電話五〇一番
北海道小樽區色内町……電話三二三番)
定價表目錄御一報次第進呈

女(はの四)

嫁ぐ人



萬代恒志筆

六月新華號

婦女界

◎自覺せよ若き女……内田魯庵

▲不健全なる忠孝論を排す……慶應義塾敎授・向井軍次

▲如何なる音樂が家庭に適するか・・理學士・・田邊尙雄

▲苦鬪廿餘年に亘る婦人問題…・女子學院長・・矢島揖子

△海外婦女界

△英詩「夏」仙石

△家庭の實驗

閨秀小說「妹」……國木田治子

懸賞募集 詳細本誌に在

◎西洋の家庭は家族主義より成る 文學博士姉崎正治

▲共公事業に活動する西洋の娘……女子英學塾・・河井道子

▲家庭に於ける佛光寺裏方…△夏季の裝飾洋服の扱方

▲情史に見えたる貞婦…大倉桃郞△故鄕の情味吉岡奎海

娘に對する親の希望

鎌田榮吉—宮田脩—井上博士—
大山夫人—横井博士—中川校長
—阿部夫人—森村翁其他四大家

◎最も恐るべき子供の惡癖…高島平三郞

二頁大彩色石版庭の花 井川洗厓

極彩色石版美人草 大下藤次郞

一冊十五錢
六冊九十錢
十二冊一圓七十五錢

東京神田區表神保町
同文館
振替口座東京一三五

（にのオ）

婦人世界

六月一日發行 六巻第七號

一冊 拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢

東京京橋南紺屋町

（振替貯金口座三二六番）

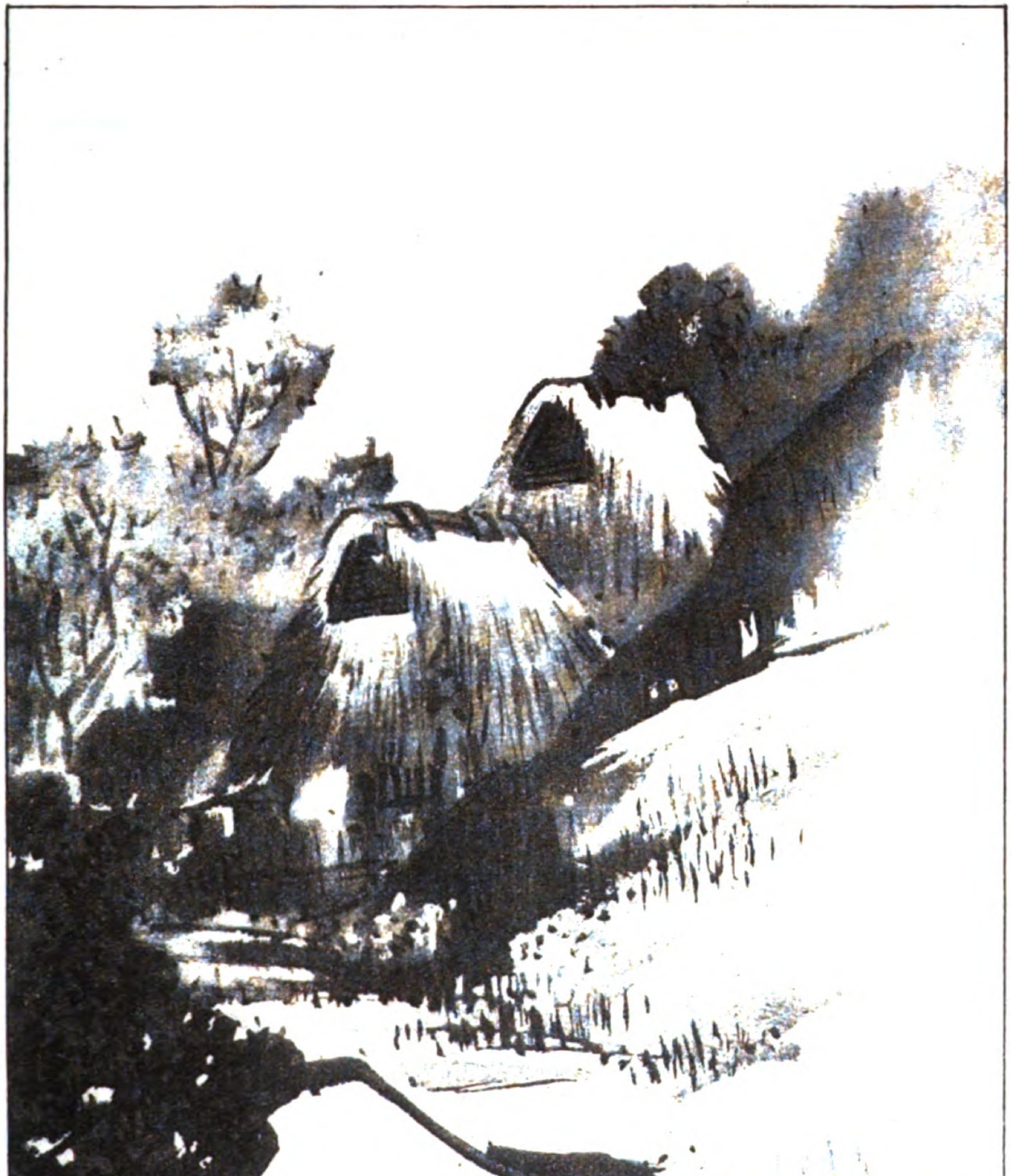
實業之日本社

女（其の三）

若あし



新樹




造花材料
撫子と石竹とは、何處が異つて居るのでせう? それは……イヤ云はぬが花。造花と共に御研究は今日此頃!
東京横山町一丁目
合資會社 天野卯兵衛商店
振替東京四九七〇番
金三拾六錢を添へて申込給へ造花案内を送付す

女(ほの一)

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇效ありとの賞讃好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奧なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有效成分を檢明し生毛に關する諸說を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其效能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き賣藥山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞著品の比に非らず、左れば普通に醫師の處方する莞菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて效なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●●取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ●●●●

三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京貳參壹壹
電話 刈谷三拾貳番

本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市
本鄉六丁目赤門前 瓜生藥局
麴町區紀尾井町三 齋藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 森田藥局
芝田町四の一二 加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
赤坂田町四の一 竹內藥局
同 青山北町五 四井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ッ谷大傳馬町二 永野藥局
神田旅籠町一ノ一 瓜生支店
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角
京都市下京區五條通り富小路行當り

大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 荒川長太郎
高松市片原町 新明藥局
神戸元町一丁目 西村關更局
廣島市橋本町 萬代藥堂
神奈川青木七軒町 水崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市菱屋町 磯崎藥局
福知 藥局
安江洋 反物店

らい病

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無れば決して他へ知れることなし安心服用あれ●

ザノサール 一ケ月分 貳圓
强力ザノサール 一ケ月分 參圓

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其效驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ケ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救濟せんとする主趣に基き發賣する者にして無效なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其效能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京貳參壹壹
電話 刈谷參拾貳番

本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

◎◎産婦人科 小兒科

宅診 午前
往診 午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長 女醫 鷲山改姓 吉岡彌生

東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院

電話番町（二三五七）

女（ほの二）

婦人畫報

六月一日發行

六月の巻　一冊 廿五錢　郵税二錢

六册税共壹圓五拾錢　二册税共貳圓八拾八錢

畫報

各女學校の遠足

▲古遠州流と松月古流の生花大會

▲閨秀書家跡見玉枝女史の祝賀會

初夏の眺：滿谷國四郎氏筆二色版二頁大美人畫

▲女子大學の記念樹栽培と餘興の遊戲

徳川時代の婦人風俗

▲東京市養育院巣鴨分院の兒童表頌式

▲精養軒の跡見女學校卒業生同窓會

保科武子夫人の盛裝

▲淑徳婦人會と淑徳女學校同窓會光景

▲上村松園女史の揮毫と西洋婦人樂燎

北白川宮女王殿下御登校

▲學習院女學部同窓生の集合と舞踏

▲原六郎氏の庭園と室内裝飾

愛國婦人會の總會光景

▲遞信省遞友會女子會員の大運動會

▲宮崎縣高等女學校生徒の東京見物

田園生活初夏の一日

▲洋裝の兒玉夫人と門野夫人

庭園に於ける毛利公母堂と九條夫人

▲鳴海絞の洒し方と絞り方

▲東京育成園の記念會▲其他種々

令孃鑑▼▼**新郎新婦**

讀物

家庭論……文學士 今井政吉

●歐米女學生の美風……文學士 河井道子

●螢狩……瀨川克三

健全なる婦人思想……文學博士 井上哲次郎

●夏姿……長谷川時雨　●自炊生活……ふみ子

現代婦人に警告……法學博士 浮田和民

●初めての嬉しさ……岡田八千代

●名婦鑑……松風村雨……遠山稲子

英國婦人觀……普通學務局長 田所美治

●家具の手入れ……宮川壽美子

●經濟で便利な火おこし竈……手塚かれ子

結婚と參政權……文學博士 建部遯吾

婦人と旅行……文學士 下田次郎

不良少女と家庭……法學博士 小河滋次郎

●和歌入門……文學博士 佐々木信綱

●小兒夏向のマント……杉山しま子

嫉妬の話……文學士 源良英

●料理……吉村里子　●懸賞和歌當選

その日〳〵……三宅花園

皇后陛下の御歌……

●六月の花……はな子●流行

●彙報其他有益なる記事滿載

東京麹町區飯田町四丁目四番地　**東京社**　電話番町二三三九番　振替口座一一八一八番

女(ほの三)



大學は
最高の學府也
大學白粉は
最上の化粧料なり
若し博識を得んとせば最高の學府に學び美人たらんと欲せば宜しく「大學白粉」を愛用せられよ學術の淵叢たる大學の大家に因つて製煉せられたる「大學白粉」は眞の婦人美を發揮する純正の無鉛白粉にして、毫も鉛毒の恐なく他の無鉛白粉の如く肌を荒らすことなく良く伸びて乘りよくお召物の衿に着ず、芳香頗る高尚なり

寺内伯爵家の新粧



陸軍大臣伯爵寺内正毅氏令息壽一氏（陸軍砲兵大尉）同夫人須恵子（貴族院議院得能通昌氏令嬢）

夫人と令嬢



加藤子爵令孃和子

兒玉貞雄氏夫人しづ子（男爵中村雄次郎氏令孃）


使用すれば
光輝と薫氣を放つ
都の花石鹼
芳香の高雅にして品質の純良なるは、紳士淑女の愛用と名譽の金牌とに依り知らる。
大阪
野村製

女へへの二

六月の巻出でたり

新婦人

第一年第三號 定價一冊貳拾八錢郵税貳錢五厘
六冊郵税共金一圓七十錢

華燭の夜

可憐解語の花今夜何人の為にかひらく

コロタイプ實寫眞

見るもの概目

花籠 石版極彩色油繪……河村清雄筆

天然色 花か蕾か 額面用……波々伯部金洲筆

高貴御肖像

盛裝したる宮中女官

リッチモンド公園に於ける歌川若栄女史

女流木版彫刻師 大倉きみ子女史

重役を罵しれる女事務員 米田雪子

爵令嬢 洋装の戸田伯夫人

顧眄情くな蘂子爵令嬢

單衣姿の德川伯

音樂家 柴田環女史

其他 百花絢爛 名流の令夫人令嬢 百二拾餘圖

讀むもの概目

女の見たる女……小島文子

女事務員より見たる銀行員……米田雪子

夏季に於ける化粧秘傳 藤波芙蓉

女房は古いに限る 佐藤博士

良妻賢母と高等教育 大隈伯爵

予は如何日本婦人を見るか 藤原代議士

清少納言とは如何なる婦人か…… 尾島菊子 長谷川時雨 岡田八千代

掃除は目でして手でするな 幸田博士

首や胴を切こさざく趣味……大倉君子

附録 家庭日記

六月分 温度表・晴雨表・献立表・來客簿・舊暦附

懸賞案件 懸賞書簡文

女(への三)

發行所 東京本郷區龍岡町 振替東京三〇五八 聚精堂

賣捌所 全國の書林 各地雑誌店 到る所

化粧香水

プラチナ



定價 一瓶 三十錢
▼郵券代用一割増 遞送無料

八方美人の香水！

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は

◉ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

◉微温湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

◉頭髮に塗抹すれば毛髮を養ひ香氣馥郁油の代用をするのみならず髮のくせを直し赤毛白髮を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

東京日本橋横山町一丁目

發賣元 近江屋 天野源七

浪花八六三三番 振替口座五九三三番

宮内省御用達

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

天下一品

最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

女(への四)

山本伯爵家の新粧



海軍大將伯爵山本權兵衛氏令息清氏（海軍中尉）同新夫人和子（上村海軍大將令孃）

若尾家の結婚式



甲府の素封家若尾家の令息謹之助氏に陽春四月の吉日を卜し、陸軍大將子爵西寛二郎氏令孃春子と合巹の式を擧げられたり、媒妁人は豊川良平氏夫妻副媒妁は小池國三氏夫妻にして、圖は即ち式場の光景也、向つて右より新婦春子の君、新郎謹之助氏、副媒妁小池氏、若尾母堂、若尾父君、叔母みわ子、叔父保重郎氏、伯母いち子、新婦令兄虓男氏、西令夫人、西大將。


最上醬油
元祖
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番



女(その三)

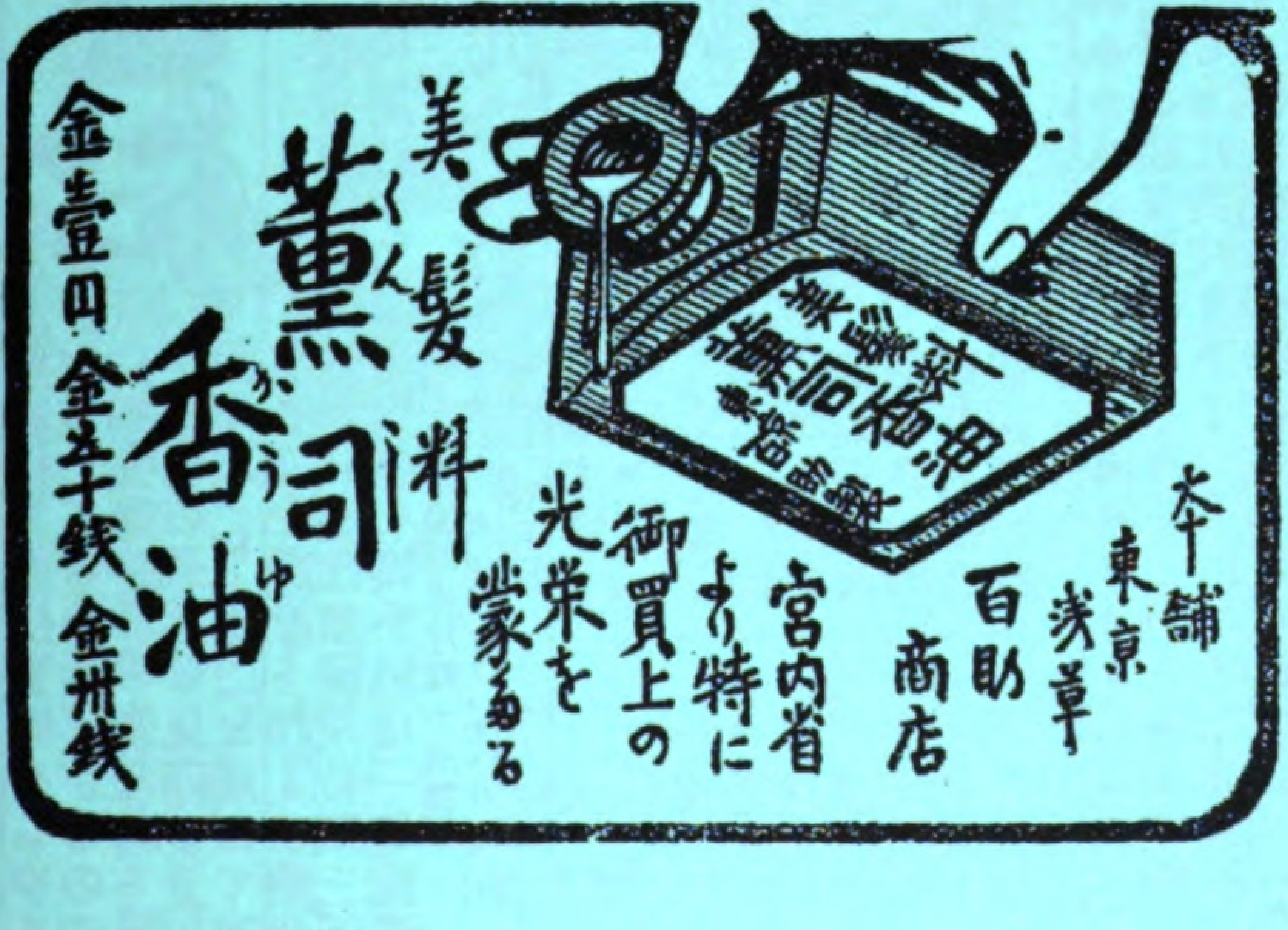
奥様の心懸●●●家庭の平和

花嫁

主人は宅の料理は不味い〳〵と申ます。妾も此内へ参りますまでは料理なんか致した事は有りませんがドーシタラ主人が喜ぶでせうか心配で成りません

料理通

素人の家庭では御料理を成さるに大抵主に砂糖をお用ゐでせう牛鍋や鳥鍋を成さるにしても砂糖は鍋に(こげつき)ますが其代用に味淋を使へば其心配がなくて第一、味は牛屋や鳥屋でお喰べになると同様においしく戴けます魚肉や其他總てのお菜を煮るにしても味淋を使へば味は料理屋の様に甘味たべられますます上等味淋は流山の**万上味淋**に限ります瓶詰、樽詰も有りますから是非御試めしなさい御主人も必ず御喜びになる事請合です。



樂手と優人



上圖はオペラの名優エムマカルベ孃、下圖右は同じ名優フランセスサビール夫人、下圖左は伊太利樂の名手リリアンノルデカ夫人

令嬢かゞみ



中圖は法學博士岡村輝彦氏令嬢幸子、左圖は元行政裁判所評定官平尾敬三郎氏令孃孝子、右圖は某名家の令孃。

面白い程早く上達する習字通信教授

筆蹟の美は容貌の美に優る

女子會員募集

假名 實用文字 六ヶ月卒業

●書者 小野鵞堂先生 玉木愛石先生 稲川雲谿先生 外講師數氏

見本 詳細會則 無代進呈

東京本郷大學正門前
電話下谷三三〇一番
電話下谷三三一〇番

帝國習字速成學會

文部大臣秘書官 赤司鷹一郎君序
東京女子高等師範學校長 中川謙二郎君序
一戸いせ子女史著

正價五拾錢 送料六錢

再版 實驗

家庭料理法

▲本書が一冊あればどんな珍味馳走にも困らない

執筆畫伯
川端玉章先生 寺崎廣業先生 梶田半古先生
河合玉堂先生 鈴木華邨先生 外大家執筆講義

專賣特許

繪畫速成帖

送料八錢

筆法説明圖入講義 美濃半紙頒美本 ▲價七拾五錢

東京本郷森川町
文成社
振替壹九四六七番

（ちの一）



コツホ博士撰定

ロード葡萄酒

（赤色ロ 金壹圓
金色ロ 金壹圓五拾錢）

健康と成功と長壽を望む人は佛國製のロードを飲み給へ精分を増し肉を肥し腦神經を健全に肺及胃腸を强壯となし陰萎老衰、貧血、虚弱、冷え症、病後、産後其他凡ての衰弱に可驚特効あるが故に病者は勿論健康者の滋養飲料に適する他に類なき最上葡萄酒なり

直輸入 東京日本橋てりふり町 太陽堂洋酒部

禿、脱毛、薄毛、生際悪き人試みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髭等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區蠣殼町二丁目 山崎愛國堂

婦人へ相談

月やく滯又は不順

等を人知れず秘密に治療せんとするのが女の性癖である、夫故往々有觸れた無効の藥などに迷ふて後日の大病を引起す人が多い、此等の婦女に斯道大醫の方劑を仰ぐと同様最も安心に快通流下する靈藥をお知らせするから、郵券三錢を添へて申込みあれ密封にて詳報す

東京市京橋區金六町三番地 笹山むめの



日本輸入品に限り包裝紙に斜に「アイボリー石鹼」と記入し一見模造悪質石鹼と判別に容易ならしむ御購求の節「アイボリー石鹼」に御注意を乞ふ

東京市京橋大鋸町

女子文壇社出版

振替口座東京壹七貳九番

六月號發賣

『女子文壇』と『少女』は到る處の書店にあり、最寄書店にて内容御覧の上愛讀を乞
（本社にて一月號より取揃へあります）

女子文壇　少女

▲女子文壇▼
毎月一日發行紙數百五十餘頁頗美裝
定價拾五錢送料壹錢半

▲少女▼
毎月一日發行紙數百餘頁口繪挿畫多
定價拾錢送料壹錢

各號高評

特賣書目

◉今の婦人
◉都會婦人
◉地方婦人

各書とも紙數二百餘頁美裝
各特賣價金拾錢送料壹錢半

月さらへ新治療藥

内用 **月經球**……無代送呈

本品は最近の醫界に於て等しくみとめられたる強度の有効原料を配合せる月さらへ專門藥にして北偉大なる藥力は如何に長き月やく滯りも心地よく通經ゞ茲に本品の効能を明ならしむる爲當分の中送料二錢封入申込者へ藥品見本として無代送呈す、一の實驗は百の誇大なる廣告を凌駕す乞ふ他藥を用ひて効なき患者速に申込み如何に確實なる藥物なるかを實視せられん事を疑ふあれば試みに二錢を捨たると思へ

◉月さらへ自宅療法の最も正確安全なる者なり

申込所 大阪心齋橋筋周防町東二丁 樂天堂藥院

井上胡蝶著 生田流

箏曲新譜

最見安き琴の譜本

歌曲

再版卷一 定價送料共一圓三十六錢 代金引替十六錢増
四季の花 門松 鶴の聲 黒髪 六段 金剛石 亂 八段 夕
願新高砂 越後獅子 千鳥 茶音頭 春の曲 小督の曲

歌曲 卷貳

定價送料共一圓十錢 代金引替十四錢増
春日影 朝外出 六段前歌 雛波獅子 末の
契 松竹梅 殘月 秋風 八重衣 飛燕の曲

本書は誰にも彈奏し得る樂譜にて記載し且つ調子の合せ方其他一切の說明を附す曲中の不詳は質義自由なり苟も琴を習はんと欲する人及習ひて忘れたる人は見よ

發行所 福岡市外馬出一一〇三 箏曲通信教授所

女（ちの三）

○子宮病自宅療法と姙娠法

子宮病の一般の容態は、手足が冷え惡寒がする、逆上や頭痛がする、肩凝り眩暈もする、そして內股や腰の邊りに索張る樣な疼痛を覺え、勿論子宮も多少の痛を感じ、下腹が重苦しく條張り、小便に度々行き、或は便通が惡くなり、局部の周圍が痛痒く不潔で惡臭がある、斯くて間もなく（或は初めより俄に）稀薄な水樣の物、又は濃い粘りある膿の樣な下物（白帶下）がする、斯うなると月經は多量になつて、經行前には疼痛を覺え、且月經時で無い時も出血し、白帶下は續いて有つたり無かつたり、而して腰部が何時も痛い、これが永く續くと一生涯不姙となり、辛い淋しい月日を送るばかりか、段々身體が衰弱して、取返へしの附かぬ重症を惹起し、遂には命迄失ふ樣になるのです。

▲子寶を得る最も良法斯樣に子宮病は恐るべき疾病ですから、一旦本病に罹ると、どんなに輕症のものでも、全く根治しない間は何うしても、子供が出來ません、世間には子寶がないと、自分等夫婦には子種かないのだと、斷念めて居る方も尠くない樣ですが、決してそんな道理はない、中には其罪が良人にある事も御座いますが、十中の九迄は婦人方が、本病に犯されて居るのが多いのです、又子宮病の治療は多く手術をいたしますが、手術をすると治りが早い代りに再發し易く、殊に全快した後でも姙娠する事が極て稀で御座います、それに手術を受くるには、身體の餘程强壯な方でないと到底堪へられません、然らば

▲何うするのが一番よろしいかと云に、それは婦人科專門の大家醫學士北畠孝夫先生の御書になりました『婦人病者心得』を讀んで其通りに養生なさるのが、最も安全で最も確實な療法で御座います、此方法によると大概の子宮病血の道は、自宅で容易に根治せられ、御希望通り姙娠が出來ます、皆樣、理窟では病氣は治りません、物は試しと云へば、現に身體に異狀ある方は勿論、何んともなくて、是迄一度も姙娠した事のない方、又は流產難產の癖ある方は、兎も角婦人病者心得を御覽になつて、成程と得心が出來たら、速かに本療法を試みなさい、後悔は先に立たずです。

記者曰く婦人病者心得はハガキにて東京京橋新榮町笹岡省三氏宛申込めば無代送附せらる

令嬢かゞみ

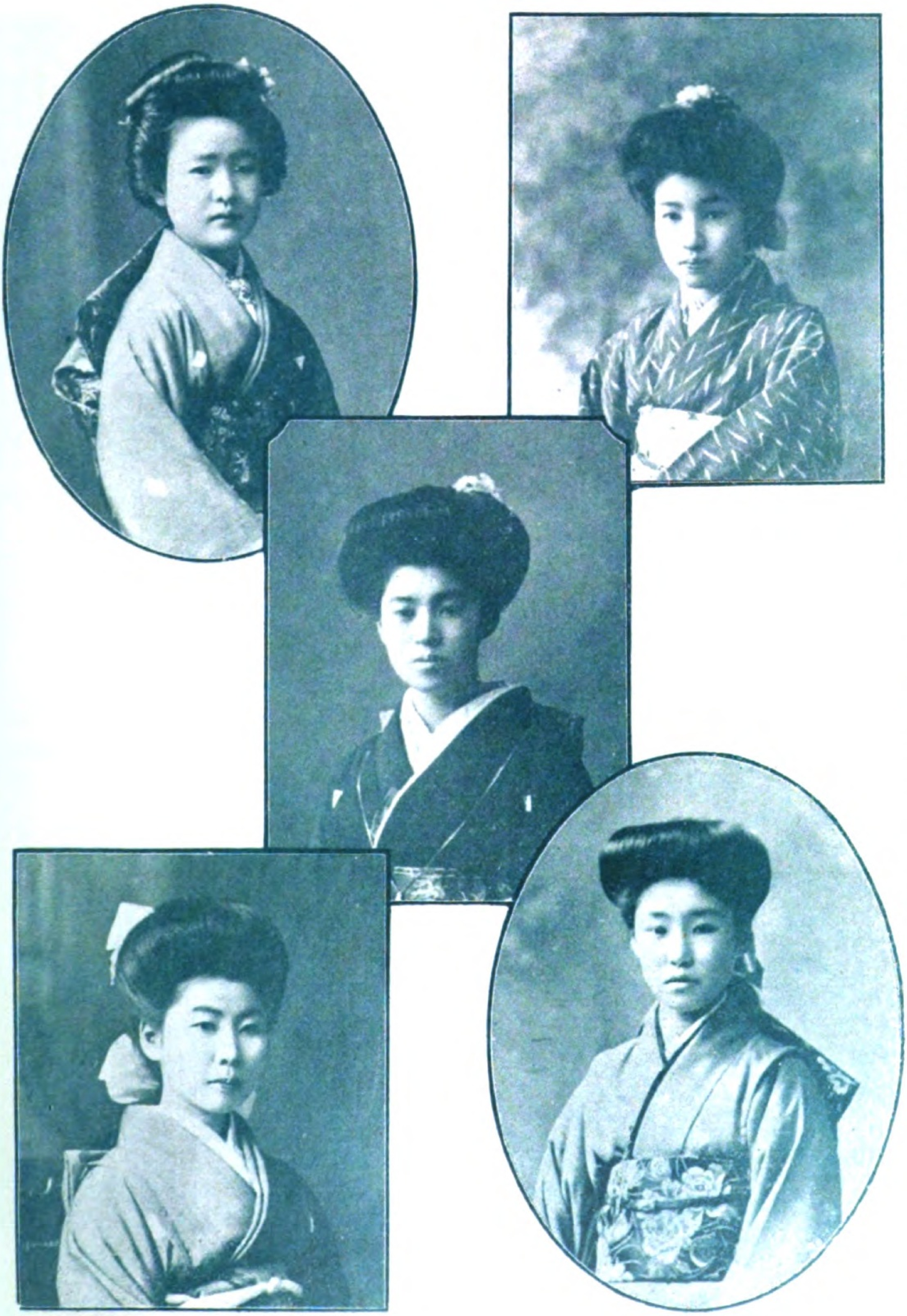






名倉謙三氏令嬢とし子　紳　商（札幌）
明石正三郎氏令嬢喜代子　紳　商（埼玉）
園田實德氏令嬢むめ子　（實業家）

令嬢かゞみ



上段右赤坂藤田繁子、左麻布佃品子、下段右下谷藤田きよ子、左麹町川路文子、中央麹町阪出孝子。

東京朝日新聞にて高評を博せる本誌の盛観!!!

女學生

六月號發行 (正價)一冊 金拾五錢 送料一錢

▼史傳 細川忠興夫人……小倉山人

▲戀覺る迄の少女心……山田邦枝子

●三輪田女學校教師評判記

▲睡眠の話……山田醫學博士

▲破れし夢……山の鳥

●新譯 お梅粂之助 近松原作

▲小説 冬子の日記……江南文三

▲お茶の水の生徒

●都會の夜の巷を彷徨する女 草の花

▲家庭で生れる犯罪の萌芽……寺田文學士

▼教會に入って墮落した女の告白

口繪 石版 木版 寫眞版 數葉入

東京神田旅籠町一丁目 文光堂 賣捌各地到る所にあり愛讀を乞ふ

毎號大懸賞募集あり本誌文藝を見よ

女(りの二)

六月一日より

かたびら地新製品陳列
特製浴衣地新製品陳列

夏季洋服地薄羅紗新着

シフヲン製ショールとヴェール

本年型夏帽子洋傘

新型旅行用化装道具種々

東京日本橋

白木屋呉服店

地方よりの御注文は通信販賣課宛御申越下されば誠實迅速に御取扱申上候

（の四）


女學世界
第拾壹卷第八號
六月號



婦人が世界の形勢を知る必要

松村介石

▲對岸の火事視しては居れぬ

手足の揃つた人間が、何日までも他人の厄介になつて何とも思はず、親族知己が少し出世でもすると、直に噛り付き喰ひ倒し、無心を云ふのは、東洋人の弊であるから、獨立獨行の精神を靑年に吹き込むのは、必要に違ひないが、唯この一方に傾注した結果、靑年は自己のことばかり考へ出した。學問して社會へ出て、月收を澤山得て、家を立派に建て、良い妻を貰はうと、朝から晩までこんなこと許り考へて居る。彼等は身を立てた後ち社會の爲とか國家の爲とかの相談を持込れると、イヤ未だどうして吾々は國家社會のことを考へる餘裕はありません。今に大に成功でもしたらその時は、なぞと逃げて了ふ。世渡りに困難な今日、尤も至極の次第ではあるが、併し自分達が生息して居る日本の國家社會は、今如何なる形勢であるか、將來如何なるものかを考へないで、唯自己のみの爲に考へて居るのは、丁度船に乘つて大海を渡るのに、風が如何吹て居るか、船がどんな方向に走るのかを知らずに、船室に閉籠つて、巾着錢の勘定許りして居るやうなものです。日本と云ふ船が、無事に航海して居る内はよいが、一度危急を告げたら個人も何もあつたものではない。總立になつて難儀しなければならぬ。此處に考がついたら、假令國家社會に盡す力のない者でも、せめて心配位しなければりやアならぬ筈です。而してかやうな事は母親から子供の頭腦へ吹込むのが肝腎で、それには婦人が我國と列國の關係を一通り明めて置く必要

があるのです。決して對岸の火事と濟して居る場合ではありません。

▲日本の財政は如何

私は貴女方に嘘をつくのでもなければ嚇すのでもないが、日本の盛衰は十年の内に決するので、百年の後なぞゝ氣楽なことを言つて居らるゝ時ではありません。日本は戰爭に二十七億圓使つたから、數億圓の借財をして、始終利子を取られて居る。この利子は國民から取集るより外方法がないから、吾々は何から何まで租税を拂つて居る。私の帽子も貴女方の衣服も、皆税が掛つて居る。そこで物價は騰貴し、金持は税の爲に事業を縮めるので、世の中は甚しい不景氣となつた。戦勝國と誇つても、内實は此の如く疲弊して居るのを知ぬが佛の婦人達が、流行だとか星菫だとか言つて太平を歌ふて居るのを見ると實に可憐しく氣の毒になるのです。米國では南北戰爭前まで少しも漁業に手を出さなかつたが、戰後イザとなつたら漁業を盛んにして、二億三億と稼いだ



宿近く花橘はほりうゑしむかしを忍ぶつまとなりけり　花山院

佛蘭西が日耳曼に負けた時は、五十億フラン取られたが、勤儉力行して、今では世界一の資本家となつて居

る。日本でも協心一致、業を勵み儉を守つたら、乾度挽回が出來るに違ひないが、却々危いから、貴女方もうつかりして居る時ではない。勤儉力行、夫を助け、子を勵まし、幾分でも國家に盡さうと云ふ健氣な心を振ひ起さなければなりません。

▲借款問題

支那はあの通り大きいけれども金がない、租税を取れば革命黨が起るので、已を得ず列國から金を借りて鐵道を敷設し、收益を計つて居ると云ふのが、新聞に出て居る借款問題と云ふのは是れであります。マサカ英佛が埃及に金を貸した手ではあるまいが、支那の前途は危く思はれます。



新婚旅行

粟田山松の葉埋む白雲のはれぬ朝けになくほとゝぎす　朶樹

▲勢力の平均

支那の境域には種種の憂患がある。露は既に伊犁、蒙古の方へ大な舌を出して居るし、英は雲南に向ひつゝあり、佛も印度支那から迫りつつある。斯る次第で支那の運命は風前の燈であるけれども、若し我國と聯合して列國に當つたら、必ず國を保ち得ます。我國から士官を聘して、彼の大軍隊を訓練したらば、其國力は實に强大となるのですが、今の分では非常に

危ない。一體列國は勢力が平均してさへ居れば、互に維持が出來るので、丁度動物が睨み合つた際、少しでも弱味の見えたものが嚙まれるのと同じ事だ。小さい犬でも嚙み付く勢力があれば、大きいものが手出し得ない如く、ウンと睨め返す勢力さへあれば、國の維持が出來るのです。

▲戰後の露西亞は如何

日露戰爭は露が日本を知らなかつた故である。何しろ露は歐洲中一等の强國と誇つて居たのですから、日本を鼻糞ほどにも思つて居なかつた。彼のクロパトキンの如きさへ、日本兵の多寡も强弱も知らす。一呑に呑んでかかつたところ、案に相違してサン〳〵の敗北を取つた。初めから日本を知つて居たらば、必ず戰爭は無かつたのでせう。併し露西亞は戰爭に負けても佛蘭西から金を借りてドシ〳〵產業を興し、今は大なる利を得て財政は豊かになつて居ります。決して戰敗國として侮ることは出來ない。然し、彼は專制國なので、戰後に議會を起したけれども、上下一致はまだむづかしく、折り〳〵內亂が起り、且つ一寸日露戰爭で弱つて居るから、當分戰爭することはありますまい。



吹送るけしきの杜の朝風も青葉が上はおとなかりけり　景樹

新婦の旅

▲獨逸は如何

百年前の獨逸は弱いものでした。ナポレオン一世に攻められた頃は、佛兵一人で獨兵二人に當つた位で、佛兵一萬に對して獨兵二萬向はなければならぬ勘定でした。斯く弱くなつた原因は大文豪ゲエテなどが出て、自然主義の墮落文學を蔓延させたからであつた。ゲエテの自然主義は亂暴極まるもので、結婚式を擧げた者に限り夫婦となるは可笑しい理窟だ、相愛すれば、直ちに夫婦になつて差支ないと云ふ主張で、彼自身もこれを實行した。それから色々の軟文學者が出て戯曲を流行させ、全國民靡然としてそれに心醉したから、尙武の風は地に墜ちて、丁度我國の幕末のやうな時勢となつたのです。それで佛の爲めにサン／＼の目に遇はされたのですが、蠻カラの親方フイヒテと云ふ伯林大學の哲學教授が出て國民の元氣を恢復した。フイヒテは大學の教授でありながら、盛んに勇武を奬勵して居たが、遂に自ら銃を提げて勇武なる大學生を率ゐて戰場に出た。而してこれを見た一般の學生共も、彼の英氣に感動して軍に從つた。これが爲めに全國民の勇氣は充ち滿ちて來て遂に終局の勝利を得たのである。フイヒテは實に豪い

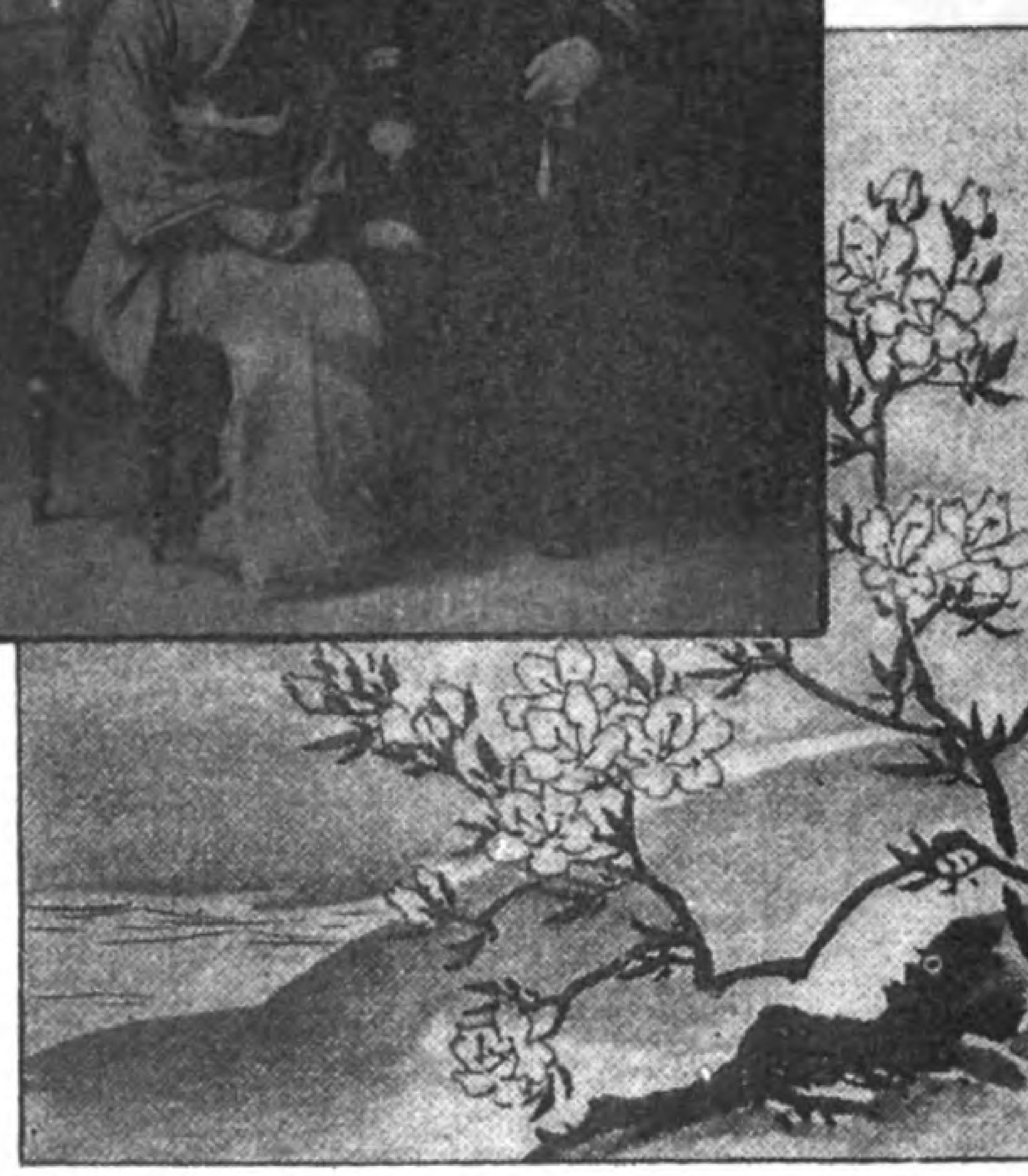


さみだれに賤が萱家は軒朽ちて菖蒲をたにもふきさで煩らふ　翠樹

學者だ。今や我日本には、頭腦ばかり膨らんで豪さうな顔をして居たつてイザ鎌倉と云ふ場合に、腰を拔かす學者が多い宜しく鑑むべきである。女だつて銃を取らぬまでも、常に腹を拵へて置かなければならぬ。偖佛蘭西に勝つた獨逸は其後商工業の方も盛になつた、三十年前の横濱には獨逸人は一個も居なかつたのに、今は非常に多くなつたのであります。斯の如く獨逸は實に畏るべき强國であるが、地理其他の關係上、差し當り日本と戰爭する樣な事はありますまい。



新婚旅行

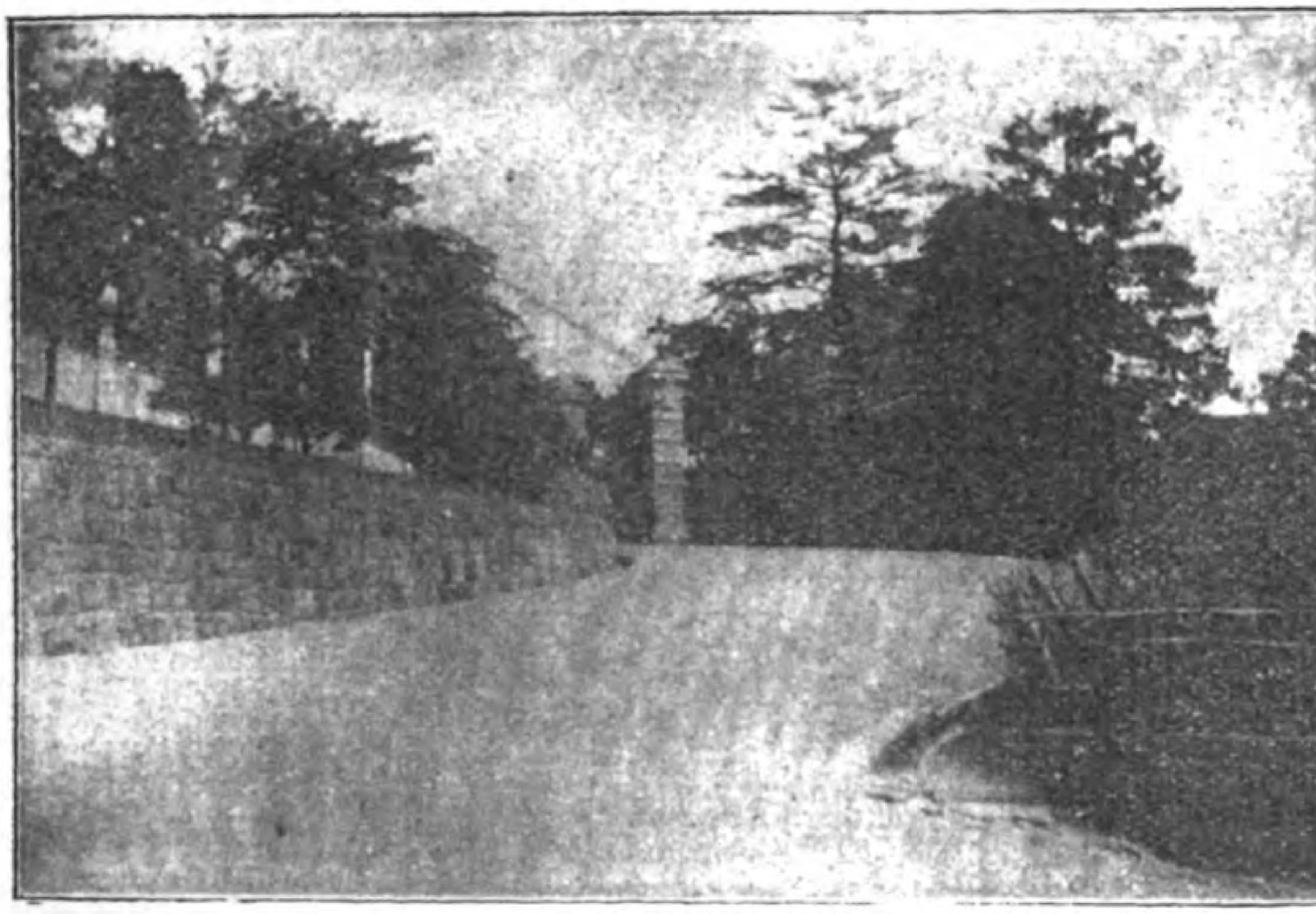


我宿のあふちの花は咲たれどなにしもおはぬ物にそありけり　貫之

▲日本人の氣節

戰爭の心配は當分あるまいが、戰はずして亡びた國國の覆轍を鑑みると男子も女子も氣節を砥礪することの急務を感ずるのです。氣節地に墜つるは亡國の徴である。亡國の民の情け無いことは印度、埃及などを見れば善く判る。日本國民は元來氣節の高い民であつて外國人を感動させた例は少くない。嘗て獨逸に在つた糸平の子か弟かゞ、大學の助敎授とチョットした爭論から決鬪を申し込まれた。所が助敎授は妻子も

ある男なので、決闘することは厭になつたけれども、一旦衆の前に高言したことを止める譯には行かないから、仲人を介して互に覘ひを外して撃うと申込んだのです。序でにお話しするが、一體決闘の規則として、申し込まれた方に武器を撰ぶ權利があるのです。そこで糸平先生は當り前なら、日本刀を持つて決闘すべきであつたが、獨逸人の持ち得ない日本刀で決闘するのは卑怯と感じたから、何事も相手の爲る儘に任せたのです。愈いよ／＼決闘となつて、此方は約を履んでピストルの覘ひを外したのに相手は約束を無視して覘つて放つた。幸ひにして横鬢をかすつたのみであつたが此方は怒り心頭に發し、今度は覘つて彼の腕を撃つた、二發は決闘として反則であるけれ

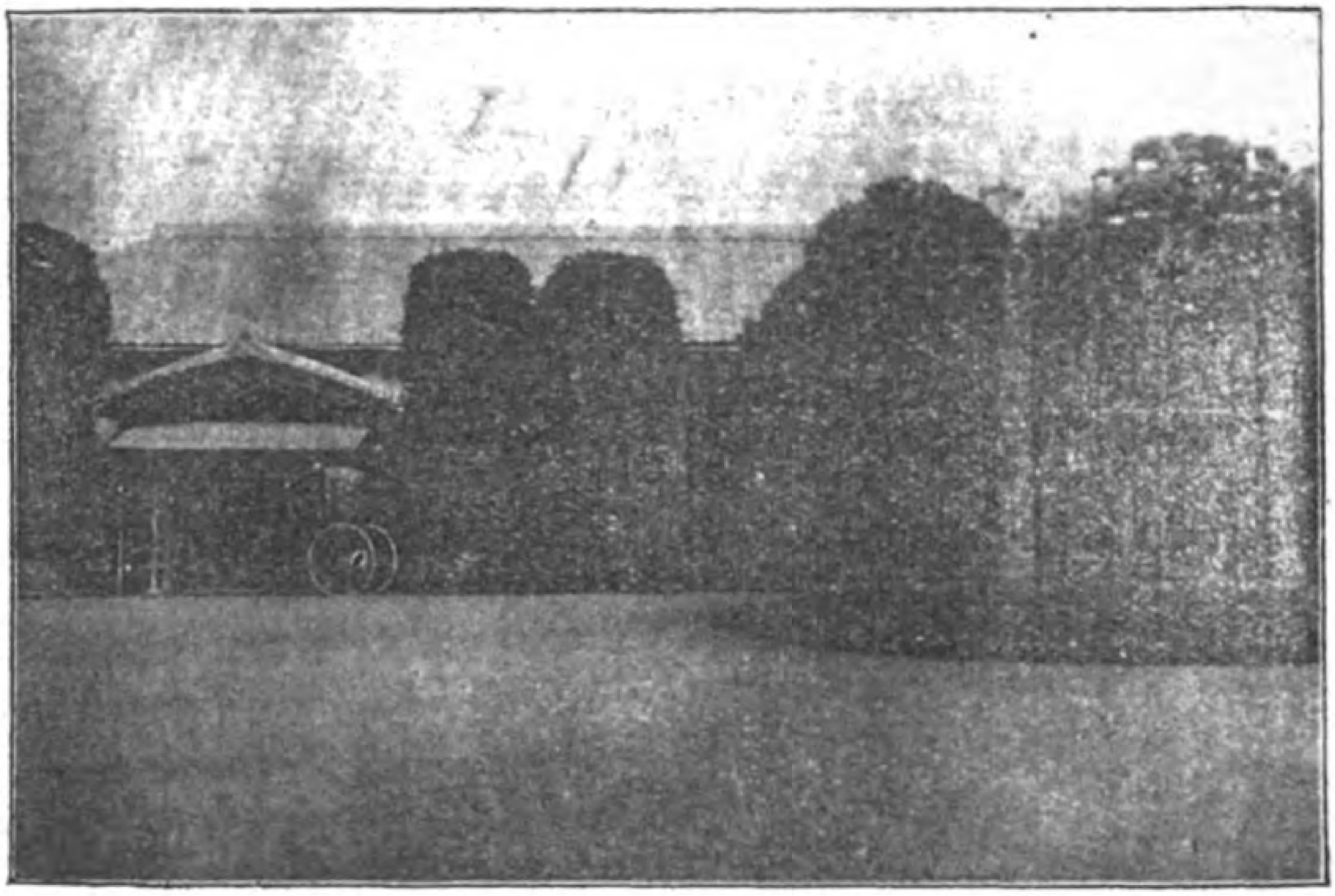


一條公爵邸表門

ども、約束を無視した助教授に對する至當の處置であるから、幾ら立會人等が助教授の同國人だつても、彼の肩を持つことは出來ぬのみならず大に日本人の沈勇に感じたさうで、これから日本人の價値がグッと上つたのであります。又横濱で英國の一紳士が落ぶれた日本士族を下男に使つて居たが、或時少しの過失のあつたのを怒つて、紳士は下男を蹴つた下男は愛嬌ある表情を以て低頭罪を謝した。一體勉めて顏色を和げ謝罪するのは、日本人の禮儀であるが、英國人は未だ善く此氣風を呑み込んで居らなかつたので、馬鹿にして笑顏したものと見て又も下男の頭を撲つた。是に至つては幾ら忍耐強い日本の雇人でも、忍耐が出來ない。一旦

謝罪した上に、親にも撲たれぬ頭を撲たれたとあつては、日本國民の恥、武士道の汚れ、己れ刺し違へて果てんと、我室へ走入つて、秘め置いた重代の一刀を携へ立ち出づる所を、傍人達が漸となだめて事なく濟んだ。此禮節あり勇氣ある行爲は、一の美談として賞揚せられ、日本人の評判が非常に好くなつたのです。斯様に日本人の氣節は毎々歐米人の認むる所となつて居るのですから、我々日本人は、男子も女子も相勵んで柔弱墮落の風を排斥し、益々氣節を砥礪したならば、國家の基礎は此上にも堅固になるのです。

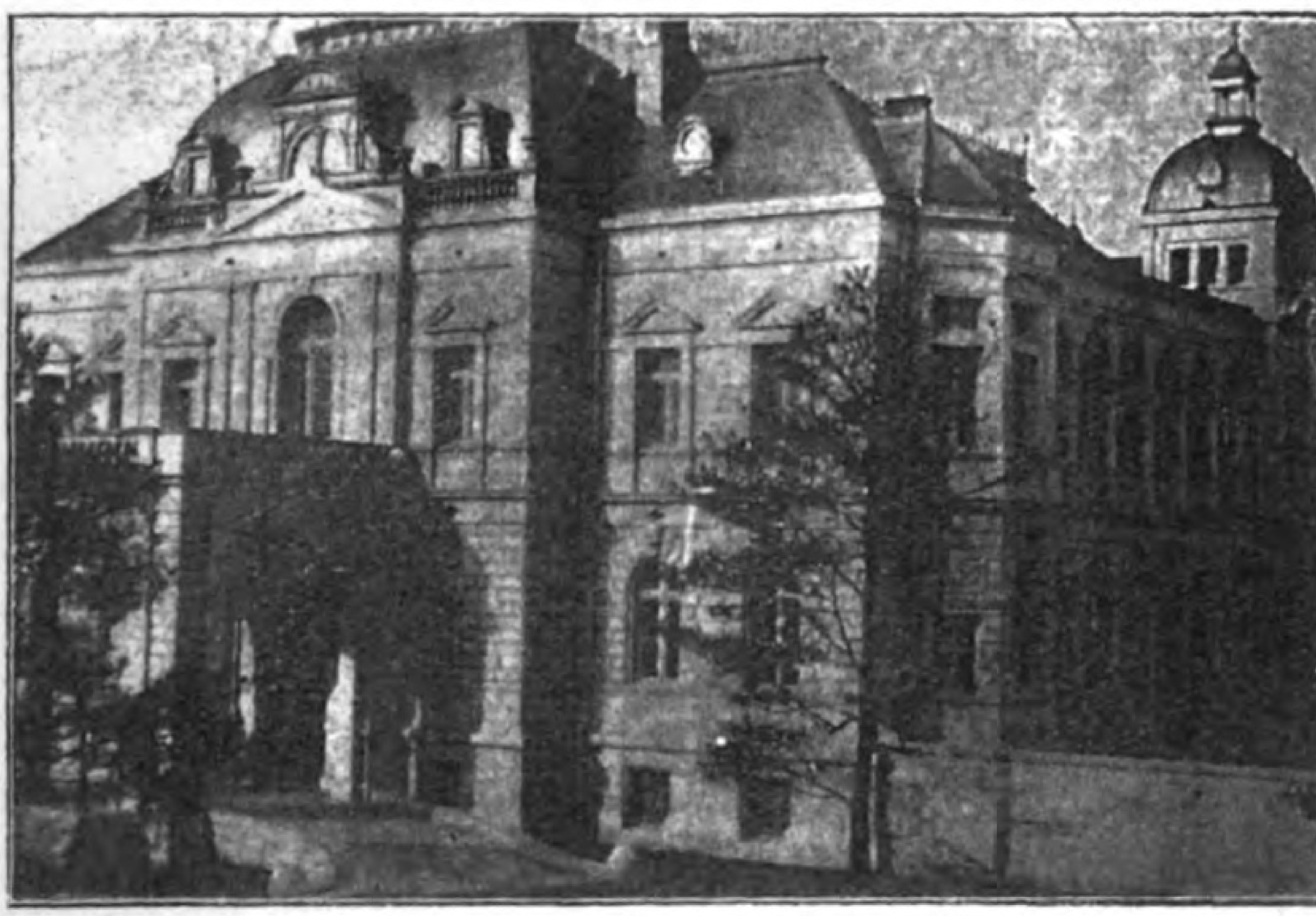
▲英國が日本と同盟した理由


九條公爵邸表玄關

白人と他人種とは、宗教其他の關係から同盟し難いので、古來異教徒同盟の例は殆どないのです。唯だ一度回教の土耳其と耶蘇教の佛蘭西と同盟した事があつたけれども、各國はこれを佛蘭西が新平民と同盟した様に卑んだのである。然るに今回英國は日本と同盟した。これには固より都合上もあらうが、畢竟英國人が日本人の氣風に惚れたからである。元來耶蘇教信者は、他教人を暗い人民と言つて、傳道用の地圖にも、他教國を眞黑に塗つて區別して居る。日本も此黑塗の中に入つて居る。所で彼等が傳道して見ると、暗黑に迷ふて居ると思つた日本人は、耶蘇教國民も三舍を避くるほど、人道心が發達して居る、人情美や雅味があ

つて、而してケバ／＼しい點がない。特に婦人は米國婦人のやうに上側ばかりをチヤカチヤカさせるお轉婆風の點はなくつて、錦を着て絅を尙ぶ的の、奥床しいところがある。外國で飛行機を揚げる時には、女まで乘らして吳れと騷ぎ立てるが、我國では一人も乘りたがる者がないのは、決して臆病と云ふのではなく、輕々しく人眞似をしないと云ふやうな、沈重高雅な氣風を有つて居るからである。此美質は吾人の大に意を强うする所にして、尙一つ喜ぶべきは追々婦人の地位が高まることである。昔から婦人を貴ぶ國は强くなり、婦人を虐待する國は衰へたとは歷史上最も明かな事實です。

▲マツチニーの母



前田侯爵邸本館

伊太利が四分五裂してゐた時代、統一運動の端を開いた志士が多く縛られた。墺國官憲の手に縛られたのである。一少年を連れた婦人は、志士の爲めに若干の義捐金を募集人の帽子に入れ、縛られて行く志士等を見送つて、ホロリと一滴の淚を落した。少年は其故を尋ねたところ、婦人は『子よ縛られて行く人々は、憂國の志士である、愛國の仁人である。斯樣な志士仁人が墺國の者に縛られると云ふのは眞に氣の毒千萬である』と話し聽かせたので、少年は非常に感動して、それより國事に盡瘁せんと志を立てた。この少年(この時十四歲)こそは他日伊太利建國三傑中の第一人マツチニーである。斯の如き偉い母親さんがあつてこそ、

斯の如き偉い人物が生れ出るのである。若し志士仁人の縛られ行くのを見ても、平氣で通り過ぎる様な母親であつたら何様でせう、一滴の涙を零さぬのみか、『汝は彼樣に罪人扱ひされぬ樣になさい』と只管一身の安全策を教へる母親さんであつたら何樣でせうマッヂニーの如き偉人は薬にしたくも出ないのである。唯だ此一事を見ても婦人の責任の重いことが判る。

▲日本婦人の無智識

西洋の婦人連は、チョット食卓を圍んだ際にも、列國の形勢、陸海軍の消息、乃至議會の動靜を語り合ふと云ふ風で、インテレストに富んで居る。

なつくさ



夏草に風わろくさき廣野かな　志水

何樣な婦人でも、如上の事を大體心得て居るから談話が容易に出る。婦人も國民である以上は、這般の消息を心得て居るべきは當然の事であるが、日本の婦人は殘念ながら、未だ此等の智識を有つて居ないから隨つてインテレストに乏しい。濫りに内政外交を喋々するのは困るが、一通りは心得て置いて貰はなければ困る。三越の噂や帝劇の批評は後廻しにして、國家の大事を少し研究して貰ひたい。國家の事を等閑にするのは國家の事を知らざるの罪ですから先づ新聞紙の第二面を研究する心掛けを有つて貰ひたいものであります。

（尚外交や政治の秘密談なども此中に在つたのでありますが、これは省きます。）

輝く粧ひ



圖は過般合卺の式を擧られたる甲府の富豪若尾氏の新婦（西大將令嬢）が入輿の光景にして同市停車場前の撮影



女と時勢の食物

望月嘉代子

▲若隱居の弊風

生意氣なことを申すやうでございますが、我國には少し地位を得ると、まだ盛に奮闘の出來る年齡でありながら、社會の爲めに働く意氣込が失せ、只管安全に一生を送らうと云ふ若隱居の御方が隨分多いやうではございませんか。元勳株の方々なぞは、御老年でありながら、却つて始終國家の爲めに鋭意精勵して居られるのに、働き盛りの殿方が直に若隱居になつて了はれるのは、如何にも遺憾な次第と存じます。これには複雜な事情もありませうが、兎も角も一等國の列に加はつた我國の價値を維持する爲めには、地位ある方が大に奮勵して活動の模範を示して頂きたいものと存じます。それにつけましても、私共もモツト心身を健にして惰眠を醒し、男子の片腕となる必要を痛切に感せずには居れません。

▲活動に趣味を持つ事

女子の活動と申しても、表向きの舞臺で奮闘するなぞは、或特殊の婦人の仕事で、一般に望むべきことではございませんが、唯だ活動に趣味を持つて、良人を勇み立たせる心掛が欲しいものでございます。米國婦人と云へば一口にヤンキーだと貶す方がありますけれども、實際接して見ますと、外部に活動すると同樣に家庭の事も善く働いて居ります。彼等が手八丁の仕事を爲し得ますのは、盛な勉強心が何事にも附纏ふて居るからでせう。他の點は兎も角、勉强と云ふことだけは

確かに私共が模範とすべきものと存じます。

▲心を若く持ちたし

男子方でさへ、生活に餘裕を得れば活氣が減るのですから、女子は無理もない次第でせうが、これが爲めに早く老けて了ふのは厭なことでございます。それでも子供のある婦人は、自然子供の爲めに心身を働かせますから、餘り老込みませんが、子供のない婦人は、身の服装だけは若やいで居ても、心の老け方は甚しいやうでございます。畢竟心身を閑殺されて、何の希望もなく、停滯せる水の腐るやうに衰へて了ふのでせう。これは實に惜いことでございますから、閑な境遇になる婦人は、何か精神を活動させる道を開いたら如何でせう。手近いところが、良人の事業に趣味を持つて研究して見るなどは、一番善い事であらうかと存じます。精神を活動させる基は、體力を壯健にするに在るのですから、規則正しい衞生法を勵行して、精力を壯健に致したいものです。我國の婦人は空氣の流通よき室に起臥するのですから、歐米の婦人達のやうに毎日一回づゝ必ず戸外に運動するにも及びますまいが、無益の雜念に耽る暇があれば、戸外運動を致すが宜しからうと存じます。

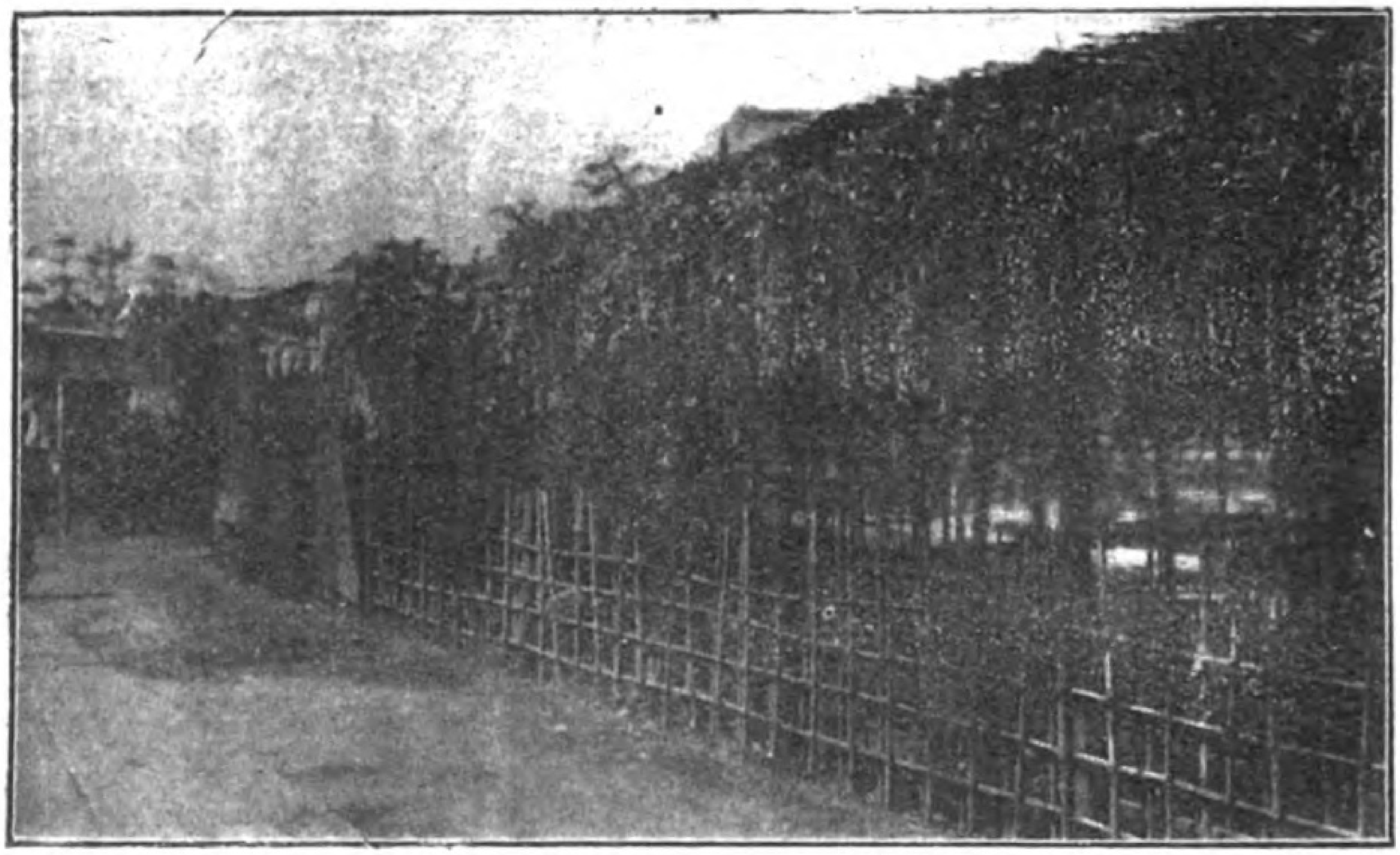
▲禮儀の國

私共は御承知の通り昨年夫婦連れで英國へ參りましたが、彼國は評判の通り禮儀の正しいところと存じました。彼國の婦人は近づきにくい點もありますが、一旦交を結びますと、親切で高雅なところがございます。召使の待遇なぞは、我國に比べて慈愛の分子が少うございますので、使はれる方でも、唯だ自分の受持だけを勤めれば可いと云ふ風で、其間柄が聊か冷淡のやうに見えますが、主從の禮の立派な點は則るべきでございます。彼國へまゐつて第一に感心致したのは、仰々しく道德を鼓吹しないでも、公德が善く行はれて居ることでございます。仁義禮を看板にして居る支那なぞは、畢竟仁義禮が不完全であるから、其呼聲が喧

しいのであると、斯樣に申された方がございましたが、私共も何だか耳が痛うございました。

▲虚禮

外國人に禮を厚うするのは、大切なことですが、目の前では御座なりの挨拶をして意を迎へて置き後日化の皮を剝がれるやうな虚禮は、却つて感情を害し侮蔑を受ける事になります。私が嘗て或慈善演劇へまゐつた時でしたが、私の後の席に居た外國婦人が見物しにくいとか何とかブウ〳〵申したものと見えまして、其外國婦人と懇意らしい或貴婦人が私に向つて、『貴女、其處を少し退いて上げたら如何です』と左も〳〵私が禮を知


龜井戸天神の藤

風なくて靜すきたり藤のはな　（杉風）

らぬやうに指圖されたのでした。併し其外國婦人も私も前々から取り定めてあつた席に就いたのですから、何も然うへイ〳〵して讓る理由もなからうと存じて澄して居りました。この貴婦人に限らず、外國人に對する場合には、兎角卑屈と禮儀とを混同し易いものですから、餘程腹を締めて我國人の正當の權利を失はぬやうに注意したいものと存じます。

▲今後如何成り行くものでせう

過渡時代は、社會の事も家庭の事も、面倒なものでございます。何も彼も二通りですから‥‥、ちよつと家婢をお客の前へ出すにも

虚禮と立禮とを教へて置かなければならず、衣服から家什から皆二通りを要し、子供の教育も何處へ歸省して宜いか判らなくなりました。美しかつた師弟の間柄まで皮相の現金主義が混合して、變な傾向になつてまゐつたでは御座いませんか。こんな風で推し進んで行きましたら、今後如何なるものでございませう。

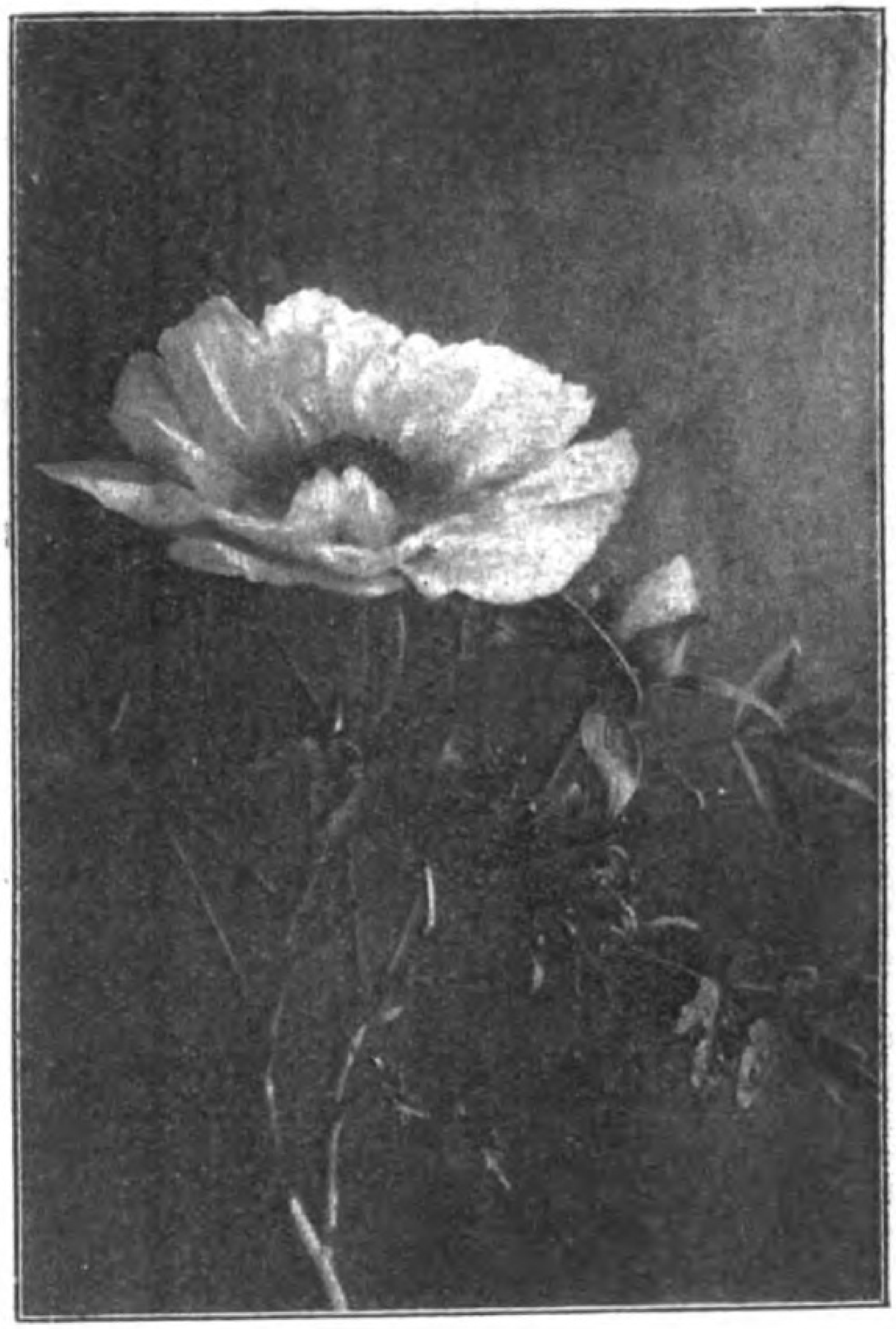
▲國力の割合に贅澤

私は佛蘭西語も出來ないし、巴里では大病で暫く入院して居りましたので悉く觀察も出來ませんでしたが外客の居心地を好くさせるのは、優しくて如才ない彼國婦人の引力であると感じました。而して巴里の婦人が華美贅澤と評判されるのは、或一部のものだけで一般の人は三年間も同じ帽子を被ぶる經濟家であることも判りました。たゞ彼等は體裁を飾る工夫が巧妙なので、一つ帽子を種々に工夫して新型に見せますから、十の物が二十にも見えるのでせう。佛蘭西が戰爭で獨逸に負けても財政で勝を制したと申すのも、畢竟經濟上手な婦人があつたからだと言はれる位でございます。それから見ますと、國力の割合に我々の方が餘程贅澤に違ひありません。何に致せ二通りと云ふ厄介があるのですから、少し氣を弛めたら冗費の嵩む道理でございます。私共は冗費を省いて心身を活動することが、何よりの急務であらうと存じます。

▲子のない私の仕事

活動の盛な外國婦人に接する毎に、切て彼の半分位の事は致したいものと意氣込んで見ますもの丶、却々實行は難かしいのでございます。畢竟我國の家庭には不規則な雜用が多い故でもございませう。併し私は子がありませんから、老込まぬ用心に良人の手傳ぐらゐは致して居ります。良人は常に我國の眞相を外人に紹介致すことに骨折りますので、これが爲めに雜誌や書物の編輯事業が却々多忙でございますから、微力な私も勢ひ手傳はぬ譯にはまゐりません。ジャパン、ツーデーなどは、日本博覽會の記事につ丶いて、歴史、

風俗、地理、物產、其他百般の事を概略ながら網羅した九百頁のものでございまして、五月から十月までに拵へ上げたのですから、實に眼の廻るやうな騷ぎでございました。尤も記事の方は助けて頂く人を頼みましたけれども　校正は殆んど私一人で受持ちました。横文の校正と申すものは、誠に難儀でございまして、活字の方がまだ思ふやうにまゐりませんのに、活版職工に素養のないのが多いのですから、甚だしいのになりますと、Mと云ふ字を二つ山、Pと云ふ字を團子の串刺なぞ言つて拾ふ（中には驚くほど英文に通じた職工もあるさうですが先づ例外と申すべきで）と云ふ始末ですから、誤字は晴夜の星の樣でございます。日本文ならば、大抵三四回で校正が濟みますのに、英文は十二三回も校正しなければなりません。而して幾度も校正する間には、何うかすると前に正しかつた個所まで誤字が出來て居ると云ふやうな事がありまして、實に雙方大困難でございます。こんな具合ですから急ぎの校正の際は、徹夜致すことが度々でございました



見せばやなのどけき春の日本にうつりて後の色深見草　景樹

▲良人の職業に同化する

文學趣味は女に必要だと存じては居りながら、ちよつと新聞紙を見ましても、先づ政治欄や外國電報に眼が着きまして、文學の方は後廻しになるものですから如何しても修養が出來ません。尤も以前は二面記事に

興味がありませんでしたが、「一體新聞紙の何處を見て居るか」と度々良人に叱られましたので、解らぬ個所を質問しながら、勉めて讀んで居りますうちに、追々興味を持つやうに爲り、何樣にか話し相手ぐらゐ出來るやうになりました。女は何うしても良人の職業に同化されるのでございませう。先づ恁んな事でも致して身心の腐らぬやうに心掛けて居るのでございます。

現代婦人評論（其五）

奇物變物英物

鐵拳禪

一

藤井侶松――吉村女將――阿部銀子――服部春子――中崎雪子――桑島千代女――峰島喜代女――村山文子――矢野恒子――山路たね子――前田仙子――樋口くに子――池村あか女――木村駒子

⊙時勢は猫眼の如くに轉遷推移す。昨日の新思想は、今日の舊思想なり。時勢の迎合に日も是れ足らざる片片たる小才子の思想、小才媛の好尚、猫眼の夫れよりも變り易き秋に當りて、最も深刻に人生を觀、白眼世上を冷笑し、滔々たる毀譽褒貶に頓着せざるものは、達人にあらずんば是れ變物也。

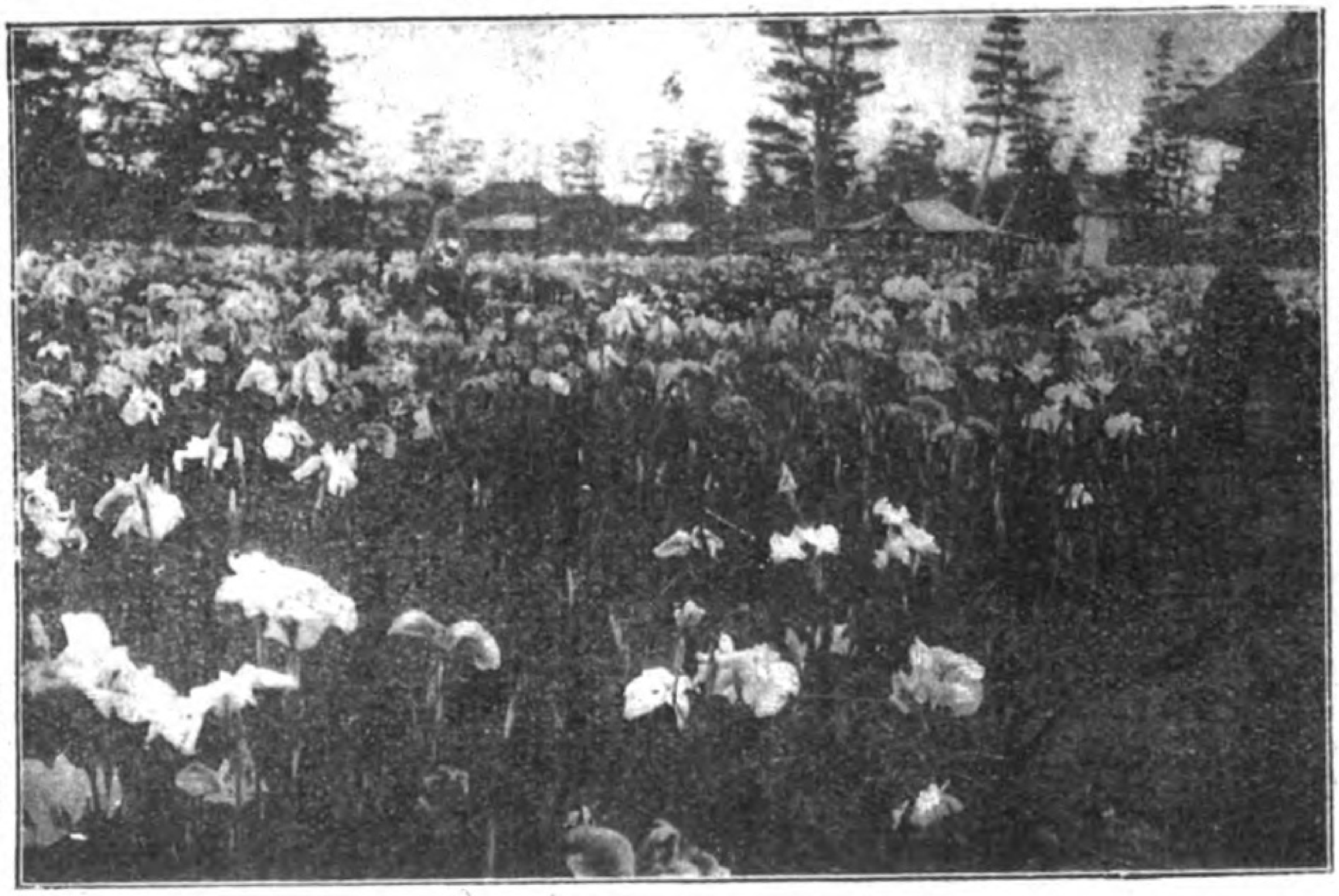
⊙東海の濱、三保の松原、風光明媚の境に、徐かに性を養ひつゝあるものに藤井侶松あり、侶松は女なり而かも上品なる年增の奧樣なり、今も猶鳥婆玉の黑髮長き女也。されどその質を以てすれば、仙風道骨の一奇人たらざるにしもあらず、日夕松蔭に趺坐し、閑雲野鶴を伴とし、世事に相關せざるが如きも一たび、紅唇を開けば談論風生す。

⊙糠味噌の糠臭き女と、青漬の青臭き男とは、彼女の前に禁物也。彼の白粉臙脂の粧を凝して、しとやかに內鎌に大和草履を踏ませ給ふ姫御前や、女とさへ見れば異樣の眼を閃かす灰殼などは、忘れても交際するを欲せざる也。故に其の交友する所ろ多くは佛教界に由緣ある奇男子也「長廣舌」の高島米峰「新公論」

の櫻井義肇、青年佛教家島地大等の如きは、其の好伴侶也。

⊙侶松は信川飯山の人、本名を瑞枝と稱す。露國全權本野大使の夫人久子とは同窓にして尤も親し、跡見女學校の出身也。年歯四十二學は和漢洋を兼ね、才思豐湧、健筆を以て鳴る。『新佛教』は、其の蘊蓄を披瀝するの壇場也。

⊙亡夫は本派本願寺の文學士藤井宣正、宗教界の一明星として仰がれ、清澤滿之と光を競ひき。當時の西本願寺新法主大谷光瑞伯と歐米漫遊の途次、馬耳塞に於て客死しぬ。訃音落ち來りて、灰色の夜の寒さに戰く時、瑞枝は同棲十三年の春を追懷して暗涙に咽び明珠滴々として下るの時、豁然として頓悟せり。



菖蒲の名所（行德德願寺の菖蒲）

花あやめ五尺の露をあげる哉　（曉臺）

⊙彼女、性磊落、容貌亦秀麗、男を男臭しとも思はざれど、嫣焉一笑すれば春風氷を解くの感あり自ら未亡人と呼ばるゝを厭ひて、可亡人と稱し、餘生を文筆に托し精神界の事業に委ぬ。蓋し佛教界の女傑也。

⊙曾て、相州酒匂の堀内別莊に在り、出入する所の人士、可亡人の哀愁を慰藉せんとて來れるは哲學宗教に傾倒する學生ならずんば、毒舌縱橫の口頭禪の徒也。これを以て土地の警察眼は一時侶松を掏兒の姉御と間違へ彼女の外出に尾行する事屢々、後に至りて嫌疑頓に解け、可亡人の眞價始めて判明したりし時。角袖の警察官平蜘

蛛の如くあやまりたりとは嘘言のやうな眞實なり。

⊙侶松の現代に超越せるとは、大に其の趣を異にするも、而も一脈の相通ふ所あるは、當代の變物問屋沼田の女將也、女將姓は吉村名は關如す。性磊落不羈にして、八分の俠氣と二分の慢氣を領す。

⊙侶松は入佛の大姉也。吉村は俠氣の姉御也。彼れは佛教界の名士と交驩し、是れは天下の浮浪人を頤使す。微醉漸く發して、脣頭紅を潮すれば、善く語り善く辯じ、老鶯の聲なほ葉櫻に滑かなるの感なくんば非ず、姿色亦艶にして四十女の嬌態得も言はれざる也。

⊙吉村の家に出入するもの、怪物宮崎滔天あり。姓名の「野」の字だけを平假名で書く、無學文盲の鑛山師押野常松あり、野に叫べる豫言者宮崎虎之助あり。時に半日を銷して、彼女と談論を上下するや、坐邊雲湧き、簾外風生ずるの概なくんばあらず。

⊙吉村の家は、奇物、變物、愚佛の問屋なり、眞骨頭を有する浮浪人の救濟所なり、來る者は拒まず、去る者は追はず、窮鳥懷に入れば之に餌を給し、職を與へ羽がひの傷の癒ゆるに至りて野に放つ。彼女の口頭より發する鐵火的洗禮は放浪者流に對する復活の靈藥也。知るもの皆、彼女を推して當代女俠の雄となす。

二

⊙伯大隈は新日本の名物、大風呂敷を擴げるに於て天下一品也、而も此の名物伯を驚かして、大風呂敷を抱へ込みたるは阿部銀子也。

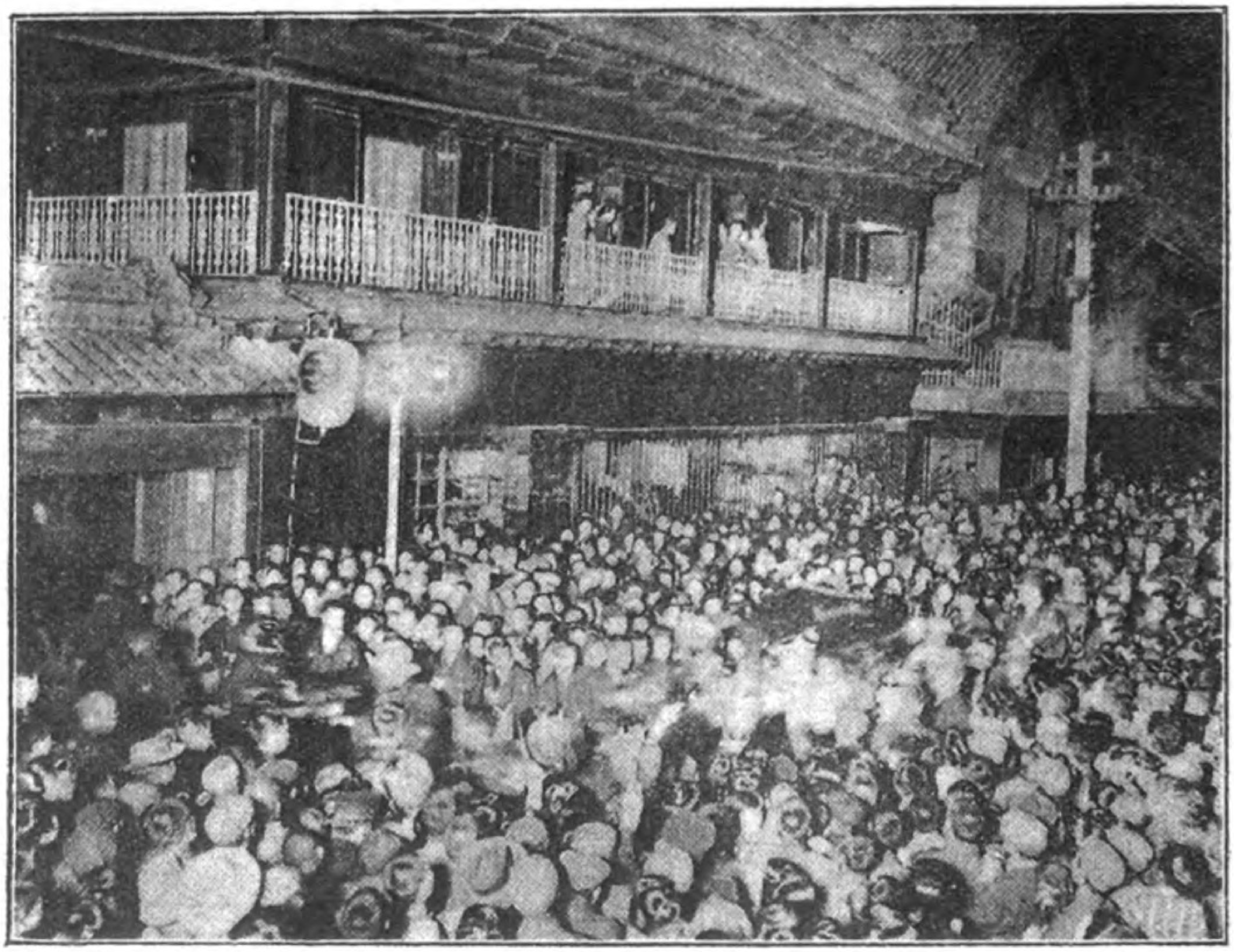
⊙銀子は越後新潟の產、所謂北國美人系中の人なるも美人として評價せんにはあまりに老年なり。宜しく活動の婦人として見るべき也。身には小豆色の紋羽重の被布を纏ひ、焦茶の袴を着け、頭はキリヽと束髪に結びて、見るからに地味な風也、年齢は正に四十五六。而して。其の一抱の大風呂敷中の物は、數十冊の大福帳――貯金の通帳たる也。

⊙伯大隈を呼ぶに『貴殿樣』を以てし、越後訛の快辯を以て貯金勸誘の苦心を談る。謙抑にして、浮誇の態なし。伯大に感じて、銀子を地方官招待會の席上に紹

介す、是れ四月二十五日の事にして、彼女の名頓に江湖に揚る。

⊙彼女もと貯金の癖あり五歳始めて貯金の趣味を解して、父兄より得る所の金を貯蓄す、現下遊説費は一ヶ月少くとも百五十圓を要す、而して此の費用は髫垂より貯蓄せる所の利子なりと云ふ。以て、其の貯金の高の驚ろくべきを知る。

⊙彼女の貯金勸誘は遞信省より囑託せられたるに非ずして、自己一身の發心也　二十有餘年同棲の亭主と死別の後、全國の



（結婚入輿式）若尾家

各郡村を遊説して、一ヶ月三十錢宛の据置貯金をなさしむ。加入者既に一萬六千人にして、金額三十萬圓に達す。而して明治二十八年以來、普く全國の山河を踏破し晝夜兼行臥薪嘗膽の苦をつぶさに嘗む。近頃の風潮薄志弱行の徒、須らく銀子の前に愧死すべき也。

⊙花賣女服部春子は、現内閣の英傑小松原英太郎の姪也。小柄の身に紺の法被を着、紺の股引を穿き、煙草入を細帶にぶら下げ、百姓男の扮裝をなして花を岡山の市街に賣

る。年齢既に四十五なるも一寸見は二十六七歳の小男也。

⊙春子の母は小松原文相の實姉さと子と云ひ、父は名を光信と云ふ兄は現に横濱商業學校の教師にして文學士也。然るに、彼女の數寄なる運命は、野心火の如き青春の時代を掀飜し、青雲の階梯を覆して、失意に慰藉を得るの花賣女とこそ化らしめたり。

⊙春子幡多村の鄕校を卒業するの頃、世は自由民權の聲に熱狂し、叔父小松原の如きは政爭の渦中に浮沈せり、彼れが新聞記者となりて健筆を揮ひ、時の政府の忌憚に觸れ獄中に下りしも斯の時代也。可燃性を有する春子爭でか默止すべき、女と生れたるを遺憾とし、花の齢の十七の秋、綠なす黒髪を惜しげもなく剃りこぼち、土地の基督敎傳道教會に入り、傳手を求めて洋行せんとせり。

⊙遺憾なりけり。好機は待てども來らず。剩へ敎會は解散の悲運に遭へるを以て、遂に思を洋行に絶ち、岡山の裁縫教場に入りて仕立屋の事を習ひ、後轉じて「關西新聞」の記者となる斯りしほどに叔父の小松原



名流の邸園　（大崎島津公爵邸）

氏は積年の志漸く酬いて、官界有力の人となりしかば春子は出京して小松原邸の玄關番となりぬ。されど春子は尙依然とし變粧男子なりけり。あこがれし、都の春も來て見れば、心に染まぬ事ぞ多けれ、彼女が憧憬せし都會の風物は期待せしほどの事もなくして再び鄕里に歸へりぬ。斯くして彼女は更に關西女學校の設立を計劃せるも、大聲俚耳に入らずして、遂に失敗するの止むなきに至れり拙き運命に泣くも甲斐なし。寧ろ花を市中に賣りて、飄逸の生活に入らんにはと、玆に野心を一擲して新生涯を開拓せるなり。白眼看他世上人、煙管筒をスポンと拔きて、咬へ煙管の煙を甘さうに輪に吹く所、文相以上の人格と權威とを領得す。

三

⊙人物は稍小なるも、中崎雪子も亦變物傳中の人也。年齡三十前後、出所進退常なく、變幻出沒端倪すべからず。時に慈善看護婦會の大旆を飜して街頭に顯はれ忽ちにして之を撤し去りて、何處にか韜晦す、斯の如きこと一屢。



無我

⊙曾て、甲州邊の資產家の總領息子に思はれ、結婚せんとせしも、情人の父兄之を許さず。さらばとて青春の男女相携へて江湖に放浪せしが財布の金の五十兩は元より何時までつゞく筈もなければ、駈落者の必然の運命着のみ着の儘となり、遂に手を別ちて東京に歸り來れり。彼女乃ち髮を斷ちて、師訓に背けるの罪を中川幸子に謝す。流石剛氣の幸子も、其の變れる姿を見て暗然として語なき事多時。

⊙後數年、再び髮を粋な丸髷に結ひて、國民中學會の

事務員某の妻となり、湯島新花町に同棲せるも、天下和平の一日なく、遂に破鏡の嘆を見る。由來變物は、家庭の人たるに適はず。獨立自營、以て飽くまでもその變性を大成すべき也。

⊙桑島千代は女髪結の雄、娘盛りの十七より三十三の當年まで人の頭に苦勞すること十有五年名聲新橋の嬌巷に高し。近頃千代結と稱する結髪は、即ち彼女の考案する所也。

⊙はかなき女の痩腕一本を以て大枚一萬圓の大金を貯へ、これを虎の子の様にして宮城屋銀行へ預けたり。一昨年銀行の破産するに遇ひ虎の子はその大半を失ひしも、彼女は更に屈する處なく、ます〳〵腕によりを掛けて奮勵し、更に數千圓を積むに至りぬ。黄金は其の慰藉者にして、三十の夏までは殊勝にも彼れ童貞の孤棲を守りたりき。

⊙彼女の得意を語るものは、其の金義齒の燦々たるなり、多少のキザを語るものも亦、其の金義齒也。おきやんにして姉御風ある特色は、口邊の金光燦たるが故に其の幾分を減殺す。老來情に溺れて、只の女と化せずんば幸也。

⊙滔々たる天下の豪富を眼下に睥睨し、蠢々たる女人を冷笑して、傲然として立てるは、尾張屋銀行の持主峰島きよ子也。年歯七十有餘、體力强健、節制克己頭腦又明晰にして矍鑠壯者を凌ぐ。

⊙東京市の宅地所有者は、岩崎一家の二十二萬一千坪を以て筆頭とし、之に亞ぐは三井一家の十七萬二千坪日本隨一の大長者にしてこれに次ぐを峰島一家の十一萬九千坪とす。前者を兩横綱とすれば後者はまさに大關の格也。

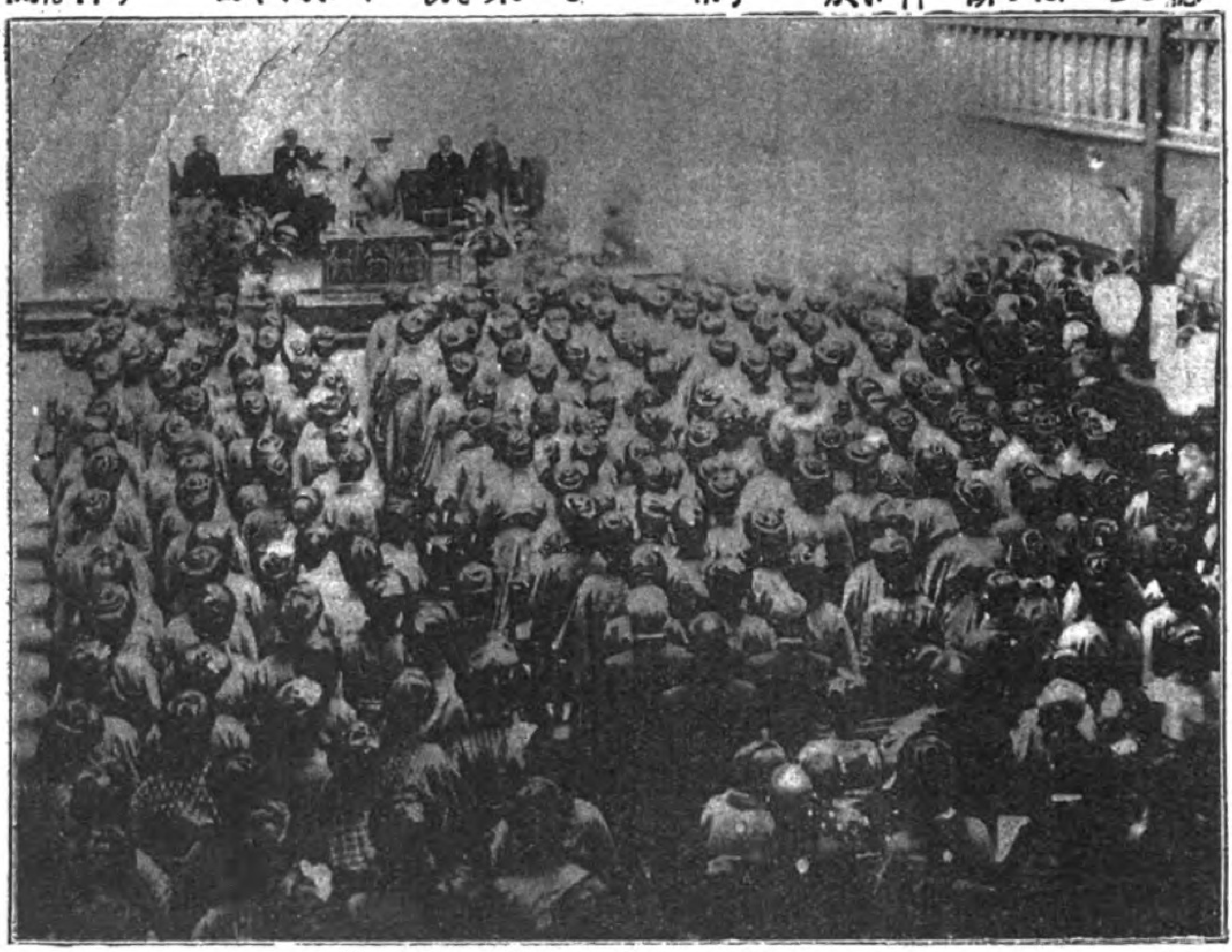
⊙斯の如く廣大なる宅地を所有し、又財界に隱れたる大勢力を負へる尾張屋銀行を持つ彼れ峰島の老婆は、侶松女史の所謂可亡人也。亡ぶ可くして未だ亡びず、頑健にして長生するは、即ち黄金劑の特効也。彼女、黄金劑の頓服によりて禪道の極意を體せる當代女の奇蹟也。

⊙絹布に生れて、絹布に死するは、老婆の本願に非ず

日常着する所の衣類は、總て是れ一反一圓二十五錢の品物也。敷く所の座蒲團は洗ひ晒らした、木綿の煎餅蒲團也、極度の節儉、＝＝惡く言へば、吝嗇なるに於て敢て人後に落ちざるも、勵精格勤の點に於ても亦常人に絶す。

⊙この難有き時世に遭ひながら彼女は今も猶電車に乘らず、人力車は元より、朝から晩まで、テク〳〵〳〵日和下駄をつゝかけて市内の差配所を巡回して監督す。

七十五錢の、毛ジュスの洋傘一本を修繕して、六年間



女子大學の卒業式ニ校長の訓辭

持ちこたへ、毎日晩餐の卓上、蕎麥のもり三杯を無上の珍味として、天道樣に詫び言をいひつゝ箸を執るの冥利心に至りては、眞に是れ二宮以上の報德家也。

⊙峰島の奇行は、確かに現代の浮華に對する一種の鎭壓劑也。亦無言の怒罵也。室内の紙障、多くは質物臺帳の反古を用ゐ、眼中に映じ來る所の文字は、悉く『ろ』の何號『は』の何番の金額と品物と也。

彼女は此の文字を見て會心の微笑を漏し、毎夜算盤を乳呑子の如く抱きて、徐ろに眠に落つ、又、一代の奇

物たるを失はず。

⊙村山文子は元「貴婦人」記者、常に三味線の撥と匕首とを褯裡に收めて、天下を横行す。吾人其の由緣を知らずと雖も、思ふに護身用の爲めにもや有りなん。

⊙文子は野州佐野の產、妙齡十八、なほ木登りを廢せざりし女也。宇都宮の高等女學校を卒業の後、人に嫁ぎしも不幸にして死別す。夫れより又良人を迎へず。鐵火箸の如き腕をさすり、尖れる顎を撫でゝ、閑談笑話するの時、鍚廣の厢髮は風前の蓮の葉の如くに搖ぐ凉風座上の奇觀也。

⊙彼女消化不良を病みて、時々數日間の斷食をなす。治胃の法、斷食を以て第一とし、坐禪を以て第二とし醫藥の如きは措いて問はず、自個の經驗を楯として萬丈の氣焔を吐く、而して肢體飽く迄も痩せ細り、健康なること彼女の如きは古來稀れ也。

⊙文子の文、未だ大に賞すべからざるも、世話好なるの一事、最も傳ふべし、鄕里に在るや、常に諸種の會合の集金係長たり。彼女三寸の舌を以て說けば、町中の吳越も亦唯々として寄附金を諾す。遂に神官に依囑せられて、大神宮の寄附を勸誘す。爾來町人等彼女の顏を見れば、「此度は何の寄附ですか」と問ふに至れりと。是れ、佐野名物の一として傳稱喧し。

四

⊙亭主によりて「愚妻が〳〵」と、到る處に振廻さるる所謂愚妻は、決して愚妻に非ずして、其實は賢婦人也。御亭主以上のこはもの也。論より證據、これを岡部法相の御新造に徵せよ。これを志賀重昂の奥さんに徵せよ。これを山路愛山の夫人に徵せよ、これを鳩山和夫の令夫人に徵せよ、これを加納子爵の御新造に徵せよ、皆是れ水平以上の傑物也。

⊙矢野恒太に夫人あり、名をつね子といふ、即ちこはものゝ第一人也。

⊙矢野は法學士也。元と農商務に官吏たりし時、保險事業を調査して得る處あり。後ち相互生命保險會社を營み今その專務にして、事業の發展頗る見るべきもの

あり、社會の風潮に鑑るところありて、孔子の遺書を研究し『ポケット論語』の著あり。

つね子は此の人の妻として内治の全權を掌握し、亭主をして一指を染めしめず。又是れ實踐躬行の家政家也。

⊙良人の外出するに際し、つね子は必ず紙入を調べ、十分の軍用金を入れて之を渡す。而して、良人の歸邸するや、直ちに紙入を受取りて之を檢査し、其の日の用途を仔細に尋ね、毫釐の微と雖も苟くもせず。此の際若



若尾家の婚禮贈物

し、費途不明の疑ある時は、彼れ威儀を正してこれを追究し、言曖昧に渡なれば、追擊いよ〳〵急にして、亭主をして足なみ、しどろもどろとなつて遂に白旗を揚げしめずんば止まらず、恒太歎じて曰く「お前の論法には迚も叶はぬ」と狐鼠狐鼠として頭を掻くを常とせり。

⊙當代の奇傑、山路愛山に夫人あり、名をたね子といふ、亦、亭主の行動を嚴に監視するの一人也彼女は愛山と同郷の人、東洋英和女學校の出身也

⊙愛山得る所の一切の報酬は、封の儘にて擧げてこれを夫人たね子の許に提供す。而して良人外出の時、毎朝二十錢の銀貨を給與せらる。是れ山路家の不文憲法也。然れども、御臺所の御機嫌麗はしき朝は、愛山も亦さるもの、遠慮なく晝飯の天井代を請求す。夫人又異議を唱へずして、更に十錢を加增すと。友人共の話也、愛山、詞壇に雄を稱し、天下に傲睨するも、入つて家庭の人となるや、稚態、小兒の如く、屢〻妻君の叱咤に遭ひて閉口頓首すと。是れ「國民雜誌」以外の種、元より道聽塗說に過ぎずと雖も、たね子夫人の面目躍如たるを覺ゆ。

⊙前田仙子は、詩人林外の閨、自ら神田三崎町に湊屋と稱する紙屋を經營す。居常粹な丸髷に結ひて一絲亂れず、帳場に端坐して商賣に油斷なし、算盤を一彈して微笑すれば、新月の眼元に不言の情趣を湛ふ。

⊙林外の小遣は制限ありて、豫算外の支出を許さず。外出の砌は、矢野夫人の如く先づ財布を調べ、良人が外に出て恥を掻かざる程度の金圓を入れて渡すを例とす、其の用意の周到なる、凡婦の及ぶ所にあらず。

⊙夫婦の間に兒無きを以て、細君の林外を愛する事常人に越ゆ、林外の痼疾再發するや身を忘れて看護し、餘暇あれば新聞の拔萃をなす等、家政の事は勿論書齋の事にまで內助し干渉す。詩集「夏花少女」の後に「花妻」の著ある、故なきにあらざる也。

⊙小石川傳通院前の書籍文房具店に礫川堂といふあり是れ主婦おくにさんの經營する所、電車停車場の附近なるを以て、千客萬來し、白筋袴の淑女等肩摩轂擊す。

⊙おくにさんは、夫の高山樗牛が「流星の如く來りて流星の如く去りぬと」評せし、閨秀作家樋口一葉の妹也。豐頰隆準の肥大婦人、時に子を抱きて賬場に坐し時に忙しく眼を廻して店頭を監視す、亡姉に比して色光澤よきは、深夜筆を嚙むの苦を知らざればなり。

⊙おくにさんの武器は算盤なり、主婦の持てる算盤の彈きに應じてパチ〱と立働らくは其の亭主也。始め客足稀に、塵埃堆く濕ッぽき店を研き上げて、今日の

光彩を放つに至らしめしは、彼女の鐵骨を藏せる柔かき腕の力ならずんばあらず。

⊙閨秀三宅花圃に異腹の妹あり、池村あか女と云ひ、長唄のお師匠樣なり、芝日蔭町に住し日夕數多の弟子を集へ、悠揚、急切の嬌喉を鳴らして教授す。又一種の英物也

⊙花圃は筑前の女傑『野村望東』を許傳して、世道人心を鼓舞警醒するの時、あか女は脂粉を粧ひてあら格子の座蒲團に坐り、歡進帳の爪彈に、古典的の趣味に悠遊す。性格境遇の異なる所、一葉の姉妹と好個の對照也。

⊙麻布の木村駒子も亦一種の女也、千里眼婦人千鶴子と同じく、熊本新町の生れ、同市の高等女學校を出で上京して青山女學院に學び舞踊の素養あり、曾て女優たらんとし、博士坪内の推讃を蒙りしも、其の境遇は遂に之を許さざりき。



⊙彼女は今茲二十五、小柄の美人也。清眸紅唇、十分の魔力を有す。其の得意とする所は千里眼に非ずしてイマジネーションなり。雪の如き左腕をヌッと突き出し。一たび觀念を籠むれば、左腕は既に我が有にあらず、乃ち肉を抓み上げて木綿針の太きを刺すも、痛みも感ぜざれば又血も出でず、平然として微笑す宛然『拈華微笑』の境地也。

⊙科學萬能主義に反抗して起てるは、靈界の研究者なり空中に聲を聞き、暗きに影を認め、果ては幽靈と相撲はんとす。斯の如きは餘りに奇なり。駒子の觀念術位が興趣十二分の所なり。



薄命の佳人

すみれ

羽織を脱で、足袋を脱でもしつとり汗ばむ程に暖い。緋ぶさのやうな楓の新芽にさらくと渡る風が、どこからともなく花の香を傳へて、九十の春光漸く中ならむとす。美の酔の裏あまれき好季節。此の歡樂極りなき陽春にそむいて、憂愁の雲に深くとざゝるゝ我一家こそ、なかくに恨多し。

アヽ兄様は、社會へいで給ひてわづかに二年。廿年の學の窓に得たまひし手腕を揮ふべき秋に先立ち、いたづらに風の行衛を訪ねて逝きたまひしよ。

懐かしの父母は、妾の物心も識かぬ幼稚き折に世を早う御逝去なすつて、冷たい他人の手に養育された妾は、兄様が學校を卒業なすつて、初めて其の暖い家庭に、我世の春を自覺ました。親にも増して頼みてし其の人を奪ひ去られた、あぢきなさ、小兄様はまだ東都の三田なる學校に修學中なのです〻の、年毎に花の齢の老い行く身は將來如何になる運命やらむ。

それにもまして傷ましいのは嫂様の身の上です。今年十九の花姿、天晴れ好一對の夫婦よと羨やまれて、鴛鴦の交情濃かなりし、其の片羽をそがれて、多恨い泪やるせなきおん風情　見るさへそゞろ哀れ深う御座いまする、

涙脆き浮世の海に漕ぎ出で給ひし第一番の痛手としてはあまりに悲惨ぢやありますまいか。人一倍美しいのがなほさら憂です。

葬式の折も、あのふさくとした多い毛を惜し氣もなく、總髪の悲中髷になすつて、白無垢召した、若き未亡人の姿を見た人は誰とて袖絞らぬ者はありませなんだ。花十七の新嫁の時の衣を二年後に、偕老同穴と契つた良人の喪の爲に着やうとは、當時姉様も思ひ給はぬ事でしたでせう。

その葬の折、喪主になられた小兄様の男振り、誰やらが、まるで御夫婦のやうだと言つた、悲しい中の串談が、つい此頃では親類の人々までも後繼者の相談の一として、眞面目にその話をもち上げてゐます。

それはもう、いづれ小兄様のお嫁様が入用ですもの同じ事ならばあのやさしい嫂様にいつ迄もく我家の主婦として、内助に盡していたゞきたいのは誰しも願ふ事ではあるが、生れて初めてゆるせし良人に、少女の血潮のあらん限りを盡して、今もなほ幽明隔たりし亡夫の上のみ想ひ

給ふ。可憐の御胸に何として、重きが上の小夜衣　夫や重ね給べき。

　昨夜も、ありし人の上やら、将来を語り合ひましたのよ。娘様は妾の手を取てしみ〴〵お泣きなさいました。

「再び男にまみえじと神に誓て亡夫の死體と倶に葬りし我愛情。妾として勤め短かゝりし身は　せめて節操を墓前に手向て、其の思ひをやりたき我願ひ。まして年こそ五ッ兄様なれ、不つゝかの身を娘と呼で下さる、其の弟と、亡夫の位牌の御前に夫婦と成て暮されませうか。又前途多忙のあの清い青年に、處女ならぬ妾が連れ添う事は勿體なくて、あたら汚すに忍びぬ事。それだのに實家の母迄がそうなれば安心だからとて進まぬ妾を強るんですもの」つてね。

　娘様のこのけなげの決心。亡兄のため、妾は嬉しい事に思ひまする。

　佳人薄命とは昔からの諺ですが　やさしい人も不幸だときゝました。

アア白百合のやうな清い美くしい娘様こそ、痛切にその言の葉を身一つにしめて居られる、方ですわね。

　それのみか、まだ娘様の身に一つ、苦しい思ひがありますの。

　凡そ世に、人の心程奇しきものはなからじな、

　三田の理財の健男子。理性の人と人も許し吾　思ふ小兄様の、先つ頃より、顔色には出されど、物を思ひ初めて胸々の情に堪へかね給ふ。そもキウピットは何故、思ふまじき女を狙へとて、其の矢を胸に射たりしや。一生の甘かるべき戀も、苦い〳〵の涙と自覚しながら、さて忘られぬ。意中の人はそも誰？　亡兄への友情、恩愛の義理さへなくば、今その願ひの届く機會にありながら、切なき胸も語られぬ、互の境遇。意志の強い小兄様なればこそ、よく忍で下さいます。道徳、義理、理性、

アヽ苦しの胸は妹がよく知て居りまする。

　このわりなき情緒を知り給ふ美くしの君も又お辛い事でせう。ゆるせし良人さへなかりせば、好意なる男の情を身にしめて、常世の春や長かるべきに。かりにも明して手を取て慰さめ得られぬ悲しの御身。我兄ながら小兄様は、殊に秀れた風姿血潮の同じ兄弟を娘様は何と見て居らつしやるでせう。アヽ眞實の御胸のさゝやきが承りたい？。

　娘様はね　亡夫の百ケ日を了へ次第、ある大家へ御奉公なさる御決心ださうです。實家へ歸るのは兄様夫婦に氣兼だからいやだつて被仰いますの。親類の人々の進めもいれず我意を立たから、青木にも居られないつ。てんですの。又淋みしくなる我家。妾はどうしませう。

　白砂青松の濱、沖に浮ぶ眞帆、片帆、呼べば答へん淡路を前にひかへし、風光絶美の舞子の別莊に、病み給ふ、若奥様のお傭といへば羨やましいやうに思ひますけれど、厚い旦那様の親切を見給ふては、又言ひしれぬ追想も浮びませう、馴れ給はぬ朝夕にお辛い事も間々御座いませう

孤獨に泣く妾は氣楽な起臥し、また幸福でしたわね

かりそめならぬなじみ。そも姉妹は何世の縁で御座いませう？

アヽ悲劇の女主人公—

あか〳〵と障子を照せし夕陽も漸くしづみて薄暮の色が次第に迫る。

こんな事書くのはやめて、娘様と松やに夕餉のお手傳など仕ませうよ。

愛國婦人會總會

愛國婦人會第十回總會五月九日新緑こまやかなる日比谷公園に催ふされたり、ことしは三年振に皇后陛下を迎へ奉るとて邦の盛觀なりき、公園の正門には大緑門樹ち、紅白と黒白の幕張りて打揃め、都下各區の會員を初め各地方の人々朝早くより入場し、總勢一萬二千餘に及べり、十時半總裁閑院宮妃殿下並に伏見若宮妃殿下を始め奉り、會長岡部子爵夫人、副會長阿部伯爵夫人濱尾、棚橋、三輪田、岡田の各理事參集し、程なく號砲の音殷々響き渡りて、陛下の御出門を報ずるや知事、支部長等は紅白の幕打ちたる式壇の上に居並び、壇下の會衆は打ひしめきて御着輿を待ち奉る、軈て表門の方に當つて君が代の樂聲瀏喨と鳴り渡り、陛下には高倉典侍の御陪乘、香川大夫以下の供奉にて御順路を御着あり、式場御車寄に下車、奉迎の諸員に一々御會釋を賜はり、假殿に入御あらせらる、此時岡部會長（空色の洋裝）、阿部副會長（白襟紋付）壇上に立ち、會長より開會を宣し、評議員の改選を行ひ、次で會務並に會計報告あり、再び奏樂起り、各員敬禮の裡に、右手入口眞白きレースの戸張の裡より、總裁閑院宮妃殿下（藤色の御洋裝）の御先導にて皇后陛下（乳白色の御洋裝）御靜かに出でまし給ひ、次で左右より會長の御先導にて伏見若宮妃殿下（空色の御洋裝）御出ましあり、皇后陛下には白き階段を靜々と昇らせ給ひ、金屏風を後にせる紫天鵞絨の御椅子の前に立たせ玉ひ玉顔麗はしく一同に向ひて御會釋を賜ふ、誠に勿體なきことにぞありける斯て陛下には岡部會長の奏請により御座に倚らせ給ひ、會長御前に進みて式を行ふべき旨申上ぐれば、陛下には香川大夫が捧ぐる左の令旨書を玉音朗かに御朗讀あらせらる。

令旨

本日愛國婦人會第十回總會に臨み益〻會員の增加するを見るを喜ぶ

總裁　妃殿下　恭しく進みて令旨を拜受せられ左の如く奉答し給ふ。

愛國婦人會創業以來既に十年を經忠愛なる會員の協贊を得て益〻隆盛に向へり是れ偏に至仁至愛なる陛下の至願に由らずんばあらず茲に第十回會員總會を開くに當り畏くも陛下の親臨を忝ふし優渥なる令旨を賜ふ本會の光榮何を以てか之に加へん伏て惟るに陛下夙に傷兵遺族の救護に軫念あらせられ眷顧の厚き會員子弟感激の至に堪へず自今尚一層奮勵し叡旨に副ひ奉らんことを誓みて奉答す

右御朗讀終るや、岡部會長閉會の旨を宣し、陛下には會員等が御名殘惜む裡を御會釋を賜ひつゝ入御、直に還啓仰出されたり、時に正午、次で各殿下を始め奉り會員等は思ひ〳〵に退散せり。

村井弦齋先生著

◎家庭改良の最良指針!!!

増補註釈 **食道樂**

春夏秋冬 合本 定價貳圓 郵税十八錢

◎本書には米料理百種、パン料理五十種、病人料理百五十種、日用食品分析表、食器食品價格表、料理心得の歌百種等の附錄あり。

増補註釈 **食道樂 續篇**

春夏秋冬分本價各一冊八十錢 郵税各册十二錢

◎春の卷には野菜料理百種、夏の卷には果物料理百種、秋の卷には魚料理百種、冬の卷には肉料理百種の附錄あり。

増補訂正 **台所重宝記**

全一册 和裝 定價金壹圓 郵税十二錢

著者の自序に曰く此書の記事は盡く我家庭の實驗する所にして余は飽く迄も世人に親切ならん事を期すと

▲發行所 東京市麹町區有樂町（振替東京七三八番） 報知社出版部

▲發賣所 東京銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番） 新橋堂書店

▲松林伯知一世一代の講演

徳川榮華物語

全十冊 各册定價五十錢 郵税六錢

◎六ケ年間報知新聞連載……好評嘖々

各卷重なる讀物

松の卷には 大久保彦左衛門……春日局

竹の卷には 天草一揆……由比正雪

梅の卷には 元祿時代……水戸黄門

櫻の卷には 赤穂義士……大岡越前

藤の卷には 白河樂翁……高山彦九郎

菊の卷には 中山公東下り……林子平

椿の卷には 河内山宗俊……鼠小僧

萩の卷には 大鹽平八郎……高野長英

楓の卷には 八代目團十郎……お富與三郎

桐の卷には 水戸叉騷動……錢屋五兵衛

▲東京小兒科院長 醫學博士 瀨川昌耆先生著

▲やまと新聞記者 天野誠齋先生著

（五版）

増補訂正 **實驗上の育兒**

上卷定價六十錢郵税八錢 下卷定價七十五錢郵税八錢

七人の愛兒を自身御夫婦にて恙なく育て上げられた育兒實驗家の瀨川醫學博士が丁寧親切に說明せられました育兒談は即ち此本です、吾見の健全なる發育を望まるゝ父なり母なる人にが非御一讀あらん事をお勸め申します。

發行所 東京銀座大通新橋際 振替貯金東京二〇〇番 新橋堂書店

女（ぬの一）

文學博士 箕作元八先生著

西洋史新話

全部凡拾冊
（隔月發行）
洋裝菊判美裝上製
地圖及密畫挿入

最も趣味に

國運の進張と國際關係の發展は、我國民をして、近時に至り殊に著しく西洋歴史に關する智識の必要を感ぜしめつゝあり、本館は、今回本邦に於ける西洋史學のオーソリチーたる箕作博士に請ひ、一般國民の讀物とすべき西洋史の刊行を企て、玆に**西洋史新話**の出版を見るに至れり。博士は「**一般國民の爲に與ふる讀物**」たる事に深く留意され、其の宏博の學識を包むに、豐富なる趣味の色彩を以てせられたれば、本書は精到比無き新方式の史書にして、而かも一面にあつては英雄傳、傳奇小説を讀む時に味ひ得る一種の興趣に滿てる新讀本也。思ふに、本邦西洋史あつて未だ斯くの如き趣味豐かなる史書あらざるべく、又斯くの如き趣味豐かなる書にして而かも新研究を加味して巧に史蹟を説けるものは無からん。本書は世界的國民讀本として、新時代に於ける我家庭に必らず備附すべき、切要第一の書たり。第一冊「**ギリシヤの擾亂**」出版に引きつゞき紀年の節序を追はず、分冊として續々刊行せらるべし。請ふ速に來りて、興を逐ふ讀書の中に、世界的國民たるの實を養ふべき此の好著を逸する勿れ。

發兌元 東京日本橋本町

花卉應用裝飾法

花は如何にして挿すべきか
花は如何にして盛るべきか
花は如何にして飾るべきか
花束は如何にして造るべきか
襟挿は如何にして拵ふべきか
室内の花卉裝飾は如何すべきか
店頭の花卉裝飾は如何すべきか

前田曙山君著

机上の花卉裝飾は如何ずべきか
違棚の花卉裝飾は如何すべきか
花の水揚は如何すべきか
水無くして花を挿すは如何に
香の無き花に香を持たせるは如何に
植物の葉は如何に裝飾さるゝか
食卓の敷花は如何にすべきか

本書を一讀すれば菫蒲公英は元より路傍に咲く赤のまんまも直ちに採りて金殿玉樓の裝飾となし得べし

菊判クロース製
南京綴三百頁
定價九十錢
郵税八錢

中村高等女學校長 戸野みちゑ女史

元華族女學校講師 近藤正一君 共著

實用 女子作文全書

女子をして容易に文章を起稿し且つ作文に圓熟せしめん爲に編述せるものにして文の組立方、修辭着想等作文上の大法は勿論記事、紀行、日記、叙情、弔祭、祝辭、書簡等諸種の文章には一々文例を擧げて其作法を懇切に記述し又作文の資料として美辭、類句、用語等を四季若くは題目に分つて列記し更に進で家庭に必要なる公用文の認め方をも示し苟も女子に必要なる文章上のことは之を盡したれば女子座右の寶典として女學生は勿論家庭に於て一日も缺くべからざる必要の書籍なり

和装菊判美本
紙數 四百五十餘頁

▲近刊▼

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十册＝每月一回發行

近時婦人敎育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生逹の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

- 第一編 新家庭訓　三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理　石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南　喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法　龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道　水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南　琴松岡文雅君　松幸齋理常君　共著
- 第八編 簡易治療法　藤井靜子女史著
- 第九編 禮式と作法　佐方鎭子女史著
- 第十編 惣菜料理　赤堀吉松君　赤堀峰吉君　赤堀菊子女史　共著
- 第十一編 編物指南　三木とみ子女史著
- 第十二編 婦人の生理と衛生　牧野清子女史著
- 第十三編 敎育お伽噺　木村小舟君著
- 第十五編 家屋と庭園　內山正如君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養　鹿野ㇾ骨君著
- 第十七編 女子作文法　遠藤ふみ子女史　松崎ふく子女史　共著
- 第十八編 子女の敎養　棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味　文學士大森兜山君著
- 第廿編 家庭遊戲法　高橋忠次郎君　松浦政泰君著
- 第廿二編 歌の手引　大和田建樹君著
- 第廿三編 刺繡術指南　磯村大次郎君著
- 第廿四編 摘み細工指南　山田興松君著
- 第廿五編 新式化粧法　藤波芙蓉君著
- 第廿六編 室內裝飾法　近藤正一君著
- 第廿七編 衣服の調整　石崎篁園君著

販賣用電話 本局二六二〇

東京日本橋 **發行所**


佛國メンマン會社釀造
アルコール分少く滋養豐富なる葡萄酒
赤白マルタン葡萄酒
MEDOC SUPERIEUR
Merman & Co
BORDEAUX
R YAMADA-YA
食卓用として又藥用として到る處の家庭に愛用せられつゝあり
橫濱東京 山田屋


御婦人の寶
御婦人方が生涯無病でお過しなさるには月經の處置が最も大切な事は申上る迄もなく從來の樣に脱脂綿等を挿入なされては經水の滯るのみならず綿の纖維が殘り乾度子宮病ヒステリ等の病源となり醫家の嘆かる事です
特許安全帶
は藤、藥學士發明消毒安全吸收力脱脂綿の數倍で博士の甚く賞用さるゝ月經時に重寶便利な如何程經水の多い方でも粗漏する事のない起居動作極めて安全な帶
又産後や白血長血痔漏等に妙です
衣
東京市下谷區池之端七軒町四十二番地
內外石鹼化粧品卸商安全帶本舖 安全堂
大阪市西區阿波座上通一丁目二十二番地角
關西一手販賣 洋々堂分店
定價
安全帶特甲一筋壹圓貳拾錢
乙八拾錢、並四拾錢、一筋ニテ二三年使用出來升
安全衣は一打入一箱金四拾錢
市內ハ藥種化粧品店ニテ販賣致升
小包料ハ一組金拾貳錢一組增每ニ貳錢增シ候

女(りの入)

活花と精神の慰藉

東京女學館教授　沼野俊子

▲活花の起源

我國で活花の起りましたのは推古天皇の御宇で、隋へ使はされた小野妹子が、彼地から歸朝して後、聖德太子の建てられた觀音堂（今の六角堂）の守護役を仰付けられた時、彼地で見て來た通り花を活けたのが初めださうです。此の觀音堂は池の畔に建てられてあつて、妹子の花を活けた室を池の坊と稱へたので、今でも活花の流儀の一つとして池の坊があるのは此に基く次第だと申します。後世足利義政の時代になりまして活花は茶道に伴れて大に榮え、流派が澤山出來ましたが、池の坊は斯道の宗祖だけに最も天則に副つて居るやうでございます。

▲天然の花と活花

賤が伏家の娘が破垣に亂れ咲ける折々の草花を摘んで棚の竹筒に挿むにも、挨りを拂ひ枝振りに葉振りに幾らか意匠を加へる位ですから、況して來客に身分相應の待遇を致さうと云ふ場合には、主人の清く優しい心ばえを客に見せる媒として、床に一瓶の挿花を要するのは、自然の要求でございませう、尙ほ又土一升金一升の都に住み、春の山、秋の野に杖を曳く閑さへ容易に得られない方は、奥さんが一寸の暇に挿された活花に何樣に精神の疲れを慰藉せられるか知れません。それゆゑ私は社會の進歩に伴れて斯道は益々盛になる事と信じます。

▲花の愛し方の相違

西洋人は日本人より多く花を愛し、來客の際は、各種の草花を集め籠や花瓶に挿し込んで、唯一のもてなしに致す風習ですが、日本人とは花の愛し方に相違がある爲め、自然挿し方も違ふのであらうとぞんじます。

西洋人は主に花輪だけを愛しますから、多種類の

開いた花輪を瓶中に集め、眩き色彩を見せることを務めるのですが、日本人は花よりも寧ろ枝や葉の自然の生ひ立を愛するのですから、一瓶二種以上を挿むことを嫌ふと云ふ風がございます。(尤も建築の相違も關係して居るのでせうが)。而して西洋では客が花瓶の中から自分の好きなのを摘んで胸や髪に挿すことなぞも、滿足の情の發表として主人に喜ばれるのでせうが、日本式の挿花は一葉一花を摘み取つても、全體の整齊を亂すのですから、他人の挿した花に手を觸れることを堅く戒めてございます。

▲植物の生ひ立にも相違あり

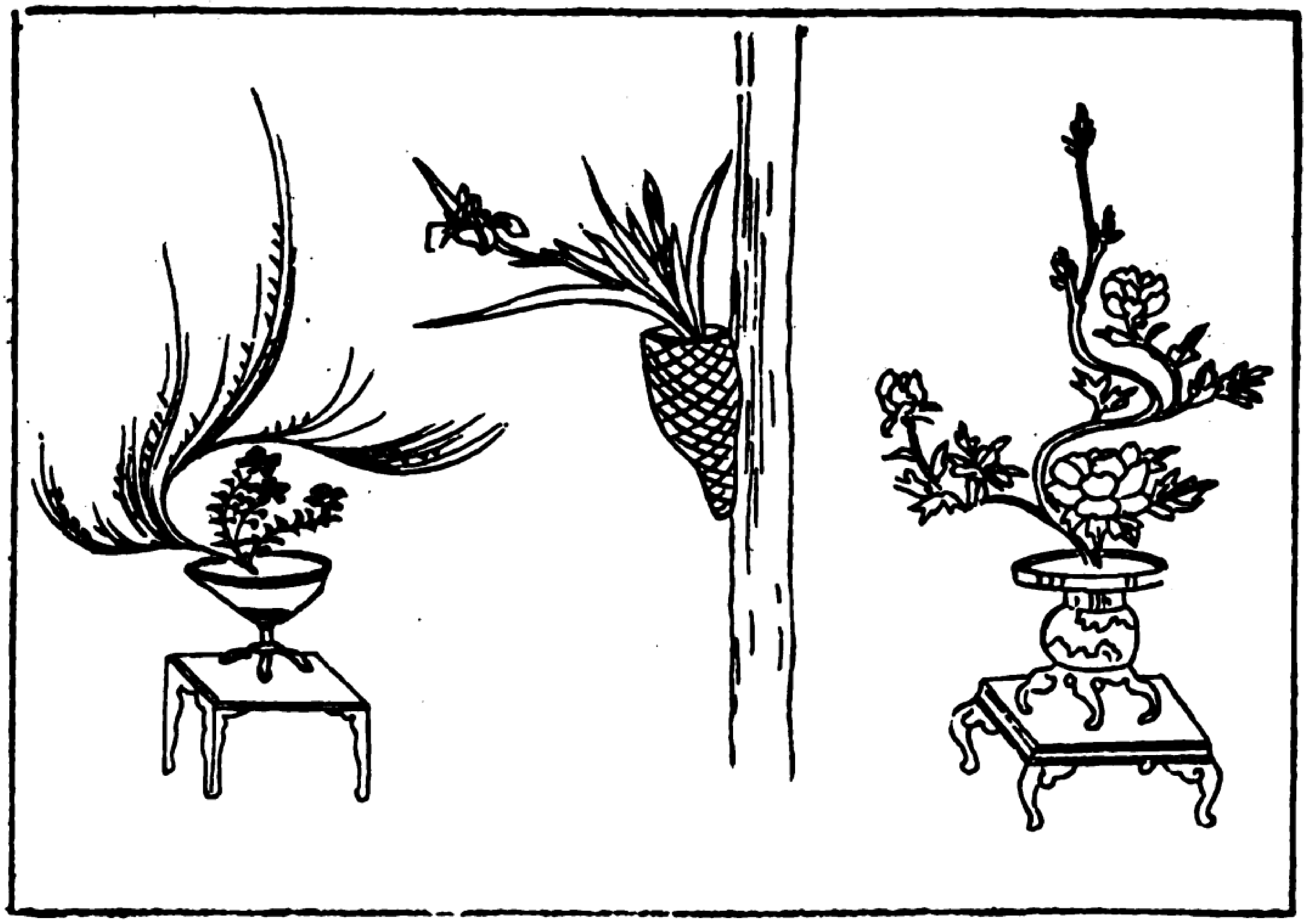
趣味が異れば、花の培養法も違ひますから、西洋の花は日本式の活花には適しないものが多うございます培養したものは其筈ですが、野生の草花でも、國民の趣味に應じた形に生長するものと見えまして、私は旅行致した折などに、善く山路に咲いた草花を活けて見ましたが、矢張り枝葉に自然の趣が見えて、外國の野生花よりは活花に適して居るやうに思ひました。趣味の相違は無心の野の花にまで影響するものでせうか、實に不思議なものでございますネ。

▲白耳義貴婦人の活花趣味

近來は西洋人も我國の挿花法に心を傾け、師に就いて研究する人が澤山あるのでございまして、私のまゐる學校へも、折々研究旁、教授法を觀に來る方がございます。一昨年白耳義の貴族夫妻が觀光の爲め來られました際夫人が是非挿花術を研究して歸りたいと仰しやつたので貴賓會の方から私へ紹介がございました。

私の藝は素より拙うございますけれども、日本獨得の藝術を、一端だけでも彼國の人に知らせたいと云ふ考へで、一週間内に大體のところを說明しながら、數種の活け方を見せました。其貴婦人は母親の記念として廣大な花園を貰ひ、日本の草花も各種培養して居るのださうでして、僅々一週間の稽古ではあり、活花趣味のない通譯者を介して意を通ずるのでありましたが

一を聞て十を知る夫人の聰明と熱心とは一通り活花の要領を會得せられ、大满足でございました。花好きの夫人は、本國で百合と云ふ雅號を持つて居らるゝのださうで、私に活花の方の名前を與れろと望まれましたが、家元だの何だのと面倒なことも申されませんから、取り敢へず採花園春霞と云ふ號を送り、英語で説明しましたところ、春の花園を理想とする西洋婦人の事とて、喜色滿面に溢れ、歸國の上に是非この高尚な藝術を社會に傳へ、自ら挿花したのを撮影して送ると約して歸りました。



▲外客に挿花の御馳走

昨夏羅馬の醫學博士夫妻が觀光の爲め兄（醫學博士三島通良氏）の許へ來られました際は、丁度例の大洪水の最中でございましたので、諸興行物は悉皆休業して居り、見物に案内する場所がございません。と申して彼の騷ぎの中でお茶屋へ招じて藝妓の踊を見せるのも、世間に對して心苦しいので、殆ど接待の方法に窮しましたから、間に合せに私の挿花を見せることになりました。所が花を出す本場所が悉く浸水しましたので、

殆んど材料に窮し、やつと方々から集めて用ゐましたが、此の羅馬紳士の夫人も亦花に趣味深き人で、かねがね日本の挿花を研究したいと云ふ希望がありましたから、僅かの間に一通りを覺え、大滿足で歸國しました。私は種々の外國人に斯道を話しましたが、希臘や伊太利あたりの古い國柄の人の趣味が一番我國と似てゐるやうに思ひます

▲獨逸人の熱心

矢張り昨年の洪水時分、ヘンゲルと申す獨逸の植物學者が、挿花の研究の爲め私方へ參りました。而して一日の内に數種の方法を見せて與れといふ望でしたから、私は息もつかずに二十餘種を活けて見せましたが其日は九十二度の暑さで、私は單衣が汗で絞るやうになりましたけれども、お客は額に流れる汗を拭ふとも忘れて打ち守ると云ふ熱心、加之根掘り葉掘り質問するのですから、言葉の不自由な私は、隨分弱りました總て外國人に說明しますには、挿花の術語を其儘用ゐられない場合がございますので、例へば陰陽と申すのを男女と譯するのも變ですから、表裏と譯して聽かせると云つたやうな工夫がいります。

▲花の情性を發揮する快感

私は以前には神經の興奮する質でございまして、些細の事に氣がイラ／＼して困りましたが、良人の勸めに從ひ、この藝を修めましてから、全然生れ變つたやうに健康に爲りましたので、學校へ出勤し初めてから今日まで一度も缺勤致したとはございません。私は花の所爲に健康を與へられましたなぞ申して、人樣に笑はれるともございますが、梅の枝を手にして其香を吸ふ時、櫻の花を取り上げて其美に打たるゝ時、不言の花の囁きを聽取るやうな心地が致します。手前味噌とお笑ひなさるでせうが、花の情性を發揮させやうと務めまする斯道は、精神にも身體にも非常な益があるのでございます。



日本印象記（四）

中村春雨

△亀戸天神の所感

自分の寓居してゐた亀戸には、例の有名な天神の祠がある。田舎にゐた時、いかい、うかれ節――今の所謂浪花節語りなどから聞いた諸國武者修行宮本左門之助の守護神であるといふ昔の記憶が今も猶頭の隅に殘つてもゐるし、江戸名所圖繪や、新版の東京名所圖繪などで藤の花の白、紫の房が長く垂れて、青い池の鏡の底に映つてゐる上を、太皷橋が渡つて、祠の屋根が神々しく聳えてゐる光景が眼先に浮ぶので、初めて東京へ來た際、親しく參詣して見ると、繪で見た青い池は、濁つた、汚い水溜である。太皷橋は大分朽ちかけて、木片の補綴が醜くゝ目立つ。藤の花丈は如何にも綺麗であるが、併しこれ位なのなら田舎の鎮守様にいくらでも咲いてゐる。名物と名所には旨いものが無いとさへ思つた。今度又更めて行つて見ると、前より一層汚い、見すぼらしい、これが東京の有名な神社の一つで、一部の都會人士の信仰の標的になつてゐるのかと思ふと、何んだか擽つたいやな氣がした。

△氣持よい名所古蹟

西洋の名所とか、古蹟とか云ふものも、皆が皆、立派な、目の醒めるやうな者許りではない。隨分「何んだ、これかと?!」失望するやうな事もある。併し國家の功臣を記念する銅像とか、石碑とかいふ種類のものは、ソレ〳〵名のある工匠の手で造られ、又結構な材料が使つてあつて、附近は青い芝や、綠の森や、四季

香の絶えぬ花園で飾られてあるのが多い。仰いで功臣の偉業を偲んだり、ベンチに凭れて自由な呼吸をしたりするに、邊りの樣子がいかにも氣持よく出來てゐる。一體我國の如く同じ人間の功臣を神社に祀るといふが如き古來の習慣は、國民の精神敎育の上に、多少の利益はあつたかも知れぬが、それと同時にいろんな、下らん迷信の種を蒔く事になつたのは事實である。天神樣に習字の上達を祈つたりなんかするのは、兎に角、病氣の平癒や、商賣繁昌、家運長久などの祈願を罩めるに至つては、隨分御門違ひで、菅公の御迷惑も察するに餘りある。敬神の風が惡といふのではない。誤られたる敬神の風が、眞の敬神の觀念を曇らせて了つて、日本人の宗敎心を淺薄なものにして退けるやうになつたのが遺憾だと云ふのである。

△精神萎靡の原因

例へば獨逸など、今日至る處に、ビスマークの銅像や、記念碑などが建てられてある。やがては日本の天神樣の數程澤山に出來る事になるだらう。獨逸國民は斯くしてこの國家の大功臣を敬慕し、國民の精神敎育上に、永久の感化力を有するものとして、誇つてゐるが、併し、その前に病氣の平癒や、商賣繁昌を祈るやうな眞似をするものは一人もない。假令、少年や少女にしても、そんな事は決してしない。ビスマークも人也、我も人也といふ、人間共通の觀念が、やがて第二のビスマークを出し、第三第四のビスマークを國民の中から續出せしむる方便となつて來るのである。功臣を人間以上の神樣にして了つて、その間に渡るべからざる深い淵を穿つのは、やがて國民の精神を萎靡せしむる所以である。いろんな迷信を產む災禍の母である。

△迷信を出でゝ迷信に入る

明治の今日になつては、最早、人臣を神樣に祀る事は許されてゐない。西鄉以下大功臣の銅像や記念碑が至る處に出來るやうになつたのは、自然の勢である。併しそれが唯、一の見世物か、裝飾品の如く見られて、

國民の精神教育の上に何等の感化も及ぼさないやうな傾向のあるのも、又遺憾である。昔の大儒が寺門を潜つて、阿彌陀佛に敬禮し、「一家に入れば必ず其御主人に挨拶するのが作法だ」と云つたといふのは、味のある言である。迷信と混同されるのが恥かしいといふ廉で神社佛閣の前で叩頭する事を避けるのは、一の迷信を出でゝ、他の迷信に入るものではあるまいか。兎に角、名所や古蹟は、都會にせよ、地方にせよ、其地の人々の誇として、永久に保存すべきものである。然るに國民が神社佛閣に對して、あまり冷淡になつては、その保存も覺束なくなる。これから變遷の激しい時代の國民の最も注意すべき一問題であらうと思ふ。



△贅澤なるアッパートメント

染物屋のさらし布の風に翻つてゐる、肥桶船や塵芥船が汚い堀割の水の上に混集つてゐる、製造所の赤煉瓦が附近の陋い家の軒並の上に、劃然と聳えてゐる、又その上に黒い煙突から、モヤ〳〵と煤烟の吐き出て

ゐる、石炭殻を敷いた道路の、底が濕潤してゐる、この龜戸町の寓居から、やがて小石川の高臺へ引越す事となつた。倂し、匆卒の際であつたから適當な住居が見附からぬ。當分住居の見込で、借り受けたのは脊中合せになつた二階長屋の一方である。

この二階長屋から思ひ出すのは、西洋のアッパートメント住居の事である。アッパートメントは即ち西洋の長屋であるが、この長屋は、日本流に横に長くなつてゐないで、縦に高く、四階五階、六階七八階、まだその上に出てゐるのもある。そしてその一階を幾つにも劃つて、一つのアッパートメントには三十家族も四十家族も住居してゐるのが少くない。それが貧乏人許りかと云ふに、それ處ではない。中には日本第一流の富豪程度の財産位は持つてゐる人が、ワザ／＼そこへ借家の、而も長屋住居をしてゐる事が珍らしくない。それは西洋の大都會は、次第に地域が狹くなつて、幾何金を出しても、土地が手に入らないやうな狀態になつてゐるからである。

隨つて、この種の西洋長家——アッパートメントは無論共同便所でも何でもない。イヤ、それ處か、一の一つ立派な、大理石造の湯殿も附いてゐる。庖厨は云ふまでもなく瓦斯應用で、燈火は電氣燈、それに室毎室暖の蒸汽々管も通つてゐれば、昇降機の設備もある。日本の華族様も、これ程には手の行き届きかねるやうな便利と安樂と、贅澤と華奢とを兼備したる高等長屋なのである。

△一軒の燒落が二號活字

日本の長屋では隣りの火事が恐ろしい。隣が明屋にでもなつてゐて、乞食か何か宿を借りに泊り込んで、マッチ屑一つ、投げでもしたら、それが運惡く、メラメラと障子に燃え移り、忽ち類燒の災難に罹るやうな事が出來し兼ない。いろんな取越苦勞がそれからそれへと出て來る。倂し西洋の長屋ではこんな心配は無用である。煉瓦造りか、石造りかの上を、おまけにコンクリートで堅めなどしてあるのだから、隣りから火が

出たつて平氣で火事見物をしてゐる。階下から火が出ても、上の窓から頭を出して眺めてゐる事などもある。それに消防の設備が行屆いて、狹い處に手の屆くやうに出來てゐるから、大火などゝいふ事は殆んどないと云つてもよい。イヤ、ホテルが一軒燒落ちたら、これが大火なのである。新聞の二號活字ものになつて、彌次馬連が大勢して火事跡見物と出かけるのである。彼の桑港の大火の如きは、地震で家が一軒一軒倒れたのだから、素より例外中の例外なのである。



△「東京村」と庭園市

日本のアッパートメント住居は危險だからといふので、その中、矢來の臺へ引越した。こゝらは土地が高くて、屋敷風の家が多い。二階の窓から眺めると、北には久世山の臺が立つてゐる。西には秩父山がおぼろにかすんで、近くは早稲田の森が黒ずんでゐる。それに、近所の屋

敷の庭園の、參差たる青樹綠林が一目の下に見晴らされて、何んだか東京といふ大都市を離れ、田園生活をしてゐるやうな感がある。外國人が『東京村』と云つてゐるのも、尤だと頷かれて來る。

紐育にしろ、倫敦にしろ、伯林にしろ、又巴里にしろ、高い家の窓から見晴らしても、見えるものは先づ高い家の屋根か、壁か、寺院の尖塔か、偶に脊いものが目に附けば、公園の一角位なものである。何うしても大都會生活といふ感に壓迫される。濁つた空氣、群集の足音、馬車自働車の音響、高架鐵道の喧騷、神經を刺戟するもの許りである。然るに東京市の生活はその趣を異にする。下町の一部分は兎に角、大部分は、田園生活の感を與へられる或物を有してゐる。貴族や富豪は、自己の家屋を廣大な森や樹木や泉や池で取圍ませて、人爲的に田園生活を髣髴せしめてゐる。彼の米國の富王ヷンダーヴキルドや、カーネギーなど、云つても、彼等の紐育市の邸宅は、高大な塀や、廣い庭園の中にあるのではなく、氣の利いたホテル住居に過ぎないのに、この點にかけては、日本の弱小な華族や富豪連は、優に彼等以上の贅澤を極めてゐると云ふ有樣なのである。



日に〳〵、發展して行く東京市の將來は、如何に變形して行くか知れないが、兎に角「東京村」的の生活の俤は、容易に滅んで行くものではあるまい。又或程度迄は保存するを要するものであらう。現に西洋には都會生活の無趣味、無風流に飽いて、市外地に花匂ひ、緑滴る庭園市を設け、此所を本宅として、市街地の事務所へ通勤するやうな制度も行はれかゝつてゐるのだから、都會的たると同時に田園的たる東京村の住民は、或意味から云へば一箇の幸福なる境遇に至るものかも知れぬ。

△貴族的の日本の劇場

この東京村の住民となつた余は、當時「劇評」家となつて、各所の芝居見物に忙しかつた。

かくて、最初に見物に行つたのは日本一の歌舞伎座である。近頃は東洋一の帝國劇場が出來上つて、歐米各國の大劇場に比して、あまり劣を取らぬ程の建築の宏壯と、輪奐の美とを極むる事となつたが、併しこれは純西洋風である。劇場内部の純日本風に出來てゐるといふ點から云へば、歌舞伎座は矢張日本一たるを失はぬ。所謂日本の芝居小屋の代表者たる資格は、依然として此座の專有物になつてゐる。

併し西洋の劇場に出入してゐた身には、日本の芝居小屋へ入つて行くのは何うも臆劫である。第一、茶屋へ行つて、そこから又送られて棧敷へ入つて行く、無用な手數と無用の時間が費る。おまけに餘計に心付やら祝儀やら、考へて見ると日本の芝居見物といふ事は頗る貴族的な、贅澤至極の沙汰になる。西洋の劇場の平民的で、頗る簡易主義に行つてゐるのと隔世の感がある。西洋では劇場の入口で切符を買つてゐる。それさへ手に入れたら靴履の儘でサッサと入つて行つて、切符の番號と照會して、定めの腰掛へ就く。それ以外、何の費用も手間も懸らない。案内者へ心付けと云つても、日本の白銅一つで事足りる。餘計な金を遣つたら、後で舌を出して笑はれる位のものである。

△内は封建時代の空氣

それから又、日本の芝居の午前十一時、十二時頃開幕といふのも、この生存競爭の激しい今日、此處丈は別世界といふ感がしてならぬ。德川の封建時代その儘の空氣が、凝として芝居小屋の中に停滯してゐるといふ氣持がする。西洋の劇場の開幕時間は早くて夜の七時半、普通は八時、遲くも十一時前後には閉場する。晝間勞働して、精神休養の爲めに、夜間芝居見物をするといふ風になつてゐる。日本流に午前から芝居が始まるのでは、男子は職業を休んで、一日がゝりで遊び暮らすといふ事になつて來る。富豪の樂隱居か、餘つ程のノンキ者でなければ、そんな眞似までして芝居小屋へ入る必要もなくなる。勢、體に隙の多い婦人連許りが、芝居小屋へ詰め込んで來る事になる。隨つて芝居も甘いもの、儚いもの、型に入つたもの丈が何時迄も繰返されてゐて、男子の趣味――若くは新らしい教育のある婦人の趣味、嗜好とは、次第に遠ざかつて來るやうな始末になる。

それから又、あの長い時間、狹い檻のやうな棧敷の中へ、窮屈に詰め込まされるのだから、煙草も吹かさなくてはならぬ。菓子やお茶も入用だ。辨當も要る。鮓も要る。その不行儀は兎に角、費用も入場料の倍かかつて來る。處が西洋の劇場では。第一、時間が短くて濟むから、かゝる事の必要もないし、又、席での喫烟などすら一切禁制されてある。唯、眼の樂み、――頭の娯樂――心の娯樂、即ち純粹に藝術を鑑賞する事となつてゐる。口腹の慾とは切り離されてゐる。

△英米は淺草奧山式

尤も西洋でも、國々に依て、芝居を見物する者の心得は必ずしも同一でない。米國や英國の如きは、日本の芝居見物者と先づ似寄つたもので、劇場を唯、氣晴らし、鬱晴らし、食後のお茶の代用位に思つてゐる者が多く、紳士淑女たる者が公然に出入する處ではないと云ふやうな頑固な、迷信を有してゐる者も少くはな

い。即ち遊戯も遊戯、――而も上品な遊戯でないとさへ心得てゐる者が多いので、從つて劇場側の者も、かかる見物の氣に入るやう、歡心を求むるやうに仕向けて、音樂喜劇――音樂を入れて、戀を綾どり、花やかな衣裝を着けた、厚化粧の美人群に盛んな踊をやらせるといふ、淺草の奥山式の見世物踊をハイカラ化したやうな興行物が隨分續々と行はれて、大人氣を引いてゐるといふ有樣である。若くは、近頃、持て囃されてゐる曾我の家式の滑稽劇風のものも、ナカ〳〵世俗の喝采を博して



ゐる。それ以上、多少進んだ芝居と云つても、文藝といふ標準から云へば、頗る劣等な種類に屬する者が多く、有名なピネロとか、ショウとかいふ樣な作者の芝居も折々興行はされるが、それ等は見物の種類が違つてゐるのである。世界の大戯曲家沙翁は本來、英國の出生者であるにも不拘、お隣りの獨逸の劇場の方で、本家本元よりも盛んに興行されてゐるといふ次第だ。要するに、音樂や踊で見物の耳目を胡麻化し、又大道具大仕掛で俗衆を嚇かし附けるとかいふのが一般の風潮で、見物遊山本位になつてゐる。

△佛蘭西人の芝居觀

佛蘭西の方は、英米の芝居とは異つて、例の國立劇場コメデヰ、フランセーや、國立の大オペラ座を巴里の文華の中心として誇つてゐる藝術國丈けに、芝居を最高の藝術として扱つてゐる。背景や光線や、衣裳や音樂やなど、その工夫も注意もナカ／＼至つてゐる。東京人が國技館の場所角力に對するやうな熱狂心を以て、劇場と芝居とに多大の注意を拂つてゐる。日々の芝居の興行物の題目を印刷した日刊新聞まで發行されて、到る處に賣捌いてゐる。新作脚本が出てそれが初興行されるといふ事になると、劇場は一種の殺氣を帶び、血眼になつてゐる見物に依て、充滿されて、取殘された場外の者まで、その上場の結果を近所のカッフエ、玉突塲などに待受けて、熱心に聞かんとしてゐる。かくて、甲是乙非の論爭が始まつて、市街上に爭鬪が起るといふ珍事も出來する。



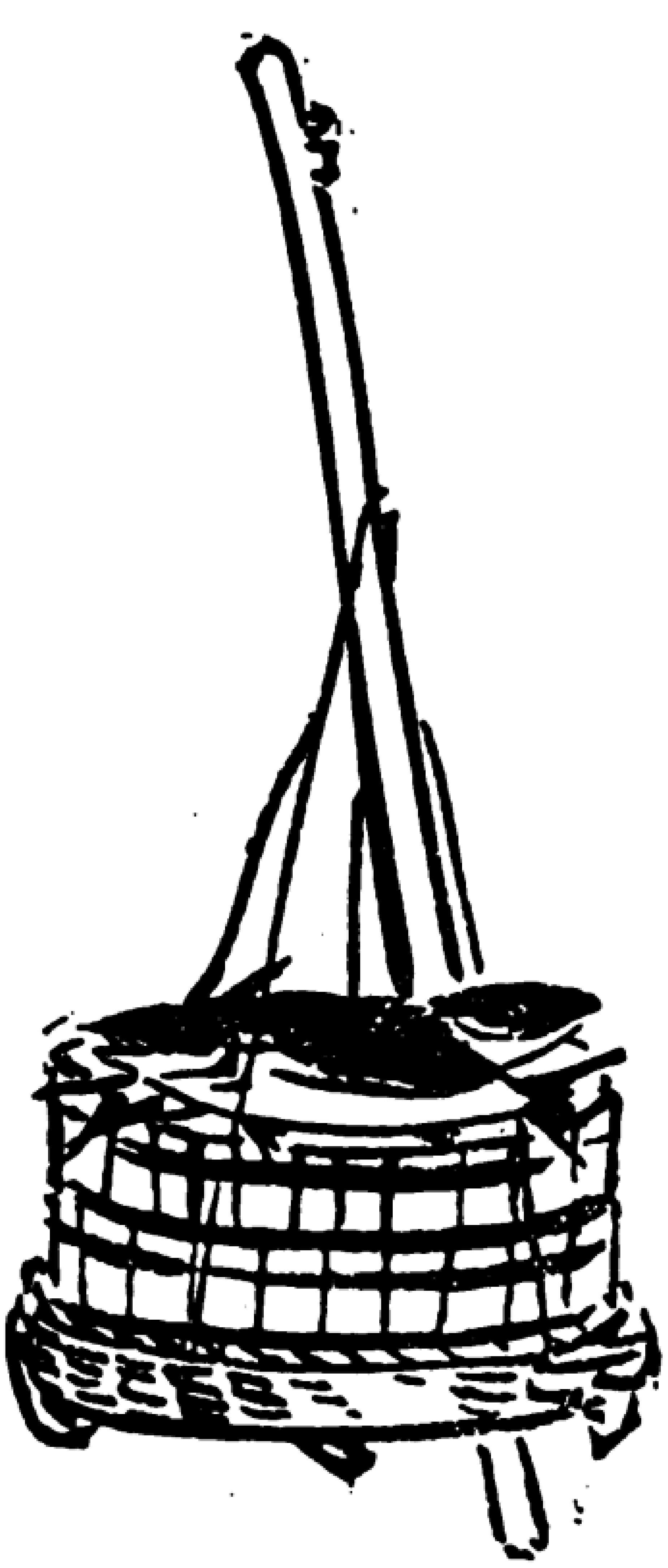
かくの如く芝居に對して、佛國人は熱心であるが、何うも藝術のための藝術——或は唯俳優の技藝如何といふ方面に許り傾き過ぎる調子がある。見た時の興

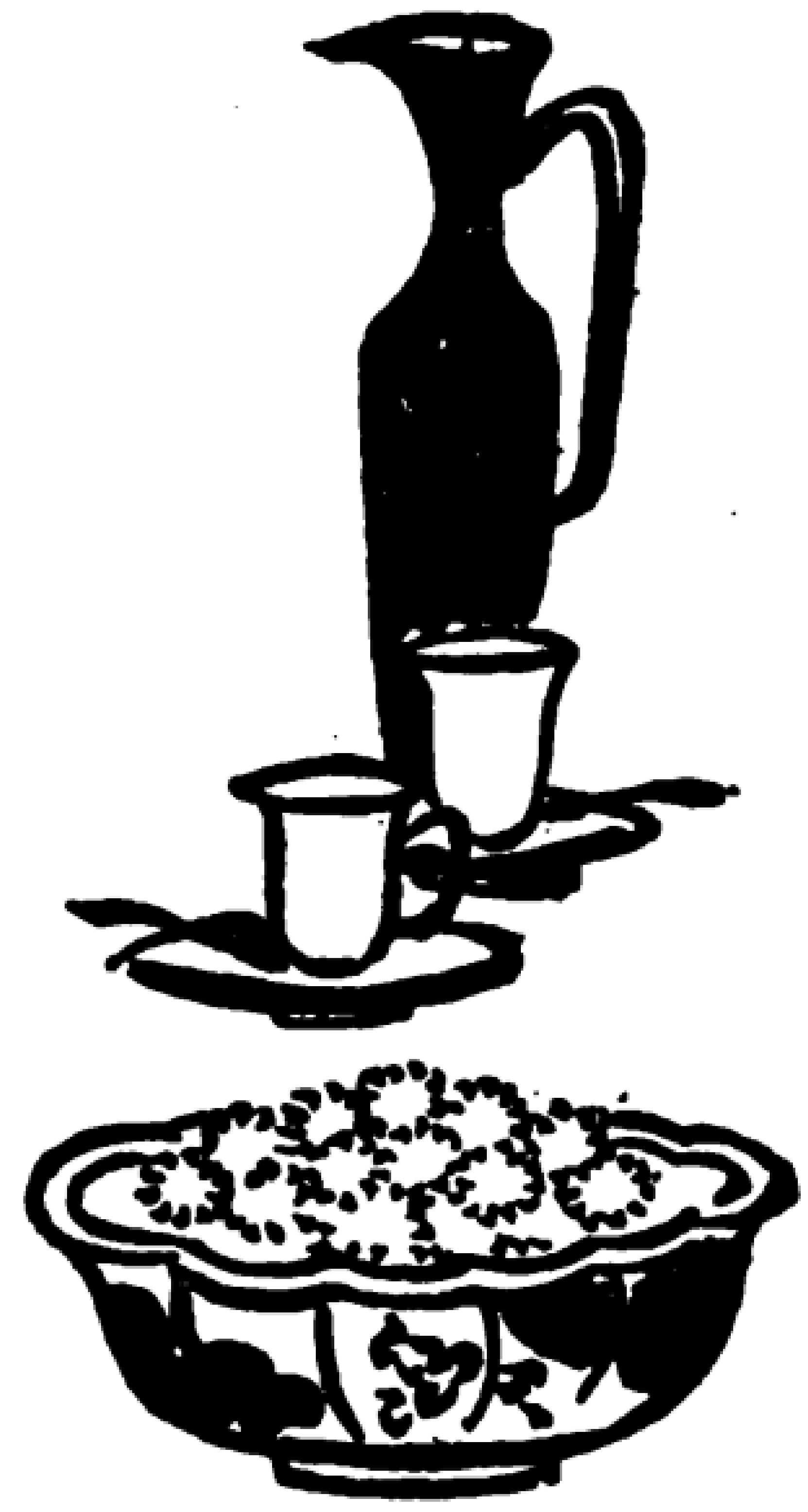
味、その場丈の快感といふ側に兎角重きを置いて、後で胸に殘るとか、頭の底に印象が留まるとか、所謂、人生と藝術との相觸れ合ふ點にまでは深く考へを及ぼさないのが、一般の風潮だと思はれる。佛國劇場で、名優、妙技を發揮して、その感興の高調に達するや、見物は忽ち雷の如き拍手を浴びせかけてゐる。俳優も、その喝采を待ち受けるといふ如き樣子の見えるのは、矢張この一例である。

△進んだる露獨の觀客

然るに、露國とか、獨逸とか、北方歐洲の國々の劇場は又更に趣が異つてゐる。彼等國民に取つては、劇場は唯、一箇の娯樂場ではなく、寧ろ敎化を與へる場處である。藝術の鍵を以て、人生の秘密を開き、これを公衆の眼前に示す場處なのである。從つて、演ずる脚本も、登場の俳優も、力の罩つた、魂の入つた者を見せる事になる。見物も亦、始終靜粛に、水を打つた如くになつて舞臺面に眺め入つてゐる。恰も信者が會堂に入つて、嚴粛なる祈禱の中に、一種云ふべからざる法悦を感ずるのと、その間に多少似寄つた點がある。

以上の各國の芝居に對する考への違ひ方は、無論その特色の重なるものを擧げて來たので、皆が皆然うだといふ譯ではないが、兎に角、日本の芝居見物は、大體英米、稍進んだのが佛蘭西程度、彼の露國や獨逸邊程度の高等の見物客は、まだ無いかも知れぬ。あつても至つて少數である。新らしい敎育を受けた淑女や令孃は、この少數の御仲間になつて欲しいものであると思ふ。





寫眞帖

紫苑

今打つたのがやつと二時、まあ此頃の日の長さ、八時に貞様かお出勤になつた後はあの無口な竹やを相手にお留守居役、最う彼れ此れ一月にもなるのだもの、少しは馴れたつもりでも、此様なお天氣の日には寂しいやうな心細い氣がして、住みなれた都の空があゝなつかしい、つと立つて東向きの窓の障子を開けて見る。銀糸の様な春雨の音もなく、シツトリと緋桃の花に降りそゝいで一しほ鮮かな色になつている。緑に美しいみさほ山が、茫然と煙つて公園の五重の塔も今日は見えない、彼の山の蔭を二百里の彼方は、父母が居ます都の地、其所に住みます友たちの上も偲はれる、さう〳〵此様な時せめて寫眞でも出してお目にかゝらう。

仲よしの方のばかりを取り出して、机の上に並べて見た。何れ劣らぬ花紅葉、これをお一人づゝ咲く花に例へて見やうか、六ケ敷しい花言葉なんか考へずにたゞ自分の思ひ浮ぶ儘に比べて見やう。

△二枚掛――外景

園ちやんの頭の頂天に、鵜毛のリボンが、丁度大きな揚羽の蝶がとまつてゐるやうに見え、玉ちやんの方は、此れも同し様な色のを兩耳の側に……右の方を心持ち上げて……房々とした髪の先を、ブツゝリ切に揃へたのが肩の邊りに振りかゝつてる、此様に好く似た姉妹も珍らしい口元なら鼻付なら、まあそつくり、だか園ちやんは瓜種子顔の輪廓に品があるし、玉ちやんの方は下ぶくらな丈可愛く見える、裾短かな洋服の胸の邊のギヤダーの良い恰好だ事、お伯母様の御考案と伺つたが、眞實に御器用だ、斯う二人手を組んで、紫雲英咲く花野をほゝ笑みながら、片足前に出した様子、長閑な春の唱歌が聞えるやうで、今にも此方へ近よるかと思はれる、眞實に良く寫つて居る事、白い靴下の細い足を膝の邊からあらはして立つた姿は櫻草に似てるやうな氣がする、あの浮間の野に咲く櫻草に……

△キヤビネ形――室内

色變り紋綸子地に、寫生風な草花模様の大振袖、胸の處に胡蝶が二ツ三ツ縫ひ出されてある、稍々右向きに立たれた姿の、まてもお美しい事

何時見ても見とれてしまふ、枝垂れ櫻の楳で肩に、柳の腰とは此方のやうなのを云ふのであらう、糸錦のお帯までが振付き度いやうな宜い恰好に、お髪は乾度ローマでせう、華者な襟元に五吋のリボンが白く大きく寫つてゐる、緋の房長いお扇子ゆッたりと握つて頭をかしげて見張つた眼の表情の巧さ高過ぎる位にスッと通ッた鼻筋、咲きかけた梅の花のやうな口付、此樣に揃つた方も少ないものだ、けれども心もあゝけれど心知つては又びつくり、お父様の財產と御自分の御容貌を高いお鼻の先に掛けて退れ見よがしのお振舞、可愛いお口で他人の惡口三昧、満座の中で友に辱かゝせるのが何より面白いとか、恐ろしや〳〵だからこそ級中で腫物に觸る樣な待遇をされてゞあつた、君子さんは薔薇の花のやうだと思ふ、おゝ麗しいと呆り觸れたらアヽ痛い....手に取り見れば刺のある枝........



△二枚掛――長方形

少し癖のあるお毛を二百三高地とやらの壽式なのに束れ、小紋の召し物に紋羽二重のお羽織、袴の折目も正しう立たれた七分身、お顔立ちは宜いとは云はれないけれど肉つき豊かな頰の何處かに愛嬌の有つて福々しいお顔だ事、高師を去年卒業られて今は遠い〳〵西の國に教鞭取る御身の上、女の腕で三十五圓の月給取先づお威らいと云はればならない、たゞ之れ迄は隨分御苦勞なすつた事であらう、實業界に多少知られたお父様がありながら、樅々しい中なばかりにお若い盛りを地味なおつくり、でもあの竹を割た様な氣性の

靜子さんはこせ〳〵した愚痴ッぽい事仰着るのが大嫌い、而して又人の惡口なんか一向平氣で空吹く風と聞き流し、挺然として御勉強の外餘念の無つた、高師の入學試驗にだつて一度で通られたのだもの、意志の強固な仕事に無頓着な何所までも眞面目な、まあ栗の花の目の立たないて然も實のある其れに例へやう。

△キャビネ形＝内景

縹羽二重が何かに光琳の菊の模樣を二枚重れて、白いぽい地に七寶くづしの帶の矢の字が左の肩から鳥渡見える、匂やかな高島田髷たけに、頸を少し曲げて二重瞼のぱッちりとした眼元に、微かな笑をたゝへ、緊く結んだ口元に一種の表情がある、お背が餘り高く無いのだけれどお腰掛けなすつたからお可笑くない、輕くお扇子を握つてそつと膝の上に置かれたお手の工合のいゝ事、其れに髮ぢりが具いから日本髮がよく似合て羨ましい、眞實に靜子さんはお若いわ、どうして私より一ッの姉樣に見えやうか、此世が樂しくたのしくて云ふ風なお顏付の通り、いつもお心が平和で總ての事を善意に取つて優しい〳〵お心ばえ、靜子さんの側に居ると自然と暖かい春の光に會ふてる樣な氣のするのも此方にお徳があるからで有らう、花も實も有る桃の花にふさわしい。

△手　札　形＝雲形のパック

あの癖の無いお毛は、無雜作に束れた前髪も恰好よく何の飾りもないのが反つてゆかしい、肩上げ深い銘仙の着物に友禪模樣の帶が鳥渡寫つゐる半身像、私よりも四つ年下だけれど幼い時に父樣に死別れなすつた丈けにしつかりとした勝氣な氣質は、きりつと結んだ口付にあらはれてゐる、切れ長な眼の涼しく見えるのは其昔の家の榮えを示すのであらう、姉樣は先達お嫁付なすつたさうだが、弟さんは未だ稚し妹さんさへお出でだもの、だからお琴さんは健氣にもお母樣の手助けにと去年から彼の會社にお出勤なすつた、他人の背に當つて此の若い胸に早くも浮世の辛さを知つて、樂しかるべき人生の春を未だ冬枯れの氣持ちでゐられるのか、眉根のどこかに寂しい陰が見えるではないか、お琴さんは水仙の花の樣な氣がする、寒い〳〵霜や雪、氷の中にか弱い姿でありながら恐れず咲き出で小さい花だが純潔な色に犯し難い所の有るのは水仙の姿に似て居る。

△キャビネ形＝内景

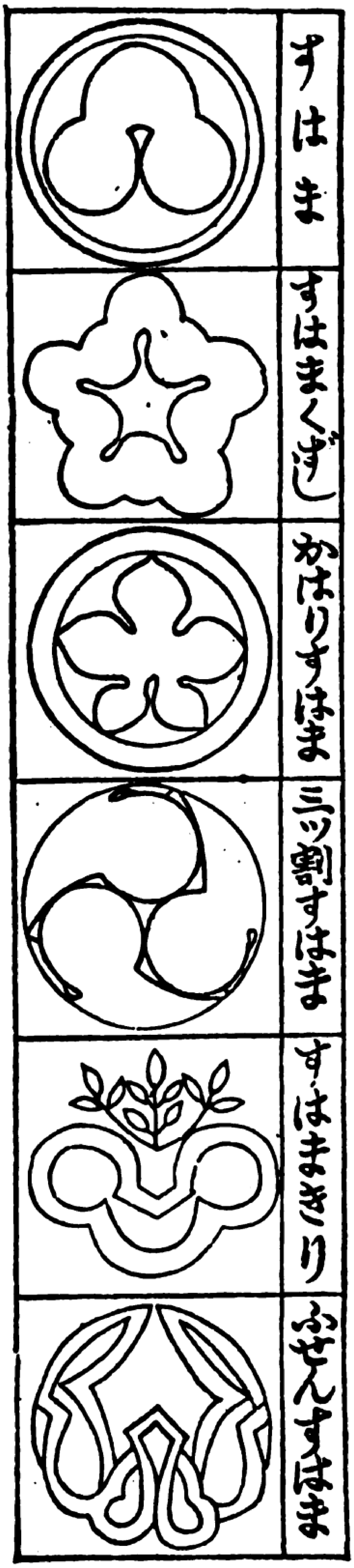
多美子さんのは絽の御紋付れ。お模樣ははつきり分らないけれど波に千鳥では無いか知ら？　彼の三日月の樣な眉が其儘に寫つて瞳が何となくやつれて見えるのは夏痩せのせいかしら、少し襟をぬいて召したので肩の邊りが何とも云へずいゝ、も少し高くお出しなすつたらと思はれる前髪の右の方に何の花か白く見えてゐる、細いお手を膝の上に置きましやかに重れて俯き加減に伏目なところに趣きがあつて優しい、お指の工合も良い恰好に成つてゐる、一體に筋肉が締つてゐるのでお姿が良い、お襟

樣なら一層見榮えがしたであらうに、一見して物淋しい感がするのは白萩の風情に似てお出でなさるやうだ。

△キャビネ形長方――外景

派手な紋御召の胸付飾つたりと、お袴を少し下めにしメンドで胴をキュツト締めて、裏草蓮ふ石垣に身を寄せてひなげしの花一輪持たれた其肘で軽く身をさゝえ、左手は自然に下に垂れフランス形の小さな靴を片足爪立てたスタイルが面白い、矢張り裏せおすな實で背は多美子さんよりか未だ高い、お袴の帯さばき飾つたりと所謂御茶の水式に致裟して森川町の通りをお通ひなすつた姿が思出される、照子さんは運動會の花であつた此方のダンスは全く取つてるのだもの、軽い足とりにポルカなんかなさる時眞實に眞かつた、テニスをしして お出の時照子さんのボールを拾ふてあやかるのだなんて随分さわがれたものだ、其が卒業後間もなく御縁付なすつて最う二ツのお子のお母様、まぞハイカラなお家庭であらう、時々遠山の花の香を慕ふ様な眼をなさるのが癖であつたが此寫眞には黒目勝なぱつちりとした眼に寫つてゐる、お鼻が少々突出しているのを隠さうとなさるので、返つて變なお口付に成つて見えるけれど此のお鼻で實際は又なく愛嬌よく見せている、華かな照子さんは思ふ儘のんびりと育つて、強い光線の下に色鮮かに咲くコスモスを聯想される。

春の花秋の草、何れも〳〵お美しくて本當に私のなんか見られやしない何故此様に可笑なのにばかり寫るのだらう、……自分の容貌は棚の上……どなた、其様な事仰有るのは……にくらしい……外には微かな雨たれの音、豆腐屋のラッパも遠く聞える。





新つれづれ草（五）

磯ちどり

○

人の癖に様々あるもをかし。

男なんぞの何事につけても直、頭搔く。暇あらば鼻毛、痛げに引き拔き、物の端等に植ゑ立つる人。思ひ事ある折血出る迄爪かみたる。羽織の紐の房に飯粒堅くつけたる人。鉛筆、筆、卷煙草等細長き物は皆耳に挾む男もあり。洟すゝりて飲む人はさても汚げ也。

其他、筆買ふ折、他し人の舐りたりとは心附ぬにや一つ宛舐り、毛尖透し眺めて買ふ人。物書くに、墨にて固りたる筆の先、一寸歯嚙み、さゝと硯の陸にてこする人あり（此癖ある人に能書はなし……）

物食べて後歯の間の物とるとて楊枝使ひ、怪しき音立つるは此上なく卑しき癖なり。町行く女同志のすれ違ひさま、後向き姿見合ふはいと心得ず……。

○

犬と猫。猫は物食ふに先香を嗅ぎ、後徐に口にす。食ふ折とてもさも味惡しげにすなり。犬は手に持つ物としあらば、皆己が食物と心得、尾打振り〳〵ちと仰見たるに、投げやれば、さと走せ行きて、何にてもあれ食り食ふ。猫は心に喜ぶとも、そを外にせず、不興げ顔したる人に似たり。犬はいと罪なし、犬連れて歩む折、其邊の塵桶等に鼻突き入れつるは、日頃さして惡しき物食はせたるにも非ざるにと口惜しく、又友なる犬に逢へば尾振り、顔さし延べ、蜜し向ひ合ひてある後は、役の如くに怪しき處嗅ぎかはしたる等、汗出る心地す。さては強き犬の牙むきて來たるに、尾足の

間にさし挾み悲しげなる聲して、くる〳〵と廻るに、今にも嚙まれなんかと心も心ならず。

されど是等の瑕瑾も、かの己が慾滿つる時は呼べども來らず、打てども嗾かぬ猫に較ぶれば、物の數ならず。

犬は三日の恩を三年が間忘れず、猫は三年の恩を三日にして忘るとは誠ならむ。されど猫の如しと言はれて憤らぬ人も、犬の如しと言はるれば腹立つるは怪しき事なり。げに心榮すく〳〵しき者の惡し樣に思はれ狡猾なるもの〻却々に重じ賞せらる〻は豈犬猫のみかは。

○

豚の瘦せて骨張りたる。馬の足太き。宿屋の主人の腹細き。いづれも相應しからず。

男は肥え太りたるを宜しとし、女は細くしなやかなるこそよけれ。斯く言へば左近の君等「此事あるべからず」とて、太く責め給ふべけれど細やかなる女の姿は、形よく見ゆれば是非なけれ。肥えたる女多きは婢女より初めて、看護婦、大原女。女子師範——。

肥えたる女は何時も何時も暑げに、顏赤く鼻の上に汗溜め、僅に立働けば鬢の邊の後れ毛肌に濡れつきたる。腋臭のいと異樣に臭ぐもか〻る人に多く、腿の肉のひたとあひて、夏等何となく物うげに見ゆるも哀なり。

また若きより人目に著く肥え太りたる女に賢きは稀に、其子も多く才鈍し。

○

醜の深情とは何となく女をさげすみ輕侮せし言葉ながら、心盡も度を過ぎては仇となる也。知人訪れし折等『田舍にて御口にあふ物もなし』と心惱ませたるに、流石に氣の毒にて『否々。馳走受けむとて田舍にや來つる。斯る物こそ都の者には却々に珍し』と言ひ慰むれば『或は、左樣にて候ひなむ』など答ふ。其後は『蕨と言ふ物煮たり、こは都には無からめ』とて出したる。

何となくのめ〳〵し、味もなき物なれば、皆も喰べて殘したるに、「否とよ。田舍にて遠慮は無用也。是非々々」と迫る等涙こぼれぬ。幼き頃なりきさる家にて大いなる椀に餅ひたぶるに容れ、汁もあらで出でたるを、餅むも惡しかりなむと思ひ、安き心も無く漸く喉を通しぬ。ほと息つきてある間に早、代の餅入れありたるには胸もつひゆる心地せしぞ。

○



さして親しからぬ人と打連れて物見に行きたる折常に心痛むるは金の支拂につきてなり。我身先に立ちてするはいと安き事ながら連なる人年上ならば、端なしと思はれむ。さればとて其人のする樣待つは何となく我財を惜むに似たり。

男同志にても此事は屢々見る處也。初より連なる一人に金出さす積にてあり乍ら、料理の勘定などの際に、己も眞面目立ちて財布とも出し、彼方の拂ひ終りたるを見て「あな。我身がする物を――」と名殘惜しげに亦懐に藏め、「さらば、そろ〳〵出掛なんか」等言ひ

て席を立つ。

○

興廢は世の慣とは知りながら、之を眼のあたりに見る程事なきはなし。一時は人の口に膾炙し、もて囃されし人の暫が程に忘られて、知る人もあらずなりぬるこそ、わけて悲しけれ。幼き頃の薄き記憶に殘れる、かの郡司大尉は今は如何に。また原田重吉と言へば、知らざる人もありなむ。近くは千里眼は、はや口にする人もなく、其他元祿姉さん、明子女史などいとゞ世の無情さの思はれて恨み深し。

調度の類にては其折々の遷り變り殊にはげしく。、で、、、あぼろと申す物。廂低く前に出したる髷。、、、、なしよなる、、、りいだわ。さては天鵞絨の旅鞄は怪しげなる袋に代へられて顧る人もなし。なべて世の名、著は相場の表の如し。いまに二宮尊德翁も消えたまふからうたてし。

○

雜誌、古反古など机の傍に堆高ければ、屑屋來たるを機に賣らむとするに「誠に御氣の毒なる事ながら女の雜誌は反古同樣に」とぞ申すさても怪しき事と訝れば「さに候ふ。女は新しき物の外買はねば」と心得顏に言ひたりしこそをかしかりし。

何れの家にても、棄つるには惜しく、藏め蓄ふるには煩はしきもの、年經る儘に多く溜るこそいと困づる物なれ。今は不用となりつれども過ぎし頃は手にせぬ日とてはなかりし物あるは何時かは物の用に立つらむとて殘したるもの。さては賣拂ひたけれど、求めし折に較べ價餘りに尠く、さばかりの爲に年久しく使ひしを手離すは、何となく心に咎めて其儘にしたる調度などいと多し。反古等にてもさ思ふ物あり。時には却々に火に罹り燒け失せなば諦も早く、心も清々しからむと思ふも物狂ほし。

○

「先生」と言ふは敬の言葉なれど手紙の末、御宛名の

下に書く折は、勢ひ「樣」の字加へまほしき心地するもゆゝし。校長は校長と呼ぶべきにや校長先生と呼ぶべきにや。校長先生は言葉つき快からず。

「女」の字にて、蔑の意を表す言葉いと多し。善男善女、愚夫愚婦の類は忍ぶべけれど、「老幼婦女」と言ひ「女と小人」と言ひ、「女の腐りたる」と言ふは、女の惡しき方のみ見たる言葉也。其他「女々しき」「女さら」などの語。あるは「男まさり」ありて「女まさり」なき。

文字の上にても然り妄。奸。奴。妬。皆女を偏とす。わらはと申す字は妾宅の妾と同じきは心得ず。「嫐る」「姦し」などの字は見るも忌はしき心地するは我のみの思はしにや。唯如來の如。妙齡の妙こそ僅に心慰むべけれ。



かの國にて女をさしてベターハーフと呼びフェヤーセッキスと呼ぶは我邦にては望むべくもあらねど、せめて婦人とこそは稱へまほし、されど貴婦人などは淺まし。顏貌愛嬌なく手套はめ、慈善會などに出歩く人のさ呼ばるれば……。

○

財豊なる人は身襤褸を纒ふとも誰かその富を疑はむ。されど貧者のかくすれば其身態の賤しさの却々に世のさげすみの種とならむ。

「女は心掛を第一とす。面の美醜は抑末也」等の語、醜き女の口より聞く時は、妬の言葉ときこゆ也。

○

我知り人に「か〻りしならばの君」と呼ぶ男あり嘗て世にありとあらゆる業企てずと言ふ事なけれども、心栄怠けたればにや、一つとして成らず。卅にしていまだ家なく、酒など飲ますれば、若かりし折の事語り出で〻「我が小學の友なりし某は今は名だ〻る政治家となりぬ、我もかの時政治に志し居しならば」等萬事、「か〻りしならばと悔むが常なりしかば」人嘲りて、「か〻りしならばの君」とは呼びぬ。

女にても此事多し。慎じむべき事にこそ。

○

人の「さには非ず」と言ふ時「さなり」と答ふるはいと難き業なり。況して「誠にさに候はずや。何々の君」と同意求めらる〻折は、さに非ずと思ひつ〻も「さなり」と答へたきは弱き女の情なれど、か〻る事より、端なく人の不信を招く事あり。

○

春は雨しと〳〵と降る夜、つ〻ましき雨滴の聲き〻つ〻獨り机に向ひたるよし。心快く摘みたる洋燈のばゆう照りて、蒔繪なんどの硯箱に薄う火影さしたる何處より迷ひ來たる蚊の一つ、ふとか弱き羽音立て〻飛來れるなと折につけて却々に哀深し。

春の雨は晝なるもよし。薄く霞みたる川向の柳青く芽ふきて、橋を行く傘のあるは高く、あるは低く、蠟塗の車の其中を分け行くが、何れも美はしく濡れたる。

又初夏の綠も清々し。肌に纒ひつきぬる綿入脱ぎて折目正しき袷と衣更へつれば、身も心も引緊りし樣覺ゆ。外出するには水色の傘などさすに、強き日の透き通りて、白き顔、手に傘の色映りつるもよし。水撒きたる街を金魚賣の朗に呼び歩くに、燕の目にも留りて低く飛びかひたる。何れも美しさは初夏の日の光なれ。



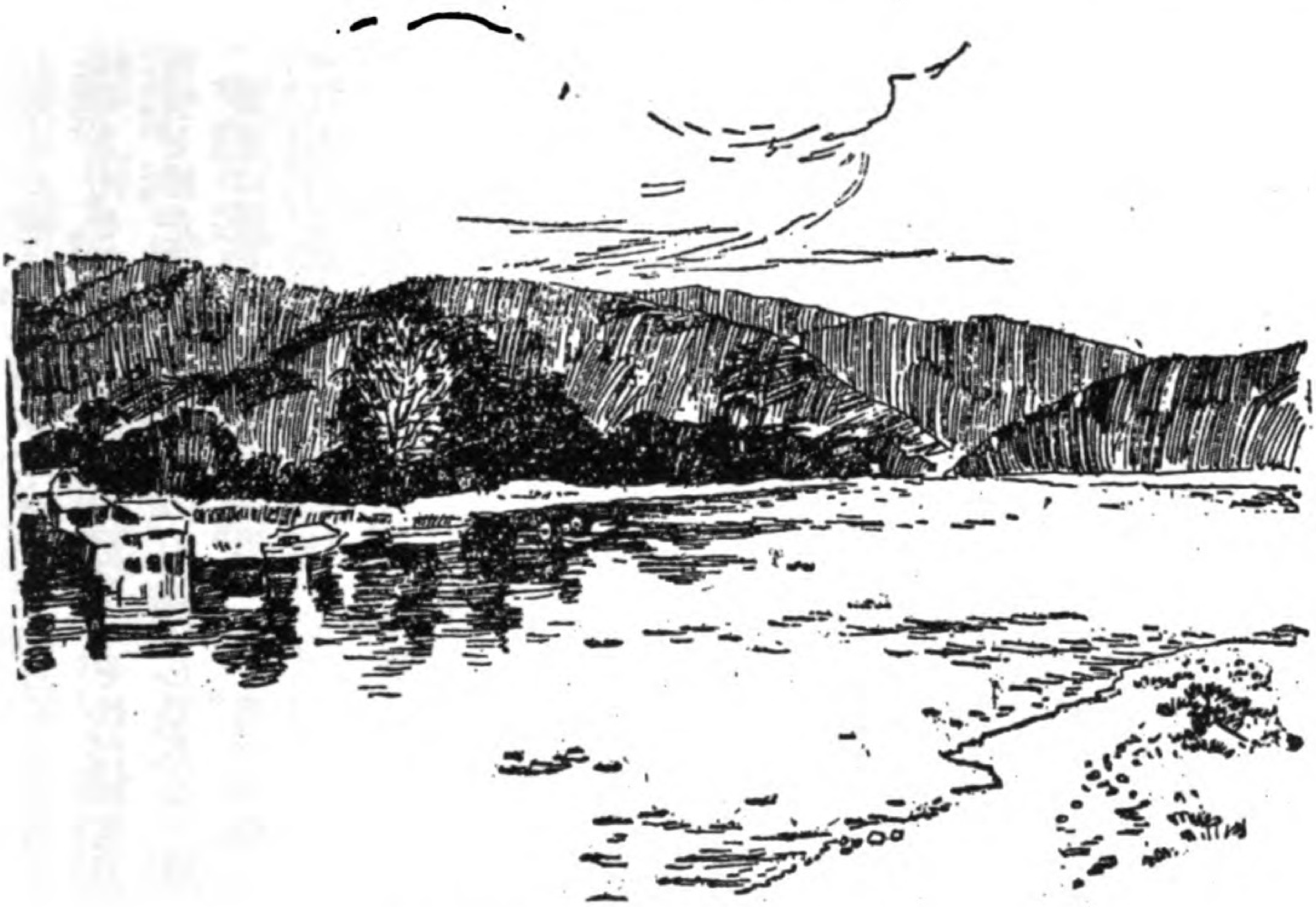
雜記帳

與謝野晶子

×

其處の中央試驗所に技師をして居るHさんから漸く四月越に病院を出たと云ふ通信が來た。大連は五月に入つて櫻が咲くので、之から花見をするのだと書いてある。あの方の結婚の話は何うなつたかしら。去年の冬、窒扶斯に罹られる以前の手紙には「妻は未だ持たなくてもよい樣な氣が致し候」と書いてあつた。丁度其頃大阪のKさんがHさんに御世話したいと思つて居られる京都の或商家の娘さんの寫眞を二枚わたしの手を經て大連へ送つた。Hさんからの返事に「一枚の方の寫眞が氣に入つた。女の美の標準の低い此地で見るせいかも知れない。大形の方の寫眞には之と反對に妙でない所がある。どちらを信じてよいのか。奥さんの忌憚のない批評を聞きたい」とあつた。わたしは一度や二度の見合で約束を極める習慣を面白くないと思つて居る。況して寫眞での見合は危險此上もない事である。最もHさんの場合は布哇の出稼人の樣に寫眞のみで決めると云ふので無く、若しHさんの注意を此娘さんに向ける事が出來たら、後は本人同志暫く交際つて見た上の事にしたいと仲へ入る人達は考へて居る。Hさんの両親は、大學を卒業する迄も、した後も、伜の行動には一切干渉しないで來たのであるから、結婚に就ても伜の自由に任せると言はれる。娘さんの方の親達は其程に洪量では無さ相であるが、本人同志交際つて頂いた上で氣が合ひ相なら貰つて下さいと言はれる丈の愼重な用意はあるらしい。工學士で詩人小說家であるHさんの名は、新しい文界に注意を拂つて居る人々の

中に知らぬ者は無い。十年以上も親しくして居るわたしはHさんを弟の樣に思つて居る。それだけ又Hさんの性情を細かに知つて居るのもわたしである。細心な人、素直に優しい人、無口で居て思ひ遣りの深い人、折々狂熱的な事をする人、勤勉な人、暇があると歐洲の新しい文學書を讀んで居る人、試驗室に這入つて專攻の學術を研究する事の好きな人、其學術を應用して工業上の大きな儲仕事をも仕たいと考へて居る人、酒席の趣を解して居て酒の飮めない人、空威張と御世辭と虚言を吐く事との出來ない人、是丈數へ立てれば何處へ出しても恥しくない立派な花聟さんである。但しHさんの家には財產が無い。財產の有無を花聟の資格の一つに加へる事はわたしも時勢の必要に考へて賛成はするものゝ、概して富んだ家の息子に俊才は乏しいから、財產の有無を世間の人が思ふ程大切な條件だとは考へて居ない。一にも人物、二にも人物、三にも人物が大切で、其上に財產があれば猶よし、無くても差支は無いと思つて居る。全くHさんは俊秀な青年學士である。何處の富豪の家を探したつてHさん程の青年は容易に見當るもので無い。其Hさんに大阪のKさんが世話をなさらうと云ふ御嬢さんは何う云ふ人柄の方でせう。若い男が妻を選ぶのに容色を氣にしない事は無い。殊に頭腦の空虚な日本の女を娶るのに容色が自然第一の條件となるのは已むを得ない事である。容色が惡ければ親元の門閥や富を第一の條件として我慢するのも敎育の度の低い社會の自然の人情であつて、敎育家などが何んなに其陋習を矯正しやうとしても一朝一夕に大多數の男子が金婚を廢めるもので無からう唯わたしのHさんの婦人觀は一般の男子と大分に譯が異ふ。Hさんは「美くしくて變つた女を」と或時の座談にも言つて居た。其意味は、美くしいと云つても人形の樣なのでは無く、内心の淺はかで無い、高い調子の感情に富んで、學校の敎育は高くなくても怜悧な質を有つて居て男の心持の理解が出來る女を好むと云ふのである。此兩三年いろんな女と交際つたHさんは、何れも顏だけ白くした單調な女に厭々して、感情の特色



初夏の宇治川

の著しい女が欲しくなつて來たらしい。併し此條件に叶ふ美人と云ふのは一寸見つかりにくいと思ふ。今日高等の教育を受けないまでも、音樂とか文學とかを修めたり、教育の方面に關はつたりして居る若い女の中には、少數ながら感情の修養の出來て居る女のあることは認めるが、然う云ふ女子に限つて容色が缺けて居る。京都の御孃さんと云ふのは寫眞で見た丈では解りにくいけれど、十人並を少し越した迄の容量で、鼻から下に男の樣な感じのある娘さんである。髮の形も衣服の着方も、京都の町家の娘の風は、東京の令孃の風に馴れた目には氣の利かない所が多い。それで容色の上に三割方の損があると見ても、そのお孃さんは大した美人であるとも想はれ無い。富んだ家に育つた方丈に品のよい所があり、京都の娘さん丈に愼しやかに氣が利いて居さうである。其れ以上は會つて見た事の無いわたしに何の判斷も附かない。其れでわたしはHさんに「寫眞丈では人柄までは申上げ兼ねます。美人の部には違ひないでせうが、直接交際つて見ねば其れも

判じ兼ねます。併し此容色以上にあなたを滿足させる女としての期待は無理かも知れません。すべて日本の娘は縁附いてから後、良人の手で敎育する必要があります。あなたの注文通の美人はまだ幼稚園あたりに居るのでせう。あなたが妻を敎育する丈の面倒を見る覺悟が無ければ、どんな容色のよいお孃さんをお貰ひになつても失望なさるでせう」と書いて送つた。間も無くHさんは病氣になられ、一時は重體だと云ふ電報が度々親達の許へ來た。年末に大連へ看護の爲に急行して歸つて來た家族の人の話では、病院のHさんの寢臺の枕もとには、其京都のお孃さんの二枚の寫眞が飾られて、四十度の熱で譫言ばかり云つて居る病人を護つて居たと云ふ事である。結婚の話は大阪と大連との間に手紙の往復があつた筈ですが、其後どうなつたのかしら。Hさん程の靑年を良人に持つことは容易でないが、其お孃さん程の花嫁はざらにある。Hさんは未だ二三年獨身で居て、大威張で出來る丈氣に入つた美くしいお嫁さんを撰擇なさる權利があると思ふ。

×

近頃の婦人雜誌に出る議論を見渡すと、賢母良妻主義が少し姿を變へて、女子は家庭に在つて働くべきものだと云ふ議論となつて現れて居ります。家族制を重んじた封建時代ですら、主君の爲には家をも身をも忘れると云ふ事がもう一段高い道德でした。諸藩の志士が君國の爲に家をも身命をも忘れたればこそ維新の大業は成就しました。若し家が論者の言葉の樣に絶對に貴重な物であるなら、皇室に忠誠を致し、社會に公益を計ると云ふ事は出來がたい。又其れ位貴重な家であるなら、男子はなぜ家を外にするのでせう。かよわい女の手に任さずに男子が家の經營に當つたらよさ相に思はれる。女子に貴いものなら男子にも貴い筈のものである。

其れから家庭と云ふ物は女ばかりで成立つもので無く、男と女の結合、即ち夫婦が成立つて後に其夫婦の從屬物として家庭が生ずるのである。嫁入前の若い娘

に對して家庭を尊重せよ、家の內で働けと力說するのは、卵に時を作れと云ふのと齊しく餘りに迂濶な事でせう。今日の女の多數は結婚の困難に苦んで居る。結婚さへ出來ないのに一躍家庭が營めるもので無い。家庭が其れ程大切な物なら、先づ第一に一般の若い男子を說いて結婚を女子に求める事を勸めて頂きたいものである。

と云つて、一身を支へる收入さへ得兼ねて居る一般の若い男子は、目先の利く敏い人程結婚を避け、家庭の煩累を厭ふのが、今日の實狀ぢやないでせうか、年每に結婚數が減り、若い男女の間に正しい家庭が營まれないのは、決して婦人ばかりの問題でなく、男子の側の重要な問題だと思ひます。

わたしは今日の經濟事情に考へて、家庭と云ふ物は多數の若い男女の爲に寧ろ悲慘な物だと思つて居る。敎育を受けた若い男子が結婚と其れに伴ふ家庭とを避ける理由に同情せずには居られません。



酒田米町通り

×

新聞雜誌に寫眞肖像の出る花嫁花聟の多くは、世の潮風に當らない權門富家の令孃令息、乃至社會的の位地を既に得て生活の資に困らない、謂ゆる成功の人々の様に見受けます。然う云ふ階級の既に結婚した男女に對してこそ家庭の重んずべき事を說く必要があり、又其夫婦が自然に家庭の歡樂を味ふ餘裕もありませう。一身の生活に追はれて居る男、貧しい親の手に育てられて男から求婚を求められる資格の缺けた女、其等の多數に向つて、なぜ結婚をしないか、なぜ家庭を營まないかと責めるのは慘酷だと思ひます。

×

偕成園で××さんと御話をしながら庭を見ると、二本の緋色の躑躅が散つて仕舞つたので、宅の庭は花のない、青木ばかりの庭になつたのが男ばかりの家の様で物足りない。隱れ蓑と云ふ名の、幹の白い常盤樹が、いたや楓の様な大きな葉を澤山な中で一二枚眞赤に染めて居るのが目に附く。彫刻家の武石さんの宅から其弟の大學さんが持つて來て下さつたダリヤの球根が一寸程威勢のいゝ芽を萌し出した鉢へ、光が跣足で如露を持つて水を注いで居ると、一ぴきの大紫がついと來て二度程庭の中を舞つて又ついと隣の庭へ往つて仕舞ふ。わたしが

「小山内さんの襟飾の様な蝶ですね。」

と云ふと、××さんが

「能く氣取つた所も小山内君に似てるぢやありませんか。」

と仰しやる。其れから小山内さんの噂に續いて、永井荷風さん、木下杢太郎さん 高村光太郎さん、北原白秋さん、吉井勇さんなどの上に話が移つた。而して、わたしは心の中で、何れも若い獨身の藝術家揃である。あゝ云ふ立派な若い藝術家に愛せられる女が、なぜ學問をした若い女の中から出て來ないのであらう。また然う云ふ藝術家の心意氣を理解して話相手になる丈の女の無いと云ふのは心細い。其れで若い藝術家は已むを得ず紅い燈の點く家の實物の女に走つて感情の飢渇を充すのである。と斯んな事を考へて居た。

×

複雜な單調。強くて弱い執着。最も勤勉で最も倦怠。充實した空虛。早足に當も無い獲物を追ふ氣分。無駄な決死隊。最も嚴肅な自覺の悲哀。

斯う云ふ矛盾は、今の三十前後の男女で、遊惰で無

く、勤勉な生活を送り、淺い心で無く、理智と感情との細かに練れた人程しみ〴〵と感ずる所である。神權を重んじ階級制度の守られた時代にあつては、人の心に不思議が多く、絶えず羨んだり憧れたりする事が出來た。又他人の羨望の目標になる自分の職業に酔ふ事が出來た。學術の自由討究が許され、人權の平等を知り、社會の階級制度が破られて、我勝に個性を建てる現代には最早夢が無い。人は皆實力を以て事實と云ふ明るいどん底に立つて居る。其れでありながら此どん底が未だほんとうのどん底で無い氣がする。泡の樣な、煙の樣な、手ごたへの無い物に執着つて、之が現實だと空頼みをして居る氣がしてならぬ。

わたしは折々斯う云ふ寂寞の感につまされて、滅入つた冷い心になる事がある。此心を押擴げて行けば「死」より外に取る道が無い事も知つて居る。併しわたしが死なれやうか。

わたしは飽く迄も生きたい。此生きたいと云ふ最初にして最後の欲望を動力とし、よし其れが空の空であらうとも、わたしは成るべく豐かに永く生きる手段を取らねばならぬ。

わたしの從來の經驗では、無爲の日送りが何よりも淋しく「死」と齊しいものである。心か體か何れかを働かせて居れば兎に角生きて居ると云ふ慰めがある。わたしの生きる手段としては働く外は無い。自分の仕事を景氣づけて、自分の心持を誇張して、迎へて面白くして働く外は無い。

之はわたし一人の實感で無く、學問、藝術、政治、實業、各方面に積極的に活動して居る三十歲前後の人に共通の心持であると思ふ。



平和なる移民地生活

米國タコマ府　カーネーション

△一週に一度の正月――△懷鄕病の豫防――△御馳走の献立――△滑稽な挨拶――△氷箱の鯛――△皿洗に一弗半――△寳石の店――△和洋折衷の福引――△流行のおつくり――△人形いぢり

◎大晦日。昨年は御馳走を澤山に用意しすぎて、何時までも殘て困つたから、今年は何も彼も分量を扣へ目にしたので用事も早くすんだ。がM樣のシアトルからお歸りになるのを、雜誌讀み／＼待つ居ると、いつの間にか零時と見えて、四方から一時に、ピー／＼プープーと汽笛やら鐘の音やら爆竹で賑やかに千九百十一年の開幕を告げて居る。

常ならば人通り稀なる宅の前も、此の眞夜中に三々伍々人の通るは、鬼に例へられた借金とりでも懸取りでもなく、善男善女の除夜の集りにとて、教會へ急ぐのである。

十二時に着く筈の電車が、大層遲れたとて一時過ぎにM樣御歸り、夫から、一年中の汚れを流すつもりにて入浴す。

◎元日。「この國には、一週間に一度づゝ御正月がある」と日本から來たこの人は言ふくらゐ、日曜は凡ての店は休みで荷馬車の音一つせず、街道はシーンとして居るのである、ダカラ元日だとて別に變つた氣もせなかつた、けれど、十時頃に御屠蘇、お雜煮を祝つて見ると妙なもので、矢張り改まる心地がしました。

M樣と弟は回禮にとて日本人街へ出かける、私は後を片づけて暖爐の傍で、過去や未來の事をいろ／＼

追想して居ると頭が妙にコンガラかつて來る。

實に月日に關守なしとやら。明治三十九年の卯月の中旬、三年程したらば歸朝致しますと、見送りの人々に約束して出た私も、日本に居た時は……十八の歳に父に逝かれて後は……何事も思ふ樣にならず、まあ逆境に立て居たと云ふのだらう、あたら人生の春をも冬枯れの樣に暮して來たが、八年と云ふ長い間の希望が叶て此方へ來てからは、日本に居た時の樣な苦しみもなく、夫れに元來は何事にも研究ずきの私、何かに付けて珍らしい事のみ覺えられる嬉しさに、愉快に二年は白人の家庭で夢のやうに過ぎ、三年目には此の家の人となつて、暖かき良人の愛に觸れてから、ふく木枯しに荒だ心も何時しか春風のソヨ〳〵と、遲まきながら人生の春を迎へし樣、勝氣な自分には可笑しきまで時には良人に甘へて見る事もある、丁度其の頃であつた、女學世界に桂月氏の新婚の夫婦に與ふ、と云ふのがあつて其の初めに「世の中に難しきものは父母の外にあらじと思ひしに」云々は私の胸にはヒシ〳〵と感じました、スルト翌月母からの便りに「今月の女學世界の新婚の夫婦に與ふをお讀みなされしならん、夫婦は常々あの心持ちで居れば、圓滿なる家庭が造れまする」とある、M樣と私は顔見合せてニッコリ致した事があつた、獨身の間の希望なんていふものは、今から考へると實に淋しい空漠としたものであつたが、日常生活に入てから三年の私は、幸ひにも苦勞と云ふほどの大きな心配もせず、ほんとうに活々とした希望と趣味に追はれて居ます、夫りやね人間の悲しさ慾には慾があつて、夫れを悉く充たさうと思へば、自然不足も起るが私はソウ云ふ場合にはいつも家康公の遺訓「不自由を常と思へ、心に望み起らば艱難したる時を思ふべし」の句を繰返しては自ら顧る事が出來る、と云ふのも逆境に立つた時の賜であらうと感謝するのであります、其の樣な風で日本を出てから丁度五年になるが、まだ懷鄉病にも襲はれず、歸國したいとも思ひません。

一體男女青年が親の膝元から遠く旅にある時は、双

方から一週間とか二週間に一度と云ふ樣に必ず音信するのがよいと思ひます、音信が規律よく往復して居るならば、たしかに遠く離れて居ても親子なり兄弟なりの温かい情と云ふものが絶えず通ふて居るのである、従て墮落など云ふ恐ろしい弊に陷らない、私が此方へ來てからも或る友人が弟からモー半歳も手紙が來ないから近狀を調べて手紙を出す樣に傳へて吳れと頼まれた事があります、此の樣な方は父兄からも手紙が絶えて居たのである、私は日本を出る時に弟と二週間に一度づゝのシアトル線の郵便には必ず手紙を出す、モシ忙がしいか、書く事のない時ははがきでも兎に角便りをする、ソシテ手紙の時は一々番號を附ける事にきめて來ました、上陸當時(五年前)の女學世界に先年藤澤先生の御子息お二人が洋行して居られた間、双方から一週一度は必ずお手紙を交換して居らしたとありまして、丁得は大先生と感心致した事がありますが、私共も近頃ではタコマ線の大阪商船便が出來ましてからは郵船と兩方で丁度一週一度宛の交換になつて居ます、番號ですか、只今では双方とも百八十號を越しました、此の樣な譯で淋しい事も感ぜずたゞ日本が近い樣に思て居るから懷鄕病にもかゝらないのでせう。

煖爐の火の燃えきつたも知らずに、感想に耽つて居ますと五時前M樣も弟も歸て來ました、宅は日本人街からズット離れた、白人の住宅區域に住で居ますから、皆樣は大變遠いと思て入被しやるのかお招きをするか用事でもなければ不意のお客もない、下街(日本人街)では隨分賑はつて居るさうだが、宅は平常の樣に靜かだ、食後私共は日本や内地への年頭狀を數十通書く。

暫く學資を得るために休校して居た弟は明朝の汽車で歸校するとてスーツケースを引繰り返して荷造りをして居る。

隣りの家では主人のピアノに主婦の鈴の樣なよく通る聲で、ソーローをやつて居るのが窓ごしによく聞える、白人の聲にはいつも我々は羨ましがつて居るのであるが、此の主婦の聲はまた特別によくつて、夫れに

愛嬌と云ひ表情と云ひ、キッ、、シンガーでもして居たに違ひないと、宅で相場をきめて居るのです。

◎二日、弟は七時の汽車で出立ので五時半から起床した、當市から四百哩の東、プルマンと云ふ處にある、ワシントン州立カレージに行くのである、今夜は乘替へする驛にて一泊して、明日の午前中に學校へ着くのであるから、四五度分の辨當が要る、汽車中ですれば一等の料理はあるが、書生の身は成べく不用の入費を省く様にとて、有合せの巻ずしにサンドウキッチをドッサリ拵へて、箱に詰めて持たしてやる、此の頃よく汽車強盗などが出沒するから、道中で必要な小遣の外の金は布でクルクル巻いて、白人盜人の氣のつかぬ處へ括りつけてやる。

六時半「氣をつけてお行きよ」と送り出す、兩手に重るようなスーツケースを、ギチギチ云はせながら濃霧の中に隠れて仕舞た、四百哩と云ふと日本ならば、大きな旅行の様に思ふが、此國では一州内でも日本本土の面積の半分くらゐあるのは、珍らしくないのだから四百や五百哩の旅行は、京都神戸間位ゐの氣で居る、椋十翁の世界見物に、日本の汽車の遲いのは、面積に相當して居るのだとあつたが、ほんとうに其の通りだ、大陸に住めば大陸的の頭になり、偉大なる人物を慕ふて居れば、漸々偉大化されるのは其理であらう、シテ見ると人間は御手本に成べく大きなものを選ばなければならぬと思ふ、

晩餐には三人のお客様があつたので、賑やかに食事しました。

◎三日、白人はクリスマスを過ぎた後の新年は日本ほどに騒がない、ほんの元日だけの休みで「勿論降誕祭とても一日の休みであるが」二日からは凡ての官衙も會社も事務を始めれば、學校も始まるのである、が今年は、降誕祭も元日も日曜であつた、日曜は神聖犯すべからざるものとしてある此國では、祭日と重なる場合には、祭日は必ず翌月曜日に延す事に、州知事から命が出る様になつて居る、よく私共は（日曜が大祭日を喰ふたとて、誰れに怨みを云ふよしもなし」なんて

残念がつた事も此國では其の心配なし。

M様も事務所へ出勤せられた、私は昨月曜にする筈の洗濯を午前中にします。午後からは明日の御年始の御馳走の材料を買ひに街へ行く、

◎四日

今ふはお客があるので何時もより早く起床す、昨日洗ふたものに鏝をかけたいが、御馳走の方が忙がしいので洗いものには、霧を打て堅く巻て臺所の卓子抽斗に入れて置く。



まづ今日の献立は

一、吸物、鑵詰の白魚、豆腐海苔

二、七面鳥の蒸燒、

パン一斤半、セロリ小半株、アニオン小一個、パター玉子大、ゼブレット、セージ鹽胡椒各小匙一

杯

三、鯛の鹽燒き、

四、鮪の刺身、妻、下し大根、マスタード、

五、葉の辛子卷、

六、重ね鉢、數の子、里芋、田作、慈姑の花押し、栗きんとん、かまぼこ、

七、卷ずし、

八、赤飯、

九、三鞭酒、

十、フルーツケーキ、玉子四個、メリケン粉一磅「百二十目」赤砂糖一磅、干葡萄二磅、バター半磅、ミルクカップに一杯半、ナツトメツグ、と粉肉桂小匙二、料理用ソーダ小匙一、ウワルナツツ細かくしてカップに一杯、ブランデ大匙二、

十一、アイスクリーム、

お料理の仕方をザツト書て置きませう、と云ふても二と十の外は在來の日本料理です、只だ違ふのは、油や油揚げを使ふ處へ、バターやベーコンを用ゆる場合が多くあります、日本料理と云ふても、矢張り折衷料理になる傾きがあります。

二は十磅ぐらゐの鳥をと思て搜したが、小さいのは降誕祭に賣れて仕舞て、十二磅が最小であつた、先づ足と首を落し、下腹部を少し切り其處から手を入れて腹の中のものを取り出し、肝砂袋心臟だけは洗て水少しにて二十分間ほど煮て置く、腹の中を綺麗に洗つたらば、スタフを入れて、栗のスタフは上等ださうだが、普通はパンを水に漬けて絞り上げ、セロリ、玉葱と前に煮て置てある、肝類も皆一度肉碎器にかけて細かく挽く夫れにバター、セージ胡椒鹽を入れてよく掻き交せて腹の中につめる、ソシテ其の口を細き紐にてかゝり置く、蒸燒器に少し湯を入れ、鳥は羽翼を後ろに組み合せ仰向けに入れ、上から少量の鹽胡椒をパラパラと振りかけ、蒸燒器の蓋をかたく空氣のぬけぬ樣にしてオーブンに入れ、焦さぬ樣に四時間ほど蒸燒く、新式の蒸燒器はセルフベーステングと云ふて、蓋の内部にたまる湯氣が、單獨で鳥の上にポタ〳〵と落

ちる樣に出來て居るから、上の方だけ乾くと云ふ憂ひなく卓子に出す時は其の汁氣にて、ソースの樣なものを造て出すのであるが、今日は臺所から細かく切て出すつもり故こゝには略す。

この鯛は丁度暮れに入港した、〇〇〇丸の司厨長樣が、お正月のにとて遙々日本から持て來て下さつたのを、頂いた晦日にすぐ鹽燒きにして今日まで宅の氷箱に入れてある、出す前に一寸溫める事にせう、長い道中を船の氷室に入れて來たのだから、色は少し變つて居たが味には變りなし、兎に角當地では求められぬ魚故、皆樣もさぞおよろこび下さる事であらう。

四の鮪は此の近海で取れぬので、遠くカリホルニヤ州の沿岸で日本人が漁獲して、ソシテ氷詰めで輸送するのであるから、氷を離しては長く持たぬ、店から買て來るとすぐに又た、宅の氷箱へ入れてあるから、一時間ほど前に刺身にしやう。

六はすべてお正月の御馳走だから、其の儘重ね鉢に入れて卓子に出して置き、御勝手に取て頂く事にしやう。

十は、クリスマス、婚禮、誕生などの目出度い時には、必ず付くものである、夫れは材料が高くつくのと燒てから乾かさぬ樣に保存すれば、二年ぐらゐは味も變らず、持つので尊ばれるであります。

バターと赤砂糖をよく交ぜ合し、玉子を入れ又た掻き廻し、夫れにミルクと粉を少しづゝ交ぜては入れ、交ぜては入れしてよく掻き、干葡萄、ソーダ、ウオルナツ、と香料のナツトメツグ、シンナモンを入れて亦よく交ぜ、終りにブランデーを入れる、型は丸にても角にしてもよし、型に紙を敷てバタを塗り前記のものを入れてオーブンに入れてやく、時間はおよそ、一時間半、之れは焦げやすきゆゑ、とろ火で氣長に燒く方よし、材料には此の他、佛手柑の砂糖漬など少し入れてもよし。

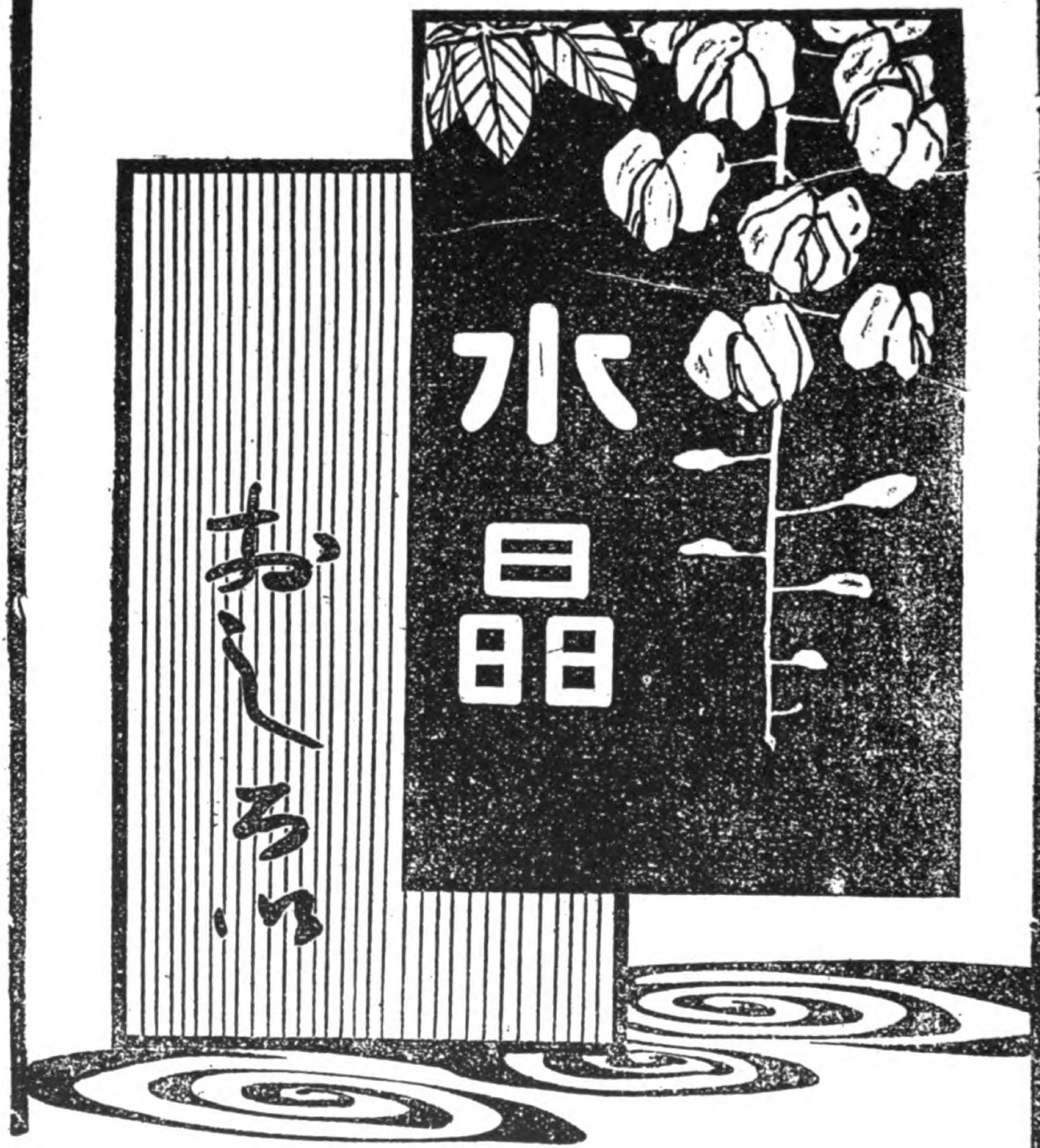
二時頃に表のベルが鳴るので出て見ると、長細い箱包みを持た小僧が立て居る、私は一眼見て、其の何處から來たかを覺りました、小僧を返して包みを開けて

見ますと、私の想像通り、中からは眼醒めるばかり、美くしい、蕾咲きのカーネーション一打と、優しい青い葉を添へてあります、私は獨見でも抱き上げる様にそうツと箱から取り出して、二三度續げさまに接吻を致しました、其の香りの高尚な事、私は其の花が大好きにて、お客でもある時はキット此れを買ふ事にして居ます、今日も先刻から花屋へ電話をかけ様と思て居たが、かければ三十分の内に持て來るから、急ぐにも及ばぬとツイ注文せないで居たのです、一體之れは何誰が贈て下さつたのであらう、名刺はと捜してもない夫れぢや、M様が贈て下さつたのだと思ふと猶更うれしい、アラお金を儉約したからだつて隨分ね、兎に角電話で伺て見ると「知らんねえ」と仰てらつしやるが、お聲が笑ひ聲だからそうと定めて置かう、早速彫刻硝子の花瓶に挿し食卓の最中に置く、雪白の卓掛けにはへて一層美しく見える。

サテ今日のお客様は、當市の有力者と折柄碇泊中の大商の○○○丸船長様と司厨長様もお招きする、昨日夫れ〳〵御案内して置きましたが、十二人の内四人御都合惡しくて八人だけ七時にお揃ひになつた。

私の方の用意も出來ましたから、私は食堂と客間の間の綾の幕を絞りつゝ、或る日本の高官の方が外國人をお招きした席上で、日本流に何にも御座りませんを直譯的に There is nothing to eat と仰て外人達は大いに面喰つたと云ふ滑稽話を思ひ出しましたから、其の通り申ますよと皆様ドットお笑ひなさつて、卓子にお着きになる、私共と合せて十人、大きな卓子に處狹きまで置き並べたるお料理も、皆私の手一ツで出來上つたかと思ふと、小さな誇りが胸に滿ちる。

三鞭のコークをポーン〳〵と拔きますのは、ほんとうに氣持ちのよいもの、西洋人は此コークがポーンと拔けて一旦天井へ當て、今度落ちて來た時に頭などへ當りますと縁起がよいと喜びます、サテ皆様のカップにつぎ渡りますと、M様が立つて、諸君の健康を祝しましてと、カップを上に捧げられますと、皆様も御一緒にカップを高くさし上げて、夫からお飲みになりま


水晶
おしろい

大好評＝既に十三版を出せり

東郷大將　片岡大將　上村大將題字
加藤中將　伊知地中將　小笠原大佐序文

海軍少佐 **水野廣德君著**

此一戰

菊判洋裝四百頁
コロタイプ版寫眞版
石版等海戰關係圖
廿六枚挿入其他
本文挿畫數十圖

正價金壹圓
郵稅十錢

天覽　台覽

（附錄）……公報、死傷者人名表等

嗚呼日本海海戰！東郷大將が「皇國の興敗此一戰に在り」と令するや士氣猛然として振ひ戰はずして既に敵を壓せりと云ふ本書題して此一戰と云ふ亦內容を見ざるも既に肉躍血湧の感なくんばあらざるなり著者は當時水雷艇長として戰に參與し偉功を樹て役後命を受け軍令部に於て海戰史の編纂に從事したるもの然れども官撰の戰紀は自ら簡明正確を主とするを以て專門家以外之れを咀嚼せずして止むべきを憂ひ乃ち本書を著せり書中戰前彼我の狀況より悽絕壯烈の戰況を叙する最も嚴にして詳其の彼我戰略の巧拙軍機の粗密を繹れ大和魂「スラブ」魂を論ずる處筆力雄勁誰れか軍務に從事する人の此の才筆あるに驚かざらんや小笠原大佐本書に序して曰く「卷を開けば君が燃犀の見と椽大の筆とは相俟ちて日本海海戰の光景咄々眞に逼り一擒一縱讀者をして乍ち怒り乍ち泣き乍ち笑ひ趣味津々たるの間に於て不知不識忠烈の士氣を涵養せしむ」と近く三週海軍紀念日を迎へんとするに當り敢て之を江湖の諸彥に薦め且つ本書を以て此の振古未曾有の海戰を子孫に傳へられんことを望む

東京日本橋本町三丁目
博文館

女（ろの二）

木村鷹太郎君新著

世界的研究に基づける
日本太古史

上卷

洋裝菊判上製表裝清楚

紙數八百四十頁
コロタイプ寫眞版一枚
石版四枚木版畫挿入

正價金二圓
小包料十二錢

破天荒の研究空前の大發見

日本民族の太古史は極東の小島國史に非るなり若夫れ博大なる世界的知識に基ける新研究法を以つて神話及び言語の比較を行ひ又吾太古史地理に就て嚴密なる攻究を行ふ時は國典吾人に示すに日本人は希臘羅典系民族の宗祖たり世界文化の率先者たり又我民族は太古小亞細亞に起りて希臘より埃及に遷り此を中津國として西は伊太利より東は波斯、印度、暹羅に至る大帝國を建成し居りし歷史を以てす。且此新研究を以てする時は從來難解不可解と爲し來れる言語、地理、神事、風俗、習慣等盡其明解を得る事猶榮登る朝暾の積雲濃霧を照散するの觀あり。是破天荒の大研究空前の大發見。本書は實に史學、人類學、言語學に關して日本は勿論世界の學界に一新紀元を開くものと謂ふべし。

本書第一卷は神史、言語、風俗等に就て日本に希臘羅典及び猶太民族の夫れを比較し彼我男女の神々の史傳は美麗なる筆を以て之を叙述し言語の比較は有益愉快の知識に充滿す、又珍奇の挿畫數十、普く一般の讀本に適し而も研究態度の嚴正なるは學者必至の研究書なり。

下卷は日本太古史地理の世界的說明にして舊來の日本的迷夢を打破し精密無比の歷史地圖數葉を挿入して續出す。

發賣元　東京日本橋本町　振替東京二百四十番　博文館





講談文庫

洋装四六判総布特製……紙數各四百五十頁

頗美本　正價（一冊）五十五錢　郵税一冊八錢

（（最　新　刊））

烈婦傳

目次

●春日局……
●皆鶴姫……
●小宰相局……
●尼了然……
●細川忠興の妻……
●乃木大將夫人……
●貞婦の仇討……
●秋色櫻……
●勇婦阿鶴……
●堀部妙海尼……
●阿能局……
●大磯虎御前……
●大野九郎兵衛の娘
●靜御前……
●烈婦さよ……
●巴御前……
●孝貞合鏡……
●北の政所……



□**武勇傳**　全二册

前編目次

●武藏坊辨慶　●濱松響の太鼓　●伊達政宗阿武隈川の勇戰
●出世の大盃　●明智左馬介　●隅田川鎌切
●鬼上官清正　●坂上田村麿　⦿外九講

後編目次

△朝比奈三郎　△天正三勇士　△佐屋川の一番乘
△安田作兵衛　△吉野落　△三方ヶ原の偵察
△山田長政の遠征　△日露戰役帝國海陸軍の譽　外十一講

□**俠客傳**　全一册

目次

▲幡随院長兵衛　▲花川戸助六　▲金看板甚九郎
▲奴お初　▲飯岡助五郎　▲新門辰五郎
▲清水の次郎長　▲江戸の相政　▲小喧嘩五郎吉

□**大岡裁判**　全一册

目次

◎小間物屋四郎兵衛　◎雲霧高嶺白浪　◎迷子札精神極印
◎夢の浮橋　◎藥種屋長政談　◎村井長庵
◎戀娘昔八丈　◎嘘吐彌次郎

□**出世譚**　全一册

目次

●豐公故郷の錦　●又藏初陣　●藤堂高虎　●天人の松　●目出鯛　●別所民部
●澤村才八郎　●文七元結　●黄金の蛇　●龜甲鍋　●桂昌院　●松前鐵之助
●菅源助　●杉田大内藏　●百萬兩　●三河屋甚兵衛　●槍持甚兵衛
●甲斐勇吉　●雲居禪師　●出世の大盃　●出世久助　●婿引出

□**名人譚**　全一册

目次

●響の太刀風　●名匠左甚五郎　●上野の龍　●同大黒天
●同名作左小刀　●芭蕉翁　●狂歌師紫檀樓　●名人こんくわん
●軍人の旗　●法樂の舞　●通し矢

東京　博文館　本町

女（ろの七）

女(ろの八)

す一體此國では家庭料理にお招きすると、飲むのが本位でなくて、召食るのが本位だから、卓上は何となく神聖に見える、食事中色々笑ひ話や罪のないお話が、續々と皆様から出まして、實に賑やかな事、一旦卓子を綺麗に引いて仕舞て夫からアイスクリームと、フルーツケーキを出しました。また／＼暫くは御盛でありました。

卓子に付くまでは樂しみがあるから、疲れも知らずに働きますが、食後の皿洗いはもうガッカリして仕舞て張合がない、今日は後片づけと皿洗ひの爲めに、教會から青年を一人送て貰へたので大きに樂であつた、但し五時から十時まで働いて貰つたので、一時間三十仙として一弗五十仙拂つた、此方の事情に慣れて居るから別段高いとも思はないが、日本でならば、三圓あれば女中を一ケ月でも雇へるであらう、米國と云ふ處は萬事が此樣に働賃が高いのだから、日本から來た當座は、一々故國の就職難や、生活難に比較して難有いとも思ふが、暫くして慣れるとツイ氣が大きくなつて、得るだけ使つて仕舞ふ樣になる、あぶく錢は持てぬの例で容易に入る金は出るのも容易なのか、どうも日本人に貯蓄してるのが少ない樣だ、ナニモ拜金主義を尊べとは云はぬが勤儉貯蓄は人間生きて居る間は忘れてはならぬ事と思ふオット之れは人樣に言ふのではない、私自身にも氣を付けねばなりませぬ。

◎五日、朝の内は三日に洗つたものに鏝をかける、午後からは骨休めに雜誌でも讀まうと思ふたがソウ／＼M樣からクリスマスの贈物に豫約のあつた、頸飾りを買つて來ませうと、下街第一の寶石商へ行く／＼頸飾りを見せよと言へば、早速三打づゝ列べてある箱を三ッ眼の先きにずらつと並べられた、見る眼輝く眞珠にダイヤの光り、かう澤山並べられた中から一つ選むのであるから、暫くは彼れか此れかと迷ふのも無理ではあるまい、ヤット型のよい相當なお價値のを求めて歸る、宅へ歸てまたビロードのケースから取り出して胸に當てゝ見ると、店で澤山な中で見たより一ッとなるゝ見榮があると、一人で喜で居た。

◎六日、今夜は青年連を集めて、骨牌會をせうとて朝から電話で三十人ほどに通知して置く。

夕食後、御來客をお待ち申て居る處へ、第一に御見えになつたは、二ケ月前に日本からお迎へになつた、新夫人花子樣をお連れになつた○○樣、私はまづ花子樣に、御渡米前の御想像と實際に就ての、御感想をお聞かせ下さいと、伺つて居る處へ、他の方々もドヤドヤとお見えになつたので、話もして居られず、早速勝負の準備にかゝる。

洋服を着て座席するのは男の方も苦しいが、女には殊更窮屈であるから、こゝ一ツハイカラ歌留多取りで食堂の卓子を大きく延ばして、立てゝ取る事にする。

M樣と云つたら、渡米後十數年間此の樣な遊びに接する機會がありまんでしたので、自然ドリなんです。今夜も私が、サア皆樣入來しやいと申ますと「僕は腹が痛で來た樣だ」つて、「樣だ」は一寸振つてますが、兎に角黴くさい逃口上ですね。

初めはお定まりのお散し數回、サア源平になつてからの盛な事、讀人が上の五文字ほど讀み上げると、ハツハツと方々でお手が動く樣は、パツプコーンを炒つて居ると云はうか、日本の形容ならば、焙烙の中の豆が飛ばうか走らうか、腹切らうかつて樣であります、撰手の面々には、萩香樣のお好きの白一筋であり、高商出の方、ベースボールチームの三四人、擊劍家、早稲田出などいづれスポートには後れを見せぬ連中、歌留多にかけても熱心に場數を踏で居られるだけ、其速い事は飛航器の速力の樣にありました、中にも花子樣は、實家には兄弟や書生や大勢家内で御座りましたから、宅中だけで毎晩致しましたと仰るほどあつてなか〱御修錬が積んで入在しやる。

私は戰ひの最中にフト思ひました、萩香さんとお近くなら、是非お招き申して、チヤンのお腕を振て頂くのに、夫れからM樣もお好きの栗の喰ひ競べでもして頂いたらとねオホヽヽ。

中休みには當地にはめづらしいおせんざいを出しました、十二人のお客樣が何れも下戸黨と見えて張合よ

くお代りをして下さる、臺所では花子様におかちんを瓦斯の上で燒てゝ頂く、二度目の五人頭には鍋の中が心細くなつて居る、俄かに砂糖とお湯を足して瓦斯で一煮立する騒ぎ、お漬物とお茶と蜜柑を出して置て、私共二人は臺所で殘りのお汁を頂く、でも召食らないで殘されたよりは嬉しかつた。



スルト卓子ではもう中入り後の合戰が初まつて居るM様はフラシライトでお待ちかねの寫眞を撮る用意して居られる。

一戰一敗いつ果つべしとも見えなかつたが夫でも皆様明日の仕事ある身とて十一時半頃に歸途に就かれた、あとは大水の引いた後の様でした。

○七日、今日は土曜で大掃除日、昨夜の煙草の灰やら靴について來た塵で敷物はまつ白、一時頃までかゝつてヤッと氣に入る樣に綺麗になつた。

明日は日曜で店が閉まるから、二時過から日用品を買ひに街に出かける。

夕飯頃はまたM樣と、歸て來たらば入浴の出來る樣に、ストーブに石炭を一杯くべて散歩に出かける、明日は閉店する代りに土曜の夜は、孰れの店も十時まで(平日は六時まで)點いて居るから賑やかだ事、別に買物もないので、方々のウインドーの陳列品を見て歩いたり、活動寫眞を二席見て十一時頃歸宅すると、ストーブの後ろに裝置してある湯のタンクが、ピン〳〵音せんばかりに沸て居た、私は土曜の掃除した晩に、あすは日曜かと思いつゝ浴槽の中に横はる時ほど幸な事はない。

○八日、今日は當市の在留婦人の機關として、去る天長の佳節に生れた○會の新年會を私の宅で持つ事になつて居る、昨日から今朝へかけて皆樣へ電話でお知らせして置きました。

M樣は知人の御葬式にとて出かけられた、私は一寸椅子や卓子、飾物に拭きをかけて、福引も和洋折衷のものを拵へて置く。

まあ此れですつかり用意が出來ました、皆樣がお揃い下さるとうれしいかなんと思いつゝ、姿見の前に來て髪を結ふ、縮毛は黑坊の樣で厭らしいから、髪鏝を荒くかけて浪にする、前髪を左右に分けて、後ろ一面のたぼを入れて根を結ぶ、兩鬢はたぼなしで、ソシテある樣にふくらす、髷はフーワリと三ッ組みにして後ろ一面にひろげてまた、此れは一寸見には三ッ組みとは見えぬ髷である。金蒔繪石入りの櫛を前髪の分けたまん中に挿し、揃ひの大きなパレットを頸筋へかみつく樣に止める、此の結ひ方は昨冬から大流行して居ます、一寸合せ鏡をしてみたが、うまく出來て居る、浴室へ行て溫湯で顔と手先きを純石鹸で洗て、クリームをつけて化粧粉をザッと、パッフではいて鹿滑皮で拭き取ると白粉をつけた樣に見えずに美しく見える

爪には爪クリームをさして一寸磨く「米國の品は何品でもよい香がするとは、先度誰方かのお手紙にあつたが、まさか何品でもする譯ではないが、化粧品なんかは實に氣持ちのよい香氣を持たせてある、かうして粧ひをこらした後は、鼻の先きから、爪の先きまでプンプンよい香りがして一寸急には去りません。

刺繍のある薄い靴下に踵の高い天鵞絨のパンプを穿く、昨冬から此の天鵞絨が大流行、衣服、外套、靴、帽子、手携鞄と何でも黑の天鵞絨である。

ドレスは藤色の濃いのに、此間買たばかりの頸飾だけかける、大小八十の眞珠と一つのダイヤが濃色の衣服に一層よく輝く、指輪も嵌めて見たが、白魚の樣な指ならよいが、年の加減と水使いする爲で、まるで古松の幹の樣になつて、寶石もグラスの破片に見えさうで、また元の寶石箱に仕舞て、式の晩から一分の間も脫かぬ結婚指輪だけにして置く、私の手と云へば國に居る時分は、大きくつて羽二重の樣に柔かなのが、評判でしたが、お友達が後ろからソーッと目隱しでもするもんなら、すぐに手だけなでゝ見て「之れ河田さん」と當てられた位ゐ、此所へ來てからも或方は「當分お目にかゝれないが、あの美しい大きな手だけなりと送て下さい」なんて手紙を受取つた事もあるが、五年の臺所係りで、こんなにも變るものかと思ふ、然し私は之れをいやだとは思いません寧ろ人妻としては名譽に思て居ます。

ボンヤリと鏡臺の前に立て居ると表に誰方か入來して、ベルを鳴らして居られる、ハッと我に返て、縫のあるリネンのハンカチーフへ、カットローズを少しばかり香はせて、扉を開ける、お見えになつたのは此の會を創立する時に大に御盡力下さつた○○牧師樣、五分も經たぬ内に一昨晩入來した花子樣がお見えになる此の方のお里は横濱の△△齒科院で居らつしやるとか花子夫人も東京の○○齒科學校を卒業遊ばして居られるとか、自活の道を立て樣となすつた方は、矢張り何處に違つてるお話して居ても、ヲキハキと面白い、よいお髮をふつくりと周圍たほに遊ばして、愛嬌のある

お眼、お口元は少し受け氣味で在らしやるが、お手のものゝお齒にお手が行屆いて入來しやるから、却て夫れがお可愛らしく見えます。

「折角其處まで御勉强なさつて放て仕舞ふのは惜しう御座んすね、此國の齒科術は世界一とか申しますからモ一ツ御練磨なさいませよ」

なんて牧師樣とお勸めして居る處へ入來したのは、半歲ほど以前に御渡米なすつたS夫人、お顏のお色はいつも櫻色、濃い三日月眉に、優しいお眼、ほんとうに御容貌よしで入來しやる、夫で此の方は御渡米の御話が出來てから、御準備にとて御郷里から御上京なすつて、〇〇女學校で英語、裁縫、料理等お學びの傍ら謠曲、仕舞、ヴアイオリン、まだ其の他にもあるかも存じませんが、私の伺てるだけでも以上のものを一年ほどの間に御稽古なさつたと云ふんですから、御器用のほども察せられます、先月でしたか少し御不快の樣に承つたが、今日コートをお脫ぎになつたのを拜見すると、モー前月の御病氣も分りました、日本ならば三月四月は袖でも隱せとか、袖がなくとも帶と云ふものも御座いますが、此國では其樣な調法なものはなくて、細い紐同樣なベルトをしめるだけゆゑ、すぐ分りますの、初姙娠のS樣、どんなにきまり悪くて居らつしやらうと見て見ぬ振りをして置きました。

第三にお見えになりましたのはH夫人、此方は七八年前に大阪の〇〇女學校を卒業なさつた方、夢二式のお眼にお顏の色艶もよく、何時も快活に、才子氣の溢れて入來しやる方、一寸見にはお廿歲ぐらゐにしか見えませんが、之れで今月中にはお二人のお母さんになられるとか、其のまゝ重いお身を大抵の方ならば、出歩きは不要心ですからと仰る處を、あくまで會の發展を扶けたいと云ふ思召で、押してもお出席下さつた御志を感謝せねばなりませぬ。

一體當市には同胞婦人は七八十人も居られるのでありますが、彼方此方と私共が手を別けて御勸誘に伺ひましても、會の趣味がお分りにならぬのか、皆樣が體よくお斷りになる數も今日集まつた以外に三四人の

賛成者はあるが、何れも御子様持もなので、お出にくいのであらう、只今の處は少數の會員でも、今後の渡米者には、自覺のある、新らしい考を持た御婦人が多くならうから、追々發展させるつもりにて努力致しませうねと、其の他二三の必要な件を御相談致しまして、夫から餘興に移る、牧師樣が讀人になつて下さつて歌牌が初まる、皆樣は孰れも昔取つた杵柄で御盛にダイヤやルビーのお手が動く。

次ぎの室で燃して居る、暖爐の火で七十度以上に溫度を保つて居る處へ數度の戰で皆樣のお顏がポーッと上氣して入來しやる、花子樣と私はよろしいが、あとのお兩人にあんまりお臍の宿替へをおさせ申ては、後が心配だから、よきほどに切上げて後は、フルーツケーキや、ファッジ、チヨコレートクリームと何れも手製のキャンデーを彫刻硝子の皿に盛てだす、香たかき玉露をすゝりつゝ、色々有益な處世上のお話を交換致しまして終りに福引を引きまして、又々大笑ひを致しました。

M樣も少し前にお歸りになつて、私共の仲間入り、ケーキをあまり召食るものですから、牧師樣は「伊藤樣は甘黨ですね、其處へ奥樣がお手製の甘いものを、ドシ／＼供給なさるから、うまいものですね」「甘いものを食る方の奥樣はお幸福ですね、宅なんかは甘いものが食けませんから私まで頂く機會がなくなつてね」と誰方かこぼしで居らした。

何時の間にか五時になつて居るので皆樣大急ぎに御支度なすつて「御蔭樣で面白う御座りましたつて、私こそ愉快な時を持ちました。

夕飯後M樣は昨日から三日間始まつて居る、素人大相撲の春興行を見に行らした。

私は一人ボッチになつて、ヤレ／＼之れで私の一月行事も無事にすんだ譯とホッと致しました。

クリスマスの時に買て來たが夫から引續き忙がしいので取出す暇もなかつた人形を裁縫室から出して來た、三十過ぎし人形いぢりも可笑しいが、私にはまだ神樣から子供と云ふものを授からない、元來子好きの

私、モー此の頃では道で行き合ふた子供でも、親がないなら連れて歸りたいと思ふ位ゐ、夫にM樣と云ふたら、何を云ふと夫れを楯に取て、「女大學に何とかあつたナ?」、三年にしてのエッ」なんてすぐ之れですの、ダカラあやかる樣にと思て、十八吋ばかりの人形を買て來ましたの、此方の人形は眞實の子供の樣によく出來て居ます、活きてる樣な櫻色の顏の輝きのある眼、鼻の恰好が申分なく蕾の樣な脣からは、四まいの前齒を見せて、茶褐色のウエーブの髪に黑い長い植込みの睫は、眠つた時の愛らしい事、手足を左右に廻轉さしたり、眼を眠らせたり起したりして居ると、私の病氣の嚙みたくなつて身體が堅くなる。

　私はよく弟妹の輪の入つた樣な手足を嚙ではキャッキャッとけたゝましく泣かした事がある、日外も其の話をM樣に致しますと「自分の子供に齒形など入れ樣ものなら、すぐ裁判所へ行くんたぞ」つて之れは此國では、結婚も離婚の時も裁判所へ兩人で出かける事になつてるの時から、未婚者には裁判所と云ふ名は大層うれしく響くが夫れに反して既婚者には何だか不快の念を起させます。

　サテ人形の名は何と付け樣、碧眼赤髪のベビーに、日本の名もおかしい、メリー、ベチー、ジユリアと知つてる子供の名を皆呼で見る、ローズと云ふ小娘は一番可愛かつたから、ローシーと呼ぶ事にきめる。

　十一時半にM樣お歸りになつた、角力は?と伺ふと「フン面白かつたぞ、散髪に口髯の力士は一寸不似合だつたが、體格のよいのや、好取組があつた、なかなか素人としてはよく取れる、明日も行くのだ」つて寢室で寢衣きになつて、ドタン〳〵と見て入來した眞似をして力で居らつしやる。





日本婦人の美なる原因

米國のリナ、カバリエリと云ふ有名な美人が日本の婦人は何故美しいかと云ふ問題に就て述べてゐるのがなか〳〵面白い。第一日本の婦人は眼は非常に美しい。其の瑠璃の様な瞳は正直らしく子供らしくて好い。髮の毛は長くて滑かで繻子の様に黒く艶がある。而して明瞭した顔は六月の朝の湖水の様に波立ず透明つてゐる我等の眼からは宛ら子供の様に見える。小さな身體は其の温順しく優しい性質に最も相應しく思れる。日本婦人の此美は何處から齎すのであらう。咲き誇る萬朶の櫻か、雲を劈く芙蓉の靈峯か、無論神の技には違ひないが、此の天賦の美を保つべく日本婦人の用意は頗る周到である。

身體の優しいのは性質が優しいからであらうが、其の大なる素因は食物が好いからである。日本婦人の食物は總て美に適つてゐる。常に消化の好い水分の多い食物を取つて、決して菓子抔を口にしない。飲料も刺戟性の少い極淡い茶を飲んでゐる。皮膚の滑かなのは之が爲めで、日本婦人が如何に肌の潤澤を保つ爲め心を用ふるかは、毎日怠らず十五分間油の中に手先を浸けてゐるのでも分るであらう。斯の如くにして日本婦人の手に常に羽二重の如く柔く而して艶がある。夫に入浴は缺した事がない。微温湯に入つて皮膚を輕く摩擦すると、血管の運行を好くして、皮膚の血色がよくなる。

而已ならず日本婦人は常に戸外にあつて絶えず新しい空氣に觸れてゐる。殊に小さな箱の様な家には紙の戸があるばかりで、空氣の流通をよくしてゐるから、假令室内に在つても新しい空氣に觸れる事が出來る。夫れから日本婦人は決して粗暴しい振舞をせぬ。此は第一皮膚を荒す虞があるからと云ふばかりでなく、粗暴しい振舞をすると身體の格好が惡くなるからである。又日本婦人は時々按摩をやらせる。按摩は筋骨を整へる爲めで、安臥して輕く身體の全部を摩擦させるのである。

尚一つ注意すべきは日本婦人の服裝は此の天賦の美を保護するに最も適してゐる事で、其のキモノは極寛かに出來てゐる。決して我々の服の様な窮屈な物でない。此點に於て日本のキモノは最も理想に適した婦人服である。

以上は多く外面的の事を云ふたのであるが精神作用の外部に及ぼす働の偉大なる事を知つてゐるものは、是と共に是非日本婦人の内面即ち精神を研究せればならぬ。自分は一言にして日本婦人の精神を言ひ顯はすべき日本の格言を知つてる「何時も笑つて居れ」平素此の心掛である日本の婦人が快活に見えるのは當然であらう。愉快なる精神は總て日本の婦人を斯くの如く美ならしむるのである。終りに臨んで云つておく。日本婦人には表情がないといふが、之は自制力の強い結果である云々。

食鹽と湯屋は無用

鹽を食はなければ生きて居られぬと言ふけれども、虎や獅子は鹽を食はなくても至つて丈夫だ。鹽を食ふのは人間ばかりで、それも野蠻時代には喰はなかつたのが、文明が進むに從つて之を用ゐるやうになつたのである。一體食物には何にでも鹽分は含まれて居るので、別に鹽を求めて食ふ必要はないのである。それを文明人が何故好んで食ふかといふに、鹽分の中には蛋白質の分解を妨ぐる力が有るから、人口が繁殖して食物の不足を來す場合には、鹽を嘗むれば少量の食物で事が足りる。此德用といふ所から鹽は文明社會に必要のものとなつたのである。殊に不景氣の時代には一層其必要があるかも知れぬ。さうかと云ふと鹽は食慾を興奮する効があるので、贅澤な人にも亦た喜ばれる。

食つた鹽分は腎臟から小便となつて排泄さるる。併し腎臟の力にも限りがあるから、餘計鹽を食べると、他に排泄の途を求めればならぬ。そこで汗となつて皮膚から排泄さるゝのであるだから汗は嘗めると鹽からい小便もからいのである。しかし汗は只用て出るものでない。夏は出るが、冬は湯に入るか、或は働かれば出ないけれども働くよりも湯に入るのが樂だから、人は皆入浴する。此の温浴は文明人のみのすることで野蠻人は僅かに雨に浴する位のものであるそして温浴をする文明人の體力が強いか、雨に浴する野蠻人の體力が強いかといふに、野蠻人の方が強いのである。野蠻人は鹽を食はないから、湯に入らなくとも、腎臟だけで鹽分を排泄し得るが、文明人は温浴を廢らなければ自分で食つた物すら排泄することが出來ぬ程弱くなつて居る。江戸ッ子は鹽からい澤庵でお茶漬さらさら、熱い湯に飛入つて茹蛸の樣になるのを得意として居るが、焉んぞ知らん、其熱湯を好むのは澤庵の御蔭である。熱い湯で汗を出されば生理上工合が惡いので、それ丈け健康を損して居るのである。故に斯んな連中は、年を取ると腦溢血を起したり、腎臟炎を起してくたばつて了ふ。

温浴は一面淸潔の爲でもある。併し垢は新陳代謝の結果生ずるもので、生きて居る間はいくら擦つても終に落し切ることはない。落し切れないものを無理に落さうとするのは愚の骨頂である。況して石鹸など使つて明日の垢まで抉り出さうとするなどは、要らざる業である。文明と共に藥罐頭が殖えるのは、石鹸やブラシで頭を洗ひ過ぎるからである。頭が藥罐になる位なら其他の機關も藥罐になる。羅馬の亡んだのは浴場からであつた。奢侈贅澤の極點に達した羅馬人は、政治を談ずるにも、文學を談ずるにも、浴場に於てした。そして湯に入らなければ身體が保てぬやうになり、壯麗なる浴場の多く設けられた時は、既に羅馬の傾きかけた時であつた。湯屋の繁昌を眼前に見るたびに、羅馬の古を想はざるを得ない。(醫學博士二木謙二氏)

吹き曝しの日本家屋

西洋から歸つた人の多くは、我國の家屋の構造宜しきを得、殊に防寒の設備能く整ひ、住み心地の好いことを頻りに吹聽して、日本家屋の

いづれもが殆んど皆吹き曝らして、恰かも風邪を引くべく出來たやうな建物だ、などと罵倒するのがおきまりである。なるほど、堅牢なる鐵の柱、石の壁、裡にストーヴをたきこめて、「むろ」の様な温かい所に安臥するのは、誰でも氣持が好いに違ひない。併し日本が之に倣うて可いかどうかは疑問である。

第一西洋風に家屋を改造する事が容易ではない。又望むべき事でもない。尤も身體が弱くて、日本室に耐へ得られぬ人や、西洋から歸りたての弱蟲連は、「むろ」を造つて這入るも可からうが、壯健な國民は、強ひて此眞似をする必要はない。如何にも日本家屋は、冬は寒い。併し日本人は、昔から之に慣れて居る。冷水浴を行うて皮膚の強固を計ることが、健康上大切であるとすれば、自然の冷風浴を強ひる日本家屋は、國民の健康を増進するものとして、寧ろ歡迎せればならぬ。

實際日本家屋は、最も冷風浴に適する。國民は此吹き曝らしの家屋に住んで、知らず識らずの裡に、冷風浴を行ひつゝあるのである。偶ま生中可通な衞生家があつて、高い費用を掛けてストーヴなど入れると、却つて風邪を引くといふ滑稽が演ぜらるゝ。ストーヴのある室で厚着をし汗ばむ位の身を其儘戸外の寒風に曝らせば、風邪を引くのは當然だ。いつそストーヴがなかつたなら、寒熱の急激な變化の爲めに、風邪を引くことも少ないであらう。

子供を育つるには、西洋風の「むろ」の中で育てるのは餘り感心せぬ。日本人は矢張從來の吹き曝らし家屋に住み、幼少より冷風浴に皮膚を慣らした方が可い。絶對にストーヴを否認する譯ではないが、之を家屋に設へなければ文明人でないと言ふほど、さう難有がるべき代物ではない。負惜しみでも何でもない。(醫學博士横手千代之助氏)

經濟で滋味ある食物

ドクトル北豐吉氏は、最も多數人民の常食に用ゆる食品八十餘種に付價格と營養との兩方面より食品の價値を研究して下の如くいへり。

「植物性食品は價格を十錢として第一は甘藷、第二は馬鈴薯其の他の芋類、之に次ぐは大豆類、米、麥、南瓜、若菜、大根等の順となり動物性食品は價格を一圓として獸肉に在りては第一は豚、第二は鯨、第三は牛肉、魚類に在りては第一は鰤、第二は鯖の順となる。牛肉は大凡そ五等に分け、一等は肉と肉との間に脂肪の交つた部分、二等は赤肉、三等は脂肪の凝結した部分、四等は赤肉、五等は切屑といふ順で豚肉も大要右同等であるが、此の等級中經濟的食品に適して居る部分は豚肉も牛肉も三等である。鯨は上等は鹿子狀をなして居る部分であるが、經濟的食品としては皮下脂肪を有する部分が適當である。

單に食品としての價値を定むる場合は消化が良く滋養性分が多く而して各人の嗜好に適すと云ふのが云ふ迄もなく第一に相違ないが、國民的食用品としては各人の生活狀態上必ず價格を加味しなければならぬ。即ち比較的安價にして消化が良く滋養性分に富んで居ると云ふ經濟的食用品を標準としなければならぬので以上は即ち此見地から研究評定したのである。

果して此の研究にして誤りなしとすれば、軍隊學校寄宿舍、監獄等の多數人收容の箇所を始め、普通の家庭に於て、同じく野菜類を食用するにしても芋、豆、南瓜、若菜、大根の順とするとか、又た同じく肉を食用するにしても豚、鷄、牛の順にすると云ふ注意が必要となり、從て調理法の如きも此等の經濟的食用品を旨く食はせるやうに研究工夫する必要が起つて來る

一體食物なる物は人生必需のものであるから苟も一國生民の治平に志を懷く政治家などは、先づ第一に此の食物問題に注意を拂はなければならない。種々の税金の徴收方法の如きは生民の健康と活動との成つた後ちに徐々と思ふ可き事項に屬する。世人動もすれば日本人は、肉食しないが魚肉が澤山であるから國民の營養上には歐米人に對して讓る處ないと誇り顏に主張するが、事實は全く反對で、魚肉を以て國民的の標準食用品とする譯には往かない。次に生活の程度から概觀して日本の食用品は稍々低廉なる如く思ふかも知れぬが、之れ亦た事實は全然反對で、常食品は却つて英獨米等よりも高價になつて居る。現に米、麥、肉類の如きは獨逸よりも高價で、野菜の如きも同價位である然らば我れと彼れとの國民の收入は如何かと云ふに、中流以下に在りては獨逸は日本の二倍以上三倍近くである。要するに日本の前途としては比較的經濟食品たる豚肉の如きものゝ供給を盛んにするのが必要であらうと思ふ」云云。

乾燥洗濯法

洗濯と云へば單に汚物を洗ひ落すことばかりと思ふて居る人もある樣ですが、此外に或る程度まで其の物の品質を回復する事が出來るのであります。洗濯の方法には濕潤法と乾燥法との二通りあります。濕潤法とは普通一般にやつて居る、洗濯物を湯に浸して、石鹼や曹達を附けてザブ〳〵と洗ふ仕方で、乾燥法とは汚れた部分だけを揮發油の樣な溶劑を使つて、脂肪を溶かして仕舞ひ、それと同時に塵埃等をも取り去る方法であります。此の後の方法は頸飾りの縁とか襟とか云ふ樣な、特に脂垢を落すに最も効力があります。此の乾燥法には第一どんな色物でも變色したり褪色したりする心配のない事。第二何んな種類の織物でも、其質を痛める事のない事。第三汚れた部分だけを洗ふことが出來て、全部を洗ふ必要のない事。第四洗濯をする衣服類は其附屬して居る裝飾などを一々取り離さずに、其まゝ洗ふ事が出來る事。等の特點があります。

之れに使ふ藥品は、揮發油、ベンヂン、石油ベンヂン、エーテル、テレピン油、クロヽホルム、二硫化炭素と云ふ樣に色々ありますが、此内でも、揮發油、ベンヂン、石油ベンヂン等は何處の藥店にもありますし、價も安く、家庭用として適當の物でありませう。其の方法は先づ最初に揮發油なりベンヂンなりを三つ器に盛つて置いて、それに第一液、第二液、第三液と假に名づけて置きます。次に衣服類の洗濯をしやうと思ふ其部分（小さい品なら全部）を第一液に浸して、液の揮發を防ぐ爲めに之れに蓋をして十五分程も過ぎて、此中で十分振り動かせば、餘程の汚れも落ちて仕舞ひます。が未だ十分で

なかつたならば、更に之れを第二液に入れて前同様に致します。まだそれでも十分でなかつたらば、更に又第三液で處分するのです。洗濯物が縮緬などの様な外觀を損する心配あるものゝ外、次の液へ移す度毎に十分液を絞つて置くがよろしい。又洗濯をする部分が一小部分で、全部を浸すことが出來ぬ樣な場合には、筆又はブラシで藥品を塗つて、其上下から白布か若しくは白紙の樣な物をあてゝ、其上から壓したり叩いたりするがよろしい。此事を二三回繰り返せば、綺麗になります。そして何れの場合でも洗濯が終つたならば、其洗濯物を風通しのよい處で十分乾かして臭氣が全く無くなる樣にするのであります。

藥品の保存、右の第一液乃至第三液は一度每に之れを捨てるには及びませんから、夫々別器に貯へて置いて何回も使ふのであります。そして第一液が甚だしく汚れた場合には之を捨てて第二液を以て第一液に第三液を第二液にして第三液は別に新らしく拵へる樣にすればよろしいのです。（原才太郎氏）

婦人の顔色と身長

人の妻になつて居るもの、或は家庭が厳格である爲めに外出の十分に出來ない婦人は大抵顔色が悪るいが、之れに反して始終一定の職業を持つて外出する人々は、營養が十分であるから皆な顔色が良い。それ故日本婦人の體質を良くするには矢張り盛んに外出する樣にしなければならぬ。歐羅巴邊の婦人は近頃盛んに外出するから、日本の婦人よりもずつと顔色がよい。日本でもどうかさう云ふ事にしたい。

日本婦人の丈の低くいのを改良すると云ふ事は少しく難かしい事である。日本人の長胴短脚なのは坐る結果だと云ふ説があるが、それは餘り信じられない。日本人が現在の如く坐わる習慣になつたのは足利から鎌倉の時代の事で、決して古いことではない。勿論古い土偶、奈良の正倉院の佛畫などには現在のやうに坐わつて居るものもあるが、一般の人の坐居するやうになつたのは漸く五六百年來の事で、それ位の間坐わる習慣があつた爲めに、長かつた脚が短かくなつたと云ふ事は恐らく無からう。これは何うしても日本人種の特質であらうと思ふ。

併し斯かる特質があるにしても、平素の訓練に依つて多少丈を高くすることが出來ぬでもない。實際に就て見るに人は終日立つて居れば夕方には丈が幾分か低くなるし、朝起きた時は誰れでも少し高くなつてゐる。又年をとれば若い時よりも低くなる。且つそれにはチヤンと生理上の理窟がある。けれども平素如何に體育に務めても、たゞ脚だけ長くするといふ事は出來ない。丈は高くなつても長胴短脚の比例は依然として變らないのである。體育を務めれば身の丈を伸す事が出來ると云ふ事は近頃の中學、高等女學校等の男女生徒が其の父母より概して丈が長くなつたのを見ても分るが、長胴短脚の比例を改革する事は矢張り出來さうにも思はれぬ。要するに長胴短脚は如何とも出來ないとしても、今後日本婦人が體育を重んじ、大人になつても盛んに外出する樣に務めれば、今よりは必ず丈高く、脚首の醜いのも、必ず直ほるであらうと思ふ。（醫學博士田代義徳氏）

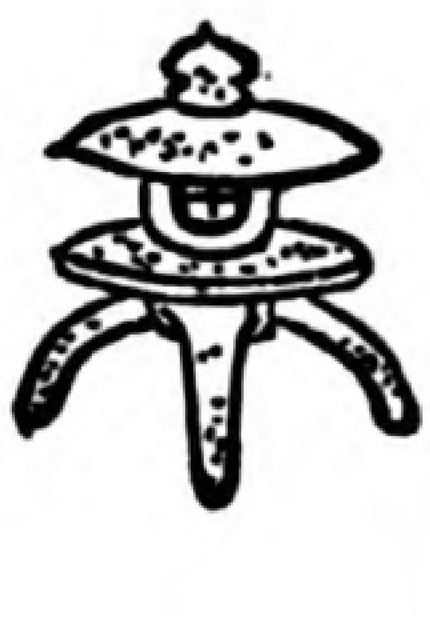
愛の表情

愛の表情には色々の要素があるが、其何れの要素にも、愛する者に接近しやうとする希望と、愛する人から愛せられると信ずる喜悦との伴はないものはない。それゆゑ眞の愛の表情には、いつも微笑が浮んで居る。相手に接近せんとするに當つて、先づ身體のどの部分を以てするかは、國により人種によつて異ふが、通例最も動かし易く、感覺の鋭敏な部分を選ぶ。例へば手（握手）の如き、口（接吻）の如き、殊に手は最も多く用ゐられ、口は或人種に限つて用ゐらるゝ一番用の少ない部分は足であるが、併し若し相愛する二人があつて、他の部分を以て接觸し得ない場合には、其足を相觸れて、せめてもの心遣りとする。これは美術家などには好い材料である。手が多く用ゐらるゝ譯は外でもない手には多くの關節があつて、屈伸自在であるから、接觸を密にし、愛情を濃かに表すことが出來るからである。

總て接觸には加動的方面と受動的方面とあつて加動的方面に立つ者が更に受動的方面に立つことを得たならば、最も滿足する所で、接觸の際には之が同時に起るのである。又加動的方面に立つ者は、接觸した瞬間に自分勝手に受動的方面にも立つのである。例へば手や唇を以て愛する人の衣服に觸れた瞬間、其手や唇は此無心の物體から幾らか返禮を受けて居る。よく西洋の小説に、宗教上の遺物や偉人英雄の衣服に手を觸れたり、接吻したりすることが書いてあるが、これ等も其一例である。

握手に次で來るものは、腕を擁して抱き合ふことで、多年相離れて居た親友が、不意に邂逅した場合などには最も純潔なる此愛の表情が見はるゝ。蓋し抱合は兩者對立するのでなく、合體して一となるといふ意味を最も深く表はすもので、其形には文明人と野蠻人とでも大差があり又文明人の間にも色々の形式がある。

接吻は唯簡單なる愛情の規約的表情として表はれることもあるが、多くは抱合よりも一層熱烈なる愛の表情として行はるゝ、之にも種々と國の風があつて、一家族のみに限られるものもあれば、親しき者には誰彼の差別なくするのもある。何故唇が接觸に用ゐらるゝかといふに、唇といふ所は極軟かな皮膚に被はれ、最も鋭敏なる知覺神經の分布する所であるから接觸に都合が好いのである。古來詩人も「こゝに二つの心が相合する」と歌ひ、戀する人が「接吻、然らざれば死！」と叫ぶのを見ても知らるる。「與へられた接吻」に播かれた愛の種子は之を哺育すべき沃土たる「返された接吻」に會つて直に萠芽し、蔚然として愛の樹が繁茂するのである。實に接吻は最も切實なる愛の約束で、人間は往々之を贖はんが爲めに、天地間の何物をも犠牲として悔いないのである。慈愛に滿ちた母親の接吻は、如何なる惡人と雖も永久に忘れ得ない。（理學士川村多實二氏）





定まる運命

葉山繁子

一

『ほんの通り雨だつたんですよ』

と光子さんは注ぎかけた急須の手を、一寸止めて莞爾した。

私は子供の時からの仲よし、家も近所、學校も同一、琴も挿花も同じ師匠、去年此富豪家へ縁附かれた時も共に悦んだのであつたが、其御主人、即當時の花聟樣が、廿歳も年長で、頭が少し禿げてゐる處から、光子さん、嫌つて〳〵、僞か眞か病氣になつて、此別莊――鎌倉も小坪寄の、寂しい不便な――へ避けたのを、お聟樣が追駈けて行つたといふのは、つひ此春。兎角家庭が圓滿ないと聞いて、案じて、一度訪ねやう〳〵と思ひに思つて、やつと今日、少し窶れこそ見えるが、昔に變らぬ快活な光子さんを見たのは、嬉しいより寧意外だつた。

もう全然夏めいて、鼠地のセルに帶は腹合せの、態と黑繻子の方を出して、玉露を釃んだ清水燒を取上げると、指の間から射る樣な光りがきら〳〵。一口飮んで光子さんは、談話を續ける。

『何でも目立つまいとの用心から、裏道を〳〵と傳はつたもんですわ、それよりや車で往つた方が餘程よかつたに、矢張周章たんでせう、此前の坂』

と身を捻つて、後方へ指を示すと又きらり。

『あれを下りて、網や襤褸を一ぱい干した、漁師町を通り拔けると直山の根に沿いて曲つたの、麗かな午時でしたよ、四月の初旬ですもの、遠方で望ると只赤土

の上へ、青粉を撒いた樣な山も、近寄つて見るともう木も草も大分延びてゐて、薄の樣な細い枯葉が澤山、長々と寢た樣に山の面を包んでゐますから土の顏などは見えません。

　左側はずつと畑で、青々と艶の好い麥が、子供なら肩迄も隱れる程。刈り込んだ樣に丈が揃つて、風が渡ると音もしないで、ふわ〳〵と裏葉が飜る、其間には菜の花が一塊づゝ、所々に黄糸の刺繍を置いた樣。

二

　こんな裏道は始めてゞすから、何といふ所やら、それに服裝といつたら平常の儘、目立つちやならぬと思ふから、信玄袋一つ持つちやゐません、洋傘も粗い方の深張、それですつぽり斯う顏を隱して、山と畑との間の凸凹した細道を、それでも大路見當を附けて、停車場の方へと歩いたのでしたが、何だか心細い樣な、恐ろしい樣な、額にしと〳〵汗が滲みます。

　何處迄往つても變化のない、車でさへ飽きる程の道程でせう、ほつとして足を止めると向ふの山の上に眞黒な雲が出て、それが漸々擴がつて來るぢやありませんか、勿論日も隱つて風もぱつたり止る。今迄浪の音とばかり思つてゐたのは雷なんです。

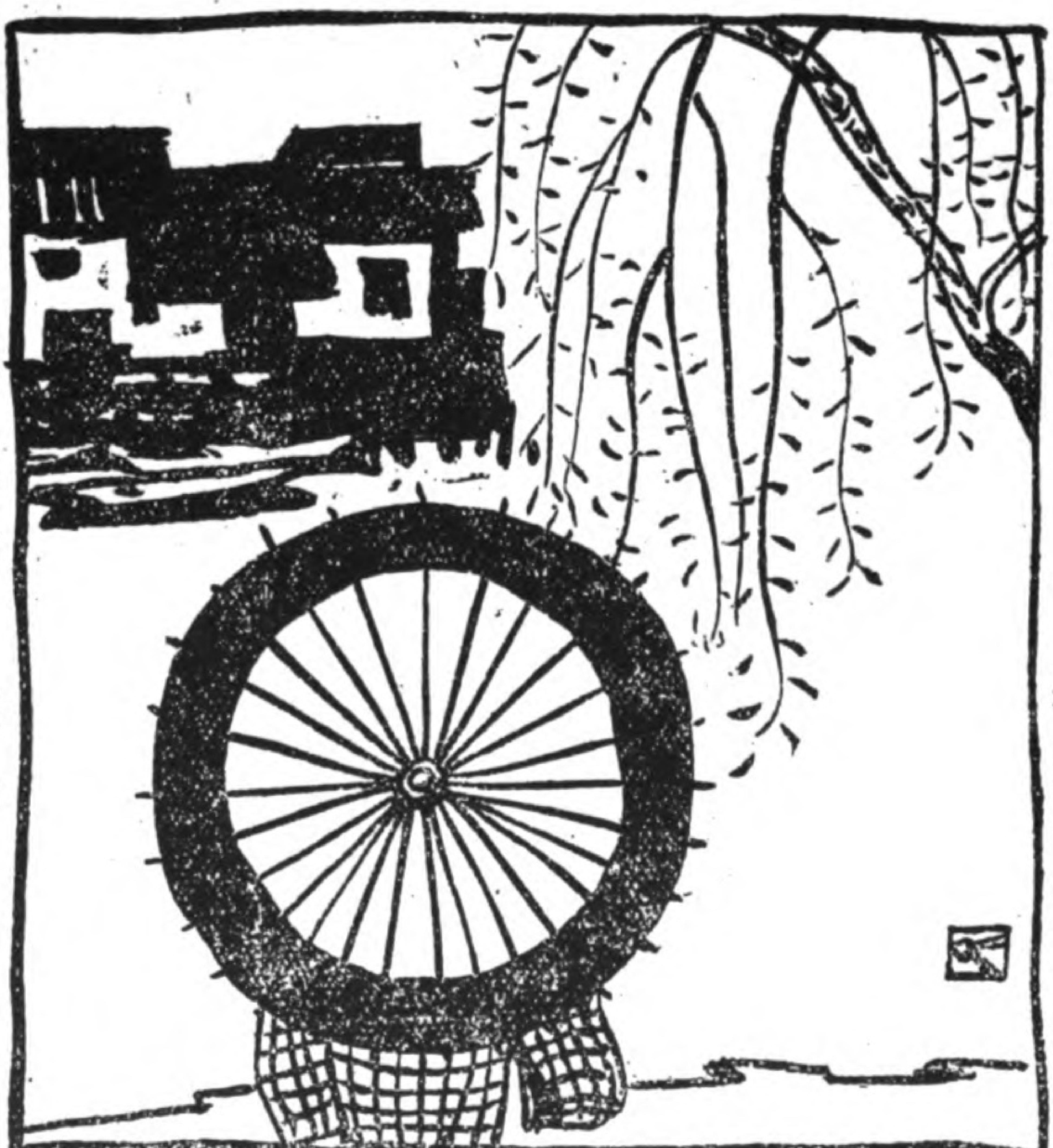
　畑の盡きた處に二軒並んだ、茅葺の百姓家から、云合せた樣に女が出て、干してある襁褓を取込む樣子、降るな、と思つても立寄る木影もなし、只うつとりと空ばかり見てゐると、眞黒な厚い雲がぱつと破れて、紫色の閃光が迸る、稻光ですよ。山の腹に當つて、畑の上へさつと流れる時はもう蒼色に變つてゐます、あつと傾る洋傘の上にポーンと一粒、續いて三粒、四粒雨の脚は漸々早くなる、麥は亂れる、菜の花は騷ぐ、と憎らしい、嘲ける樣な雷の音が次第に強くなる。

　あゝ罰かと、思つて見たが後へ引返すのも容易でなし儘よと、今迄後生大事に引添つて來た山の裾に別れて麥の中の更に細い道を一目散、人目のない氣樂さは、嫁菜を踏み越え蒲公英に躓き、辛と驅け拔けると、突當は垣根の樣な低い竹藪で、徑は丁字形になつてゐます、を右にとつて足下も見ずに行くと、右側に大きな

お寺の門がある、やれ嬉しやと方立にぴつたり體を寄せて、ほつと一息。

三

法華寺か何かでせう宏いは宏いが餘程古いもんで屋根も柱も全く傾いて、觸つたらぬらぬらと氣味が惡るさうに苔がむしてゐるの、本堂迄ずつと石が疊まれて右側は鬱然、松の林、左の方は京菜と蠶豆を作り分けた奥を小さい生垣で見切つて、庫裡の羽目に寄つた處が井戸、竹釣瓶の長竿が、椿の葉を縫つて空さまに今の雨に落とされた眞紅の花が二三輪、侘びしげに俯いて、黄金の花粉が散亂。



楊弓にあたりのつゝやはつ袷　（永保）

少し小降りになつたので、未道が泥濘といふ程でもなし、此間にもう一足も出かけ様かと思ふと目前へピカーリぐわらぐわら〳〵ザーッとそれがもう一度きたの。纔に頼んだ古屋根からは、銀の簾を懸けた様、此門も、身體も、持つて去かれるかと・生きた空はありませんでしたね。

『もし〳〵、もしもし』と何處かで呼ぶ様な聲がする。はてなと一寸柱を外れて振り返ると、本堂の横手から人の顔が出てゐるぢやありま

せんか、美しい女の顔が。

降りが强いので、雨戸を閉め樣として、見すぼらしい私の姿を認めたんでせう。

「こちらへお入んなさいまし」、と涼しい聲でお寺だけに、地獄で佛も可笑しいが、兎に角遠慮なんぞしてゐられる場合ぢやありません禮心に一寸領いて、小さな深張に袖を竦めて銀の簾を潜ると、女の姿は庫裡の上り端へ廻りました。

四

「おゝ〳〵飛んだ御難儀でございましたらう、まあちつとお上んなさいまし、其内には晴りましよ」と雑巾を持つて來る、びしよ濡れの洋傘を、奪ふ樣に土間へ干してくれる。

どうも其女が何處かで見た顔に違ひないの。廿四五でせうか小造りな、少し壞れかゝつた丸髷に、双子づくめのきりゝとした、風采なら、容色なら、こんな古寺にも勿體ない、いゝえ不思議な女。

茶の間めいた六疊ばかりの座敷、てら〳〵拭き込んだ長火鉢や鏡臺が配置よく、整然と片附いてゐる故か、外から見た程古ぼけてもゐません、壁に寄せた茶簞笥の隣りに、朧塗――といふと立派さうだが、剝げて所所木地の露はれた階段が三段程、昇つた處が本堂らしい。

和尚さんが雨漏りでも繕ふのか、絶えずコツ〳〵といふ音に、餘韻の長い咳が交つて聞えます。

外は益々激しい雷雨に、ひた〳〵と閉し籠めた古寺の陰鬱は、目に見えぬ鬼神が空氣に立ち交つて、人間の本心に何物をか求める如く、譬へば、夫を嫌つて實家へ逃走しやうとする我儘女を、强ひても悔い戻させでは止まぬと樣に、怪しく身に迫る。

梵妻でせう、美しいのは長火鉢の前に莞爾と。

「よく鳴りますこと、初雷でございますよ、お嬢ひ?」

默つて領いた私の顔は蒼かつたのでせう。

「ほゝゝゝゝゝ女は誰もねえ」

云ひながらひらりと起つて、件の朧塗の階段をそしと

しとと、暫時姿を隠したが、直ぐにお線香を持つて出て來て。

『好きなものでもございますまい、あの東京でいらつしやいますか』

手早く火を點じて五六本美しく均らした灰の上に。

『はい、あなたも？』

『は、いゝえもう』

むらくと立昇る煙を、一寸手で拂つて、

『此節ぢやすつかり田舎者になつてしまひました』



暇乞や遠く見て來し家の前　（碓蝶）

宜しうございますよ、呑氣で』

『まあ、あなた程の御姿色を……』

はつと思ひ出した、お小夜ですよ、住吉屋のお小夜なの！』

光子さんは例の光る手で、打つ眞似をして、私の驚顔を期する樣に、ぢつと目を据ゑる。

『へえ？』

『あゝ忘れてそら眼の病い爺父と二人で三田の通りに煙草屋を出してゐた』

『へゝ』といか樣驚いた。

五

慶應義塾の書生さんをお顧客に、可成り繁昌した住吉屋のお小夜、覺えてゐる。

一六の稽古日には、光子さんと同道に店の前を通つて。其容色を羨み合つた。其頃はまだ十八九の大抵島田に結つて、黑繻子の掛襟に友禪の帶、いつも紫メリンスの前掛を締めてゐたつけ。

「さう〳〵、何でも坊さんに見染められて、嫌がるのを親父が無理に遣つたといふ。」

「えゝ覺眞寺といふんですよ、歸りに見たら、餘程さう云つて見樣かと思つたけれど、また止してね、

「よく東京が戀しくありませんね、と水を向けると」

「そりやもう、嫁りたてには戀しくつて〳〵逃げ出さうかと迄思つた事が、幾度ございましたらう、でもねあなた、何も運命でございます、多寡のしれた人間の力で、成行に逆はうといふのは不可能でございますからねへ、どの道送る一生ならくよ〳〵しても始まりませんから、ほゝゝゝゝ」

と双子の袖を口に當てたお小夜の顏が、凄い程氣高く見えて、私は慄としましたわ。

間もなく本堂の方に、コツ〳〵の音が止んで、咳の聲が頭の上に、和尙の姿を見た時は再慄としましたよ。

ほゝゝゝ、だつて其香染の十德よりもつと黑い顏が、松皮疱瘡とでもいふのでせう、宛然お強飯のお結びの干からびた樣、年齡などは四十か五十か、見當も附きやしないの、それが香の煙の朦ツと、薄暗い階段の上に顯はれたんでせう？私一人だつたら如何に怖かつたでせう。

此怪物がちよいと、お小夜の夫ぢやありませんか、あの美しいお小夜の。

いそ〳〵と自分の敷てゐた、更紗の座蒲團を裏返て、

「御苦勞樣でした、お茶でも入れませうか」

つてまあ優しい事は。

看板代りに端然と坐つて、いつでも締めてゐる前掛の紫の樣に、色ばつかり綺麗でも仕方がない、と通りすがりにあらたに私語いたのが、私ぢやなくつて？

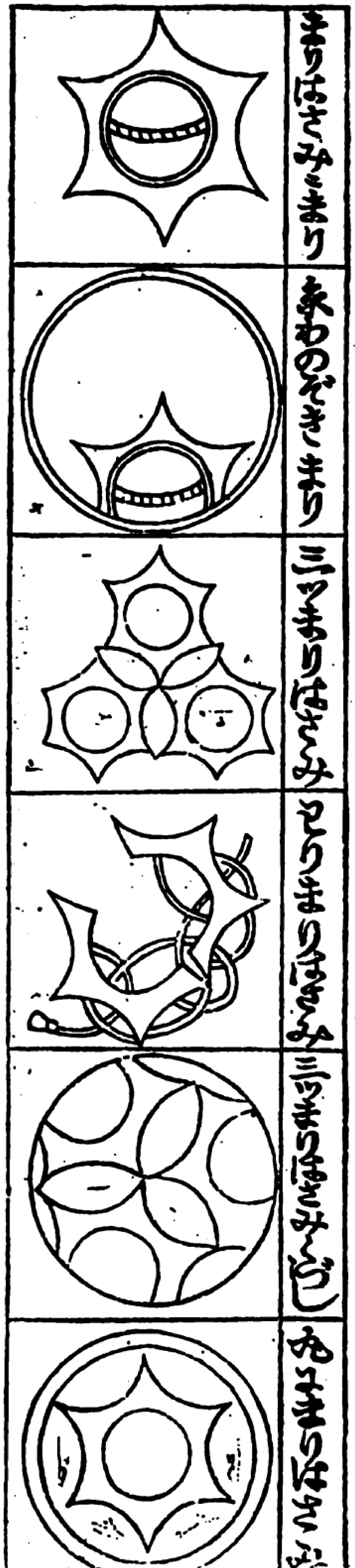
先方では識るまいが、私やもう羨しい樣な、濟まな

い様な、氣の毒な様な、正面に顔を見ちやゐられませんでした。

六

いつの間にか、外の音が靜まつたので、お小夜は後ざまに手を伸ばして、肘掛窓を一枚開けると、もう花やかな日光が眞明い様、麥も菜の花も頭に重い露の玉を輝かして、垣根際の連翹の花が散つたかと、思つたのは雌雄の蝶々、何を話すのか頻に鬚を動かしながらすれつ縺れつひら〳〵〳〵。

空の一隅に、逃げ場を失つた黑雲の一塊は、是も極りの惡るさうな雷の音に追はれ〳〵て、とう〳〵地球の裏面へ辷り込む。」



談話は一寸跡切れる。

斷崖の上へ新たに建て出した此部屋は、平家ながら脚下へどぼん〳〵といふ怒濤の響き。

風過ぎるといつて閉めた硝子窓には、紺青の沖の色遠くは江の島、稲村ヶ崎、伊豆の大島迄、透き通つて手に取る様。

恍惚となると、矢庭に光子さんは私の手を握つて。

「堪忍して下さいよ、堪忍して下さいよ、あなたに迄心配させて濟まなかつた、もう全然精神を入れ替へたの、入れ替へたの。」



夢にて逢ひし人

みさご鳥

△藤村さんへ

お手紙有がたう。

絶えて久しき君が玉章！　うれしう拜見致しました。あのお手紙を受け取つた時のこの胸は、なつかしさに高波を打ちましてヨ。

お目にかゝつたのは去年八月、あの嬉しいまとゐの時でございましたわねえ。どんなにお變り遊したでせう。去年は未だ私も無心の處女でしたものを……。

此の頃はね、高髷に結つて居りますのヨ。流行を追はぬ超然とした……なんてよく云はれますけれど平氣で居られる樣になりましたわネヽヽヽヽ、お正月から肩上げもとつて了いましたの、何だかも、うやたらに心細くつて……燃えるやうな眞紅のリボンでもメッとかけて見度うございますのよ。

十八と云へば未だ若いわ。同じ年頃の方はみんな名ある女學校に通つてゐらつしやるのに、私獨りかうして居るのかと思ふと心細いわ、寂しいわ。

あゝ及ばぬ空想と返らぬ昔の榮華の夢を戀ゆるのは、垣間見た天使の影を追ふやうなもの。とかつて人はさゝやきましたが此の頃は度々それを思ひ出しますの

藤村さん、おひまがあつたらゐらしつて頂戴な何だかやたらになつかしい感じがして……。屹度ゐらしつて下さいねえ。

おゝ、こぼれるやうに星が輝いて……。寂しい宵。低い〳〵尺八の音が杜の方からきこえて來ます、思ひ出は泉の樣に胸に湧く。

もう書けませんわ、胸が一ぱいになつて……。今夜はこれで失禮致します。御免遊ばせ

星月夜

東都城西にて花枝より

△湘南の人へ

渚からのお便り、只今落手いたしました。

封じ込められた梅の花！！なつかしい記憶は又しても胸に充ちて、たまらなくなりました。

今宵はめづらしい良夜。

新嫁樣が嬌羞の色のやうな春の月、薄絹につゝまれて、朧に空に浮

いて居る。丸窓の障子に寫る影法師、宝冠真つ蛙の聲――とおつしやつたNさまのお言葉も思ひ浮べられて……。

あゝ、〇〇樓の樓上にあなたもあの月を仰いでゐらつしやるのでせうね。

逢つた昔が戀しいわ。

小田原は永久に忘れられぬ土地、行つたのはたつた二度きりですけれど、私何故か小田原はなつかしいのよ。あの砂の色、松の色!!夕霞淡やかな函嶺の峰や、夢のやうに見えた伊豆、熱海。深く〳〵印されて未だにあのなつかしさが忘られません。

先達て芳花さんの湯ケ原よりをよみました時も、眞實に思ひ出しましたわ

「國府津で下りた時は日光雲間を洩れて、新緑の山も、野も、林も、眼さむるばかり輝いて來た。愉快!電車が景氣よく走り出す、函嶺諸峰は奥床しく、靜かに、面を擬して近づいて來る!暗い、淡々しい雲が神なる海の上を覆ふて居る、鷗が飛ぶ、濱が碎ける、そら雲が日を隱した、淋い影が野の上を、海の上を通ふ、忽ち又明るくなる、此時僕は決して自分を不幸の男とは思はなかつた」

此の一節は幾度もよみ返しましたわ。去年は全くこんな感がいたしましてよ。

私ももうすぐ歸ります、けれど私の行く頃にあなたは御上京遊ばすんぢやなくつて!?

小田原にも飽きた〳〵つておつしやるけれど、やつぱりお好きだと見えますのねえ、だつてゐらしつてからもう一月あまり、今度は割合お長いではございませんか。花なき里に住みやならへるつていつか私におつしやつたけれど、あゝそれはどなたの事ですか……。

ですがね若杉さん、もうしばらく辛抱してそちらにゐらつしやいな、此度參りますのですもの。御病氣がおなほり遊したからつて小田原をお見捨てになるのはあんまりよあゝ……。

小峰の森林!!今頃はさぞ美しいでございませうねえ、例の御連中で度々御出かけになるんでせう!?

あの東宮さんや三好さん、先日南總の方へ御出かけになりましたのね、お便りが參りましてよ。相變らず美くしいペンの走り書き、よんで居て心地が好うございますわね、

去年八月の湘南は大分皆樣に痛烈な印象を與へたと見えますわ。月明らかなりし彼の夜の樣を夢見ては――なんて篤麿樣まで書いておよこしになる程ですもの。

若杉さん!

今年の春はどちらへかゐらつしやるの!?皆樣して旅にばかりお立ちになつて、眞實に寂しうございますのよ。私獨りいつも都の月を仰いで……。

夏には又、思出多いあの濱で戀歌でも歌ひ度うございますけれど。

なつかしい濱から、どうぞお便りを下さいねえ!　さらば君おん身

御いとひ遊して。

二十三日夜

花枝

△旅の人へ

藤村さん!!　昨夜は長い長い夢を見ましてよ。床を離れるとすぐ、なつかしいお便りに接しました。

うれしくて、しばらくは封も開かず眺め入りました。ああ、けれど、けれど、御文よみ終つた時の私は、たへられないで　とう〳〵泣きましてよ。

行方定めぬ漂泊の身なれば………………

又洛陽へゐらつしやいましたの!?　一言さうとお報へ下されば、せめて新橋までなりとお見送り致しましたものを。あゝ又當分はお目にかゝれませんわねえ……。



早く歸つて頂戴な。

流れは空し法皇の、夢香かなる鴨の水、水にうつろふ山城のみやびの都ゆく春のかすめる姿見つくして。

今宵西六條の街に、旅のつかれを休めてゐらつしやるのでせうか。

松の翠に細雨灑ぐ東山の朝。鴨川の流れに燈影ゆらめく四條五條の夕べ!!　あゝ私も、行つて泣き度い!?

春去り行かば青によし
奈良の都にたづれ入り
………………

櫻散る春の夕べ南の縁に佇んではよく二人で歌ひましたわれえ、なつかしいあのお聲は未だ耳に殘つて居りますのに……。

三井寺の鐘の音に胸とゞろせて、お筆手にした儘ぢーつと行く影見送つてゐらつしやるお姿がねあ明白と目に浮ぶ!!

お目にかゝり度いわ、篤麿様！
早く帰つて頂戴な。
筆が乱れてもう書けません。
行方定めぬ漂泊の人よ、御身お大切に遊しませ。　さらば。

△湘南小田原の人へ

なつかしい若杉さん！！
相変らず御丈夫でゐらしつて？！　此の四五日大変お寒うございますのね。
いよ〳〵明日小田原へ行く事に致しましたの、早くお目にかゝり度いわ……。
先達て、私久子さんと二人で青山へ参りましたのよ、あの浪さんのお墓へおまゐりしましてよ。
このしきみの葉は浪さんのお墓の垣のよ、お送り致しますからどうぞ大切になすつて下さいねえ。
浪さんのお墓も寂しうございましたわ。
浪さんと云へば、先日本郷座でありましたわ。私行きたくつて〳〵ならなかつたの、けれど誰も家に居ないのですから駄目になつて了いましたのよ口惜しかつたわ。せめてあの逗子海岸不動堂の所だけでも見たかつたんすけれど……。あゝこんな事云ふと又雛様かにおしかりを受ける！！　よしませうね……
けれどねえ、私どうしても浪さんは好き！！　若杉さん。
此の間ね、向が陵の方まで行きましたのよ。夕日うすづくたそがれ時でした、あの森川町から例の所へ出て高等学校と大学のあの間の路をあるき乍ら……色々の事が胸に湧いて、なつかしかつたわ！！
あゝあなたも去年まではあの通りをおかよひなすつたのねえ……。
マントの襟をキユツと上へたてゝ、あの角帽に、インク下げてゐらしつたお姿！
あゝ、そゝり立つ向が陵の自治の城！！
あの帝大と一高とを眺め乍ら、自然と熱い涙が浮びました。
東宮さん、三好さん、藤村さん、大内さん、秀様、川島さん、みんな此寮にゐらしつたのかと思ふとなつかしさに胸は乱れて……。
昔は物を思はざりけり。相見てのけふの心の千々に乱るゝ！！
あゝ秀麿様の御妹様ね、お片附き遊すんですつて、おきゝになつて
先方は何でも海軍の青年士官、旗艦薩摩に乗つてゐらつしやる方だそうね。お望みどほりの海軍士官。神様のお心はどんなでせう。委しい事は明日お目にかゝつてから……。
御免遊せ

なつかしい
輝明さま　　花枝

苺の料理法

◎苺ヂャム

苺をよく洗ひ、へたを去り、擂木などにてつぶし、苺一斤に付き砂糖一斤を用意し（好みによつては砂糖が一斤の四分の三位ゐでもよろし）、まづその中の四分の一を苺にまぜて火にかけ、煮立つてから十五分間煮また四分の一の砂糖をまぜて十五分間の後更に四分の一を加へ、十分か十五分煮て、殘り四分の一の砂糖を加へ、汁の十分なくなるまで煮詰め（鍋より少量掬ひ涼しい所に置けばかたまる位に煮詰る）瓶につめて置くのです。なほ瓶の口がねじでしまる樣になつて居らぬ時は、コロツプを堅くして、その上を封蠟か膠の類で空氣の入らぬやうに封じて置きます。若しまた瓶の口が大きいならば、西洋紙をその口丈の大きさに切り、ブランデーかアルコールに浸し、詰めたヂャムが冷えた時その上にのせ、それより大きく切つた美濃紙二三枚を、玉子の白味で重ね合はせ瓶の口に張つて置きますが、鼠を防ぐために更にその上に、ブリキの薄蓋をするならば殊に安全です。

◎瓶詰いちご

是は苺をつぶさずに形と味の變らぬやうに貯へる工夫です。それ故まぜる砂糖の量も極く少してあります。一體罐詰ものに砂糖氣の多いのは、腐敗させぬ爲で、砂糖の量が少なければ少いだけ、黴などが早く來るゆゑ日本の樣な濕氣の多い所では、この瓶詰いちごは殊に注意して、空氣の入らぬ樣に造くられねばなりません。瓶につめてから煮るのが一番よいが、それには瓶ごと煮る鍋が入用です。手近いのは石油の明罐を利用するので、即ち罐の蓋のブリキを取つて、罐の中に入れられる位に切り、所々に小さい穴をあけ、一寸位の脚をつけて、罐の底に置き、其上に苺を詰めた瓶を置き（丁寧に洗つてへたを取り丸ごと詰める）苺の瓶の中程まで浸る位に微温湯に入れ、別にコップ一杯の水にそれと同量位の砂糖を入れ、一旦煮立たせて少し冷まし、苺を入れてある瓶に入れ、ふたを輕くして、ブリキ罐にはしつかり蓋をして火にかけ、瓶の中の汁が煮立つてから五分位でおろし、瓶の口を密閉して罐から出し、瓶が少し冷めたら、適當の器の中に倒まに立てかけて一晩も置くと、底に沈んで居た汁がよく果物とまざります。この法は獨り苺に限らず、梨、桃、林檎等種々の果物に施すことが出來ます。いくらか固い果物ならば、煮立つてから苺よりはすこし長く煮ること、梨のやうに甘いものなら砂糖の分量を適宜に少くするだけの注意がいります。これはよく出來ると二三年保ちます。

◎プリゾーブド、ストロベリー

苺一斤に砂糖一斤を用意し、瀬戸引鍋にまづ苺少しを入れ、その上に砂糖をふり、また苺また砂糖と代る〲に入れて一晩ほど置き、苺より少しく汁の出た時に火にかけ、攪きまはさずに柔かになるまでそろ〲煮、煮て居る中に上に浮ぶ泡を掬ひとり、煮上つたなら瓶につめ前の樣に栓をよくして置くのです。サンドウヰツ

ナまたは食後の菓子の代りには、ザナムや此のプッヂング、ストロベリーが適當で食事の一部分として用ゐるには、罐詰苺が適當です。

◎苺水

苺水を造るのには、苺を清水でよく洗ひ、蔕をとり、苺一斤に砂糖一斤をまぜ、瀬戸ひき鍋に入れ三合位の水を加へて、四十分乃至一時間位よく煮て布で漉し、罎につめ栓を堅くして貯へ置き、夏になつて水に薄めて用ゐると、美麗清涼の飲物がたやすく出來ます。

◎苺の罐詰

前に述べたる罎詰いちごと同樣のもので、その製法の餘程簡便なものであります。即ちよく熟した無疵の大粒を撰り、丁寧に瓶に入れ、一層毎に砂糖をふりかけ、十分詰つた時に冷水を湛へた鍋に入れ、火にかけて煮立たせ、直ぐに栓をはめ、密封して冷處に置き、時々取出して用ゐるのです。

乳離れの小兒に與へる食物

△ブレッドジエレー

小兒が生れて六ヶ月以上になりますと麥類を少しづゝ與へても宜しう御座います。就中ブレッドヂエレーが一番よいと思ひます。ブレッドヂエレーとは、食麪麭（成るべく燒たてでない乾いたパン）四半斤を、六時間ばかり水に浸け一時間半ほど弱火で煮、絹ごしにして固まるまで冷ましたものであります。これを一寸あたゝめて乳八に對する一の割合で混ぜてのませます

△オートミール

また大麥かオートミール大匙一杯に、水三合を入れ、弱火にかけ、汁が減つたら、後から後からと湯をさし、煮上がるまで三合の水の減らぬやうに氣をつけ、沸騰してから三十分ほど煮て卸し、鹽少し加へてこし、乳四に對する一の割合で混ぜてやつても宜しう御座います。（米も同樣にして用ゐることが出來ます）。そして小兒の便秘する場合には、大麥よりもオートミールが宜しいのです。小兒が九ヶ月十ヶ月位になると牛乳に水を割らずに、是等のものを混ぜてよいのであります。

△牛肉の搾汁

小兒の一ヶ年より一ヶ年半までは、日に四五度乳を與へます。（勿論十ヶ月以上になりますと夜間乳をやるとは全く廢めればなりません）。そして前に申した麥類の外に、牛肉の搾汁を一日に大匙四つか六つ位づゝ與へるが宜う御座います。牛肉の汁を搾るのには、牛肉一斤の三分の一（脂身のない汁の多い）ほどを網にかけ、火にてザット炙り（燒けるまで炙るのではなく、汁を出すためにするのです）、丼の中にとり、五勺程の熱湯を注ぎ、賽の目に切り、レモンスクヰーザー（レモンの汁を搾る器）にかけて其汁を取るのであります。これに鹽少し加へて、一日分として貯へて置き、乳をやる度に幾らかづつまぜて飲ませます。これは虚弱な小兒に殊に

よいのでありまして、毎日といふ譯に參りませんなら、一週二三度でも大に効能が御座います

△柔かな飯と牛乳

凡そ十六本ほど齒が生えましたなら、嚙む必要のあるものを少しづゝ與へてよいのです。それは柔かな御飯、或は二三時間煮ましたオートミールや、フラクドフヰートブレッド（小麥の引割とも云ふべきもの）、ホールフヰートブレッドへ牛乳をかけてやるのであります。大抵の方は是等のものに必ず砂糖をお加へになるやうですが、全體麥類は糖分を含んで居るものでありますのに、其上更に砂糖をかけますと、麥に含まれて居る糖分と生の砂糖とが調和しないで、往々胃の中で醗酵し腸胃を害することがありますから、最初から砂糖なしで與へつけます。さうすると、遂に習慣になりまして、却て其方を好くやうになります。

△挽肉、鷄卵、馬鈴薯

ジヤガ芋を煮てつぶしたもの、半熟の玉子などまだ宜う御座います。併し茹玉子は不消化でありますゆゑ與へぬに限ります。極く新らしい鷄卵ならば、齒のあまり澤山生えない間から、與へて差支ありません。一年半乃至二年までは日に四回食物を與へます。但し極く強壯な小兒なら三度でも差支ありませんが、弱い小兒には一回の分量を減らして、五度にも與へなければなりません。そして一年半以上の小兒には時々少しづゝの挽肉など與へます。

△二三歳位の時

鳥や脂濃くない魚類、なまの果物、芋、ビーフステーキ、ローストビーフ等を與へるのは、小兒の二歳以上になつてからのことであります。三歳以上の小兒には、貝類、オムレツ、野菜類、煮果物を與へてよいのです。なほ小兒の食物を調理するには、鹽をあまり澤山用ゐぬことゝ、酢、辛子、胡椒の類を一切用ゐぬことに注意しなければなりません。揚物又は脂濃き食物を與へぬに限ります。ビール、葡萄酒は勿論、茶、コーヒーなども十四五歳までは與へぬがよいのです。但し麥類で製したコーヒー、コヽアなどは差支へありません。

△角砂糖とザラメ

間食は格別の場合を除くの外は、子供の爲に嚴禁せねばなりません。砂糖でかためた菓子などは、小兒の五歳位までは殊に嚴禁するが宜しう御座います。併し其の代りとして朝、晝の食事後角砂糖一つかざらめを茶匙に一杯位、いつも與へる事に致すのは差支ありません。のみならず混り氣のない純粹の砂糖は子供の身體に必要でもあり、また子供達の好くものでもありますゆゑ、斯う云ふ風に規則正しく與へることが、寧ろよいので御座います。唯夕飯後に與へてはいけません。



婦人の生活と謡曲の趣味

江木榮子

謡曲の流行は唯今頂上に達して居るのでございます或る女學校では謡曲を課目に入れましたので、山科明子女史が擔當して謡、仕舞などを教授されることになつて居るさうでございますが、高尚な趣味を養ふ爲めには誠に結構な事と存じます。併し其の一般の家庭に取つての可否は俄かに申し上げられません。私の様に主人は素より親族まで斯道に非常な趣味を有し、夫の勢を慰むるとか、又は健康の爲めに應用するとか、種種の名の下に誰憚らず稽古の出來るのならば宜しいでせうが、主人が好まぬのに妻が家で獨り唸つて居るのもをかしい譯でございます。又其の家の令孃だけが一人斯道を學ぶと申すのも變なものです。父親か老人が謡曲を好み、家庭の調和上それに樂しみを添ゆる爲めに、仕舞をするとか、鼓でも打つぐらゐの所が結構かと存じます。そして婦人で專門に立ち入ることは、却却容易な事ではありませぬ。申すまでも無く婦人の音聲其ものが謡曲に適しません。それゆゑ私は唯だ家庭に高尚な趣味を加ふる爲めに、婦人の境遇上許される範圍内で致したら宜しからうとお勸め致したいのでございます。

▲婦人の獨得の領分

婦人は聲門の組織が違ふとでも申すのでせうか、如何しても音量が男子には敵ひません。男子なら七八番續けらるゝのでございますが、婦人は四五番謡ひますると聲が漸々と上づり、所謂キー〱聲に爲つて、了

ひます。然し彼の熊野、松風、其他女をシテ(主人公)にしたものは、婦人が謡ひますと、ちよつと眞に逼る感が致します。又舞の上では男子に及びませんが、拍子ものゝ中、大鼓とか鼓とかは婦人に却々の熱心家がありますから、今後男子を凌ぐやうな專門家が乾度出來るだらうと存じます。

▲仕舞と婦人の姿勢

仕舞を稽古した方は、姿勢が何處となく違ひます。ちよつと小笠原流と同じでございますから、令嬢方が學校でゴツ〳〵なさつた後で、やさしい仕舞でも致されるといふことは決して無駄でないと存じます。十五六歳までは、ピン〳〵と飛びあるくも宜しいけれども一家の主婦となつて、尙ほ大股に肩を聳やかして歩かれては餘り見よいものではございません。しかし仕舞も少し出來てまゐると、兎角舞臺へ出たがつたり、人前で舞つて見たがつたり致しますが、これは側迷惑で餘り見よいものではございませんから、これも謡曲と同じく、何處までも家庭の爲めと云ふ觀念を忘れない様に致したいものです。

▲能樂と女の身の長

婦人は假令藝道に優れても能樂に適しない、身の丈が低いから引き立たない、などゝ云ふお説もございますが、決して然ういふ理はなからうと存じます。觀世清廉さんなぞは身の丈は至つて低いけれども、舞臺に立つと堂々とした姿勢を現はされます。彼の俳優なぞでも、技術の優れた者は、何となく舞臺で幅が出るところを見ますと、これは藝術問題で、身長には關係ないかと存じます。今にもつと技術の發達した婦人が出てまゐりましたなら、必ず男子方と立ち並ぶことが出來やうと存じます。

▲顚へる扇子の先

師匠から最早大丈夫と許され、これならば衆人に見られても恥かしくないと云ふ自信が出た者でも、舞臺

に登つて看客の視線が己れの眼にピタリと合つた時には、自然に顫が出るものでございます。藝術が出來ても度胸のない者なら其筈ですが山が崩れて來ても驚かぬと云ふ人でも、場數を踏まぬうちは、扇子の先がピリピリと小さく顫へ、冠がチリチリ細かに搖ぎ、心臟の鼓動が五體に傳はつて、何處となく身體の締りが付きませんですから扇子の先を注視して、初心と老練とを直に見分けることが出來るのでございますが、この顫は全く武者振ではございませんネ。それに付けても女優の膽力は豪いものだと思ひます。僅か二年やそこらの修業で彼の大舞臺に現はれ名優と立ち並んでおづ〳〵もせず。遣つてのけるところは、其藝術は兎に角、其度胸は實にスパらしい者ではございませんか



▲三井さんの望月

素人のうちにも實に藝道の優れた方がございます。三井元之助さんの謠曲は、悠揚迫らぬ上品な調子で、少しも衒ふやうなイヤミがございません。殿樣風とでも申すのでせうか、奥床しい感を與へます。三井得右衞門さんは、最早素人ではございません而して大鼓、太鼓、笛、鼓、何にでも精通して居られるのでございます。嘗て三井さんが望月を演せられた時の事でした小澤の刑部が敵秋長をハッシと斬る一刹那、刀の勢がちよつと氣が拔けて見えましたので、いつにも無い事と存じ、私の眼の見誤りか知らんとも考へましたところ、他の四五人の看客も同じやうに感じたと申されました。それで後に或る能樂通に聞きました所に據りますと、三井さんが刀を揮り上げられた途端、地謠か拍子かの些との間違が耳に入つた爲めであつたさうで御座いますが、普通の人なら地謠や拍手などに耳を傾けて居る餘裕だにないのに、三井さんは實にえらいものだと感服いたしました。

▲場しまりのする藝

何の藝道でも同じ事でせうが、幾ら天稟でも修養の力には敵ひません。謠曲の妙味は、素より美聲に在るのですけれども、如何に美聲でも修養の足りない者は何となく場がしまりません。鳴手の人の鼓でも、練れない藝には、何處か纏りの付かぬ音色が現はれるものでございます。私は天稟の優れない人が、練りに練つた修養の功の豪いものだと云ふ例を一つ擧げませう。彼の寶生の野口政吉さんなぞは、生れ付聲が良くないのに、非常な嚴しい師匠に就いたのですから、大抵の人なら失望して止めて了ふところですが、咽喉を破つて三度も血を吐きながら、其辛さを耐へ忍んだ熱心家だと聞きました。成程野口さんの聲は素より美しいとは申されますまいが、嚴重な師匠の教授を嚴重に奉じて、一絲亂れぬ謠ひ振りには、聽者に襟を正させる價値がございます。私は嘗て野口さんの橋辨慶を見ました時、女だつて彼れだけの熱心があるなら、上達しな

いことはあるまい、假令上達しないまでも、萬事に忠實な習慣を作り得らるゝと感じたのでございます。

▲以前の勇氣

盲蛇物に怖ぢずで、初心のうちは、却て人様に聽いたり視たりして頂きたくつて、少からぬ御迷惑を掛けたのでございますが、然ういふ時代を過ぎて、少し趣の味が判つてまゐりますと、以前の勇氣はなか／＼出ないものでございます。それで私は近頃稽古が一番興味深く存じます。例へば彼の蟬丸の『花の都を立ち出でゝ浮音になくか鴨川』といふ「カ、カモ川」とカの字が二つ重る處の微細な音調の變化なぞに就いて教を受けることが、非常に面白く感じられるのでムいます。

河骨の意匠



家庭的寄宿生活の内容

小萩の園

所は新潟縣の某高等女學校の寄宿舍、四間に三十七間づゝの二棟の平屋、この中には舍監室を初め八つのお部屋、娯樂室、食堂、炊事場、洗面所、湯殿、洗濯場に干場、女中部屋、病室と、所せきまで一通のものは備つて御座います。建物の間には八十五坪ばかりのお庭が御座いまして、中央の泉水に泳ぐ金魚は一年生のお方が引受けてお世話いたして居ります。干場の周圍と裏口の空所は舍用の畑になつてゐて、「先生今年は大根が六十貫目穫れましたのよ」なんて大喜する事もある。家族はと申しますと、舍監の父様お一人、母様お二人、生徒の子供が七十人、女中が二人、合せて七十五人の大家族、……校訓、舍訓の下にこの大家族が毎日々々樂しく暮して居ります。事新らしい都の生活等とは比較になりませんけれ共、家庭的寄宿生活の内容も亦一興かと存じまして左に。

四時過後生大事と燕子花の活けられた竹筒を持つて長い廊下を自分のお部屋近くに來ると、一年の清様が硝子窓から「御歸りなさい、燕子花ですね」可愛い桃割は少し亂れて一層美しい。

「お風呂はまあだ…」

「イヽエ皆様して貴女の御歸りを、お待して居りましたのよ」

「おやさう、どうも難有う」

「あのね好いお話があつてよ、早くお部屋にゐらつしやい」と向ふに廻つて入口の障子を開けて下さる。皆様は圓く輪を作つて何やら樂しさうに話の最中。「只今」と云い乍ら床の間に筒を置く、先週活けた河骨と敗けず劣らず何れも床しい姿だ。

私は割烹掛なので、「お米屋さんが參りましたよ」と障子を開けて女中のお春さんが來た。「ハア、只今參りますよ」と光子様と行く。南京袋のお古でこさいた前垂をしめた當番さんが縁に畏まつて居る、四月五日白米六斗。代價七圓五十錢と書いた通帳を私に渡す。

一斗桝に六つ手早く米櫃の中に入れて行つた。五時のタイムがカン〳〵と鳴る。申合せたやうに白い前掛の割烹當番の皆樣がゐらつしやる。夕飯のお菜はとろゝ汁に酢の三杯、「お薯を擂ると手がかゆくつて仕樣がないわ」と幸樣がおこぼしになる。明日のオムレツに使ふ玉葱を切つて頂戴と達樣に御願ひして、酢の三杯をこさへる。酸つぱいのだか何だかさつぱりわからないので光子樣に鹽梅していたゞいて、やう〳〵出



來上つた。八百屋がお用伺に來た。里芋五升、大根五本、玉子七十八、雪のり三帖干瓢一たば、牛蒡一束、椎茸一斤半、これ丈注文する。「お稲荷すしの油揚は八百屋ぢやないんでせうか」と幸樣がおつしやるので皆樣一度にアハハハ。餘程をかしかつたと見えて八百屋までクスクス。すると鈴が鳴る。舍監室からですよと云ふと、お釜の御飯を移してゐるお春さんが驚いたやうに走つて行く。「貴女方お二人に舍監室までゐらつしや

いませつて。」ハー何先生？。小泉先生ですよ。「何の御用でせう」と光子様と想像し乍ら行く。

「少し早いですが、小使が明日長岡病院に行くさうですから、この次のお献立表を作つて置いて下さい、なるべく今夜のうちに……明日の課業に差支ない限りで」

六時に五分前、御飯の鐘を鳴らす。私の前で召上つてらつしやる先生はとろゝ汁が大變おいしく出來ましたよと仰しやる。まんざら悪い心地もしない。靜に御飯もすまして、手早く後をかたづける。

「お献立表を作るのは只今からに致しませうか」と光子様。

「さうで御座いますね！其の方がよいぢや御座いませんか」。

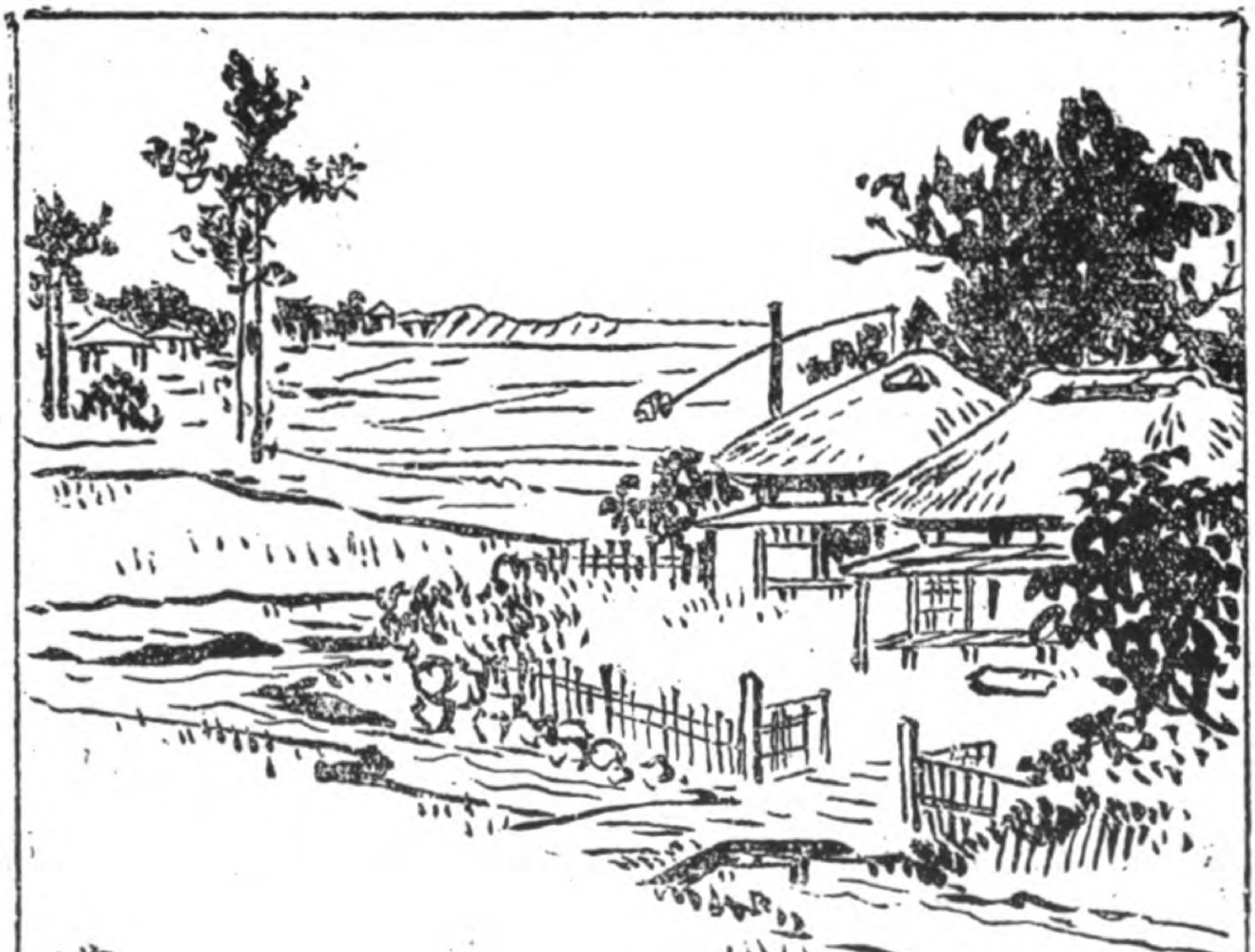
雑談してゐる内に皆様舎監室へ御揃になる。割烹長、これは最上級生の中から二人、云はゞ主婦と云ふやうなもので、すべての經濟を一手に握つて一月交代になつて居る。其の下に働く方は一年から三年まで通じて五人、此の期限は一週間。……何日も同じやうな御馳走ばかり。あれこれ評議の結果こんなものが出來上つた。

	朝	晝	夕
日、	玉子燒のり	キャベツ 牛肉 煮付	櫻めし 八杯豆腐
月、	魚のから汁	さしみ	信田腑、煮豆(大根 油揚)
火、	柳にけまり(大根、芋、味噌)	柳川(豚、牛蒡 玉子)	鰹でんぶ、錦木 淺漬大根、雪のり 味噌漬大根、アサヒ
水、	フイスカレー	いとこ煮、煮豆(大根、里芋、牛蒡)	支那料理、いり丸子(豚、葱、薯 うき粉)
木、	すまし汁(豆腐、葱)	茶碗むし(魚切身、百合)	いんげん甘煮 のり佃煮
金、	鱈、味噌汁	牛肉、味噌漬 里芋、旨煮	フイシホ、ホワイトソース(魚切身、牛乳、メリケン粉、バタ)
土、	食パン、牛乳 手製ジャム	魚 里芋 煮付	三つ山(魚照燒、いんげん、花みかん、きんとん) 吸物(かまぼこ、芹) 食後、手製羊かん

一ケ月食費四圓五十錢、舎費五十錢と云ふお安い寄

泊料でも、物價の安い此處では相當の御馳走で、猶餘分が出る。「今月は少し贅澤過ぎましたよ」と先生から御忠告を受けた月でも三十圓位、この月は少し儉約して見やうと初めから思ふてかゝると六十圓はたしかに殘る。然し十一月に入るとそろ〳〵冬籠の仕度をするので、大根、菜、それに炭、薪と云つたやうに隨分費用がかゝるのでいくら儉約しても其の月の收入だけではとても〳〵……。だから毎月少しづゝの貯蓄の必要は認めてゐるが、併し寄宿舍基本財產なぞを作つて備つけて置くのぢや御座いません。新らしい。本でも出ると、皆樣相談の上、先生の御承諾を得て買入れたり、それに新聞雜誌、又去年は五十圓位のオルガンも求めました。かういう所に使ひますので誰一人不平云ふ者もなく、休日などには娛樂室が隨分賑ひます、書物などは部屋へ借りて來ることが出來ますので、調べ物でもある時はほんとに好都合です。

八時半頃、舍監室を出て部屋に歸る。放課後初めて落付いたので何だか嬉しい。お隣の幸樣もゐらつして又樂しいまとゐが開かれた。



牡丹の意匠


ぼたんびし
葉ぼたん
ぼたん
ぼたんてふ
利久ぼたん
落ぼたん
菱ぼたん
さうの裏ぼたん
三ツ葉ぼたん
かゝまぼたん
九み立ぼたん
仙臺ぼたん
うらぼたん
二葉ぼたん
近衞ぼたん
葉ぼたん
唐草ぼたん
きやうぼたん

若き繼母の述懐

いさを

△四人の繼子の母となる

私は高等師範を出てから、新學期に迎へては卒業生を作り出す教師生活を致たのですが、之れが自分の天職だらうと覺悟して、人の子を育てるのを何よりの樂しみとして、知らず識らず年月を送るうち、いつか老嬢といふ階級を得て居りました。しかし、私が義務年限を終へる頃になると、親族の者が大層心配致して、兎角女は身の納まりが大切である、月給取りの先生生活をいつ迄もつゞけるのは決して望む可き事でない、また極めた事でもない、適當な人さへ貰つて與れるならば嫁く決心をする樣にと申して與れましたけれども私はどうしても此愉快な境遇に別れを告げるのが惜しいばかりでなく、結婚といふものに對しては説明の出來ぬ一種の恐怖の念にかられて居ました。と申すのは、同窓のお人や先生仲間の話しを聞いても、出來るならば一生獨身で居たいもの、結婚にはいろ〳〵の苦勞が伴なつて來るものだ、などゝ申て居るし、特に三つ四つあつた結婚の口が皆繼母としてのものだつたのもたしかに躊躇せしむる原因でありました。そして居る中一昨年の春四人の繼子の母として然かも並に外出がちの主人の妻として迎へられる事となりました。

△浮世の義理人情のしがらみ

「澁かろかしられど柿のはつちぎり」とは千代女の名句ですが、眞の柿の實であるならば、口にいれて澁ぶかつたらつい吐き出す事も出來やうものを、浮世の義理、人情のしがらみ、人世の旅路に別け入つた私は、昨日迄は心も身もかろ〳〵と洗ひ髮の束髮に空色の袴短靴はいて飛んで居たのはうその樣、女は化粧が身のたしなみと、朝な夕なに心を配つて、ついぞ手にした事のない水白粉に若いてからの丸髷姿の鏡にうつるも我身ながらをかしく、羽二重の白衿が光琳模樣の縮ちりめんにかはり、人の妻といふ名と同時に得た母といふ名。……何も三十の齡がかゝつたと云ふぢや無い、四人のお子樣とは少々あなたに荷が勝ち過ぎるぢやありませんかと友の一人が、しみ〴〵いつて下さつた事など思ひ浮べる事もございます。

△包めど現はるゝ言葉の針

既にこんな事を申すのが繼母根性かも存じませんが、上二人が女子で、次が男子、末が女子で、長女はもう高等女學校を卒業致して居りましたので、私と年の差はたつた九年、それに先の母さんが死なれた後三ケ月を女中を使つて家内を切り廻し、父が出入の世話、姉や弟の面倒を見たといふ利發な質、次女は同じく女學校の三年生で、つぎの弟は中學の一年生、末子が小學校の四年生と申すのですから、乳呑兒の樣に朝夕に手のかゝると申すではなけれど、なか〳〵心配な事があります。茲三四年の内には娘二人も他家へ嫁に行く身故、苦勞といつても少しの間

男の兒は女とちがつてさつぱりとしたもの、舅姑があると申すでなし、他に氣張氣苦勞もあるといふではなし、主人は淡白な軍人氣質、第一配偶者の人格を慕つて見れば不足は無いだらう、などゝ兄や伯父は申しますし、ほんとにお仕合な奧樣だなどゝ出入の者のおべつか半分のお世辭も聞き飽きる頃には、飽めどあらはるゝ言葉の針、どつかに冷たい感じがする樣になつたのでございます。今迄でもはつと思ふ事もありましたが、新婚後二ケ月ばかり致して主人は隊務の用を帶びて旅行致しましたが、其旅行先から安着の報に次いで書面がまゐりました。これは申殘した用事や留守中の事に就て委しく申しよこされたのでしたが、それを讀んで居ると長女が私にはありませんかと聞くのです、聲が妙にひゞいたと思ふて見ると、何とも申狀の出來ぬ顏をして居りますので、思はずぎよつとしましたが、いゝへ別に花さんにはありませんが多分安心して御出になるでせうよ、と申ますと、齒ぎしりをして、花子は、どうせ私なんぞどうでもよろしいのですわ、今迄はどこへ御出になつても第一に名所繪葉書だの何か送つて下さつたのに……と確に現はるゝ嫉妬の言葉、何といつてよろしいか私は實にいやな感じが致しました、

△どうせ私は虚榮心の塊

婚約時にも、母さんどんな指輪がお好ですかと申したから、只四方山の話しと思つて、さうですね、ダイナのよいのが一番でせうけれ共、一寸裝飾品は餘りに氣が寄りませんからねと、何の氣もなしに自分の說をして申しますと、眞赤な顏をして、私はどうせ虚榮心の塊りなんですからとぷり〳〵致します故、また氣に逆らつたのかといろ〳〵に申譯致してもきかばこそ、十町ばかり離れて居る實の母さんの實家のおばあさんにいつゝけに行くのです。食事の時だつて、三皿四皿のおかずでまだ不足な時には、今日はお腹が空いたけれどおかずが無いから食べられないわ、などゝ全く無教育な長屋の娘子供も及ばぬ不行儀。何かに付けてあたり散らすのも、私に母としての威信が不足のであらうと思つて何事も胸をなでゝ堪へて居りますから、軍人氣質の淡白な主人が知らう筈もなく、また知らしも致しませんから、幸福な平和な家庭だとようこんで居りますのを見るにつけても……、

△妙にからんだ伏線

姉を見まれの大女なども學校ぢや皆さん秩父位着て御出になる事よ、私なんかみじめなものだわ、……學校の裁縫用布が入用だけれども、わからないから林のおばあさんにいつたら、後程いつて見て上ると仰しやつたわ、などゝ聞えよがしに姉に話をする。姉といふのは先夫人の實家なのでございます。おばお樣は果して午後に御出になつて、挨拶をよくもきかずに、宅の子供は内氣な質なんだから親の方で察してやらなくちや可愛さうですからねと、妙にからんだ口調で納戸へずん〳〵お入りになつて、先夫人の簞笥を開けて、まあ〳〵母さんは眞にしまつがよかつたから何も彼もきちんとしてあるのね、何もうすぐだよ、母樣の御召物な

んだもの、二人がみんな分配して宛てお上げなさい、それが佛への第一のつとめですよ、などゝ暗に私が衣類を我物顔に扱ひはせぬがと感召て其伏線をお張りになる。

私だつて女のたしなみ一通りは揃て居るのに、何で行丈の合はぬ人の品に目をかけませう、これが俗に申す痛くない腹を探ぐられると申すのでせう。

△姑氣取りの氣儘放題

先達つても、よんどころ無い用向で外出致して歸りますと、姉娘は、一家の主婦が留守をあけるなんて間違つて居るとか何とか、氣むづかしい主婦が山出の下女を使ふ樣な口の利き樣……。此間も伯母が一寸まゐりましたところ其後で申しますのに、私もう家へお客樣の來る位ゐいやな事はないそれ



も人によろけれ共いやに頭ばつかり下げるなんていやな事だ、と妹とひそひそ話し。他家樣から何か到來すると、直ぐ二人が一見してお毒味をして父に見せながら、馬鹿でも假りでも母親たる私に少しも其かげも見せないといつた有樣何か仕損じでもすると、尾に鰭をつけて父や林のお祖母さんにいつゝけ口男の子は實にさつぱりしたもので、別に何も申す事もなく、末子などは母樣〳〵となついて呉れますので、此子に接する時ばかりは親らしい氣も致しますが、もう〳〵上の二人の子には……。何か氣に入らぬとすぐお飯を喰べぬ。聞けば先の母樣はヒステリーであつたといふから、其遺傳か何か存じませんけれ共恰度卑い女が後へ入り込んでゐたか何ぞの樣に、年の割合に着物が既いだの髷をこはすのがひどいのと、まるで以て姑氣取、口にも態度にも乃

頭は猿芝子某嬢に至る迄にあて付けの氣儘放題、これでも小石川の某高等女學校の優等卒業で學力拔群品行方正であつたとは……、表裏は正に此通り。

△胸に波立たぬ日のない境遇

世に繼母と呼ばれる方は、誰れも經驗がおありでせうが、主人と子の板挾みになつて苦しい思ひをする場合も少なくはございません。主人が申すのに、前の母は常に注意をしたけれども、實は病氣で無敎育であつたから、子供のしつけが至つて不行屆で、親戚の前で赤面する事も度度あつたのだから、お前がどうか仕込んでやつてくれ、特に母の死後はもう／＼家内はめちや／＼で其女の云ふ儘になつて居たのだから、買物なども無用の品をよく拵へる樣に、どうせ他家にやる娘だ、嫁いだ先で不始末なのは即我々の恥辱だ、と餘り申さぬ人がこれだけはしみ／＼と申し付けられましたけれ共、扨其實行がなか／＼困難で、斷行しやうとすれば家内がごた／＼致すは知れた事だが默つて居ては却つて不親切で主人の意にも反することだからと存じて、いろ／＼と致して見ますけれ共、やつぱり私の足りない爲なのでせう、父の前でわざと汚れた肌着などを出して、注意されると、だつて母樣がまだ繕つて下さらないのですもの、などゝ申して私の立場のなくなる事は度々であります私だつて多少の經歷もある身故、學校にさへ出るとすれば、愉快に氣鋒に過して行けるものを、何に困つて要らぬ辛い繼母となつて後半生を暮す事であらう、考へて見たれば見る程、烏の鳴かぬ日はあつても胸に波の立たぬ日はない此境遇。忍びをいつそ色に出すならばこんなに心配もあるまいけれ共、そこが女のつゝしみ、多少の敎育ある身のたしなみ、何といはれてもこれも修養、むしろ其人を憐んで罪を恕らすの寛度を持たればならないわけ。終日外に働いて、一朝事ある時には我國の守、散つて萬朶の櫻花となり、凝つては百錬の鐵となると、口癖の樣に育て居らるゝ主人に對しても話された事でもあるまいし、これが腹を痛めた眞の子であつたなら、親はあらん限りを盡して其矯正を試みるであらうが、兎に角まだ／＼私の精神が至らぬので、まゝ母根性がどこかに頭を出して居るのだと存じまして、何事も根に持たぬことに致しました。

△私のあきらめ方

其心で居る故か此頃では大分にやさしい氣に變つた樣に見うけます。此茫漠たる冷たい世に、緣あらばこそ親と呼び子といはればならぬ宿世の約束事と呑み込でしまへば、今迄氣になつた事も思ひ惱むに至らず、自分の調度でも望まるれば、よろこんで與へて其のよろこぶ顔を見るのが滿足である位に迄進み度いと存じて居ります。さればにや、實は姉娘は本年の暮れに某中尉の青年士官と結婚させる筈になつて居ますので、もう今から仕度とり／＼のうちに、それでも他人ばかしの他國へ赴任した時の淋しさなどを想像してか、私れどこへ行つても日に一度は必ず手紙を差上ますわ、などゝ申して居りますし、妹娘は又姉樣なんかいゝ事れ

お召物がどつさり出來て私の時にもこしらへて下さい、なんて今から申込んで居ります位。私は私で、とうか子供達が十分の一でも自分の眞意を酌んで吳れて、世に出た後で繼母に育てられたる人といはれぬ様の言行をして貰ひ度いとばかし我身を忘れて存じて居りますが、それでも時折林の御老人などが御出になると、五度に一度位おやつと思ふ様な事を申したり致します。考へて見れば妙なものです。然し此様に存じますのも、つまり私が是迄單調な寄宿舍生活ばかり送つて來て、心に餘裕が無くての考へかも知れません。

輕便合宿所

一國の中で最も困る階級は、最下層の者よりも寧ろ中流民の下位に在る者と思はれるが、米國では此安給料取の便宜の爲めに一種の合宿所が出來て居る。

▲設立の趣意は、安給料取の便宜を謀つたのであるが、夫も全然慈善的に經營しては、彼等の自尊心自助心を傷つける虞がるといふので、出來得る限り低廉串して、然も出來る限り便宜に、愉快にと努めたところが、此設備の特徵である、設立者はミルスといふ富豪、紐育市第三十六街七横町にあるのが去る千九百七年に出來た第三のホテルで、其十年前に第一のホテルが出來、次に第二のホテルが出來、十年間に都合三個の大建築が出來た譯である、然も其成績は三個共に頗る良好、千五百五十四の寢室を有する第一ホテル、六百の寢室を有する第二ホテル共に開所當日より滿員の姿で、冬季の間などは屢々お客の申込を斷つた位である。

▲場所の選擇　お客の種類が種類であるから其建築の場所も大に考へればならぬ、斯くて此ニユーミルスホテルの建設せられた所は、紐育市の殆んど中央、四通八達の所である、寢室千八百七十五を有し建坪二百呎に百呎にして、地上十五階の大建築、外に別に地下室がある、此建築には專門の技師が苦心してあらゆる文明の科學を利用した、從つて光線の射入、空氣の流通も工合好く清潔で便利で愉快である、全體が煉瓦大理石、硝子等で出來て居る、安宿といへば夫れまでゞあるが止宿人をして、毫も不快を感ぜしめず、在泊中に貯蓄をして立派に獨立に家庭を作つた者も少くないといふ。

▲設備の大様　此ホテルには寢室がある、食堂がある、浴場がある、洗濯場がある、讀書室がある、書簡を認める室がある、先づ寢室は八呎に六呎のものと、八呎四方のものとの二種あり、前者は一夜三十仙、後者は同じく四十仙、夫れで立派な寢臺があり、蒲團から敷物まで相當なものが備はつて、蒸氣も通つて居るし、換氣の工合も好く出來て居る、食物は一品五仙よりあるが、極りが朝晝共に各二十五仙、夕食は三十仙である、風呂場は三十もあり、何れも鐵管に蒸氣が通つて居て、一回毎に湯を換へられる、讀書室も自由に出入が出來るし、書簡を認める室には書簡紙から封筒まで一切無料で便利づくめだといふ。

新案文字の教

三之部

(三叉)サンサ　みつまた。
(三才)サンサイ　天地人の三つ。
(三友)サンユウ　(一)松竹梅の三つ(二)琴詩酒の三つ。
(三方)サンボウ　儀式やおまつりに供へものを載る道具。
(三寶)佛教でいふ三つの寶、即佛、法、僧。
(三世)サンセ　前世、現世、後世の事
(三老)サンロウ　百歳を上壽といひ、八十歳を中壽といひ、六十歳を下壽といふ。
(三曲)サンキヨク　三味線、胡弓、筑紫琴の三つの鳴物。
(三伏)サンプク　夏のごく暑いじぶんをいふ
(三光)サンコウ　日、月、星の事。
(三后)サンコウ　太皇太后、皇太后、皇后。
(三更)サンコウ　夜の十二時ごろ。
(三台)サンダイ　太政大臣 と左右 大臣 のこと。
(三辰)サンシン　三光に同じ。
(三舍)サンシヤ　一舍は三十里なれば、三舍は九十里。
(三竿)サンカン　日の高くのぼつたこと。
(三軍)サングン　(一)軍隊の左翼、中軍、右翼をいふ、
(三昧)サンマイ　物事に一所懸命になること。
(三省)サンセイ　幾度もじぶんの身をかへりみること。
(三浣)サンクワン　三十日のこと。「上浣」「中浣」「下浣」を三浣といふ。
(三春)サンシユン　はるみつき(三月)のこと
(三族)サンゾク　(一)父母、兄弟、子孫の三つ(二)父子孫の三つ。(三)父のしんるゐ妻のしんるゐ。
(三赦)サンシヤ　三つのゆるすべきもの、老、幼、愚。
(三尊)サンゾン　阿彌陀、觀音、勢至三つのほとけ。
(三嘆)サンタン　たびたびほめること。
(三稜洲)サンリヨウシユウ　川上からながれてきた 土が河の出砂につもつて、島となつたもの。

不之部

(不才)フサイ　働らきのない事。
(不日)フジツ　幾日もたゝない內、日ならず。
(不仁)フジン　慈悲のないこと。
(不毛)フモウ　土地がやせてゐて、穀物などのできない所。
(不文)フブン　(一)學問のできないこと(二)文章のかけないこと。
(不吉)フキツ　目出度ないこと、緣起のわるいこと。
(不言)フゲン　口をきかぬこと。
(不利)フリ　(一)得のないこと、(二)戰に負ること。
(不肖)フセウ　(一)親に似ないこと、(二)人に及ばないこと、自分のことを、へり下つていふ事。
(不佞)フネイ　自分をへり下つていふときにつかふ。
(不朽)フキユウ　(一)永久、(二)朽ちないこと。
(不屈)フクツ　(一)曲らないこと、(二)よわらないこと。
(不拔)フバツ　(一)ぬけないこと、(二)しつかりとしてゐること。
(不和)フワ　仲の惡きこと。
(不登)フトウ　作物のとれないこと。
(不服)フフク　氣に入らない事。
(不聞)フモン　聞れないこと。

(不埒)フラチ 規則にしたがはないこと。
(不倫)フリン おこなひの正しくない、人の道にはづれた事。
(不逞)フテイ (一)自分のおもふ通りにならぬこと、(二)おこないのよくない事。
(不敏)フビン 利口でないこと。おろかなこと。
(不測)フソク はかり知れぬこと、おもひがけないこと。
(不發)フハツ (一)ものごとをはじめぬこと(二)弓などを放たないこと。
(不遇)フグウ 運のわるい、まはり合せのわるい。
(不撓)フタフ (一)たゆまないこと。(二)よわらないこと。
(不腆)フテン そまつな、(ものをひとにおくるときへりくだつていふことば。)
(不惑)フワク 四十さいのこと。
(不辜)フコ むじつ(無實)のつみ、まちがひのつみ。
(不稽)フケイ とりとめのないこと、くだらないこと。
(不遜)フソン わがままにふるまふこと、えばること。
(不虞)フグ おもひがけない事。

(不齊)フセイ そろはないこと。
(不勝)フショウ きぶんのすぐれないこと。
(不廉)フレン 値段などのたかい事。
(不實)フジツ (一)うそ。(二)しんせつのないこと。
(不滿)フマン きにいらぬこと。
(不隨)フズヰ おもふとほりにならぬこと。
(不審)フシン よくわからぬこと、あやしいこと。
(不圖)フト はからず、おもひがけなく。
(不調)フテウ とゝのはないこと、まとまらないこと、うまく行ないこと。
(不敵)フテキ (一)かなはないこと、(二)どきようのよいこと。
(不整)フセイ きまりのないこと、ふしだらなこと。
(不興)フキヨウ (一)おもしろくないこと、(二)おこること。
(不豫)フヨ (一)よろこばないこと、(二)びやうき。
(不斷)フダン (一)いつでも。(二)ぐづぐづしてゐること。
(不穏)フオン おだやかでないこと、さはがしいこと。
(不覺)フカク ゆだんする事。

(不羈)フキ 世の中のみちにしたがはぬこと我儘なこと。
(不世出)フセイシュツ 却々世のなかに出ないような、めづらしい人の事。
(不如意)フニョイ (一)おもふとほりにゆかないこと、(二)びんばふ。
(不見識)フケンシキ (一)ものごとにかんがへのないこと、(二)いくじのないこと。
(不決斷)フケツダン おもひきつてきめぬこと、ぐづぐづしてゐること。
(不倒翁)フトウオウ おきあがりこぼうし。
(不透明)フトウメイ すきとほらない。
(不即不離)フソクフリ つかずはなれぬこと、どちらともつかないこと。
(不倶戴天)フグタイテン ともによのなかにいきてゐないこと、(君と親のかたきを「不倶戴天」のあだといふ。)
(不得要領)フトクエウリヤウ あいまいでどちらだかわからないこと。
(不臣)フシン けらいのみちをまもらぬこと。
(不易)フエキ かはらないこと。
(不貞)フテイ みさをまもらぬこと。
(不通)フツウ (一)とほらぬこと、(二)たよりのないこと。

(不作)フサク　さくもつのとれぬこと。
(不明)フメイ　(一)はつきりわからないこと、(二)りこうでないこと。
(不用)フヨウ　つかはないこと、いらないこと。
(不信)フシン　まごころのないこと。
(不動)フドウ　(一)うごかないこと、(二)不動様のこと。
(不偏不黨)フヘンフタウ　どちらへもかたよらぬこと。
(不時)フジ　ときならぬ。
(不快)フクワイ　こゝろもちのわるいこと、びやうきのこと。
(不公平)フコウヘイ　えこひいきのあること。
(不安)フアン　あんしんできないこと。
(不能)フノウ　(一)はたらきのないこと、(二)できないこと。
(不着)フチヤク　とゞかないこと、つかないこと。

中之部

(中老)チウラウ　五六十歳の人。
(中旬)チユウジユン　毎月の十一日から二十日までのこと。
(中年)チユウネン　三十歳前後。
(中和)チユウワ　程のよいこと。
(中風)チユウフウ　體のきかないやまひ。
(中秋)チユウシウ　舊暦の八月十五日。
(中浣)チユウクワン「中旬」とおなじ。
(中溝)チユウコウ　(一)國中の事、(二)おくむき。
(中流)チユウリウ　(一)河のまんなか(二)可なりのくらしをする人々。
(中略)チユウリヤク　まん中ごろを省くこと(おもにかきものなどをうつすときにつかふ。)
(中坐)チユウザ　中途で席をはなれること。
(中庸)チユウヨウ　(一)本の名。(二)ほどのよいこと。
(中啓)チユウケイ　疊んだ時にさきの廣がつてゐる扇。
(中産)チユウサン　中位の財産。
(中情)チユウジヤウ　心の中。
(中絶)チユウゼツ　やりかけて止めること。
(中暑)チユウシヨ　あつさあたり。
(中試)チユウシ　しけんに及第すること。
(中傷)チユウシヤウ　ひとの名譽をきずつけること、惡口をいふこと。
(中道)チユウドウ(一)何方へもかたよらぬこと、(二)ちうと。(中途)
(中葉)チユウエフ　中頃の世。
(中腹)チユウフク　山の中ほど。
(中樞)チユウスウ　眞中の、かんじんな場所。
(中興)チユウコウ　一度衰ろへたものを、盛んにすること。
(中斷)チウダン　まんなかできること。
(中人)チユウジン　みぶんのあたりまへのひと。
(中古)チユウコ　なかむかし。かなりふるいこと。
(中外)チユウグワイ　じぶんのくにとほかのくに。
(中宵)チユウセウ　よなか。
(中宮)チユウグウ　こうごうさま。
(中心)チユウシン　(一)こゝろのうち、(二)まんなか。
(中天)チユウテン　なかぞら。そら。
(中日)チユウニチ　はるとあきのひがんの四日めのこと。
(中立)チユウリツ　どちらにもかたよらないこと。
(中毒)チユウドク　どくにあたること。
(中庭)チユウテイ　なかには。
(中原)チユウゲン　くにのまんなか。

茶の湯の宗匠

風雅な職業としては、茶の湯の宗匠などは其の尤なるものでせうが。市内に三百人もある宗匠中に、眞に技術のある者は僅に十數人に過ぎないとは一寸意外な話です。宗匠は男子八分、婦人二分位で、流儀は重に千家の裏表です。稀には石州其他の流儀もありますが、先づ千家の全盛時代で、其の中でも裏の方は餘り勢力なく、表の方が幅を利かして居て、表と裏の割合は七分三分位だと申します。

一人の宗匠の持つて居る門弟は、女學校や宮家に出入をしてゐるのは別として、先づ二三十人位のものだとか。其の門弟は何んな人かと申すと、第一が未亡人、次が令嬢、其の次が中流以上の隠居さんなどださうであります。男子で商店の主人入字髭のお役人、稀には學校の教師、前垂姿の番頭さんもあるやうですが、先づ婦人が多數を占めてゐると申します、弟子の中で一番教へ難いのは年寄の婦人で、妙に頑固で、若い宗匠のいふ事などは一向聞かないので、これには宗匠も閉口するさうで、誰れでも「お婆さんは厄介だ」と申して居ります。教へ易いのは十七八のお嬢さんで、手は柔かいし、言ふ事は能く聞くから、割合に早く成功するさうであります。

一通り覺え込んで仕舞ふには、大抵は三年位はかゝるさうですが、其の間辛抱して通ふ者は少なく、多くは途中で止めて仕舞ふて弟子は四時變つて行くので、宗匠の許を受ける者は二三十人の中で僅に二三人に過ぎないとは心細い次第です。其の眞面目に續くのは未亡人位で、男や夫を持つてゐる婦人は實に飽きつぽいと申します。

稽古日は月の一六の日と定めたり、毎週何曜日と定めたりして、之れに對する月謝は平均一人に付、薄茶が壹圓、濃茶が貳圓位ですが中には何れでも月壹圓、若しくは貳圓と定めてゐる所もあります。尤も此外に出稽古があつて此の方は良い宗匠ですと一回三圓位の心付が貰へる上に、車代だの晝飯だの、悉く弟子持ちですから、一寸手の利く宗匠なれば、一ヶ月四五十圓以上七八十圓位の收入があつて、下女の一人位置いて相當に暮して行けるさうであります。



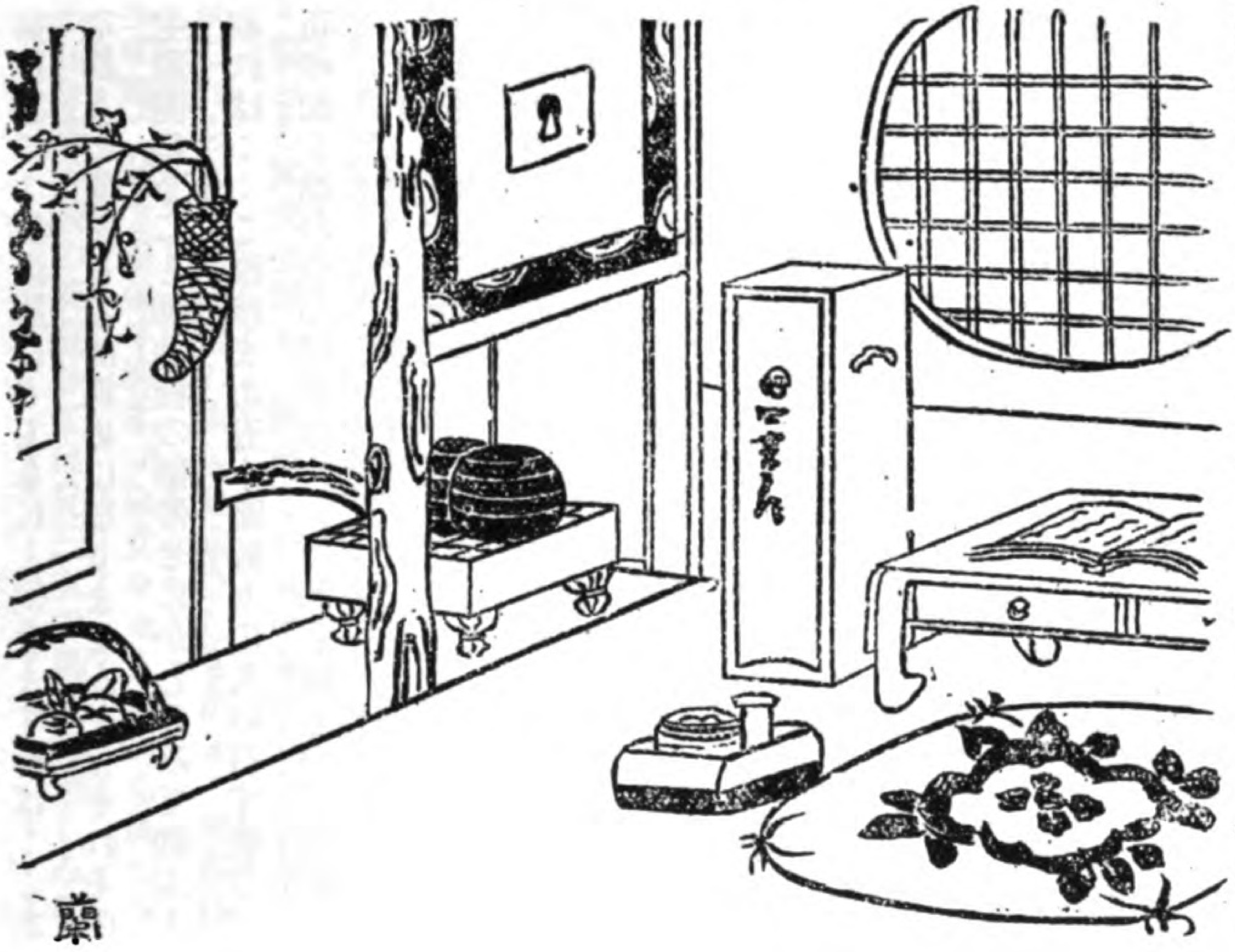
嫁いで來りし我家の家風

露草

家風！家風！何といふ重々しい響の有る言葉でせう。春美くしき伊香保の湯の泊り、新婚のむつみ言甘く、此御睦じき亡き奥樣に、一目なりとも御見せ申したしと、樂しきまとゐに、乳母の涙おとさせ、逗子の濱邊のそゞろ歩き、來ん世も又の來ん世も、妹脊ぞとかたく誓ひし武夫夫婦も、家風とやらのきびしき掟のもとむごたらしう姑の君の去らせ給ひしとか：：：寒風狂う冬の町、幼き里の子等に、狂女々々となぶられつゝも戀しき夫の絃の音慕ひては兄三次の胸奥に悲しみの一つを增さしめし琵琶歌の里野、皆此掟のもとに、血に泣いて別れたのでは有まいか、以上は架空の小說ではあるが、かくれたる世の裏面にはより〳〵以上の悲劇が實演されてるに違ひない：：：自分も此家に嫁いで早や四年、もしや姑樣のみむねの奥：：：もしや家風にあはぬ嫁と、こんな恐ろしいいやな〳〵御思が、ひそんでゐらつしやるのではあるまいか？、否々大丈夫だ。去年の春姑樣御國へ御隱居の折：：：私ももう年を取つたし、家の事もお前にもよく會得された樣だから、私はこれから隱居さして貰ひます、後々は夫婦よく相談して御家の繁昌をお計りなさいと美しく笑んで申された。私はお姑樣の御めがねに叶つた身だ、家風にあつた嫁と思つて下さつたのだらう、心强い：：：何だか嬉しい。

然し春と秋とが四度めぐる其間、御家風に染んで仕舞うまでは、隨分苦勞もして來た、人知れず泣いた事も幾度か有つた、先き樣は大變御古風で、御物堅くてゐらつしやるとは聞き及んで承知もして來たが、これ程までとはよも思はなかつた、結婚後はじめて旦那樣の

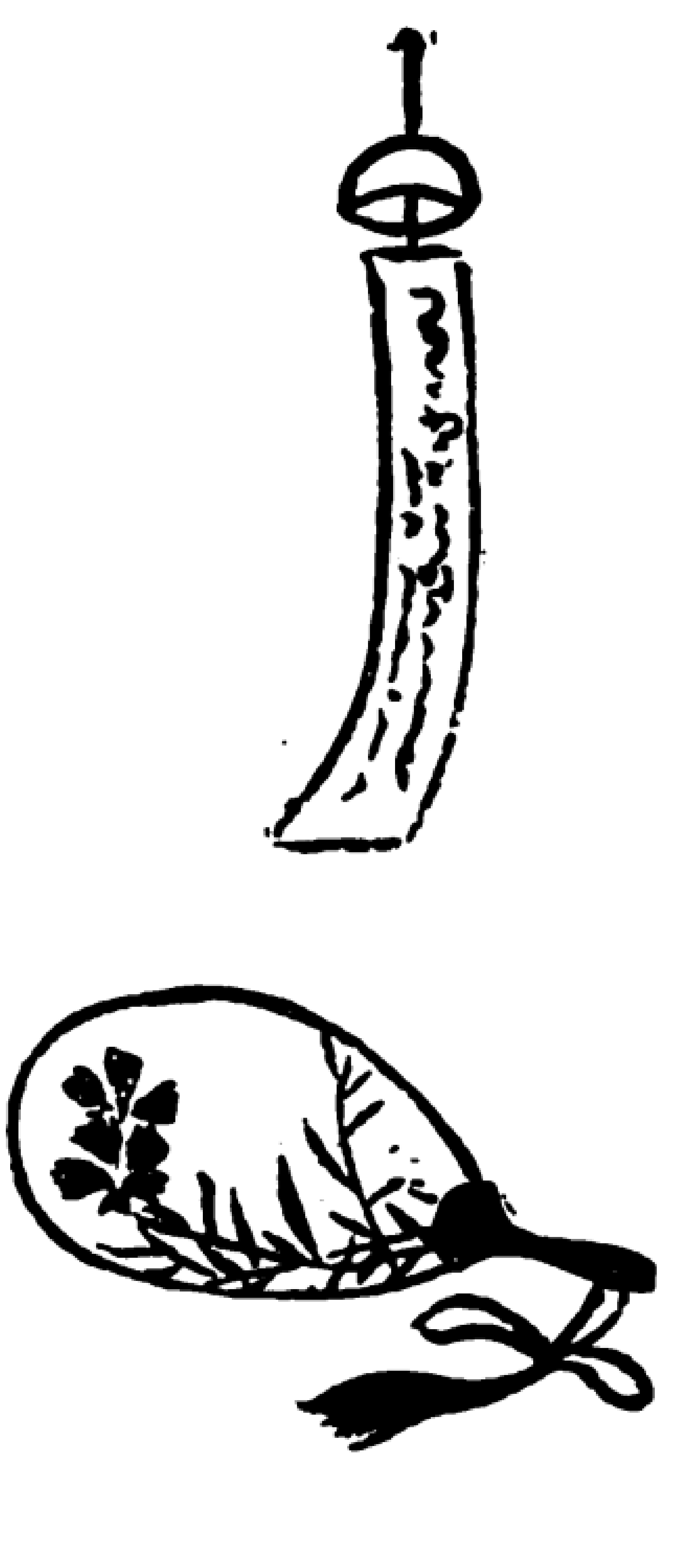
御出勤……御洋服はどちらにと伺ひますれば……あんな異人の着るものは爲めになりませんよ、それその御坐蒲團の下にと御姑樣の御仰せにかしこみて御ふとん取れば……これはまあ五十路餘りの人の召す樣な、昆布の如く地のつんだかたい〳〵御手織もの、御袴はとみれば、之も茶と紺の千筋縞……まあ御可哀さうに、三十路に足らぬ御身で、此地味さ……それも御雇か何かのお身分なら知らず、かりにも學士の肩書持つてゐらつしやる御身がと何だか悲しい樣に思はれて夢心地で玄關へお送り申す御足袋も御手製らしく夢二式の大きさ御みあしを餘つてダク〳〵と御下駄も十五錢を外へは出まじき代物、旦那樣御出ましの後はじめて御臺所の御片附を拜見する御戸棚蠅入らず美くしく拭き込れて鏡の樣皿は皿茶碗は此所と、皆整然かたづいてねすみの埃などは勿論の事、ちり一つ轉がつてゐないまあ御きれいです事だが御姑樣これ〳〵の道具の數を書いて中へ貼つて置きましたら如何でせうと申せば　イヱイヱ今風の人はそれだからだめですよ、それぐらゐの事は頭の中へ書き込んで置いて御らんなさい、そして其紙一枚大切にすれば、御客來の時御菓子が一度包めます、私の家は皆斯樣な風ですよ、塵も積れば山となる、一寸の糸屑も小さな綿切も、小判の耳と云ふ事をお忘れなさるなとの御さとし、午前は御代々の佛樣に御叮嚀に御經をお上げになる、其御奉仕のまめやかさ只今感心して拜見しながら、自らも御回向申す、午後からは御仕事遊ばさるゝとかにて、押し入れより何かゴト〳〵出させ給ふ御樣子に、御手傳ひにと參れば、これは又世のすたれものとのみ思ひし一挺の糸車、篠卷き一包み……やがて姑樣は御居間に据ゑて、ぶいーぶいーと御はじめになる、右の手、左の手、器用におやつられると車がきり〳〵とまはつて、編針の樣なものに白い糸が生れて卷きつく、露さん出來ますか、こんな事を仰せられるぞとてもと申上くれば……私の家の人となるからは決して此車おろそかにされませんよ、一錢二錢もつて糸屋へ走らなくつても、此車さへ始終まはしてゐれは、そんな手間や不自由は入りません、



着物だつてさうですよ、今時は人が狡猾にばかしなつて、外見だけは立派ですが、使つてみたらためですよ呉服屋ものは禁物々々、矢張り車でひいた糸で織らなくてはねえと御もつともの御言葉ながら、私は何と御返事申してよいやら、行燈の下で夜仕事なされた封建時代はいざ知らず、廿世紀の今日繁忙い社會に立て、複雜な家事の整理に、育兒に、昨日よりは今日と向上してゆかねばならぬ此頃を、如何して悠々と、こんな事して日を暮してゆけやうぞ、だが私はいやで御ざいますとは申上げられない、何卒よろしくお敎へ下さいませと御返事はしたものゝ、何やら心元ない樣な氣がする、それから姑樣はお仕事を遊ばしながら種々と世間話の末、おう〳〵餘り車をまはした故か、肩がこつて參りました、露さんや袋戶棚の右の方に、紫色の箱が有りますから出して下さいと仰せられるので、早速持つて上がれば中からさま〴〵の紙包お出し遊ばして、底の方から出た一包！さも恭しくおいたゞき遊ばして、御題目三度ほど嚴そかに御口に召されたは、何樣の御符とやら、難有い〳〵と幾度か繰り返し給ふ

御樣子、御老人のお恙なしとは申せ、又一しほの心元なさ、若し御大病の時は如何なさるのであらう、此後子供でも生れて、熱でも有る樣な事が有たら……あゝ矢張あの御符だの、お呪いで……おゝ恐ろしや〳〵。御家風とは申せ、御家風とは申せ、お改め申させたい……然し嫁だ〳〵、自分は未だ新しき嫁だ……默して默して御從ひ申さずばなるまい。

其夜は何とも云ひ知れぬ不安な想にふしどに、入た！そして靜かに此家の家風を想像した、姑樣天下で、御質素を旨とせられて、よろづ派出々々しきは大の禁物されば御物堅き事はよの常ならず、おきれい好きで、佛樣の御事ならば莫大の金も惜しませられぬ、先づ結構なと申す御家風、然し又伴ふ弊風も在しまして、質素か極端に走る事も有り、御ゆうづうのつかぬ御頭、今少し圓くと思はれる事も有る、御佛信心の末は迷信に捕はれて怪しき修驗者の言葉に、貴き金、價値もなく失はるゝ事も度々……始めの程はよろづ現代的だつた實家の風習さめ難く、何だか情ない樣な氣がしたがはや二人の母親となつて自分にもをかしい程糠味噌臭くなつたと共に、別に此家風に苦しとも情ないとも思はなくなつた、退歩したのであらう、たしかに退歩したのだ、甦らなくちやならない、さめなくちやならん姑樣は一家を擧げて私に任して下さつた今日、宜しきはかたく守り、如何はしきは今日今から改めよう、そして美しい家風を造つて、子々孫々に傳へる責務は此かよわい自分の肩にかゝつてゐる、△△家十代目の嫁御は、却々のやりてゞ有つたと、位牌を指して貰へるやうになりたい、不如歸だの琵琶歌の悲劇のまねは夢にもしたくないので有る。





日記の中より

常　夏

「世の中に絶えてかるたのなかりせば
　春の心は淋しからまし」

電燈晃めく大廣間に、掛聲さへも勇ましう、美しき娘子軍の將として、華やかに暮せしも夢の間に去年と過ぎて、今日は雪深き信濃路に、火桶を友に日を送る吾れ……。面白からねど、日記を左に！

△月△日、今日で寒は開けると云ふのに眞實に寒いの寒くないのつて、いくら雪に名高いしなのだつて、餘り寒すぎて、譯もなく腹が立つ。今朝なんか水洗用つて、跡で髪をとかうとしたらまあ、妙に白く凍つてるんだもの、情なくなつて仕舞ふ。楊枝だつてもしつかり凍りついてるんです。今年は雪が少いつて村の人達は云つてるけれど都の冬に馴れた私は、これで少いんなら多かつたらどんなになるだらうと思ふ位。

それは、道こそ、降る度に片附けられたり踏まれたりするから、歩く間こそ雪はないが、もう其の外は野と云ふ野、山と云ふ山、畑は云ふに及ばす、田も家も、たゞもう一面に眞白のゆき。おまけにいくら日が當つても都のやうに、雪解の水がぼた／＼落ちるやうな事はないんです。もう日が山の端に入ると同時に凍り初めて、うつかり歩くとつる／＼と辷る。

ハッと思つて中心を取るから知らず識らずにスケードが上手になります。

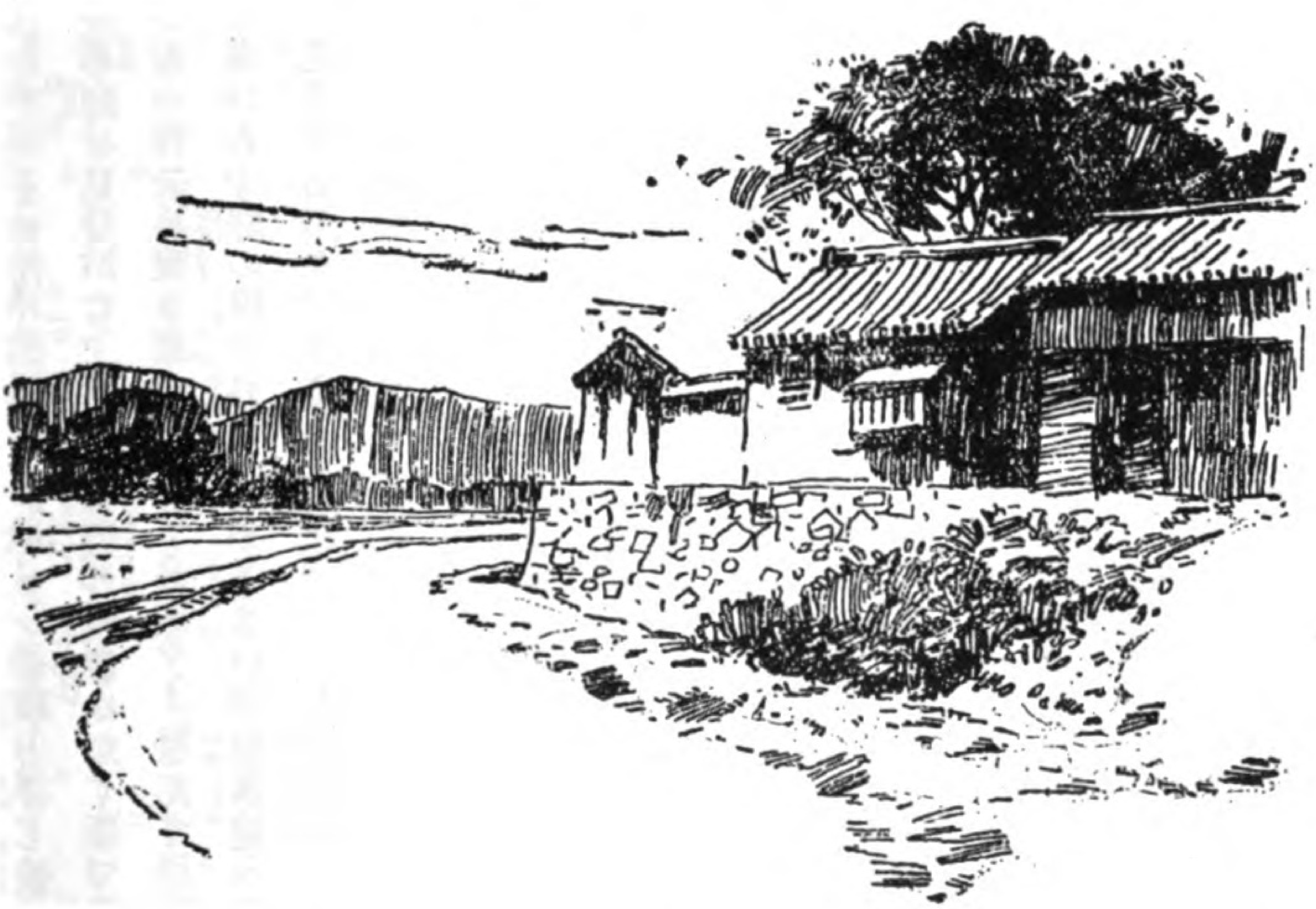
ほんとに寒い所なので皆炬燵にばかり、かじり附いて、仕事でも何でも炬燵で致しますの、まあ謂はゞ、無精者にはもつて來いと云ふ所です。

然し、炬燵に居ても手が冷たい位ですから、御寒さ

もひとしほでとても、都の方にはわかりません。
寒いのに障子を開けて、炬燵から庭を見ながら、あ
の美しい紅い實の南天に、雪のつもつた云ひやうない
風情を見惚れてると郵便とも何ともいわず庭の塀の外
から封書を二本、ヒラリと縁に投込んで行つた、まあ
嬉しい。思はず頬ずりしてつい白い歯を見せて仕舞つ
た。日に三度の配達が待ちどほしくて〳〵。
うらをかへすと芹枝美貴子さんと市瀬さん——。
先づ第一に市瀬さんの、封を切る。相變らず眞四角
な活字のやうな字だ。オヤ、ホヽヽヽ、ホヽヽヽ。
「昨日、厭味澤山の御尊書、頂戴致し、火鉢の傍にて
讀み申候處、涙やら、涎やら水つ鼻やらたらし火の
消えるのも覺えず候ひき」ですつて！オホヽヽヽヽ
ホヽヽ、ホヽヽ、眞實に、ほ、眞實に、ホヽヽヽ、眞
實に馬鹿にしてるわ。涙やら涎やら水つ鼻やらだつ
て。ホヽヽヽ、ホヽヽヽヽ、あゝをかしい。あゝあ
あ、私も、お腹が痛くなつて來た。「御地はかるたも御
盛の由御羨しう存じ候、誰が何と云つても百合さん
がチャンの事と存じ候、當方會は頗る振はず候、百合
香孃の脱會はかくまで我が九重會に大打撃を被らしめ
るとは、あゝ」なんて、おだて上といて、「ピクチアー送
つて下さい、寫眞屋へ三里半位なんです、田舍ぺーの
癖に。どうも田舍者は暢氣でいかん」
ヅドンと上げて、ドシンとおとすんだから、氣の拔
けた狼火宜しくで流石の私も、ウンザリしました。
まあ芹枝さんの、美しい露堂流の文字、樣つて字な
んかほんとうにすてきだわ、
卷紙にすら〳〵としなやかかな、何處となく力のあ
る、憎いほどスッキリした字が、自由にかきこなして
ある。
例の通りの輕快な文章——。まあ〳〵怒らずにだま
つてお聞きなさいよ。御返事のおくれたのには、色々
と理由があるのよ、
ねえ百合さん、和さまはどうなすつて？其の後—」
もう厭！　美貴子樣は!!! お忘れやう〳〵としてるの
ぢやありませんか。ほんとに私、何かしてるのよ。

あゝ數へて見れば去年の今日よ。あの方と二人で神樂坂へ行きました。えゝ夕ぐれでした、冷たい空に星のまたゝき、暗示のやうにおもはれて、美しい宵でございましたね。あの方は注文して置いた琵琶のばちを取りに行くつて仰有つてでしたの、私も濃いブルーのリボンがほしかつたから、連れてつて頂戴つて云つたら「僕あ厭だ、買つてきてやらう」なんて云ふんですもの、だけど私、兄妹ならいゝわ、つて、ついて行つたの、あの方は默つて笑つてました、あの方の絣

京都仁和寺



の羽織と私の長い袂とすれ合ふんですの、道でもね、「福ハ內」つて、大きな聲でどなるのを聞くと、無言のまゝ二人は顏見合せて笑ひました、あゝあの頃はたのしかつたわ。……。

夢見るやうに美しい追想を、たどつて無意識に筆のあとを追ふ。

おや？　まあ……!!

私は自分の目を疑つた、まさか冗談ぢやあないでせう——。

「貴女に蚊のすねなんて云はれてた義姉ね、廿一日に歸らぬ旅立いたしましてよ。」

あゝ、重尾様、重尾さんは遂々、亡なつたんだ。

重尾様！何故死んで終つたんです。何故、最と永い間生きて居ては下さいません、私はほんとに御恨みです。重尾様、あゝもういくらよんでも‥‥肩にすがつてさけむでも重尾様には聞えない。聞えるものか、死んでしまつたんですもの、

思へば果ない別れでした。私たちが信州へ來る前の晩、去年の七月の忘れもしない九日の夜、もう御別れに上つた時、「氣をつけていらつしやいよ」つて、たをやかな夏やせの御體を、御玄關の細い柱にもたれたまま惜し氣に見ていらしつた――、あれが最後の御別だつたのですわねえ、これが今生の別れとは二人ともちつとも知りませんでしたものを‥‥‥‥。

つらい浮世ね、重尾様‥‥‥‥。

眞實に御優しい方だつたのに口惜しい事致しました。

私なんか始終可愛がつて頂きました、商賣人のやうな恣氣な方で、私今でもようく覺えて居る。縞モスの襟のかゝつた輕い袷を、思ひ切つて拔衣紋に召して、右手に手拭とシャボン箱とを下げた湯歸りの粋な御姿が眼に見えるやう。あんな美しい女を奥様に持ちながら、外妾を御置き遊ばす方の氣が知れない。

稍、眉のせまつた色白の細面、二重眼の凛とした、凄い程美しい此の方が、あの好い御毛を、水色の手柄懸けて、丸髷に御上げなすつた時なんぞ、女でさへも見惚れる位でございますもの、

あゝもう其のうつくしき薄命な人は、此の世を捨てて白玉樓中の人と化つてしまつた、

幾度云つてもかへらぬ事だけど、あゝあ、重尾様はどうして亡なつてしまつたんでせう。私は此の方が、十六の時嫁らしつてから生れてこゝに三十餘年の星霜をへても何のたのしい事もなく、色も香もある姥櫻、無情の風に散つてしまつた事を、ほんとに、心から、悼みます。愚痴のやうだけど何故、重尾様は儚なくなつてしまつたんでせう。死！死！死の恐しき手に奪ひ去られた美はしの人の御魂よ、せめては、未來とや

らが有ならば、此世と反りて幸多かれ……。

おゝ内藏人さんも？血をはいて？あの肺…病？まあ、何て悲慘なんでせう、之れほど情の深い主從が又と外にありませうか、？　あんな快活な内藏人さんが、思ひも懸けぬ肺になるとは？　あゝ運命の手は恐しい。快活に似ぬ神經質の方でしたから、重尾樣が亡なつたので急に氣落ちがして、それで胸の病まで御出になつたのね、

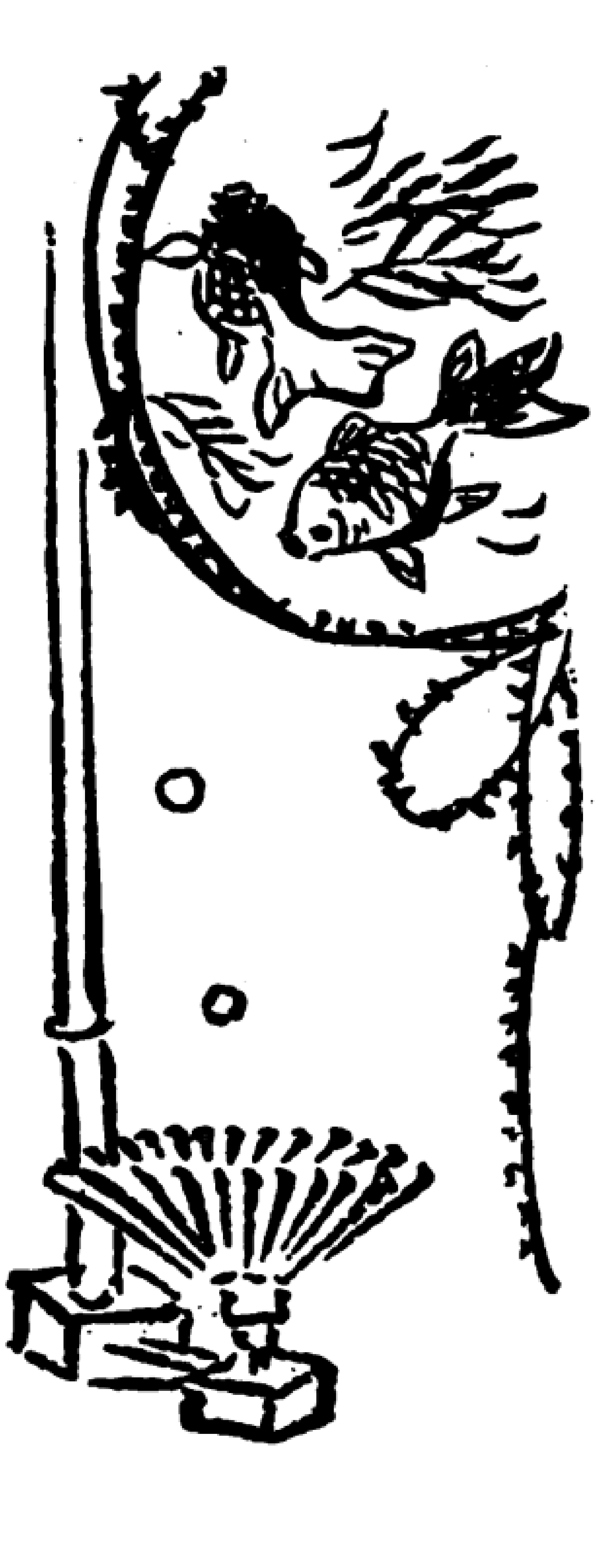
大好きだつた靜枝樣とも遠く離れてしまつてはお二人の想ばかりでも御體にさはりませう。

あゝ若い御身でなつかしい奧樣の御亡れをいたんで胸の病を御求めになり明日をもしれぬ露の命とは。情ないぢやありませんか。

もう重尾樣のあの御優しい御脣から、「百合さん」て仰有る細い透る涼しい聲音も、もう此の世では聞かれないのかとおもつたら私…私…もう何だか情ないやら悲しいやらむやみと口惜しいやうになつて、ホロホロと淚がこぼれる、あの儚ない御別れ――、殘念でした、口惜しうございます。なぜもつと未練のないやうに御別れしなかつたんでせう。夢にも思ひかけなかつたので、本意ない告別を致しました。あゝ、もう何と云つて悔んでも重尾樣は地下の人……。

與實に考へりやあ、いやな世の中ねえ、「百合ちやん、御飯ですよ。」ハッとした、泣いたり笑つたりしてとう〳〵半日、つぶしちやつた。感情家になつちまつて私ほんとに困るわ。

想かへして御返事の御悔みの文かく、序に内藏人さんにも御見舞の手紙したゝめた。



二十

繪日傘令孃

サイネリヤ



△外交官の令孃と商家の令孃

全くの好い取組ですわ。つや子樣つてば東京生れでまるで西洋式に育てられたレディー、英子樣は大阪でお名前とは大反對、それこそ深窓に育つた糸さん風ですの……。大阪地方で糸さんとは孃さんのことを申しますのですよ。

雪をもあざむく純白の洋服に、ボーンネットゆらめかして、ダイヤの光る御ん手に、ヴ井オリンを持たれるつや子樣と、お島田におぐしを上げて、露もしたゝるばかりのところへ金房ゆら／＼させて、銀簪のキラメキ美しう、おもはゆげに小鼓遊ばす英子樣と、そのコントラストの眞いこと、全く雙方とも油繪か日本畫がぬけて出たやう。何しろつや子樣は父君はいま時めく外交官のパリ／＼、母君はその父君に見染められて是非にと御所望あつての御方、申し分のないことは、此の上なし。その御子樣のたつたお獨りの一粒種のいとし子ですもの。これまた何と申しませうか。生れるとからパパママで始まり御二方の御寵愛は日に日に、つのる一方です。すらりつと遊ばした御洋裝に、何時も／＼うす紅の頰にはゑくぼを湛へ、そしてぱつちりとした黑目勝ちの目でぢつと見つめなさいますと、誰れしもチヤームされてしまいますわ。學校でも、何時も此の御方は何かの會には花形役者ですの。コンサートといへばヴ井オリン遊ばすし、演藝會といへばきつと活人畫 さう／＼活人畫つてば何時か此の御方が大理石像におなりなすつた時の 美しさ思ひ出しても血がをどりますわ。臺の上にスラリツと立つて、うすい絹をまきつけて胸のあたりまでパラ作したる肌を出して、全くマリアはきつと斯んな氣高い方だつたでせうと思はれるやうなお姿でしたので、私なんかもうボーツとして了ひました。ですもの若殿原の御さわぎも大變ですが、いまだに御養子をお迎へ遊ばしたと云ふ風評もありません。御性質もまあ御身分相當ですわ。成績はフレンチだの音樂は滿點以上ですが、他のものはちつと……。イヽエ嫉妬心からではありません。ありの儘を申上げてるのです。英子樣の御父樣は大阪でも有名の商人……、商人だつて一日店に坐つて算盤パチクリとは、違ひますの。お店と奧とはまるでの別天地、それこそ廊下傳ひで出かけなくちやならぬ有樣。新番頭は糸さんのお顏も存じません位ですのよ。何といひましてもね、大きな何百年と續いた御店故、番頭さんも數が多く、手代やら小僧合せて五

十人近くも使つて居られますし、下女にしても、それ御家人様付きの、やれ御家様付きのつて大變ですの。そこのおひとり娘、勿論御兄様御三方は皆それぞれ目下見習ひ中つてわけですが、娘さんはおひとり切りですもの。いつも英様は「私なんかほんまに淋しうてつまりません」としみじみ仰しやるので、お氣の毒でたまりません。併しあんなに皆様に大切がられてお仕合せですよ。そりや御父様御母様は申すまでもないこと御祖母様もお有なので、その祖母様がまた、朝から晩までなめ通しになめても居たいつていふ位お可愛いのださうで、一寸でも英様の御顔が見えないと大變ですつて。そんな御祖母様の御秘藏ですから、何うしても大家のいとさん風に育つて居らつしやいます。女學校も二年でおさがり、專ら長唄とお琴と小鼓とに御熱心です。お茶やお花は免許皆傳の御うでまへ。全くお飾りものゝお人形さんのやう。美人評判記にも一番に出ましてよ。それこそあの御方を花のお江戸につれてきてウント磨けば蔦龍もしづ江も逃げ出しませうよ。しかしもう近々御結婚ですつてこんないゝお嫁様を貰う幸運兒はどんな人ですつて？ そりやお口は方方からきたさうですが、矢張り商家風で一番々頭の藤藏さんとやら申す方ださうです。ともかくも私は未來の大商店の御家人様たる英様に幸多かれと祈ります。

△男爵令嬢と多額令嬢

海軍中將男爵令嬢と、貴族院議員多額納税者の嬢様は、まあ、どうしても大關を動きませんでせう。

千代子様の御家庭は、父君男爵と母君に、御兄弟は八人。そのうち一人かけて、今は七人御在世。御兄様は大學へ御通學、たしかＭだ‥‥とか。お次の千代子さまは、御容貌は學校で屈指の美人。たゞおぐしがれ、すこし‥‥ですの。御自分も大變にお氣に遊ばして、それはそれは毎日約二時間もかゝつておぐしあげ。しかもそれでも、出來ないと學校はおやすみで一日御就床とやら。隨分わがまゝに御育ちあそばしてよ。學校にもいつでもおしろい御持參よ。ホヽヽ。時間中でもお机の下で鏡を出してちよいちよい先生の目を盜んで、お顔なほしが始まりましたつけ。學問もなかなか勝氣ですからよくお出來でしたわ。しかしあんまり利己主義ですから、お友達は皆様で敬遠主義をとりますの。それでゐて、またお口の惡いつたらありませんのよ。クラスメートでも幾人か泣かされましてよ。さうさういつかも、たま子様のことを巡査のおかみさんと仰しやつたとやらで、大さわぎが始まり、もうすこしで先生の裁判をうけるといふさわぎ。やつとの事で治まりましたのよ。こんな風ですから、全くニツクネームの湧くところは、このお方のお口よ。でもほのかに承はれば近々にバロネストとならせらるるよし、君のマダム振りさこそと思はれます。

長女は同じき運命の春子様、全くお名前のやうな、のどやかなおどけないエンゼルといふお名のあるのは御尤も。

どなたでもまあ可愛いこと‥つて仰しやいます。澤山の御兄弟たい

としがつて姉様ブツ〆御様子のおかあいゝこと一しほですよ。

この御方の特點は何を申しても、ニコ〳〵遊ばすのがいゝとしころ。上クラスで大さわぎ遊ばすのも、御無理はありません。いつも前髪をつツクラと出してさう目立たぬ位にうすくお化粧して、荒い絣のお召ものリボンきつと桃色でしたが、御卒業頃から桃われでしたとか。きつと多勢さんのＳさまのおさしづよ。それでお家では何のおけいこと申すと、まあテニス遊ばす方に似ぬ踊りのおけいこにお琴のおしらべですの。二つともはや先生も敎へるに困るといふくらゐの御上達。別して踊りとくるとそりや踊り子もはだしといふ程。そして御自分もお好きですって。いつかも○○宮殿下の御前舞ひを遊ばしましたの。チヨツと私も隅の方で拝見しましたが、それは〳〵



いつもの春子様とは又大違ひ。丁度小督でしたかれ、局がお琴弾くところに仲國が來るあれでした。八重子様の仲國も夏様の侍女も美しいでしたけれども、春子様のお局風のそのきれいな事……、ほんとに私感心して拝見しました。紅のうちかけ召して、キラ〳〵する簪かざしてお琴ひかれる其のお姿とても申しやうがございません。そんなかあいかつた春子様も早ヤママと呼ばれて居らしやるのですとか。どんなにか可愛いママチヤンでせう。赤チヤンが泣くと御一緒に泣くやうな母ちやんではありませんかしら。……

△獨身令孃と醫師の令孃

文様、解様、御二方とも讀書好きですの……。あなたのやうに小説は

かりよんでも、やはり讀書ですつてッ。まあ隨分のお口わるね。これでも私學校に通つた頃は、インゲヘッシェリーゲーも、聞しで師ノ曰クも、源氏物語も拜見しましてよホ……。

文様のお家は御兩親なし。それでも御親類の御家に入らつしやいますその御家は御役所つとめ遊ばしてるのださうで、お子様なしですの。ゆくゆくは文様がおあととり遊ばすとやら。中肉で小柄に小ぢんまりと整つたお姿。お髮は何時もルイザにお上げになつて、お召でも目だたぬやうになすつてます。すべてが、どことなく上品で、私ほんとにお慕ひ申して居りますの。一寸ものを御相談しましても、それは〳〵親身にきいて下さいますもの。私何だかお姉様のやうな氣がして……。いつも讀書が命だと仰しやいまして、いつも本にかじりついてばかり。たまに私があんまり勉强遊ばすとおからだに障りますよと申しますと、ヱヽでも私本でも見ませんと心淋しくつて……と、涙ぐまれますのですよ。ほんとにあまへる母様が入らつしやいませんから　、どことなく何時も沈んで一入落ちついて見えます。先生方の評判も大變で、女學校のモデル生徒だといふ立論ですつて。私はこんな落ちついたそして親切なお友達をもつた事が幸福でたまりません。

靜様は文様と又違ひまして、それは〳〵よく云へば活潑、惡くいへばお轉婆ですの。それでゐて本を何時もおはなしになりませんよ。お父様がお醫者様。…術といふ評判ですわ…その第二女です。ちつともおなりは構はれませんのですよ。いつも赤いおぐしは茫々として何時おあげ遊ばしたかと思はれる位、火をつけるとよく燃えませうと私心配いたしましたわ。お衿はいつも垢だらけ、お白粉は女になつたらつけます學生のうちは決してその必要をみとめずなど仰せられましてね。お召物は頗るフルッて居ります。銘仙でも衿は汚れるし　袖口はえならぬ　光を放つといふ體裁。お袴も五寸の縫ざきに大きなつぎをあてて麗々しくめしてます。いくらお母様がおかまひ遊ばさぬとてあんまりと思ひました。しかしこれは四五年もむかしの靜様、丁度私と机を並べて居た頃のはなしで御座いますのよ。今では矢張りそんなになりふり構はず勉强遊ばした螢雪の功空しからずして、めでたく首席を以て高師の、しかも理科へ御入學、最う文の深林わけ入らせ給ふとか。遠からずして御立派に御卒業のあかつきには、どんなにチーチャー振り遊ばすことやら、是非拜見したいものです。しかし御氣性はさつぱりとした竹を割つたやうとはこの方の御こゝろでせう。獨身主義を主張遊ばすのは、少々フエースがすこしね。いゝえね、ただあざがおあり遊ばしますの。ほんとにお氣の毒ですわ。でも御自分ではまけ惜しみか知れませんが「私はこのあざに御禮しますの、だつて、でなければ思ふやうに本も　よめませんでせうし」など仰せられます。

△銀行員のマダムと海軍將校夫人

松　様も輝　様も早やマダム。

松様のハス君は○○銀行にお通ひ、J料出の俊才ですつて。歌子様なんか大變羨ましがつて入らつしやいましたわ。そら先達ての△△新聞の花嫁花むこに出て居りましたでせう？あの御方ですの。私此間一寸御祝かたがたニユーホーム拜見に上りましたと思し召せ、御門のすぐとに井戸が見えますの。そこで一生懸命に洗濯してらつしやいます、丸まげの若々しい御方ひよつと首をあげられますと、どうでせう、それが松子様ですの、あらつて申した切りただ茫然としましただつて松様の御實家は、そりやわ下女も五人居りますもの、お洗濯はおろか、ハンケチ一枚もお手づから洗はれた事がありませんのでせう。私びつくりしたのですよ。マア〳〵と奥へ通されてお茶菓子のおもてなしにつれて伺ひますと、お姑様が大變お悪く、それがヒステリーなので下女も皆逃げ出しますのでついこん



な水仕事までいたしますのよつてひゞの切れたお手を見て仰しやいます。でもほんとに感心ですわ、そんな御病人の看護から、廣いお庭お家の整理をすつかり遊ばして、お料理から何からすつかり一手でやられます御うでまへ、それに御不足一つ仰しやらず日々つとめて入らつしやいます。私なんか到底まれも出來ません。否、下女が二人以上で老人なしでなければ嫁に行かぬなど仰せらるゝ方に、松様の爪の垢でゝ煎じてさし上げたいのですわ。

それに引きかへてノンキな蝶様のマダム振り、はるばると大阪より東京へ御嫁ぎ遊ばしてすぐに御主人様は海軍の御方で横須賀詰におなりなすつてからは、夫婦に下女の水入らず、毎日〳〵子供のやうな騒ぎです。御自分で私の家庭はスヰートホームよなんておノロケ遊ばすの。可愛いですよ。で時々大阪宵が出て、そんなことおりやしま

へん』など仰しやろさうで、やさしい旦那樣が語學の先生でおけいこです。航海の時でも毎日おはがきはいふまでもない事おみやげの多い事もびつくりします。そして何かいふと『蝶さんの好きなものだから』と仰しやいます。ですから蝶樣も二言目には、やどが〳〵と仰せられますの。私『やどが夫人』と申しましたの。そりや何方でもあきれておしまひ遊ばす位猛烈ですの。私なんか三度に一度は負けすにと思ひましても駄目、さてとなると、口から出ません。クラスメートの評判奥樣です

いつかも御宅へ伺ひますと、御二人樣でおもてなしがうまくつい長座してしまひました。日曜とか祭日とかはきつと御不在。御二人樣逗子、やれ葉山と御散歩。それは〳〵お樂しさうな有樣ですよ。ほんとに海軍の御方は奥樣大切に遊ばすのですもの。私なんかいつもさう申してやりますの。私此度生れた時は海軍の方に嫁きますよつてね。だつてほんとにやどほどかまはぬ人も少ないですよ。

石竹の意匠





和歌

一等

○ 麹町　小山ひで

温泉の宿に人はづかしき旅の朝ひそかに二人はゝゐまれぬる

評、新婚旅行の歌なるべし。

二等

○ 島根　青柳秀子

赤き帆の金絲の獅子は落日に今もえたてり荒海の上

評、勇健限りなし。

二等

○ 川越　貝谷むら子

逝く春は小さき胸にたゞひとつ甘き愁を殘して去りぬ

評、甘き愁の語面白し。

三等

○ 本郷　山本時子

丸窓のともしびゆれて降る雨の若葉薫する初夏の宿

評、美はしとも美はし。

三等

○ 三重　角田千代子

春怨の頰につめたきみだれ髪つとかみしめて窓の雲見る

評、淋し。

三等

○ 近江　はざくら

音もあらく降りしきる雨のかゝる時我が世の夏は立ち初むるらむ

評、調健。

秀逸

○ 大阪　本山綾子

寂しと見しかの彩雲に思ひ乗せ君に送らむその術もがな

評、着想の奇を取る。

○ 四阪島　渡邊梅子

伺候する京は五條の橋詰に月はあけがた郭公鳴く

評、技巧を極む。

○　横濱　て　い　子

散る花の恨をのせて草隱れ逝くこと逝き春の水かな

評、逝くこと逝きの辭、能く情春の意を歌ひて餘情あり。

○　越後　吉田さち子

つくまりの音もかすかに聞ゆなり花散る里の春の夕暮

評、筆調の流麗を極む。

○　横濱　高城てつ子

波あれて家一しきりゆらぐ時上總の山に夏の雲はしる

評、跌宕。

○　三河　み　ど　り

亡にし兒の乳房さぐると思はれてうまいかぬ夜を時鳥鳴なく

評、餘哀同情するに堪ゆ。

○　備中　圓山愛子

寥潤の灯影うすれて繊撞にたゞよふ春の淡き悲み

評、淸婉。

○　熊本　ふ　み

都李花散るかたはらに櫻咲く若き不安の春の風吹く

評、若き不安の語妙。

○　分　工藤小草子

戀しさをしゆちんの帶の下にして嫁くやおぼろ夜桜の花のみち

評、下句殊に面白し。

○　札幌　四方直子

ごむまりの氣ぬけしやうにわが胸の彈性今あらずかくて春はゆく

評、遺辭斬新。

佳作

○　東京　う　た　子

君を戀ふ歌かきのせて緋ぼたんの花ながしやろ春の暮かな

○　横濱　小豆澤しげ子

ほとゝきす淺間の山は紅々と空に火を吐く夕まぐれ時

○　山形　千　枝

内海の女波外海の男波とがさゝやきのせてゆく帆かへる帆

○　青森　南たけ子

いつのまにまつききぬらんあしびきのやまほとゝぎすいまなくなる

○　福岡　綾戸あさを

若葉せる合歡の木陰に風立ちて瀧の飛沫に虹現はるゝ

○　横濱　原　靑　瑠

わひすみの身にうらかなし夕くれの雨になやめる緋牡丹のはな

○　麻布　濱部惟子

椿さけどあやめは咲けど若き葉の眞白きおゆびいや細り行く
○　　牛込　金坂文子
神代よりひかりつたへしかゞみこそみ國をまもるたからなりけり
○　　本郷　横田佐久
紺碧の湖にたゞよふ白鳥のせびらにかをる初夏の風
○　　富津　町本紫
鴨川の水に散りうくはな見れば都の春もいまか行くらむ
○　　東京　渡邊房子
木の間よりかすかにもるゝ琴のねのねしなつかしき春のくれかな
○　　牛込　平塚白百合
テキサスは花げし多し初夏の菖蒲花さくふるさと戀ふ
○　　備前　和田纖子
萬千の緋牡丹の中を絹日傘の少女歩めり公園のひる
○　　仙臺　野末菊子
南北違ふ學や異なれど眞につむ道はかはらざらなん
○　　門司　新ぐさ
病める子のかわける脣をそとしめす藥のしづくよ逝く春の宵
○　　名古屋　ますみ
下京に人は居ませり行く春を病みて別れし古里の家
○　　下谷　佐藤冬子
いさゝ川春のながれのさゝやきに背になきし子も今ねむるらし
○　　東京　中山和子
そよ風の花をめくれば枝とふたさゝやきあひてはるは散りゆく
○　　小石川　下田有喜子
汝来ていざひらきませうき歎のひそめる我の胸のとびらを
○　　福岡　山崎たつ子
菜の花にこし方の月のおもひ出のうすき悲しみ去りしあへぬかな
○　　大阪　湯淺稲子
いさり火もかすみにふけて春の夜の月にこぎ行くあまのつり舟
○　　大阪　野村雅子
ほろ〳〵と花のちり来るよど川のながれにそひてふれくだりゆく
○　　本郷　岡角敏子
春の日はのどに讀みぬぬれ縁に浮世繪を見る淋しき女
○　　信濃　石田繁子
繪馬堂の落葉そゞろ七年の昔かたるよ人の名我か名
○　　栃木　波多野喜子
今日もまた赤き絆に結ばれし十九の胸のかなしみを知る
○　　信濃　松島ふみ枝
ほの紅く林檎の蕾ふくらみぬわが嫁ぐ日の間もあらぬかな
○　　芝　折田香代子
渡舟来るを待つまの手すさびに柳の糸をむすびてもみん
○　　丸龜　白露女
さらでだに蛙の聲のいふせきになほ一入の雨のあしかな
○　　宮城　沼倉雅子
只一人そゞろ心に彷徨ひぬ星のよき夜の葉櫻の下
○　　麹町　齋賀琴
廣き野になき四つ葉をばさぐることはかなきわざと知りつゝもなほ
○　　京都　川島花枝
五月雨のそぼふる中を吾が乗れる車の音の輕き悲
○　　京都　福井いと子

時鳥なきてよぎりぬ有明の池しづかに白みゆく空
○　本郷　文子

紫陽花の露もたわゝの花蔭にネルの从衣のほの白う見ゆ
○　美作　水江新子

合奏は淋しき音して終りけり濡れし瞳のひたとあひつゝ—
○　小樽　青子

さめ／＼と音忍びてわれに泣く子のおとろへや夕に酬して
○　山口　緑行美智

逝く春を一室の中にこめられし狂女の笑みのすさまじきかな
○　大阪　寺西八重子

灰色の雲間よりふと漏れ出てし鋭き斜光に森雀立つ
○　淡島　宗原美津子

片言に父の名を呼ぶいぢらしき我が愛し子も五つとなりぬ
○　馬島　星とめの

春の日の暖簾くゞれば簪の落ちてひゞきぬ青きたゝみに
○　麻布　藤井常子

牛若のありし昔を想ふかな五條河原の夏の夜の月
○　大阪　のぎく

入日さす大井川原にさをさしてくだすいかだに散る櫻花
○　京都　初枝子

いさゝかの振舞にだに女なるよと祖母の訓へのさびしかりけり
○　丹波　関みさを

靜泉諸の匂ほのめく絹足袋や君と花みしよきこの形見
○　大阪　北村晶子

うらおもうある冊なれども君とわれつゆいつはりの無きぞ嬉しき
○　横濱　佐野孝子

みどり子の母の御胸にやすらかに寝むるが如き海の静けさ
○　浜花　桂枝

何と無く氣もおちつきて雨の日は文見るによし歌よむによし
○　横濱　野の花

そらとなりたゞよう花のほのかをり春の夕べの湯がへりのみち
○　山梨　田中はま子

わが身てふものもおぼえずゆられ來しその夜に似たり夕月のかげ
○　北海道　つぼすみれ

八幡山峯に嵐の音絶えていてふの檜ふくろ鳴くなり
○　朝鮮　瓦本美都子

何事も只何事も然と見てわれは明日より笑みて暮さん
○　深川　佐久間貞子

悩ある胸とも知らで孩子の鬼事せんと袖にまつはる
○　伊豆　加藤鈴子

青き雨まなくひまなく降りしきりほとゝぎす鳴く五月となりぬ
○　天草　しら菊

青すだれ美し人やおはすらむほのかに薫る衣のそらだき
○　伯耆　錦城さち子

泣くべきや笑ふべきやのそれにさへ人の面見る日かげの身かな
○　川越　高瀬逸緒子

昨日まで秋に置き君の文今日は憎しくもかくしわずらふ
○　鳥取　安達元子

のがれ來てわつと泣き伏すあつまやのひさしにもるゝ片割の月
○　赤坂　中川美き子

儚年わび積日數ずと生れしや心淋しや相會はずして



俳句

天

ものに慾ふ眼をやれば庭に陽炎へる　　肥前　隈部よし子

地

夏近き水面抜づる柳哉　　横濱　稲毛たき子

人

茶の花の宇治日和とて曇りけり　　新潟　東樹常子

秀逸

松江　長澤きみ子

日盛や野飼の駒の脊光る

三河　みどり

満山の景趣彩る若葉哉

麻布　鈴木喜恵

逝く春の名殘雨蛙惜むらん

神戸　森中かず

行く春を縁なき姉の蠶飼哉

東京　高木姫百合

櫻堤とて名所や土筆

孔雀病むでかつ散る櫻靜かなり　　前橋　登志子
妹山の青山戀しき蠶かな　　新潟　東樹末子
惡寒にもの憂きな野焼雨とこそ　　長崎　隈部ふじ代
蛙なく窓近く遺稿編みにけり　　旅順　山本やす枝
初夏や柿の葉もれる日青し　　大阪　かつら子
名所見物名殘る餘日を鳴く蛙　　相模　三橋靜波
大文字の傘干す庭や春日和　　兵庫　賀堂ちよ
外科室へ通ふ廊下や木の茂り　　鹿兒島　山下とよ子
名僧の御来と聞や桐の花　　芝　藤山藤子
はり板のさらさのうへや赤とんぼ　　山梨　櫻井糸子
米買ふて歸る茂りや山の坊　　出雲　長崎百合子
夕暮の空に雨氣持つ五月かな　　後志　鈴木善子
灯ともして牡丹見とるゝ女かな　　信州　戒能澄子
白き蝶に紅してはなつ妹かな　　山梨　片澤黛く子
子ら遊ぶ蚊帳釣草の露涼し　　廣島　小松さよ
霧の宵月の淡や時鳥　　埼玉　ホワイトリリー
町内に掃除のふれや夏隣　　赤坂　佩花
長江の架橋工事や夏木立　　伊豫　有田百々代

寢顔や洗衣干る留守の家　水戸　森山花子
竹の皮散る寂院の月夜かな　廣島　新見朝代
蜘蛛の子の亂るゝ罌粟の微風哉　山城　白濱子
姿見に映る牡丹の白き哉　茨城　楊箸照子
躑躅咲く中に野風呂の煙りかな　新潟　東樹賢子
黒欄干に衿のつめたし牡若　栃木　波多野よし子
黄沙吹く煙動かぬ春日か郷　豐前　近藤花子
風にゆらく横岡の灯やなく水雞　島根　登志子
翡翠や水に影ある雲の月　深川　大井學
失せものを探す灯に飛ぶ蛾かな　肥前　隈部やすゑ
湖近る廣帆の舟や青嵐　横濱　佐藤曽子
初逢駈くる栗毛の駒や青嵐　横濱　佐藤秀子
藤咲て訪ふ人多き野寺かな　本郷　うた子
永き日を讀書にあきて散歩かな　府下　神谷初子
隔々の胸掻き亂れ子規　府下　赤羽みどり
鶯の啼く音古りけり竹の秋　藤枝　山内貴代子
白蓮の香に立つ朝の曇り哉　福島　佐々木よし子
海近き山家に住みて夏降り　神田　土屋ゆき子
青葉して床しき家はかくれけり　芝　和山まさ子
濱音もしづかに霞む小島かな　廣島　香川玉代
青簾遠篁を隔ふ離亭かな　信濃　竝々子
朧夜やすれ違ふ人の影優し　東京　竹村ほがら
琴の音の簾もるゝや風薫る　岐阜　今山ちゑ
春雨見て歸省へり花の雨　播磨　吉田輝子
近江路へ旅する人や青嵐　本郷　城本貞子

手荷物を枕に旅の宿寢哉　紀伊　岡所なみへ
落陽に鐘長うして春暮るゝ　福島　星　とめの
寂然と闇聞く夜半の落葉かな　新潟　渡邊りよ
ほのぐと松に聲あり郭公　越後　櫻井こう
半よぶ聲は女か夕狹霧　熊本　鳥居須磨子
夏草や野に落武者の塚一基　千葉　星野絹子
百金の蘭を藐めけり柚が家　旅順　田中きよ子
風光る湖畔の茶屋や野料理　三重　角田千代子
蘇刀の試合す園の牡丹かな　越後　東樹初子
吉野山御帝の帳に落花かな　小樽　小田てつ子
百合の香に微かにもるゝれいき哉　奈良　萱部美那子
新緑や朽ちたる門の貸家札　金澤　土谷靜波
竹杖に蜂越す日の暑さ哉　廣島　古宮靜江
花の埃吹き込んである座敷かな　備後　理上つる子
櫻咲く園美はしう暮惜れり　神奈川　成岡民子
椿雨や君を忍ひつゝ夢に入る　北豐島　大濱勢い子
霧深き旦の灣や蜜見船　横濱　鈴蘭
日盛りや蛞の衣匿く委れ変　牛込　三橋こう子
山寺の鐘朧ろ月朧かな　三河　山田鈞子
奥の間の丸行燈や青すだれ　近江　草橋貞志子
蛙なく宿なるよまこと瓶あらぬ　肥前　隈部よし子
茜實の粟津に歸る夕哉　本郷　原　琴子
刈束の菖蒲に光る螢哉　紀伊　上田まつへ
螢見や我れ人妻の身となんぬ　茨城　春野ひろ子
ながめ雨に紅牡丹ちるうらみかな　札幌　俣野恭子
南窓に稚兒の晝寢や風車　四淡島　渡邊梅子

お花の師匠

家庭の娯樂としては今日最も流行を極めて居るのは生花でございます。普通の家庭では、娘は大抵花の師匠のところへ通ひ、又一寸良い家庭になりますと、折々自宅へ出稽古を頼んで、奥様からお孃さまから御隱居様までが一生懸命に稽古をされると云ふ風ですから師匠はなか〳〵繁昌のやうでございます。

今日東京で流行してゐる流派は、古流、遠州、池の坊などですが其他の流派をも合して市内に何れ程の生花の師匠があるかと申しますに、專門と內職とを問はず兎に角看版を懸けて弟子を取つてゐるのが平均一町內に三軒位は確にあるといふ事ですから、東京をお江戸時代の八百八町と極く內輪に見積つても、二千四百二十四軒といふ多數に上ります。そして其の內には一家で二人も三人も免許を得て居るところもあるから、いくら少く見積つても三千人は下りません。此の多數の師匠が少くとも二三十人、多いのは二三百人の門弟を持つてゐるのですから、其の盛んな事が分りませう。

一週一回の稽古で月謝が大抵一人一圓位、それから出稽古となりますと、最少額が一回二圓位で、家によつては車代をも出し、又時刻になれば晝飯迄も出すといふ風ですから。師匠の生活は一寸好さゝうですが、交際費が却々かゝるさうで、傍で見るやうな氣樂なものではないといふ事です。師匠は大抵婦人ですが、男子の師匠もちよい〳〵あつて、先づ七分三分位の割合だと申します。弟子も略々同じやうな割合です。

師匠になるには何年位かゝるかと申しますと、人に依つて一槪には申されませんが、大抵五年位はかゝるやうです。其の間に初傳、中傳、奥傳を三期に分けて授かるので、其の都度一卷の秘傳書を家元師匠から貰ひます。其の卷物の傳授料は七五三の緣起の數によつて初傳は三圓、次が五圓、奥傳が七圓以上なさうで、其の間に名號、齋號が授けられるのです。名號は師匠の名を一字授かるので、これにも前に準じて謝金が要ります。次いで齋號を貰ふ時にも其の通りです。

此等を殘らず受けて何々齋何々と名乘る事が出來るやうになつて初めて師匠が出來るのです。其の卷物といふのは、口傳を筆記したものを又寫したもので、其中には文字を知らぬ筆工が書いた誤字だらけのものがあつて、そんな物を一家の重寶として大切に秘藏する者も尠くないさうですが、目下或る一派では夙に此の點に留意して、誤を正して之を版本としやうといふ計畫を立てゝゐるさうですから、それが出來上つた曉には多少面目を改めやうと思ひます。

批評眼の養成

西洋婦人の常識教育

法學博士　井上　密

△人格の尊敬は發展の基

「女子を尊まざる男子は開明に赴くことなし、社會上最も適當したる人間の行動を知らんと欲せばこれを貴婦人に問へ」とは詩人ゲーテの言である。私は此の文句を讀んだ時に、少からず驚いた。で最初洋行した際にも「ナアニ西洋は女尊男卑だからだ、其んな馬鹿なことがあるものか」と思つて居た。ところが滯歐日久しきに及ぶと、次第に自分の最初の考へが間違でありゲーテの言葉が道理であるといふことが判つて來た。如何にもその通り、婦人は尊まねばならぬ。尊んで始めて婦人は發達する。譬へば美術を發達せしめやうと思へば、先づ美術其物を尊敬せねばならぬ。商工業者の人格を高からしめやうと思ふには、矢張りこれを尊敬せねばならぬ。ナニ商工が、ナニ商人がと輕蔑して居た日には、到底發達する見込はない。草木とてもその通り踏み躙つてしまつてはとても伸びはしない。矢張それには垣を結び、肥料を與へ、手入をしてやらねば、花笑ひ果實のみのる時は來ない。婦人も同じくこれを發展せしめやうと思へば、先づ尊敬するが第一である。婦人が發達せねば、國民の過半は仕事の出來ぬ下等な者ばかりで、國家の勞働力が減ずるのみならず。又健全なる子を生むことも出來ない。從つて自然男子も開明に赴かぬといふ譯になる。

△常識の優れた婦人

それから第二の「貴婦人に問へ」と言つたことも、だん／＼上流婦人に接するに從つて僞でないことが判つて來た。歐洲の貴婦人は我々が想像以上に高い思想と能力とを持て居る。男子よりは遙に高いと言つても決して過言でない。專門的智識に於てこそ男子には

劣る、常識になると女子の方が遥に上手である。これはどういふ譯かと云ふに、歐米は自由結婚で、相當の年齢に達すると皆宴會の席に出で適當な配偶者を自ら選むことになつて居る。娘ばかりでなく、兩親も亦宴會の場に力めて娘を同伴し、娘に自由にして且つ眞面目なる選擇をさせる。丁度十一月頃から三月頃迄がその宴會季節である、即ち宮中には大宴會があり、個人間には知己朋友の招待が頻繁で諸方で盛んな宴會が催される。こゝで未婚者はそれ〴〵配偶者を選むのであるが、元來人を選ぶといふ事は、西瓜や唐茄子を選ぶのと違つて、人間の一番むづかしい仕事である、一季半期の雇人でさへ却々思ふやうに行かない。況してや一生を托すべき良人を選むのであるから、餘程自分の批評眼が高くなければ其の取捨は出來ない。且つ又此人はと思つたところで自分の才能や人格が低いやうでは、相手の男子が應じて與れない孰れにしろ、こゝは大いに修養をしてかゝらねばならぬから、皆一心に人格の向上に力めるのである。西洋婦人の常識が男子に卓越して居ることは、即ちこの理



淺草公園の一部

由に基くのである。

△結婚の要件比較

それから西洋では婦人の容貌の美醜は結婚條件として餘り重きを置いて居らぬ。女の美しいのは當然の事としてある。西洋の婦人は相當に身綺麗にして居るから、上下の相違こそあれ、總體に美しいので、日本のやうに見るに忍びぬやうな醜婦は稀れであるから、即ち日本の樣に美醜の條件がそれほど有力ではない。即ち容貌よりは財產、財產よりは思想、といふ順序になつて居る。成程財產も隨分有力な條件には相違ないが西洋人は現代の日本人の樣に金錢慾が活動して居ない別して此頃では財產を標準とする者は劣等な品性として賤められて居る位である。そこで第一の要件は矢張り人格である、擧動の高尙なこと、思想の立派なこと、調子の好いこと紳士たるの體面の立勝つてゐるのが目指されてゐる。既にかういふ傾向であるから隨つて婦人の思想といふものが中々高尙である。近世の文豪の作物を愛讀し、殊に旅行記などを盛んに讀んで社會の風俗好尙に通じ、又人々の心理作用を巧みに解せんことに力めて居る。これを以て自然頭腦が明敏になり、機微の間に、各種の場合情勢を察する能力が備はつてゐる。一寸お話して見ても日本の女のやうに不調子なことはない。迂濶な事はない。よく行屆いてゐる、その上相當な財產を持つてゐるから、自然夫に對して無意味な服從はしない、道理ある自尊心を持つのである畢竟尊敬せらるゝ丈けの價値を有して居るのである。

△昔氣質の父兄

顧つて日本の婦人を見るに、大分發達したとは云ふものゝ未だ〳〵幼稚である。成程都會の婦人は相當の敎育を受けて發達もして居るやうだが、地方に行くと小學卒業程度の婦人がザラにある。まだ非敎育主義を唱ふる父兄も多いのみならず、高等敎育を卒へて出た者でも確りした所は些もない。人の前へ出ても無暗に顏を赤くしてゐるといふ風で、如何にも心細い譯であ

る。どうか今少し毅然として主張すべきは主張し、枉ぐべからざることは何處までも讓らぬといふやうな確固たる精神を持て欲しい。生意氣と云はれるだらうなどゝいふ懸念は要するに皮相のことである。さう云ふことを心配する暇に確り修養して家政を整理することを考へた方が宜しい。彼の花を活けるとか、茶を立てるとかいふやうな事に苦心するより、馬鈴薯の値段でも調べて置くが好い。薄茶の立てやうに頭を惱さうより、牛肉は何う煮たら旨からうかと考へた方が尤も必要である。

△西洋婦人のバザー修業

西洋の女子教育は餘程行屆いて居る。如何にして巧に買物をすべきかと云ふやうな事項が家政科の中に置かれてあつて、無用な物を買つてはならぬのは無論のこと、有用な物でも、何ういふ品を何ういふ風にして買ふべきかといふことを研究する。そこで一家を持つた細君達も亦毎日バザー（勸工場）に出掛けて、何品が何程で買へるか。この椅子はこの卓子よりも便利であるとか、彼の人に進物をするのは、この器物が一番よからうと云ふことを平素考究して置く。而して必要の生じた時に兼て見て置いたものを匆々と買つてかへる兎に角家政に實を入れて、利害得失を判斷するの能力はよほど深く養はれてゐるのである。

△消極主義の經濟

それから婦人の職業に就いて一言すると日本では未だ女子が進歩して居ないから、獨立の從業者も少ないが、西洋では盛んに職業に從事して居る。之れも羨しい事である。今假に日本の女子も西洋と同樣に働くものとして考へて見ると、日本の人口は約六千萬あるから、其の半分を女と見積ると、三千萬人の活動力を增す譯となる。之を金錢に積つて一人一ヶ月十圓宛として三億萬圓、一年では少くとも三十億圓を下らない然し子供や老人もあるから　更に二分して一千五百萬人としても、十五億圓といふ大した額である。此を從

來の女が些も仕事をせぬ時と比べると、十五億萬圓は唯儲かる勘定になる。國家の財政上から云つても、又一家の經濟上から云つても、夥しい利益である。日本の婦人も主人の稼いで來た金を儉約して使ふといふ消極主義の妻君にばかりならずに、積極主義の妻君になるが好い。

△職業は性格を高める

日本では、女子の職業としては、學校の教師、郵便局の事務員、電話交換手、停車場の出札係、



宇治の浮島

或は女工等で、未だ極く少ないが、獨逸あたりでは商店の賣子は殆ど女子の獨占で、其他小中學の教師でも、女工でも、日本とは違つて皆相當の地位まで進んで居る。中にも目覺しいのは店の帳附(簿記係)で、何んな店でも一人位は必ず居る。月給は普通五十圓。少し大きな店になると百五十圓も取る。それに婦人の職業は單に經濟上の利益ばかりではない。性格を造る上に頗る必要がある。何故かといふと、獨立せぬものは自然卑屈になる。意志が薄弱である。日本

の婦人のやうに、財產はなく、職業はなく、良人に養はれてばかり居ると勢ひ卑屈になり易い。此頃歐洲諸國でも女の職業の盛んなところでは子供の預り所がある。中流以下の共稼者が、朝出て行く時に子供を預け晚には連れて歸るのである。子供を可愛がるのは夜分で十分なばかりか、相當な設備をして專門の保母が親切に世話をして與るのだから、生中不完全な家庭で育つより何の位好いか知れぬ。日本も次第に然う云ふ風に發達しやうと思ふ。そして老後を安樂に暮す爲に若い間にせつせと共稼ぎするのである。

△醫師と美術家の心配

要するに、日本の女子も次第に發達して、獨立の境涯に到らねばならぬ「米國の或る大學教授の話に「米國の女學生は段々と男になつて來る、第一屋外體操が激しいので、手と足が非常に大きくなり、肩幅が又恐ろしく張つて來た、それと同時にお臀が次第に引込んで來る傾向がある、おまけに顏の筋肉がだん／＼引緊つて來て、近頃では餘程男に近くなつて來た、此の分で骨格が發達して行つた日には、今に兩性の區別がなくなつてしまふ」と言つて居る。それから一歩進んで或る美術家の說がおもしろい「此の狀態が今後百年も續けば社會に女がなくなつて仕舞ふから今の內に女のモデル丈でも保存して置かなければならぬといつてゐる、笑談のやうな眞面目な問題である。畢竟精神教育の進步の結果、理性が發達して、從來の溫順と云つた風の窈窕美がなくなつたのであらう。然うまで極端に發達されても困りものだが、さりとて日本婦人のやうに引込思案の含羞屋では段々と時の社會に生存が出來なくなるだらう。



解剖して見た人間の羞恥心

源　良　英

△恥かしい時の表情のさま〴〵

大勢の人が、づらりと並んで居る前に出ると、各人の視線が自分一人に集まるやうな氣がして、顔はポッポと灼つて。頭が自づと埀て來る。殊に何か挨拶をしたり、お話をしたりする樣な事があれば、氣の弱い人は口が吃つて來て、甚しくなると何にも言はずに默つて仕舞ふことがある。此際には必ず思想が亂れて來る。何を話して居るのか自分にも分らなくなる、話の筋も滅茶〳〵にこはれて、只斷片的に考が表はれて來る許りでなく、初め話さうと計畫して居つた事が全く出てこない事がある、恰も水の流が一寸堰き止められたと同じやうに、咽喉のあたりに考が引懸かゝつてそれから先きへは出て來ないやうに思はれる。リッアス教授が「羞恥は一種の心理的痿痺で且つ堰止である」といつたのは、實に眞を穿つて居ります。

恥じさが尙烈しくなつて來ると、心臟の鼓動が高くなつて、一々數へられる樣になり、血液は頭の方へづんづん昇つて來て・顳顬の邊は脈管が隆起するやうになり、頰は熱くて燒けさうになり、耳は破鐘を撞くやうにがん〳〵鳴り、頭は痛み出し、目は霞んで周圍が見えなくなり、立つても坐つても居られなくなつて、其處らに穴でもあつたら這入つて仕舞ひたいやうになります。それで子供の頃には、よく自分の顔を衣服や前埀袖などで覆つたり、又は母親の後方に隱れたり致します。大人でも手や袖などで顔をかくすこともあるが。多くは顔を埀れるか、又は他の方に向けるかして、出來るだけ他人の視線を外れやうと試みるものである。

殊に心中何か疚ましい事でもあると、尙更顔を反けるもので、犯罪を敢てする程の剛强者ですら、尙且つ

深編笠に自分の顏を隱くすのは往々見受けることである。彼の自分の女房を殺して其屍體を善光寺に送つたといふ堀某が、東京監獄へ車で護送されて居る寫眞が當時の新聞に出てゐたが、其には手拭で顏を覆ふて居ました。また聖書の中にも、我は我が神に向ひて面を擧ぐるを羞ぢて赧らむ、其は我らの罪積りて頭の上に出で、我らの愆重なりて天に達すればなりといふ句が出て居ります。

大勢の前で歌つたり、又は式辭を讀んだりする時には、往々咽喉が枯れて聲が出なくなつたり、或は聲が震へたりします。この聲が震へるのは發聲筋の一種の痙攣から起るのであるが、筋肉の痙攣は單にこれに止まらないで、手や足の緊張を起すやうな事もあつて、かの演奏會などでピヤノや琴を引く手が思ふやうに動かないで困るといふ話は能く聞く所である。中には種種異なつた癖を有するものもあつて、例へば左右の肩を不均齊に搖すぶつたり、顏を妙な風に振つたり、頸の所を引きつけたり、目を絶えず瞬きしたりする人もある。時としては眞赤な頰の邊に、涙の流れて居るのを見受けますが、この涙は一方に精神上の當惑（くやしいとか苦しいとか）から起るのであるが、又他方には血液の上昇の爲に、網膜や目の調節機關に於ける毛細管內に血液が充溢して涙腺に影響を及ぼすのであります。

△暗闇では顏が赤くなる

恥かしい時に顏の赤くなるのは人類一般に見受けることで、歐米の文明國民や支那朝鮮の民族は勿論、印度の土人、亞剌比亞人、馬來人、ポリネシア人、其他の野蠻民族に至るまで皆恥かしい時に顏を赧らめるのは一樣である、併し亞弗利加の黑奴だけは赤くはならないで、其の黑色がいよ〳〵濃くなるさうである。勿論黑奴でも恥しい時には血液が顏に集まつて來るのは他の人種と異はないけれど、只色素の具合で黑味を增すやうに見えるのである。だから頭などの瘢痕の白い所は赤くなるといふ事である。

所が自身「獨りの時や」暗所では、顏は赤くならないと主張する人がある。有名な沙翁の脚本中で、妙齢のヂュリエットがロメオに對して自身の戀を打明ける所に、女をして斯の樣なことを語らしめて居る。即ち「夜といふ假面に顏を包み――若し此假面がないならば、こんな事をお耳に入れて、女の身の顏から火の出るやうでムりませう」と。斯樣な論斷を下すに至つたのは、一は「獨りの時や」「暗がり」では十分に觀察が出來なかつたからである。今一つは羞恥



心を起す主要條件たる、他人が自分の行動を見ては居ないかといふ事が、此場合には缺けて居るから、從て顏も赤くならないだらうと極めてしまつたのであらう。併かし獨りの時でも他人が自身の事を何とか思つて居はしないかといふ考も明瞭に起るし、又多くの觀察者によると、暗がりでも顏が灼ることは確かであると述べて居るのを見ると、矢張「獨りの時や」「暗がり」の時でも顏が赤くなるのは正しいやうに思はれる。

△恥しい時に何故顏が赤くなるか

恥かしい時に顏が灼つたり、赧くなつたりするのは抑も何故であるか、有名な心理學者ゼームス、ランの說で吾々が逃げ出すから恐ろしいのである、顏が赧くなるから恥かしいのであると說明するのは今暫らく措いて、此の他に尙二つの主なる說がある、即ち一は顏面は常に覆を用ゐないで大氣に曝らされて居るから、顏面を保護する爲に毛細管の分布が密で、且つ其の感じも鋭敏である。だから何か精神的變化が起れば、身體の他の部分に比して顏面の方は充血を來すことが早いといふ說である。併しこの說に反對する人によると手や足は顏と同じやうに常に風雨にさらされて居るが赤くならぬではないかと言ふのである。もう一の說によると、顏面は人類の最も主要な部分で、心の中のことは大抵顏付で分かると云ふ位であるから、他人の注意を最も惹き易いし、又吾々も顏を大切にして、出來るだけ綺麗にして恥をかゝない樣にと平生心がけて居る。この通りに顏面に注意を向くる事が、祖先以來幾代となく續いた結果、今では身體の他の部分よりも、注意を向け易いやうになり、從つて又血液が自然と其處に集まつて來るやうになつたのであるといふ說である。注意を向けると血液が其處に集まるといふ事に就て、ダーウィン氏は常態の場合や變態の場合（例へば催眠中に或一局部に注意を向けよと暗示を與へると血がそこに集まりて來る樣なことの）種々な實例を擧げて說明して居る、併し私は何れの說にも夫々一面の眞理があると思ふ、顏面は單に風雨に曝らされる許りでなく、手や足などゝは丸で比較にならない程、非常に重要な諸機關を具へて居て、尙其の上に身體や精神の活動の主權を握りて居る腦髓も其の傍にあるから、頭部に於ける毛細管の分布の精粗や其内にある血量と精神生活とが非常に密接な關係を有つて居るのは明瞭な事であつて、從て又少しの感情の刺戟があつても、直ぐに此等の毛細管内の血量の增減に影響するのは當然の事と思はれる。この通り顏面は大切な部分であるから一面には他人の注意の焦點となるし、自分でも顏を大事にして居るので、容易に注意を其方に向けるやうになり、從て又血液も其方に集注し易いやうになつたらうと考へらる。

官邊事故

最近の國家問題

△施療救濟の協議會

曩きに聖旨を以て御內帑金百五十萬圓御下賜の處分に關する協議會は去月九日首相官邸に於て開かれ出席者は桂首相を始め平田內相、東京、大阪、橫濱、神戶、名古屋に於ける實業家約八十餘名にして、桂首相及平田內相は各一場の演說を試みこれに對し澁澤男は來賓一同を代表して、鄭重なる挨拶を述べ、尙は今回の計畫が我邦現在の狀態に於て尤も機宜に適せる所以を詳述して、贊同を表して、就ては該計畫を遂行せしむる爲め各地方等に資金を集めしむべく、夫々世話人を設けたしと述べて結び、夫れより食堂を開き、一同晩餐を共にしたる後、別席にて種々協議の結果東京二十名、大阪十名、橫濱、名古屋、京都、神戶は各五名宛の世話人を設くることに決したり。

△平田內相の演說

▲聖恩洪大　本年紀元節に當り桂首相を御前に召されて下し給はりたる聖勅と云ひ施療救濟資金の御下賜と云ひ聖恩の洪大なる洵に感激に堪へざる次第なり

▲救濟事業の施設　救濟事業に就ては政府に於ても夙に其必要を認め專ら之が指導督勵に勉め其施設の優良なるもの並に發達の見込あるものに對しては獎勵金又は助成金を下付して事業の普及を期しつゝあるも之を泰西諸國に比すれば尙著しく遜色あるを免れず即ち泰西諸國に在ては各種の救濟事業も大に發達し殊に貧民患者に對しては或は公費に依て自宅救療の道を開き或は入院救療の便を與へ或は慈善團體其他富豪の寄附等に依りて多數の施療病院も建築せられ其他各種の施藥救療の方法に依て療病の道を得せしむる等公私共に專ら其力を竭しつゝあり又死亡統計の上より見るも現に英國の如きは人口千人に就て僅に十四人獨逸に於ても同じく十八人に過ぎずして漸次減少の傾向を示しつゝあるに拘はらず我邦の死亡率は尙依然として二十人內外を算し毫も減少の傾向なし是等は必ずしも公私救療事業の施設如何にのみ關すべきものにあらざるも救療事業の關係する所少からざるは固より言を俟たざる所なり

▲恩賜財團濟生會　施藥救療資金の御下賜に就ては窮民を御軫念あらせらるゝ大御心の深きに感激すると與に朝野力を勠せて最良の方法を竭し以て聖旨の貫徹普及を圖らざるべからず右に就ては總理大臣より演說ありし如く御下賜金を以て一の財團法人を設立して之を恩賜財團濟生會と名け之に有志の資金を加へて汎く救療の實を擧げんことを期す同會の組織に就て其大體を述ぶれば財團の總裁として皇族を奉戴し顧問會長副會長を置くの外專ら事務處理の任に當り

財團を代表すべき理事を置き又重要の案件を審議する爲め評議員を設け本會の事業に賛同する人々の中に就き各方面より選定せんとす　又本會の事務を翼賛する人々は之を會員として永く其誠意を記念し其協力に由て本會事業の大成を期せんとす

▲濟生會の事業　本會の事業は大體之を二つに分ち即ち療病院の設立と施療券の配付とに依り汎く全國各地に救療の普及を圖らんとするなり言ふ迄もなく都市に在りては窮民の數も多く其生活狀態も概して困難なるが故に樞要の都會地には成るべく療病院を設立し度き考なるも一時に其運に至らざるに依り特に必要なる地に漸を以て之を設くることとし又全國に亘りて汎く施藥救療の普及を圖らんとするには種々の方法もあるべく隨て十分研究を要するも先づ今日に於ては適當の標準に依りて施療券を各府縣に配付し窮村僻地に至るまで普く惠恩に浴せしめんと欲す

▲施療券の配布　又施療券は之を各地に配布し各府縣の赤十字社病院、公私立病院、醫師會又は開業醫等に委託して診察治療を行はしむる考へなるも其施療を要すべき人員に就ては乍遺憾全國患者の統計なき爲之を推定すること甚だ困難なり　歐洲諸國に於ても矢張り精確の統計なるものなく獨逸の衞生大家ペンテンローヘル氏の所説を基として計算するに依り今假りに此例に倣ひ死者一人に付患者三十四人疾病治療の平均日數二十日として之を我邦現時一ヶ年の死亡總數百萬人に割當て全國患者の總數を換算すれば三千四百萬人の患者ある割合となるべし乍併此內窮民として施療を要すべきものは果して幾何なるか其要否を甄別するに就ても地方の狀況に依り自ら異同もあるべく一概に標準を定むることは固より困難なるも大體其百分の一を施療するものと假定すれば三十四萬人となる割合なり

▲義金に關する措置　尙終りに一言すべきは各地有志の義金に關する措置是なり此有志の義金は之を中央に集注し一財團の下に管理及利用の方法を講ぜんとす此の如くして之を各府縣に分置せざる所以のものは各府縣に於ける救療を要すべき患者の數は之を豫定すること頗る困難なるのみならず其數も亦年々異動あるを免れざるべく之に加ふるに是を各地に分置するに於ては其資金の間に自から多寡を生じ救療を要する患者と資金とは衡平を保つ能はずして隨て其救療上にも厚薄を生じ地方に依り偏重偏輕を見るが如きことなきを保せず是故に窮村僻地に至るまで齊しく惠恩に浴せしめ全國に亘りて過不及なく公平に救療の實を擧げんとするには中央に於て之を統べ全國各地の救療狀態に基きて年々豫算を立て施療券を配付するを以て最も其方法の宜しきを得たるものと認む

△重大なる精神教育の答案

普通教育に於て祖先を崇び家を重んずるの精神を涵養するに一層適切なる方法如何との文部省の諮問に應じて全國聯合教育會の答案左の如し

一、修身教科書は勿論其他の教科書に於ても祖先を尊び家を重んずるの精神を涵養するに適切なる材料を成るべく多く加ふること

二、孝友和の諸徳は家の觀念と密接聯絡を保ちて之れを教育する事

三、祖先に對する尉慕の念と共に子孫に對する責任の觀念を養成することを力むること

四、生徒をして自家の系圖と歴史とに通曉せしめ家名を重んずるの念を発成すること、

五、家憲家訓等を重んずる風を養成すること

六、生徒をして遺族を重んじ墳墓を大切にし家寶遺物等を鄭重に保存せしむること

七、生徒をして寄宿舎に入舎せしめたる場合には婚嫁葬祭等には歸省せしむる方針を取ること

八、家庭に在りては祖先の靈位位牌を拜禮することを怠らざらん爲め遠隔の地に留學する生徒には成るべく父母祖先の寫眞を携帶して朝夕之を拜せしむること

九、父母長上に對する禮等は勿論婚嫁葬祭及び忌服に關する心得を授け修身教授と聯絡を保ちて其實踐躬行を奬勵すること

十、婚嫁葬祭等の爲め休校したる場合は之を缺席と見做さゞること、

十一、親族間に於ける和親協力の念を涵養し吉凶禍福相扶くる風を助長すること。

十二、個人教育の場合には成るべく其生徒の家系及祖先の事蹟を引用することに注意すべきこと

十三、祖先崇敬の念は廣く之を各家共通の祖先にも及ぼすこと

十四、教師をして我が家族制の長所を知悉せしめ祖先を尊び家を重んずるの模範を示さしむべきこと

△小松原文相の演説

直接教育の要路に當れる諸子の熱心なる盡力によりて近時教育の進歩の大に見るべきものあるを喜ぶ然れども之を以て足れりとせず教授の方法は勿論訓育に於ても益々精勵指導されん事を望む惟ふに教授法の改善すべき點は必ずや數多あらん然れども徳育の方面に於て幾多の改善を加へ道徳上の功果を益々確實偉大ならしむべき様盡力を盡すは最も今日に於ける急務なりと信ず而して國民教育の拠て立つべき所は教育勅語の御趣旨を奉戴し之が貫徹を期するに在る事は勿論にして之を行はしむべき其方法は大に重要なる事なり今回の聯合教育會に際し文部省が諮問したる第一諮問案の如きも其一なり即ち我國民道徳の上に於て祖先を尊敬するは最も重きをなりとす然るに近時動もすれば新教育を受けたるもの〻中には之を輕視せんとするの風あるを見る若し此儘にして推し移り行かば我國民道徳上憂ふべきものあるを慮る宜しく祖先及び神社等に對しては尊敬の念を喚起せしむる様兒童を訓育し然く比較的行ひ易き點より訓育し我國民道徳の念を鞏固にせしむる事を望む云々

廢娼問題

帝國大學敎授
法學博士 プリデール夫人

私は今是非とも日本の姉妹がたの御賛成と御助力とを願ふて、何卒成功したいと切望して居る問題があります、其は外でもない廢娼問題、即ち此頃世間の輿論とならんとして居る、吉原遊廓の廢止請願で御座います。私が外國人の身を以て我敬愛なる日本國の社會問題につき兎角の批評を下しますことは失禮且つ僭越であるかも存じませぬが、併し廢娼問題は世界萬國に於ける緊要なる婦人問題でありまして、唯に日本に於ける目下の急務のみではありません、若し今日本に於て吉原問題が好結果に落着いたしますならば、是は世界萬國を通じての喜ばしい音便でありまして、決して東京市或は日本國民の利害得失ばかりではないのであります。

或人の云はるゝに「日本の婦人は溫順で家庭の幸福子女の敎育には全力を擧げて盡力して居るが、社會問題、政治問題などに嘴を容るゝ樣な生意氣な事は好まない」と申されました。私は日本婦人の斯く柔和にして同情深く、良人及び子供の爲めに犧牲的の生涯を送らるゝことに敬服して居りますが、併し廢娼問題は決して家庭問題、敎育問題に關係のない事ではありますまい。若し眞に國家を思ひ、子女を愛し、幸福なる生涯と、高尙なる生活とを冀ふ人であつたならば、世にも不幸なる數多の婦人が恐るべき罪惡の淵に沈み、のみならず絶えず他人を誘惑して、精神にも、身體にも、又財產にも、大なる傷害を及ぼし、有望なる前途を過たしめ、竊盜、詐欺、情死等無數の犯罪を生み、幸福なる家庭を蹂躙し、妻子眷族を路頭に迷はしむるが如き、日常の出來ごとにつきて、徒に看過することが出來ませうか、昨日は人の身、今日は我身と云ふ諺もあります、何時其不幸は我身の上に降り來るとも圖られませぬ、娼婦の舌は蝮蛇よりも恐ろしいと云つた人がありますが、彼等によりて墮落し、腐敗した人間は、

昔も今も變らないので御座います。其故其子の前途を憂ひ、清淨無垢なる生涯を送らしめんと思ひまするならば、世の親たるものは先つ此世より此恐るべき悪魔の巣窟を撲滅しなければなりますまい、世には往々有理らしい説を傳へて人を瞞着しやうとするものがあります、存娼制度の不徳なることは勿論、之を否定することは出來ないのに拘はらず、巧に言葉を設けて「若し之を廢するならば、密に之を營むもの續出し、病毒を流布し、却て社會を害するに至る」と云ふやうな論旨であります。けれども事實は之に反し英米の如く之を禁止したる國と、佛國の如く之を公許して居る國とを比較いたしますれば、直ちに明瞭判斷はつく事であります、即ち現在英米人の徳を重じ、男女間の關係の整然たるに反し、佛國は風教頽敗して、淫風盛なるに徴しても其の一端を見る事が出來ます。また遊廓なるものゝある周圍が必ず風俗紊亂して、人心の淫靡なるのを見ましても、悪風の四隣に及ぼす影響を知ることが出來ませう、私の生國は瑞西でありますが、ゼネバー」といふ一市にのみ娼妓が御座います、此はナポレオン」一世が瑞西に浸入したる時に設けられたもので、其後此地は恰も佛蘭西に似たる悪風に染むで參りました。

廢娼論の率先者は英國の「バトラー」夫人で、英國が之を禁止したることにつきては夫人の功が預つて力あるものと云はれて居ます、私共もゼネバー市を救ふために屢ゝ運動をいたしましたが、此地の有力者には佛人が多數なりしため、容易に成功いたしませんでした、併し醜業婦救濟につきては幸に好結果を奏することが出來ました。或一婦人は此事業のため献身して熱心に盡力せられました、其結果多數の婦人を改悔せしめ、自活の方法を授け、高潔なる生涯に入らしむることが出來ました、今日本にも慈愛館、救世軍等にて此事業に盡力せられて居るさうですから、私は何卒日本の御婦人方に御同情と御助力とを御與へなさるやうお願ひ申たいのであります。

凡そ此世に於て最も不幸なるものと申ましたら恐ら

く娼妓ほどのものはありますまい、金錢のために一身を束縛せられ、卑しむべき事の犠牲となつて身心共に傷害せられ、人に侮られ、世より捨られ、一生涯浮む瀬のなき暗黒界に沈むのであります。彼等は多く家庭の事情愍むべき虚榮心、青春時の過失永年の習慣等のため、恥づべく賤しむべきものなる事を知らずして此内に陷るのであります、彼等は眞



に此世の罪惡によりて生れた奴隷であります。私共に一掬の涙がありますならばどうして泣ないで居ることが出來ませう、節操を以て稱贊さるゝ日本婦人、家庭のために献身せらるゝ日本婦人同情深い日本婦人は、人道のため、國家のため、家庭のため、子女のため、此が廢止を贊助せらるゝ事を切望いたします、且つ此愍むべき婦人等のために救濟の道を講ぜらるゝことを冀望いたす次第であります。

季節の衛生

二ツの贈物

醫學博士　二木謙三

唯今私は御婦人方に進呈いたしたいと思ふて居る二ツのお土産物が御座います一は病氣の體内に入らぬ法、二は病氣が入つても體内の力に勝たせて健康を害せぬ様にして各々自己の本分を全くする爲には大切なもの即ち腸窒扶斯菌と食物及び腹壓と腹式呼吸法の二種で御座います。

△腸窒扶斯の流行

昨夏より今春にかけて窒扶斯の流行しましたことは近年稀に見るところであつたので、唯東京市中のみにても絶えず七八百名の患者が御座いますと一年を通ずれば數千人の、多きに上りますし、駒込病院に於ては目下尚ほ百名以上の入院者があつて加之のみならず、昨年より今年にかけての流行は比較的例年よりは上流人士の間に多くありました、何故に如此き悪疫が流行したかと申ますと、其原因は種々ありますが、其の内の一は昨年の大洪水でありまして即ち本所の如きは床上浸水腰を没して人々は二階、天井裏等に逃れ、家具食物は流失して僅に救助を他に仰ひでをりました、此時にあたりて手足衣類等の汚水に濕潤するは固よりにして他より運搬する飲水食物等をも同じく汚水に穢れたる手指若しくは器具を以て之を受くるの止むを得ざる次第でありましたが、洪水は便所塵溜其他の不潔なる場所を構はず氾濫して參りますので、其中には有害無害の無數の黴菌が含有してをります、窒扶斯菌は氾濫の汚水に於ては四五日間以上生存し得るのでありますから、其間に人體に侵入し不幸にも發育する動機を與へられますならば十數日を經過して漸次に體内に增殖して茲に病的症狀を呈するに至ります此の菌が侵入してより發病に至る迄の間即ち所謂潜

伏期は大抵二週間でありまして昨年も氾水後十四五日目より俄に窒扶斯患者が増加したので御座います。

△傳染の動機

されば如何にして傳染するかと申ますと、窒扶斯菌は決して外氣より傳染するものではない、即ち呼吸皮膚等より感染する恐はないが、必ず口より侵入して體内に増殖するのであります、されば食物、食器、指手の消毒が十分に行はれて居りますなら、決して傳染の恐はありません、其故水道下水の完全に設備せられてをるところに、此病疫は發生しないのであります、現に西洋の最も衞生設備の完全した都市に於ては醫學上の研究材料として學生に腸窒扶斯患者を見せたいと思ひましても、其を得るに困難であると云ふ位の所もあります、併し現今の日本に於ては到底十數年後でなければ此の如き完全なる設備を得ることは出來ません、其故出來得るだけの力を盡して其感染を防ぐより外仕方がないのであります、されば食物に注意するのは勿論ですが、蠅鼠等は最も傳染の媒介をなすものでありますから、特に注意を拂はなければなりません。蠅は好むで腐敗物の上に集合いたします、彼の小さき體軀には時として無數の恐るべき黴菌が附着して居るのです然も其不潔なる體軀を以て彼は無遠慮にも我々の食卓を侵襲するのであります、私共が彼等を驅除するのは實に當然のことでありませう、また鼠は常に糞便中にある不消化物を食物として居ります、其故其身體には種々なる不潔物が附着して居るのである糞便中には時として窒扶斯菌が居ますから從て鼠の嚙りたるもの又は觸れたる物品には、また之が附着しないと云ふことは出來ない、鼠は只にペストの媒介のみならず蠅と鼠は赤痢や虎列剌又は腸窒扶斯の媒介をもなすのであります。

△菌携帶者

△窒扶斯と食物との關係

蠅や鼠の害毒の外近來の說によれば知らぬ間に極輕い窒扶斯にかゝりたる人や又は一旦窒扶斯にかゝつて

治癒したる人の便又は尿中に何ヶ月も又は時としては何年も窒扶斯菌が出て來ることがあるので詰まり其の人の體中には尚窒扶斯菌が寄生して居ることがある、醫學上では之を「菌携帶者」と名づけますが斯る人の身體の周圍には常に窒扶斯菌があつ、て之れが自然食物等に混じて他の健康者に感染することがありますので甚だ危險なことであります其所で傳染病の病院などでは病氣が直つても窒扶斯菌のなくならない內は退院を許さぬのであります、併し



知らぬ間に極輕い窒扶斯にかゝつて居る人は致し方はありませぬ、其所で蠅や鼠又は菌携帶者によつて屡〻食物、食器を汚染せらるゝ故に傳染を防ぐには第一食物、食器等を注意せねばならぬのであります、前述の如く窒扶斯は食物によりて最も感染しやすいものでありますから、私共が日常要求する食品と窒扶斯菌との關係につきて、研究いたしますことは決して忽にすべからざる事であらふと考へます、先づ此黴菌をとりて、我等日本人が一日も缺くべからざる米飯の上に

置きますならば、黴菌は四晝夜以上即ち此米飯が腐敗して用をなさゞるまでは生存して居るのであります、されば若し蠅鼠其他の者によりて此黴菌が持ち來られたる場合に於ても、また同樣の結果を見るのでありますから、飯櫃の蓋などの取り扱は餘程嚴重にしなければなりません、併し密閉すると云ふのではない、蠅鼠等の侵入を禦ぐのみでありますから、夏時に於て薄蓋を用ふるのは差支へありません、また副食物として第一位を占めて居る魚肉にも殆ど同時間生存いたします併し大抵炙り或は煮て食するのでありますから、熱に逢へば黴菌は死で仕舞ひます、たゞ料理して後更に黴菌の附着せざる樣注意しなければならないのであります、けれども茲に一ッ六ヶ敷い食物があります、其は即ち刺身です、刺身は魚を生のまゝ食するので、特に夏時に於て賞味さるゝのでありますから、最も危險なる食物です、其上肴屋の店先には溝があり、二三尺隔つた處に多くの場合には淺い井戸があつて、井戸は淺きのみならず絶えず溝より汚水がする、其水で魚を洗つて俎板の上に切りかけて置く、蠅は自由に其上を飛び廻つて居る俎板も庖刀も其の水で洗ふ、小僧は他の用事をした手で直ぐ刺身を作ると云ふやうなのは從來の仕來りでありますから、刺身にあてられる人々は澤山あります、上流人士に窒扶斯に感染するのは、宴會などで刺身を食べたと云ふ事から起るのが多いやうです、されば刺身は禁ずべきかと云ふに、刺身は却々大切なもので最も消化よく胃腸の弱き人々には適當なる食物です、其所で吾人は肴屋、料理屋等の衛生的大改良を希望するものであります、吾々は早く改良の實を擧げた店から澤山に肴を取ることに致したいものであります、止むを得ざれば我々は各自調理の際によく注意をいたしましたならば、此危險を避くることが出來ませう、即ち先づ鯛ならば一尾其儘、鮪等ならば大切にて買ひ求め、皮や切口を削ぎ去り中身のみを料理しましたならば頗る安全で御座います。また刺身に附屬する山葵や大根おろしやは多少の殺菌力を有してをりますから、黴菌は十二時間より二十四時間の間に死で仕

舞ひます、併し此時間を經過すれば此等のものは大抵味を失つて、仕舞ひます、大根其他の野菜物は畠より直ちに之を取れば餘程安全でありますが、農夫の市場に運ぶ際、彼等が常に肥桶を洗ふ小川でまた之を洗ひますので、黴菌の附着する恐れが御座います、其故大根おろしなど拵へます時には、能く注意して上皮を剝がねばなりません、併し我々は考へるのです、たとへ刺身や、いかしに黴菌が附いて居つても醤油に入れて食べたら黴菌は大抵死にさうなものだと考へるのですが如何でせうか、所が案外でありまして醤油には黴菌が一晝夜、二晝夜或は三晝夜生存することが出來ますから、刺身は矢張り安全ではないのです從つて醤油は買つて來てから一度煮立てて、後に之を用ふるのが安全でありませう、次に菜の葉等には菌は四晝夜も生存して居ります浸物はゆでたる後に注意して再び黴菌の入らざるやうにしなければなりません。



併し我日本には、幸に殺菌力に富む食物があります、即ち澤庵漬であつて彼は大凡五六時間より十一二時間の間に、窒扶斯菌を全く殺す力を持つてをります、其故之を漬物屋より購求しましても、私共の膳に上るまでには大抵安全な食品となつてをります、澤庵は澤庵和尚が始めて作つたものでありまして、爾來二百六十餘年我日本國民の缺くべからざる副菜物となつてをります、今より數年前迄は衞生學を誤解して澤庵は不消化だなど〻云つた人がありますが。

澤庵には澤庵ヂャスターゼ、大根ヂャスターゼなどと云ふ消化に必要なるものが含むでをりまして、特に穀食をする我が國民には最も必要なる食物でありますす序に一寸申上ますが、上流の社會に、胃腸の弱ひ方々が澤山ありますのは、餘り食物を精撰せらる〻ため纖維素が缺乏するからで、之も誤りたる衞生の一ッであります、

次に又梅干には最も强い殺菌力がありまして、一分二分乃至三分間に窒扶斯菌は悉く死滅します、昔より握飯に、梅干を入れてをけば腐敗しないと云ひましたのは、如此き殺菌力を有するためであつた、又水戸黄門が庭に梅を培養し花を賞し實を漬けて、戰爭の準備になしたと云ふことも、皆理に叶ふたる事であります。

また糠味噌も殺菌力に富むでをります故、其中に窒扶斯菌を投ずると忽ち死で仕舞ます。

又酢も殺菌力に富むでをります、夏には酢の物を多く食すると云ふのも自然の作用でありませう、併し鮨には黴菌を殺すほどの酸味はありません、かつ鮪など魚の附いたものは前述の次第で危險ですが海苔卷、玉子卷などは比較的安全であります。

酒も同じく殺菌力を有して居ますけれども、之は餘り用ふると、人間といふ大な黴菌が死で仕舞ひますから、一層御注意を願ひます。

味噌は醬油と同じく黴菌を殺す力が弱いのですが多くは煮て用ふるもの故大丈夫です、けれども生にて之を用ゐやうといたしますならば、流行時期に限り熱を

加へて後冷して用ゐました方が安心です。

甘酒、牛乳は殺菌力に乏しふ御座いますから、能く注意しなければありません、箸、布巾なども濡れてをりますならば、黴菌は三四晝夜生きてをることが出來ます。

砂糖は殺菌力に富むてをりますから、砂糖の强きものは三四時間で死亡しますが、饅頭の皮、菓子パン喰パン、カステーラパン、の種類は作りたての新鮮なるもの丶外危險であります、併しカステーラは砂糖强く且つ外部に砂糖が結晶して居りますから安全でせう。羊羹、飴等は安全であります、それから又奇態なことは鹽煎餅であります、彼は三十分乃至は一時間位で殺菌する程の力を以てをりますから子供などにはよきものであります又飴は昔より病人子供に與へて無害のものと云はれてをりましたが、之もまた殺菌力の强いものであります。

鹽は最も殺菌力のあるものでありますから、鹽引、鹽漬の肴は大抵安全で御座います、果物は多少づ丶殺菌力を有つてをりますので、外皮を取れば大概黴菌の恐はありませんが、西瓜、甜瓜のみは非常に黴菌を蕃殖さする力を以つてをります、昔より西瓜、甜瓜は蟲の毒とか云つて、之を嫌つてをりました、之は全く古人の實驗より來たりし處のものにて、昔よりの口傳、習慣の間に吾人が學術上未だ發見せられざりし多くの眞理を發見する事があります、家康も五年行はれし法令は捨つるべからずと申ましたが、永年行はる丶物には必ず其間に眞理が存するので御座います、私共が無意味に日常食する食物も比較的有効なる物のみであると云ふことは、た丶偶然ではありますまい。何分御注意を願ひます。

記者曰く右は「二ツの贈物の」一即ち「腸窒扶斯」と食物の話丈けでございます。

猶「腹壓と腹式呼吸法」のお話は引つゞき次の號に記述いたします。(明治母の會五月例會講話)

梅雨前の衣服の整理

宇山祿子

△梅雨前の洗張

季節がいよ／＼梅雨季に近づきました。此の季間に於ける衣服の整理と申しても、私共では、別に是れといふ妙案もありませんが、梅雨の季節になつたからとてさう急には出來ませんから春立ち初むる頃より、用事の隙を見て、ボツ／＼之が準備に取掛ります。今迄着て居た冬服春服の、多少垢づいたものは、一切引解いて、丁寧に洗濯し或は張り、能く乾します。布團なども矢張さう致しますが、衣服などの襟の汚れたのは能く揮發油で拭いて淨めます。布團なども、碌々使はないで、僅に襟の所の少し垢染た位なものは、襟當丈取外して、能く洗ふことにして居ります。毛織物なども、矢張汚れを取つて、能く乾します。

△汚點拔の法に就て

其の中、汚點の出來たものは、ちよつとしたもので常の洗濯で落ちるものは、商人に賴まずとも、家で落しますが、巳に汚點と名のつくものは、到底素人では拔けないものであります。可なり拔いた積りでも、矢張淡く殘つて居て、而かも面積が前に數倍したり、巧く拔いたと思へば、模樣が惡くなつたり、地質を荒したり、などして却て比較的小な染よりは、不體裁に終るのが、常でございます。其故、私共は洗濯法などは大分考究したもので、汚點拔丈は、信用ある紺屋に托して居ります。併し下手な紺屋に托すると、矢張素人のやうな失態を來しますから、其の上手なることを見拔いて、之に賴むのが宜しうございます。

△衣服布團の仕舞方

前申しましたやうに、何れも洗張を致し、毫も殘す所はないのですが、其れが濟みますと、夫々裁縫に取

掛ります。而して裁縫が了へましたら、よし濟まなければ其儘・衣服でも、布團でも、掛物のやうなものでも、夫々日光に中てゝ、仕舞ひ込むのでございます。

仕舞込む器具といへば簞笥・葛籠・挾み箱、長持の別なく其の入物は中側も外側も、能く日光に曝し、程好き敷物を敷きまして、是れに順序能く仕舞ひ込みます。無論衣服でも布團でも、直接に入れますと、汚れる虞れがありますから、相當な敷物又は包物を要するのですが、私は白金巾を用ゐて居ります。假ひ中に包まれたものが清淨でも、敷物が穢いといけませんから、垢のつかないものを用ゐるのは勿論、消毒を要しますから、一度熱湯に浸すことを忘れてはなりません。此の時一枚でも汚れたものが交つて居りますと・他のが五枚でも十枚でも、等しく濕ることがありますから、絶對的に清くするといふことが肝腎であります。



△除蟲の方法

梅雨中は、殊に蟲がつき易いので、前申したやうにして、夫々衣服などを仕舞ひ込む時、ナフタリンを使ふことが流行して居りますが、是れは多くの婦人の嫌がる臭氣でありますので、私共は用ゐません。その代り自製の藥を入れることにして居ります。兎に角、世間では蟲除のことを八釜しく申しますけれども、さう蟲は恐るゝに足りません。畢り清淨に洗濯して、能く乾してありさへすれば、決して蟲のつくものではありませんから、蟲除の藥などに騷がずして、洗濯を能くすべきであります。少しの染があつても、矢張蟲の生ずる本になるのでございます。

△年中の洗濯と土用干

常の洗濯は、餘り垢づかない間にするのが、衞生的でもあり、且つ經濟的ですが、大きい洗濯は四時の移り變りの際、必要であります。梅雨前などは、恰も暑氣に移り變る時節でありますから、一通りすべきは申す迄もありません。

土用干は、梅雨が了つて土用の盛暑に入る時、致すことになつて居りますが、從來の習慣としては、此の時唯一回(一年に)に限られて居ります。是れでは、殆んどせざるに優る位なものですから、手の屆く限り、少くとも時候の變り目にするは勿論、時々天氣の好い日を選んで、衣服でも布團でも乾すといふことを忘れてはなりません。最も簡便有効の殺菌法は、洗ふには熱湯でありますし、曝すには日光であります。

學術講話

思慮ある結婚

これは通俗心理學會第十六回の講演會に於て「優良種族の消長」と題する松本文學博士の談話の大要であります。

博士はまづ人間の精神及び肉體には幾多の相違ある事を說き、その特長を研究して行く學問が起つた事、及び昨年八十二歲の高齡で逝いたフランシス、ガルトンは優良種族學を創設するに至つたが、社會の進むと共に自然の現象を人爲的に矯正することが行はれる事に說き及び、個人の精神と肉體の二方面に著るしい相違がある、この程度の研究が却々面白い。

即ち英國婦人一千に就き其身體を計つた所最短五十吋にして最長七十二吋に達するを發見した、而して其最も多數を占むるのは六十二吋である、更に頭の大さと腕の長さを調べた結果を見るに標準値を有するもの即ち中庸の程度の者が最も多い、更に體質の强弱に就き健康を中央にして其以上を强、强壯とし、其以下を弱、虛弱とし五階級に分つて調査した所男兒二千人中健康者が最多數を占め、强之に次ぎ弱更に之を次ぎ强壯は第四位、虛弱が第五位を占むる事實を發見した。

更に之を精神的方面の特長に徵するに、去四十年度の高等學校入學試驗の成績を見ると、第一部の志願者五千人中各科總計の滿點を千二百點として最低百二十點より最高六百九十點に至る間に分配されたが、是も其中頃に當る三百六十點前後を得た者が最も多かつた更に又之を一部二部三部の志願者に分つて調査すると二部の理工科の志願者が最多の得點を要し三部の醫科之に次ぎ一部の法文科之に次ぐの結果を發見した、以て青年の精神的才能の分配程度を知ることが出來る。

カール、ピアソンは人間を愚、鈍、遲鈍、遲、遲敏、銳敏の六段階に分つて人口二千人に就て研究して居るが、これも亦其最多數を占むるものは中央に當る遲、遲敏の徒であることを發見した、即ち凡庸者流が最も多いのである、フランシス、ガルトンは更に人間を十六

階級に分つて研究して居る即ち純凡を中央にして其以上八階段、其以下八階段に分つて居るが天才とも稱すべき偉人は最劣等の愚者と共に百萬人中に一人位の割合に當りこれも凡人が最多數を占むることを見出した次に研究すべきことは各個人の心身の特質が如何にして現るゝに至つたか、其の原因又は條件である。

思ふに各人に智愚賢不肖の生ずる所以は之を二つに分つことが出來る、第一は偶然的の變異、第二は祖先的の變異である、偶然的の變異は其個人特發の事情で、子孫に長く遺傳するものではない、併し祖先的の原因は子孫の血統を通じて遺傳するものであるといふのが今日の學說となつて居る、親が偉人であるのに不肖の子が生れ、親が凡人なのに賢明な子が生れる如きは則ち前者の例で、或血統の者は引續き長命し、又は智者が出來るといふが如きは則ち後者の例である、近頃盲啞學校卒業生同士の間に結婚するやうな實例も見聞するが、啞同士の夫婦の間には矢張啞の子孫が多いといふのは事實である、是は親の身體上の缺陷が遺傳したのである、白痴者、低能者、極貧者は多く身體上又は精神上の不具者であるが、夫れも祖先傳來の者が少くない。

更に博士は、劣等なる階級に於ける種族と、優等種族との遺傳研究の結果に說き及びガルトンが英國に於ける上流社會即ち王　學　會　員に就て研究したところによると會員の父と會員以外の人の父とを比較研究の結果、會員の父は通常人の父に比して偉大の强さに於て二十四倍なるを發見した、更に其兄弟に就て調査したるに三十七倍の强さを有することを見出したと說かれた。

それから今日の社會に於て優良種族と劣等種族との子孫の增減に就て比較し、前者は後者に劣るの事實を發見して趣味ある優良種族の滅退說を示された。先づ田舍の人口と都府の人口とを比較して見るに、都府の住民は、田舍の住民に比して文明の度に於て進んで居るから優良種族と認むべきであるが、其人口は漸次減退して行く、從つて田舍より絶えず之を補充するの必要があるが、其田舍より補充する人間は如何なる人間

であるかといふに、多くは田舍に於ける最良の種族である、故に田舍には劣者のみが殘ることゝなる、然も其優良種族は都會に移住し來つて自滅する、即ち都會は優良な人間を食つて繁榮しつゝあるのである、英國に於て模範的の都會と田舍とを比較した結果を見るに其後繼者を殘す割合は七十七と百との差がある、故に百年後には都人種の數は田舍人種の半數に減じ更に二百年後には五分の一に減ずるのである。

優良者は何故に衰滅するか是には明瞭なものと不明瞭なるものとの二つの原因がある事を說かれた。彼の野生獸類を動物園中に捕へ來つて時日を經過すると其產率が減ずるこの作用は人間にも働くものと見える文明人と野蠻人と接觸すれば、野蠻人は遂に絕滅するに至る、即ち野蠻人が自然的生活より、文明の生活に移るに從つて凋衰するに至るのである、是れ即ち不明の原因であるが、其明瞭なるものは文明に伴つて行はるる晚婚と避姙との事實である此二つの事實は重に上流社會即ち優良種族の間に行はるゝのであるが、此二つの事實の爲めに優者は漸次減退して行くのである、晚婚者は早婚者に比して子孫の數に於て少く且代と代との間が隔絕するに早婚者は子孫の數も多く代も重なり合ふが故に、其數益々多く、數代の後には全社會は此劣等種族の領有する所となるの理である。

加之ならず上流社會には意志的の避姙法が行はれ、上流の婦人は懷姙分娩等を厭ひ種々の醫藥等を用ゐて努めて之を避けんとするが故に、優良種族は一層減退することゝなる、然るに下等社會に於ては身分や體面を構はないから、早婚も行はれ、人口は非常な勢ひを以て增加する又勞働者中に在つても良工の數は漸次減退して、不熟練の職工が增加するといふ有樣であるから、殘る者の品質は益々惡くなる、之を自然の儘に放任する時は文明社會は滅亡の外はない、優良種族學は是に於てか起つたものである云々。

博士は斯く說き來つて、更に優良種族學の目的に向つて實際上の發展、即ち、人間は思慮ある結婚をなさざるべからずとの結論をされた。

草花培養の樂しみ



△種子の蒔き方

草花は、自分で種子を蒔いて芽を出させ、色々手數を掛けて、蕾から花と次第に咲き誇らせて眺めるのが一番樂しみですから。今年はどうか其うしたいと思つて、態々種子を買つて來て蒔いて見ると、よく芽を出さない事があります。これは種の中に古い不正の品があるからでせう。第一に信用ある店に就て良い種子を求める事が肝要です。そして其の蒔方に就ても色々注意が要ります。草花の種類に依つて、種子に大小があり、又外皮の厚薄がありますが、先づ大粒で外皮の厚いもの、例へばカンナ、夜會草、牡丹、芍藥の類ならば、之を蒔く前に、微温湯に一晝夜浸して置いて蒔くと早く芽が出ます。中にも夜會草、カンナなどは、内部の組織を傷めぬやうに種子の上下兩端を鑢で少し磨卸して外皮を薄くして蒔くと一層早く芽が出ます。又櫻草、サイネリヤ、ペチユニヤ等の小粒のものは、種子を蒔いた儘、上に覆ひ土をかけないで置きます。そして其の上へ板硝子の覆ひでもかけて種子が風に飛散したり雨に敲かれたりしないやうにして置く事か肝腎です。又更に種子の小さいもの、例へば虞美人草、石竹類、松葉牡丹、金盞花等ならば、篩に通した土の上に蒔いて、其の上に土を撒き風雨を防ぐ爲に切藁を掩ふて置きます。コスモス、金蓮花、ダリヤ、菊科植物等の種子も同じ蒔方で、やゝ土を多くかけます。

△變種の作り方

先に述べたやうに販賣してゐる種子は却々信用が出來ぬから、若し少し身を入れて培養しやうとならば、種子を自分で採るに限ります。そして斯樣にすると又一ツ樂しみが増します。それは種子を採る前に、花に人工媒助法を行ふと、次の年には色々變種の出來る事で、西洋では非常に盛んに行はれて居ります。人工媒助といふのは、或る花の雌蕊へ他の花の雄蕊を持つて來て附ける事で其の方法は、花の半ば開いた所を見計らひ、其の雄蕊をピンセツトを用ゐて取除き、後ち其の花が十分開いて雌蕊の柱頭が成熟した頃、之れに媒合しやうと思ふ他の花の雄蕊を取つて來て其の花粉を附着せしめるのです。そして其後數日間は、他の花との自然媒合を避ける爲に、其の花の上へ布などの袋を覆ふて、十分受胎作用を遂げしめ、確に受胎の濟んだ頃に之を除きます。花は大抵一花の中に雌蕊と雄蕊を備へて居るから、自然に任せて置けば

其の花丈けで交配を遂げて、次の年には其の種子を蒔けば前年と同じ花が咲くが、他の異つた花を人工媒助を行ふて作つた種子を蒔けば、花も大きい立派なのが咲き、又色々變種を見る事が出來るのです。

△虞美人草

此の花は或は雛罌粟とも稱へられて、色は紅、白、紫、絞り等種々にあります。五月初旬に咲き初めて六月中旬頃に終りますが、若し春の彼岸頃から種子を第一次二次三次と順を逐ふて蒔けば、春晩から秋季迄絶えず可憐な花を見る事が出來ます。此の花は。昔、楚の項羽が重圍の中に陷つた時、其の寵姫の虞氏が項王の足手纏ひとなつて戰敗を招かせてはならぬと思つて、自刃して士氣を鼓舞したが、虞氏の死後、其の墓地に曾て見た事のない優しい花が咲出したのが此の花で、當時の人が、姫の生涯を悲しんで、名殘として之を虞美人草と稱へたとかいふ。なか／＼哀れな歴史を持つて居ります。丈七八寸、其の緑濃くこんもりと茂つた枝頭に二つ三つ蕾が物思はしげに頭垂れるところ、或は葉末に露を宿して旭日の出るに光つて愛らしい花を咲くところなど、實に得も言はれぬ風情があります。



△朝　顏

朝顏は奈良朝時代に支那から輸入されたものとか。色は紅、白、紫、瑠璃、鼠等、瓣は單瓣、八重、牡丹千重咲等いろ／＼あつて、座敷を清掃し、朝涼の氣の爽やかな時、庭に色取りよく鉢を配置して一家團欒して之を賞する樂しみは、他に求める事は出來ません。のみならず之れに人工媒助を行へば、其の變化は極まりなく

花の色は素より、花の形から、葉の形迄變るので、これが又一つ〳〵の樂しみです。これは誰れにでも培養出來て費用も多くかゝらず、又場所がなければ屋根の上でも育つから、誠に重寶なものですが、しかし眞に培養するのはなか〳〵容易でありません。種子を蒔くのは八十八夜前後で、早いのは七日位、遲くも二十日位で芽を出します。そして發芽後眞葉が一二葉出たら、之を鉢に移し植ゑ、二三日間日蔭に置き、後ち日向へ出して育てます。土は排水が良くて肥養分を好く吸ふものを好み、肥料は菜種油粕が一番良いやうです。

△麝香撫子

これは石竹科の植物で、日本在來の石竹に比べると、花の形は大きく、背は高く、色は非常に濃艶です。之を切り採つて盛花や挿花にすると、よく水を揚げるから、一輪挿などによく適します。四季に咲くもの、一季咲きのもの、或は春秋二季に咲くもの等種々ありて、花の色も白、紫、紅、絞り等様々で、實に種類に富んで居ります。種子は春の彼岸頃から夏の初め迄、或は秋の彼岸頃に蒔きます。これは砂交りの眞土を能く篩にかけるか、又は畑土と砂土を半々に混ぜたものを、長さ一尺二三寸、幅一尺位、深さ四五寸の箱に盛り入れ、其の上を成るべく平坦にして蒔くので、種子を土の上へ散き、土を種子の中を蔽ふ位に被せ、一寸水をやつて藁を蔽ふて置くと、七八日位で芽を出すから、之を鉢なり庭なりへ植ゑ込みます。其他挿木、取木等でも繁殖させる事が出來ます。

△金蓮花

此の花は一にノーゼンハレンと呼んで居ります。葉は蓮の葉の如く、花は黄色なのが多いから、こんな名を附けたのでせう。日本では只眺めるばかりですが、英米邊では酢漬のツマとして其の芽の苦味のあるところを賞用します。春種子を蒔けば初夏から花が開きます、これには丈けの低いのと、高くなるのと蔓になるのと三種あつて蔓性のものは家屋の階段に這ひ纏はせると風情のあるもので、西洋の家園にはよく之を見受けます。色は樺色、黄色、或は褐色に斑點のあるのを多く見受けますが、其の外にも紅、綠、栗色、乳白、紫紅等いろ〳〵あります。

△夜會草

これは一年草で、朝顔の種類です。種子は八十八夜前後に蒔いて、發芽後之を移植して培養することは朝顔と異ひません。水が缺乏すると蕾をつけてもう開花しよやとするやうになつて居ても萎れる事があるから餘程注意を要します。花は夏夕景に咲いて翌朝になつて萎みます。丁寧に丹精すれば、白くて光澤のある七八寸位の大輪の花が咲き實に見事です。

澤瀉の意匠


ねぢおもだか
梅おもだか
五ツおもだか
舟おもだか
ちがひおもだか
おもだかつる
二葉おもだか
立おもだか
わりおもだか
三ツよせおもだか
四ツ七宝おもだか
おもだか丸
おもだか丸
雪わ向おもだかくずし
花おもだか
おもだか菱
おもだか巴
立おもだか

九州を代表する博多婦人のタイプ

不知火

△派手な風俗

九州の婦人と申しても熊本もあり、長崎もあり、鹿児島もあるが之を代表するものは先づ福岡の博多の婦人でせう。容貌、體格から申して見ると、一般に顴骨が高いのがすぐ目につきます。其外體格に比して顔の面積の廣い事、顔の割合に鼻の大きい事、或は下膨れの容貌が多いといふ事が特徴です。

色は、九州だとて馬鹿には出來ません。隨分白い人があります。美人と云はるゝ婦人の中には血色の良い理想的の顔色の人が澤山あります。

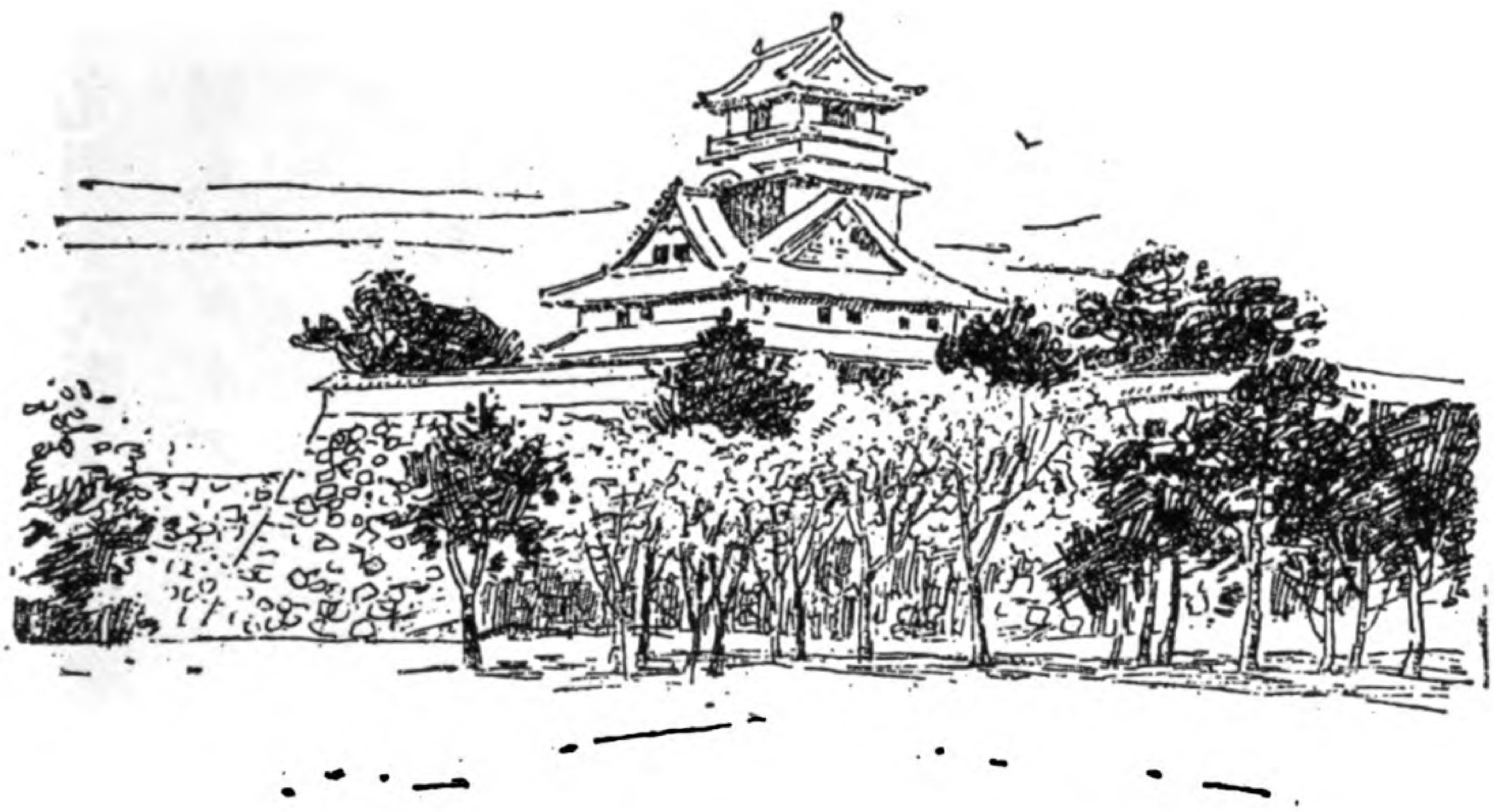
髪の毛は一般に濃くつて長い方で、容貌は其れほどでないものでも髪は艶々しく美しく結んで居ります。體格は殆ど見て衛生的美人で肩は張り肉付は良く、他國の婦人に比べて餘程大柄で、顔は美しくても體格は男にしても見まほしい様な婦人をよく見受けます。大きな顔、大きな鼻下膨れ額廣き肩、之れを綜合して見ますればなかなか派手な體格でせう、是等の特徴のうまく調和されて居る人は、思ひの外立派に見えるのです。

△流行は大阪本位

流行は、まづ大阪七分に、東京三分とでも申しませうか、外來の移住者は、東京風の人もありますけれど、土着の博多婦人は、まづ大阪風といつてもよいです、其れゆゑ三越白木の出張した時よりもまだ、高島屋の出張した時の方が、人出が多いですが段々と東京風に化せられるのは爭はれない事實です。縮緬類も、大幅で安い大阪製がよく賣れますメリンスの事をサロイと申しまして、之れも大阪製が重に賣れます。店頭にあるもので、之れは東京ものでございますと云ふても、まだ矢張り大阪ものを賣つて居ります。

流行も東京より二三年は遅れて居ります。三年許り前に東京に流行した御納戸色が、つい近頃まで大流行でした。然し蝙蝠傘さてはショールも遅いながらも、流行の移り變りはなかなか烈しく、新柄の出る度びに、婦人方は憂き身をやつして居ります。

市内に、炭坑主等も居まして金廻りは一般によい土地ですから、衣服調度には隨分贅澤をつくして居ります。それゆゑ呉服店の如きは可なり、大きい店が隣から隣に續いて居る町があり、其他、名產、博多織ネル類カスリ類と各々專門に販賣する店が澤山あります。そして一方には春季に行はるゝ、ドンタクと振袖行列とが、博多婦人の虛榮心を誘ふて居ります。



土佐名所(高知公園より城閣を望む)

△筑前琵琶の根元地

婦人の娯樂は何處も同じく芝居見物ですが博多は演藝に殊に趣味を有し素人芝居なども隨分盛んに行はれます、又近頃市の有志家が後援をして、演藝倶樂部を創立して斯道を奬勵しますから、婦人も殊の外熱心です。琴曲、三味線等の師匠も至る處にありまして、一寸した家でも、琴の一面位ない家はありません。琴は重に生田流です當地に特筆すべきは、筑前琵琶の盛んな事です町の何處にでも、此の師匠が居ります。其れにつれて琵琶製造人も澤山にあります。宴會の餘興や壽筵などには、必ず此の琵琶を持ち出さなくては、治りがつかぬ樣な有樣ですから妙齡の婦人は勿論七八歳の子供にも稽古させます

次に、關西の一般の風ですが當地の婦人も重箱主義の御多分には洩れず、一寸遊山に行くにも、すぐお辨當持參です東公園の塵埃の中でも平氣で重詰を開いて居る所は京都婦人と變りません。

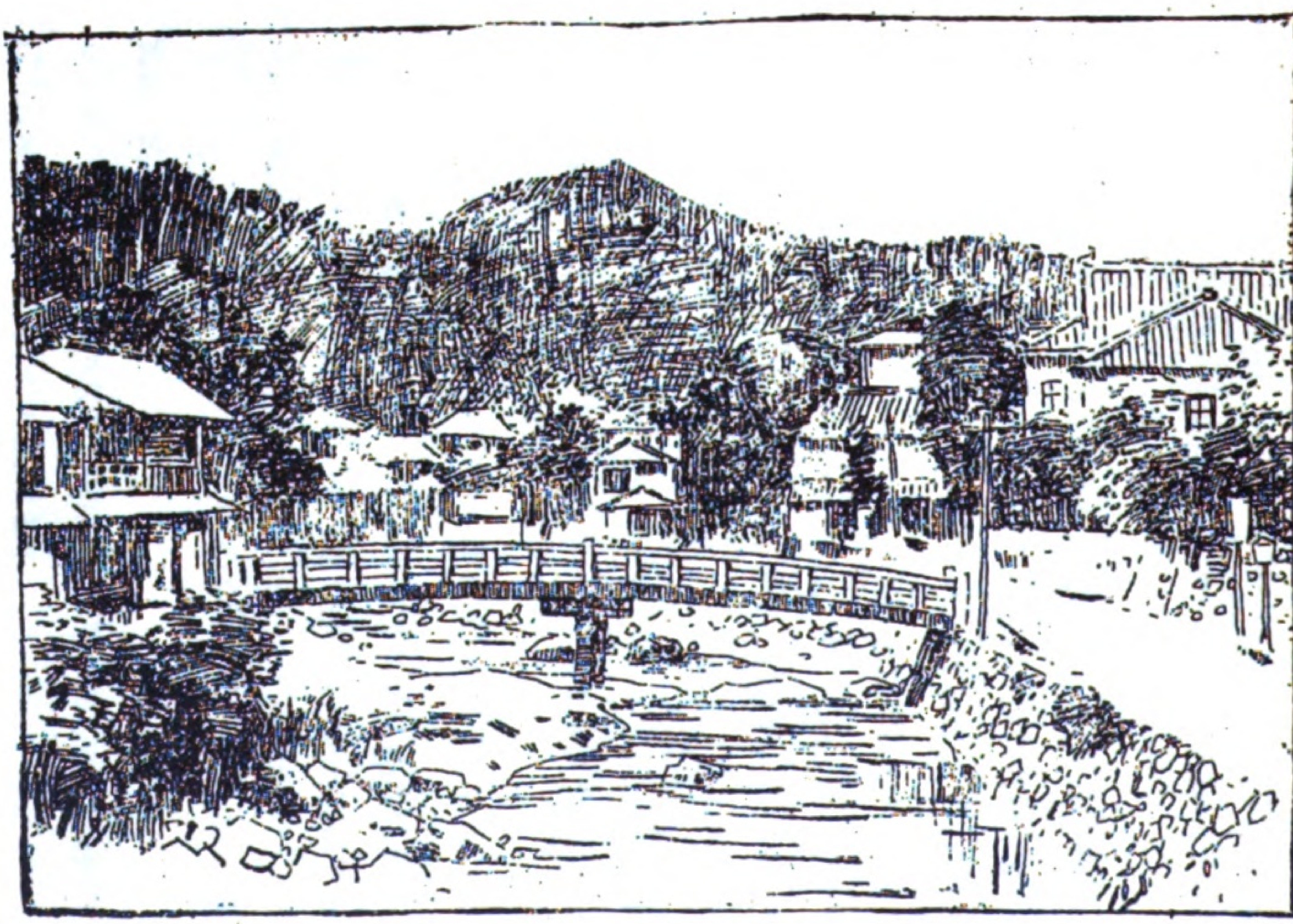
△名譽ある婦人の職業

下々の婦人の職業として尤も盛なのは機織です博多織、箱崎縞などの織り出される土地ですから從て織女が多いのです。其のために下女は常に拂底です銀行會社事務員、勸工場監督人などは何處も何じで婦人の職業の中に數へられて居ります。たゞ當地の特色とすべきは大學醫院看護婦と琵琶語りでせう。何れの地方でも、看護婦は餘り好

ましき職業としてありませんが、當地では婦人の職業として、中流ど上の家庭の子女も喜んで此の業につきます。されば看護婦は外出に際して、常に美服を着け、一見令孃かと見まがふ樣です、又婦人の琵琶語りは皆、相當の弟子を持て繁昌して居ります。然し、如何はしい者もありまして、醜聞を流す事もないとは云へません。三インチのリボン燃ゆる樣な緋色のものを髮にも被布にもつけ、コテ〳〵と厚化粧してそれはそれはいやな風をしたのがあります。其他目に付ますのは、婦人の魚賣の多い事で、子供を懐に入れて、魚籠肩に、妙な呼聲で賣て歩きます。下女の給料はなか〳〵高くなりました。十四五の子供でも三圓位廿歳以上にもなれば五六圓でも却々見付からぬ時があります。

△婚禮の風俗

年頃の娘で婚約が成立ち結納もすんでいざ結婚といふ數日前には、近親、知己を招いて衣服調度を陳列し、批評を乞ふのであります、其の時の來客は婦人のみですが、最後に盛んなる酒宴を開きます。結婚がすんで、三日頃に、一番歩きと申して、花嫁は盛裝した美しい二人の幼女を伴ふて里方へ歸ります。其の付添の少女は、殆んど營業的に處々へ雇はれて歩くものですから、隨分立派な衣裝を着て居ります。其の時、嫁の土產として菓、洗粉の樣なものを知己へ配ります其の次ぎに二番歩きと云ふのがあります。其の時は饅頭の樣なものを土產に配ります。



伊豆修善寺虎渓橋



姑様の御伴して帝劇観覧

藻 染 麗 子

陽春花の頃になりますと、毎年國から姑様が御出になるので、今年も長男の孝が、試驗休にお迎ひに參り、卅一日の午後三時半、無事御着になりました、私はお茶の用意をして、風呂を沸す樣、婢に言ひつけて置て子供を連れ停車場へお迎ひに參りました、開札口より掃き出さるゝ群集に交って、切り下げの御姿を見た時は、何とはなしに一雫ほろりと致しました。

『アラ祖母さん!!』

子供が左右より取りすがる。

『オヽ正子も、美津子も大きくなりましたね』

ニコ〳〵とお嬉しさう、私も御安着の御挨拶申上る、孝は帽子を取りながら、

「母様只今、汽車の中、もう倦き〳〵しちやつたの、トンネルばかりになつちまふんだもの、ねえ、祖母様」

トンネルで有名な中央線は、甲府八王子間の數へ切れぬ出入に夏など眞實に厭になります。

「アラ兄さんのお顔に墨がついて!」

正子のさけびに等しく孝の顔を見ると成程まつ黒です。

『ホヽヽヽ何といふ顔でせう早く家へ歸つてお洗ひなさいよ』

『八王子で乘り換の時お洗ひと言つたのだけれど洗はないものだからへヽヽヽ』

祖母様も笑って被入る。

萬事に質素な姑様は、仕出し屋の手をへたお料理はお好になりませんので、手料理の晩餐に一同卓を圍んで食後はバナヽやアツプル剝きながら國の話しや近親の噂に。春の夜の更くるも知らで、眠りに就たのは、十時過ぎでした。お土產には姑様が手づから、丹精籠て、織られた白絹一反。正子が學校の式服に染る樣との仰せ、私は何より貴い此品を頂いて如何に嬉しく思ひましたでせう。何時迄も大切に保存して、後の記念に致しませうと、厚く御禮申しました。それから皆には、これも姑様が御手製の古露柿一箱、毎年頂くのですが、本物にも及ばぬ甘き味ひ、一同喜んで賞翫致しました。こんな事や、お疲勞のため、一日はごた〳〵と御話しなどに暮れてしまひました。

二日には兼て姑様が御出になつたらと、用意して置た帝劇に御案内するので、午後より出掛けました、生憎此日は明日の日本橋開橋式見物

の人等で、犇々と詰で電車も汽車も新橋へ向ふものは皆満員、二等車な一等に繰り上げて、漸く腰掛もなく、新橋につきました。私自身の用法には、何時も三等と極めてあるのですけれど、ご老体のお身に煩しい事をおさせ申すのは、餘りに申訳がありませんので、姑様登廻の時のみ、二等若くは一等に乗車致します。時間が少し早いので、日比谷公園を一巡して劇場へついたのは四時前表玄関よりホワイトエープロンの案内係に従つて一等席につきました。

「アラ奥さんよく被入ましたのね」

肩を叩く方があるので吃驚して見ますと千田の奥様が微笑で被入る。

「アラまあ、ちつとも存じませんでした、貴人御一人、オヤ旦那様と。私は国から姑が参りましたものですから」

御挨拶して居る中に、早や華なピアノの音に幕は開きました、序幕は北條館の庭中、楠の大木の元に、北條時政の娘政子姫が、妹浦代姫の夢を買ふ処から、とど頼朝と縁の出逢になるのです。梅幸の政子姫、さすがに品格もあり、美しくもあれど、後に有名な尼将軍と呼ばれる程な傑物とは思はれませぬ、併し所作に於ては、頼朝に對する姫の挙動普通の少女が恥らひと異り、知らず識らず力がはいりますのは、さすが優の価値のある處と思ひました。森律子の浦代姫 誰やらが、あれは時政が侍女にでも手をつけて、生れた娘であらふと評されたのは、ちと酷ですが、政子に比して品格もなく、何となく見劣りのせらるゝのは、是非なき事と存じますが、一つには着物の色の配合が悪いからだと思ひます。政子の鶯茶色(?)は、楠の大木と反映して、如何にも引立ちましたけれど、浦代姫の鉢がゝつた衣裳は一向見榮が致しませんでした。

高麗蔵の頼朝、却々立派ですけれど、何だか史中にある頼朝とは、別物の様な気がしてなりませぬ。併し私は日頃日本史蹟を愛読致して居りますので、曾我兄弟の事蹟の中に顕はれた佐殿が頭の中に残つて居りましたので、大に感興深く見物致しました。

幕合が短くて、少し御話して居ると、もう幕が開くのです。漸く中幕との間が三十分ありますから、三階の食堂へ参りましたけれど、何處も人で一ぱい、漸との事に隅の方に席を得て、御辨当を喰べ始めましたけれど、何だか咽喉に支へて一向喰べられません。姑様には御気の毒ですけれど、半分程でよして二階の婦人化粧室に行き、姑様と共に用を弁じて来て、見ますともう中幕は開いて居ります。

伊賀越唐木屋敷、祝言の場より郡山城中仕合の場迄ですが、普通餘り演らない狂言ですから、一向面白くありませんでした。併し雁治郎の政右衛門と、宗十郎の妻お谷、何れも申分ありません 昔はつまらない義理の為に、罪なき妻を離別したり、人を殺させたりしたものですね。政右衛門は偉い人物かは知りませんが、私は感心致しません。何故此様なつまらないものを出したのでせうか。

此次が又三十分ありますので、再び三階へ行っておすしを喰べたり紅茶を飲んだりして居りますと、もう四邊の人は大層に少くなりますので姑様を忙し立てゝ席にかへりますと、既に幕は開いて、長唄連中の冴え

た三味線の音が聞えるといふ始末、姑樣など、やつぱり元の樣に場の中での方が、落付て喰べられてよいと仰有る。

大切り羽衣天女の舞は、常磐津、長唄連中出語り掛合にての振事、却却見事に美しいものでした、梅幸の天女高麗藏、宗之助の漁夫二人、何れも腕揃ひの事とて、見て居ろ自分の身體も浮くかとばかり、輕妙な舞の手振り、鮮明なものです。私など子供がありますので、めつたに芝居を見る事はありません、たまに姑樣のお伴して參りますばかりですから、一向斯ういふ方面には暗いのですけれど、同じ見るなら所謂千兩役者の演ずる舊劇の方が興味が深く、何時迄も餘韻が殘つて居て、面白いといふよりは寧ろなつかしいといふ樣な心持が致されますのよ。新派の方でも高田や



合の不如歸や、乳兄弟、其他松風村雨とか、月魂とか、見るには見ましたが、餘り寫實すぎて、何時迄も印象を殘す事は出來ません、兎に角劇といふものは子供の見るものではありません。私なども年に一度位、歴史物か何か、しつかり實のあるものを見るのは、誠に樂しいものだと思ひます。十時五十五分新橋發にて神奈川の宅につきましたは十二時前でした。

吉野川その源を尋ぬればむぐらの雫萩の下露

讀人不知

なせばなりなさねばならず成るものを成らぬと云ふはなさぬなりけり。

手島　信

飯と汁木綿着物ぞ身を助く其餘は我を責むるなりけり。

二宮尊德

女を詠んだ夏の句

吉野臥城



女と夏との配合——長い黒髪に照り輝く日、想ふだけでも暑さうである。暑さに配するに暑さを以てしては、何うも調和しさうにも無い。所が、俳句に於ける夏の女は巧に美化され、涼化されて居る。心憎き迄の美しさはあるが、暑苦しい厭な感じは起らぬ。

實際を見ても、東京の女は夏になれば美しくなる。そして胸のあたりにも、腕にも、素足にも涼しさが見えて來る。一様に新しい單衣、中形の粋な浴衣を着る。古布子の一皮剝いた所に美はあり、涼しさは有るのである。上﨟の和歌は暑く、町娘の俳句は涼しい。濃艶は晩冬孟春の詩趣で、瀟洒は盛夏新秋の俳趣である。

▲岩倉の狂女戀せよ時鳥　蕪村

▲麥の秋淋しき顔の狂女かな　同

狂女と時鳥、麥秋と狂女、其の風物の配合に依つて二句おの〳〵別個の趣味に活きる。一は悽艶にして深刻、一は悲愴にして沈痛。噪狂と鬱狂との二種の顔容がまざ〳〵と浮ぶ。

▲繪團扇のそれも清十郎にお夏かな　蕪村

巣林子の戯曲で有名な、戀の清十郎にお夏で、當時非常の評判であつたらしい。丁度今時の小說『不如歸』の武夫と浪子が、繪葉書にまで持て囃されるやうに、似顔は團扇に描かれたものと見える。で、繪團扇の夫れも矢張り清十郎にお夏かなアと云つたので、感じの好い句である。

▲手弱女の側へすり寄る毛蟲かな　一茶

『手弱女』は美人のこと。たをやめと讀んでも、たわやめと讀んでも可い。美人と云へば直ちに顔の美を聯

想するが、たそやめと古語で云へば、何となく上品ななよ〳〵した、風にも堪へぬと云つた様な美姫を聯想される。

離亭の縁か何ぞに手弱女が居る。毛蟲が無遠慮に這つて行く。其の光景を一茶は、例の一茶式の俳諷で、毛蟲が何か意あつて、厭がる美人にすり寄つて行くと云ふ風に、興じたのである。毛蟲と美人との對照も奇抜なれば、「例へすり寄る」の七字が活躍して、美人と毛蟲との様が宛らに見る様である。

▲青梅に眉あつめたる美人かな　蕪村

「青梅」は、まだ熟さぬ梅の實のこと、味は酸く且苦味がある。美人が青梅のつまみぐひをやつて、眉を顰めた瞬間の描寫である。「青梅に眉あつめた」と云ふ技巧に一寸のそつのない所が、此の句の長所である。

▲青梅や女のすなる飯の菜　太祇

「土佐日記」の「女もすなる日記……」から思ひ浮んで、「女のすなる」と置いたのであらう。朦朧體の句ではあるが、飯の菜と青梅との配合から考へると、身持の女でも有りさうに思はれる。言葉のあやの外に、餘り面白味がない。

▲昔女はらから住めり杜若　曉臺

▲女臈なら船へと申せ杜若　召波

二句共に、「伊勢物語」の八ツ橋の條より脱化したので、前者はそつくり其の儘である。後者は巧に換骨脱胎して、纔かに杜若だけに面影を存してるのみだが、「……船へと申せ」は何となく「……露と答へて……」の句調と異曲同工の感がある。寧ろ「これへと申せ」の、舊劇の白でもあるまい。

「はらからは」同胞のこと、「女はらから」は即ち姉妹である。伊勢物語をしのばせる句である。「女臈」は耳馴れぬ語であるが、まア上臈の事、宮仕する女と解して可い。其の何人なるかは、説明の限に非ず。

▲行く女袷着なすや憎き迄　太祇

「行く女」は道行く女、「憎き迄」は心憎き迄、嫉ましき迄にて、實に美しいと云ふ意味が言外に溢れて居る上品な句である。

最う初夏になつたので、皆袷に着更へた。道行く女の或者は、着こなしが上手で、しつくりと體に合つて、心憎き迄いき、である。之が先づ太祇の俳眼に止まつて此間を成したので斯の如く途上矚目の實感を叙して萬人に一様の強き印象を與へる句は尠い。

▲大原女の五人揃うて袷かな　蕪村

▲小褄より針ひねり出す袷かな　几董

何れも句意は明瞭である。大原女の五人揃うて袷に更へたる畫中の趣も捨て難く、縫ひ下しの袷を着る時に小褄より針をひねり出した細心の用意も面白い。前者は三人よりも矢張り五人の方が感じが好く、後者は『針ひねり出す』と云つた所に働きがある。無論、女であらう。



▲ふだらくや赤い袷の小巡禮　一茶

『ふだらく』は梵語、漢字では補陀落と書く。もと海島の義なれども、茲では觀世音の稱。作者は『傾城阿波の鳴門』の巡禮の段から、ヒントを得たのであらう。

▲母親や納凉がてらの針仕事　一茶

▲寢せつけし子の洗濯や夏の月　同

一は涼み乍ら針仕事をして居る母親を描寫し、一は子供を寢せつけてから夏の月夜に洗濯して居る女を詩化したもの。洗濯物は云ふ迄もなく、子供のおしめやら着物やらである。一は平々淡々と筆を着けた所に趣があり、一は「子の洗濯や」と簡潔に云つてのけた所に手腕が見える。一茶の特長を遺憾なく發揮した句である。

▲萍の花を眺めて添乳かな　一茶

百姓の女房が、沼の堤の草を藉いて憩ひ乍ら、萍の花を眺めて添乳して居る態を詠んだものである。沒風流な百姓の女房の眼前に、萍の花を點出したのが面白い。併し、必しも百姓の女房と拘泥するに及ばぬが、然う見た方がより多く趣味がある。

▲夕顏の花で鼻かむお婆かな　一茶

婆子は無心で鼻をかみ、一茶は之に興じて句となす。夕顏の花と婆子のはなと能く調和し、寸分の隙きを見ず。所謂滑稽趣味の上乘。

▲卯の花や貴ぶねの巫女の練の袖　蕪村

純白のものに配するに、崇高きものを以てす。卯の花も練の袖も、能く利いて居る。「みこ」は「かんなぎ」とも云ひ、神樂を舞ひ、湯立などを行ふもの、「貴ぶね」は貴船明神の事である。莊重を以て勝る句だ。

▲掛香や唖の娘の人となり　蕪村

掛香は夏日汗穢の臭氣を除かんが爲に用ゐる香劑で、室内に懸ける香嚢と、袋の兩角に緒をつけて衣の頸に繋ぐ匂ひ袋とがある。此の句の掛香は即ち後者で、汗の臭を避ける爲めに、掛香を用ゐて居るので、自ら其の上品な人と爲りも偲ばれる。唖娘ではあるが、身だしなみが好く、何處やら奧床しい所がある。

▲味噌汁も吸はぬ娘の夏書かな　蕪村

一夏九旬(九十日)の間、夏を修し、經文を書寫するのが、夏書である。飲酒魚肉を斷つは云ふ迄もないが、其の娘が味噌汁も吸はぬと云ふ一事で以て、如何に專らに勤めて居るかゞ分る。恐らく並の娘ではあるま

い。

▲戀知らぬ女の粽不形なり　鬼貫

端午の時、今は柏餅を食へど、古は粽を食べた。糯米を水に浸したものを笹の葉に卷き、煮て熟させたものを笹粽と云ひ、菰の葉に包みたるを菰粽と云ひ、其他製法に依つて種種の名がある。

此の句は、粽を製へて居る時を現はしたので、戀知らぬ、世馴れぬ女の結ふ粽は、其の形までが不格好だと興じたのである。其の味の程も、思ひやられる。



▲粽結ふ片手にはさむ額髪　芭蕉

之は又、際どい所を見つけたものだ。うるさげに垂れて來る額髪を片手ではさみ乍ら、せつせと粽を結ふて居る樣を面白くよんである。流石に芭蕉翁である。

▲お袋が手本に投げる粽かな　一茶

▲がさ〱と粽を咬る美人かな　同

そんな不格好なのでは不可い、斯う製へるのですと、お袋が娘の前に手本に投げたのが前者で、笹をほどき乍ら、がさ〱と粽を咬つて居るのが

後者で、何れも輕妙である。

▲笋や女もまじる犬の眞似　一茶

「たかんな」は筍のこと。「女もまじる」とあるので、筍を掘つて居たのは男なる事明かである。「ホラ此處にもあつてよ」とか何とか云つて、木の片か何かで筍をほじつたのであらう。夫れを例の一茶式で、「犬の眞似」と一喝し去つたのである。其の輕妙の皮肉が此の句の生命である。

▲けふはとて娘も出たつ田植かな　蕪村

▲離別れたる身を踏込て田植かな　同

▲めしもりに嫁の出立つや田植時　許六

「けふはとて」と云ふ所より察すれば、此の娘は餘り野ら稼ぎはせず、家の内の仕事をして居る娘と見える然るに、田植時と成つて忙しいので、今日は出やうと云つて娘も野らに出たつのである。許六の作よりは技巧の點に於て勝れて居る。「身を踏込て」田植するは、出戻りの女で、自分から進んで田に踏込んだ氣分が現はれて居る。

▲早乙女や祭のやうに揃ひ出る　涼菟

「早乙女」は田植する女のこと。「祭のやうに」は、早乙女の澤山揃ひ出たさまの形容である。田舍で人の出さかるのは祭禮であるから、此の比喩は適切である。

▲早乙女や先に下り立つ年の程　太祇

▲早乙女の下り立つ彼方此方かな　同

▲早乙女が黄楊の小櫛はさゝで來し　蕪村

▲早乙女や一人は見ゆる猫背中　召波

▲早乙女のさみだれ髪や田うゑ笠　許六

▲早乙女の尻につかへる筑波かな　一茶

▲早乙女や箸にからまる草の花　同

七句夫れ〴〵趣がある。「箸にからまる草の花」は、田の畔で晝餉をしたゝめて居る早乙女の寫生である。

燕子花の意匠


だきかきつばた
三ツかきつばた
三ツもいかきつばた
根引かきつばた
かきつばた菱
一ツかきつばた
かきつばた菱
かきつばた花の丸
向かきつばた菱
むかいかきつばた
むすびかきつばた
三ツ花かきつばた
むかいかきつばた
一ツかきつばた
真向かきつばた

様々な婦人の内職



一記者

▲刺繡

婦人の内職にも色々あるが、上品で而かも最も澤山の收入あるのは刺繡である。然し其の仕事が多種多樣に別れて居るので、一人前の内職家となるのは容易でない。刺繡の内で最も容易いのはリボン、手巾の類、手間のかゝるのは油團・力士の化粧廻し、或は額、掛物などである。其の縫賃は仕事の手間どると否とに由り、又手腕の熟不熟に由つて差があるが、學校とか師匠とかに就て學んで腕に覺えのある人なら、最初から三十錢位ゐの收入は十分にある。そして段々熟練して來れば五十錢から八十錢位ゐまでは容易に取られる。是を内職にして居る人は中流社會の人に多く、下層社會の人には餘りない。中には會社銀行員、或はまた陸海軍の將校夫人達で修業旁々やるのも澤山あるし、又將校の未亡人とか夫人とかゞ暇つぶしにやつて居るのも尠くない。つまり仕事が綺麗なのと收入が比較的に多いのとで案外に人氣が好いのである。

普通の賃金を調べて見ると

▲手巾　一枚十錢以上二三圓迄（輸出向）
▲襟一掛　七十錢以上五圓内外迄
▲定紋（金糸七寸角の帛紗）　二圓より五圓内外
▲帛紗　一圓内外より百五六十圓（輸出向）
▲羽織紋　一ツ五十錢より一圓迄
▲煙草入　三十錢より五圓内外迄
▲額掛物類　十圓内外より二百圓迄（專ら輸出品）
▲ショール　二十五錢内外
▲ボンネツト　五十錢内外

ザツと斯うである。其内簡單な手巾や襟などは一寸腕のある者には一日五枚は平氣で縫はれる。其の模樣は一寸とした花とか文字とかで、一つ七八錢位ゐである。地質が革とか經木入りの物になると、賃金は又ずつと高くなる。それに近來ミシンで刺繡をやる樣になつて、これでやれば手縫の三倍は出來るので、一寸した官員さんは叶はん位ゐの收入がある。

▲足袋の下縫ひ

足袋の内職に出すのは、普通「甲縫ひ」と「底縫ひ」の二種で工賃は山の手の方が安く、下町の方は一針拔きの面倒なものであるだけに、何程か高いのである。「甲縫ひ」の賃金は足袋の大小に由つて差異があり、紺と白とでも又多少の違ひがあるが、先づ普通紺足袋が一足一錢二三厘で、達者になると一日に二十四五足は出來る。「底縫ひ」も普通一足が一錢位で、之れも一日に二十四五足は出來る。何れにしても少し呼吸を覺えると誰れにでも出來る仕事である。此の内職は足袋屋が出すので、最寄りの大きな足袋屋に交渉すれば何處でも出して吳れるさうである。

▲羽織の紐組

此れは市内の小間物店でやらして居るが、主に十四五歳前後の女兒が留守居がてらに、或は下女などが暇々にやつて居る。收入は比較的少ない方で、毛糸や木綿糸の子供の紐百掛が十八錢から二十錢内外。瓦斯糸のが百掛二十五錢から三十五錢であるが、稍上等の女物で材料が絹になると、非常に上つて、一掛二錢内外、其が男物になれば尙ほ高くなつて、三十錢から四十錢となり、特に平打となると五十錢以上七八十錢位となる。丸の具組は簡單なだけに一丈が五厘から稍く好くて一錢位のものである。簡單なものは子供でも二十掛位は平氣で組み、少し熟練した人になると平打を一掛位は苦もなく仕上げる。で平均一日に十四五錢から二三十錢の收入があるといふが、之をするには相當の保證人を立てるとか、材料に對するだけの保證金を納めて置くとかしなければ、容易に受け負はせないさうである。

▲麻裏の緒と裏附

職は少々劣るが、一すよい金になるものは、麻裏草履の裏に麻繩即ち組麻を取り付ける仕事である。之れを疊の裏に具合よく縫ひ付けるのは、四五日練習すれば誰れにでも出來て、一日に十足位作るのは平氣である。工賃は女兒用の小形の物で十足が七錢、大人用は十足が十五錢位で、一日に少し勉強すれば十五足から二十足位は仕上げる事が出來る。次に麻裏の鼻緒をつけるのは、五十足分一束で上物十錢位から以下五錢位までである。これは少し慣れて來ると一日に三束（百五十足分）を拵へるのは樂である。仕事は四季を通じて何時でもあつて、所在の麻裏專門の店は大抵内職を出して居る。

▲洋傘の附屬品

洋傘製造に附隨して女子の手を要する仕事は幾種もある。其中で甚麼子供でも又老人にでも容易に出來るのは、ダボ附けの仕事で傘の大骨と小骨と合ふ箇所を切地で縫ひ付けるので、實に造作が無いが、それで手間賃は最初から十錢乃至十五錢になり、廿日もやつて熟れて來

ると十五錢から廿五錢位は取られる。次に切地を骨に貼附ける事がある。これは大抵一週間も習へば直に出來て賃金は廿錢から一生懸命に遣れば四十錢位ゐ迄になる。それから中縫ひと言つて切地と切地とを縫ひ合せる仕事がある。是はミシンを使用するので、其使用法は一ヶ月で熟れるが、それで一日三十錢から七十錢位ゐ迄になる。但しミシンは貸して呉れる問屋もあるが、大概は自分で買ふので、其の價は八九圓位である。以上の外に雜貨と云つて握り總を付ける事等女子の手を要する仕事が澤山あつて、手間賃は何れも十五錢乃至廿錢位である。本所、深川、淺草、神田等には製造元が澤山あつて、仕事は年中絶間なしにある。

▲繪端書の彩色

繪端書が非常に流行した頃には、此の内職は盛んにあつたものであるが、昨今は繪端書熱の冷却に伴れて此の内職も一種の專門家が出來て、素人には多く出さぬ樣になつた。それは素人は何うも手際が小綺麗に行かぬからである。それでも端書を扱ふ小店では時として素人に內職として渡すこともあるが、然し是れは賃金が一枚一厘五毛か二厘位で、多くは田舍行きの安物である。繪の具は手前持で、一日に二百枚位は出來るといふ事である。

▲軍服の肩章

軍隊で改正服が採用された頃は之を作る內職は盛んにあつたが、今は少くなつて、多くは下町の裏家でやつて居る。之を取扱つて居る問屋は、日本橋區馬喰町二丁目蜻蛉屋、下谷仲徒町二丁目安川仁藏商店の二ヶ所で、其外には小さな洋服屋などでも內職に出して居る樣である。仕事は、心となるボール紙、羅紗など受取つて來て、肩章に仕立てるので、少し器用な者には直ぐに出來る。一對の工賃は先づ六厘から八厘位のもので、一日に三十組位、少し勉强すれば四十組位は容易に出來る。但し仕立に使用する糊、縫ひ合せの糸、星章をかゞる絹糸は一切自分持ちである。

▲手巾の縁縫

數年前迄は、キヤラコ等で作る極めて粗末なものゝ縁縫も內職として可なりあつたが、商人の方で色々攻究した結果、今は此等の粗末なものは、商人の方で十二三歲の女子をを通勤させ、ミシンを以て工場で縫はせる事になつた。此等の女工は一日十二三錢から二十錢內外で働いて居る。こんな風だから、手巾の縁縫として內職に出すのは多く外國向の絹物で、普通端から一寸位の所を四方とも二三本づつ糸を拔き取り、其の跡をかゞるものであるが、これは手でやれば一日に三枚平均にしか仕上らない。そして其の賃金は一枚が二錢內外であるから、一日に六錢位にしかならない。然し今は之れもミシンでやる樣になつて、此れなら一日平均十枚位仕上げる事が出來るので、

隨って一日に二十錢前後の收入は得られる。

▲差し物

此の内職を出す處は、下谷龍泉寺町に花島、河喜、前川、元結屋などいふ専門の問屋がある。此の差し物と云ふのは年末酉の市で賣出す熊手を飾る大福帳、おかめの假面、七福神、千兩箱等のことで、下等のボール紙で拵へて、それに一々脚を付けるのである。此の脚を付けたのを百本一組として問屋に納めるので、價は百本に就き十五錢から二十錢位。これが一日に三百本出來ると上成績である。原料は自らで工夫するもよし、又問屋から下げて貰ってもよい。が、これは淺草千束町邊の獨得の内職で、普通の人には不向な方であらう。

▲眞綿摘み

此の内職は非常に根氣のいる仕事で、先づ田舍から送り出した眞綿の塊りをほぐし、それを丸い坊主頭樣のものに掛けて極薄く引展べる。斯くして幾枚も其れを作った後店頭で賣って居る樣に、或は袋の樣に或は板の樣に作るのである。故に非常に根氣の強い婦人で、而かも細心な者でなくては到底出來ない。その賃金は一百匁摘むのが大抵二十錢内外であるが、何程熟練した者でも一日に五十匁と摘む人は殆どないと云ってもよい。

▲下駄の表編み

籐で作る方は、原料を内職者の方で持つのと、只だ手間賃だけのと二種になって居る。原料を持ってやるとすれば上等の籐一把が一圓五十錢から二圓内外で、下等は六十錢から八十錢位迄で、此れで表を作ると、平均一把で六足から六足半出來それを店に賣ると、上等のヌキと稱して籐の節を拔き取って作ったのが一足一圓乃至一圓二十錢、下等のザクと稱して節を拔いてないので作ったものが一足十二錢から三十五錢内外に賣れる。それで一日何の位出來るかと云ふに、ザクの方は一足半乃至二足、ヌキの方は一足位で、比較的良い賃金を得られるが原料を受けてやる方だと、一足につきヌキの方が十五錢から十八錢内外ザクの方が三錢から五錢位のもので、收入は餘り好い方ではない。

▲レース編物

レース編物の最も盛に行はれたのは四五年前の事で、今日では少し下火になって、問屋の數も餘程少なくなり、賃金も低廉になって、朝から晩まで働いて十五六錢内外のものである。試みに編物の工賃を記すと、テカラ一掛が一錢より一錢五厘、皿敷が簡單なものは一枚八厘、やゝ手込みなものでも二錢内外、巾着一個が簡單なものは二錢内外二錢五厘位、卓掛が一枚大きいので一圓内外であるが、其等を編む日

數はと云ふと、小さな針で一々編むのだから、極く簡單な物でも一日に畳數四枚位ゐ、テガラなどは三掛中から四掛、巾着なら三つから少し模様入りの物となると二つ位、餘程練習して來ても今一つ二つ餘計に編める位のもので、普通の家で内職としてやれば一日に七八錢から十錢位の收入である。

▲裁縫

何と云つても内職では裁縫が一番である。材料は少くて殆ど腕一つで、それで腕と長く達つて居れば隨分顧客が出來るのである。

和服裁縫には二通りあつて、一つはお店向、一つは素人向であるが、お店向は最早本職となつて内職にするのは少ない。素人向の内には又四通りあつて、お邸向、商家向、學生向、藝者向となつて居る。此内でお邸向と商家向とは定り切つた收入だけであるが、學生向は願る氣樂で、少々下手でも粗末でも平氣の上に、十六錢と云ふ所へ二十錢出して釣は要らぬと云ふ。此の調子で四十錢のは五十錢、八十錢のは一圓になるから、餘分の收入がある。藝者向も同じくお釣は要らぬと云ふ方で、之れは又一層奮發する有様である。殊に四季の移り替りの時などは目の廻るほど忙がしくて、縫賃も倍以上も奮發する。たゞ困る事には仕事が少々八ケましい。それに古物許りで却々汚い(新しいものは本職屋に出す)。商家のは重に小僧用の双子の新規物だから、心持は可いが、縫賃の奮發が無い。又お店物は年中絶えず忙がしいが、古物が多いから腕が無くては出來ぬ。但し同じお店物でも古着屋の新物を縫ふのは至つて粗末な仕事で、一日に袷ならば五六枚も縫はれると云ふ位許りである。

裁縫で縫賃の一番割合のよいのは帶、次が袴で、木綿物や小兒物は割が惡いといふ。仕立賃は下町と山の手とで大きに違ふが、普通は女物ならば綿の綿入や羽織が八十錢から一圓、袷は二割安、丸帶が一圓から二圓五十錢位、男物は紋付の羽織が八十錢位、袴も同様袷は一圓、と云ふやうな割で、木綿物は大抵其の半額位が相場である。

△正　誤

前號百五十三頁にありたる「精神の修養と物質上の餘裕」松村介石氏と署名ありし記事は、宮川壽美子女史の誤りにつき訂正す。又本號松村介石氏の署名の中、財政問題のところに、「鐵道を敷設し殖產を計つて居る」とあるを、「稅制の改革と工業の發達を計つて居る」と訂正す。



靜御前（上）

物集梧水

二十年の生涯は實に夏の夜の夢の如かりしなるべし然りながら之を打てば凜乎として白雪の如き節操あり之に頼れば溫乎として花の如き情味あり、節操と情味と、相化して宛ら美玉の如き跡を止むとすれば、二十年の生涯は直ちに千古を貫きて、決して短しとは言ふべからざる也。

◎神泉苑の舞雩

日和も三日五日の間こそよけれ、十日廿日と打續きては、稲田の水も涸れ果てぬべく、實に今年（嘉永元年）の秋の稔さへ心遣らる。

朝の天空は、嬉しや白雲少し棚曳くと見しに、やがて時刻の移るに從ひ、今日も亦た太陽の光輝然とかゝやきぬ、夕暉西山の端に入りなん頃は、紅き雲・金色の雲、錦の如く空に漂ひ、忌はしや、又も明日の旱天の推量られぬ。

斯る日の、十日、廿日、卅日と打續きぬれば、諸山の寺院、胡摩を焚き、讀經に凝り、只管降雨を祈りしも、更に其驗なく、都の人々、唯だ恨めしげに天空を仰ぎ見ては深き太息を吐くのみなり。

後白河法皇・一日神泉苑へ御幸ありて、有名る白拍子百人許り召され、龍神に願ぎて降雨を祈るべき雨乞の舞をば舞はしめ給ひぬ。

少く美しき舞姫達の、孰れも緑の黑髮高く結びあげ仄かに薄化粧を施し、白き水干着て、胡蝶の如く舞へる様は、唯だ瀟洒に麗はしかりけり。

一曲、一曲、曲移りゆけば、舞姫も亦た替りて舞ひぬ、斯くて最終に起ちて舞へるを見れば、芳齒こそ未だ十五六の花の蕾なれ、扨ては面貌の、扨ては容姿の優に勝れて美しきが上に、舞の振さへも甚とゞ美妙じかりければ、其處に並居し人々。唯だ眼を細くして眺めにけり。

折柄大空少し薄暗くなりて、彼の舞姫が軈て徐かに舞ひ納むる頃は、太陽の光さへ陰翳ひ、咄嗟と思ふ間に、黑雲の間より龍鱗閃現き、大粒の雨はら／＼と降りそゝぎぬ。

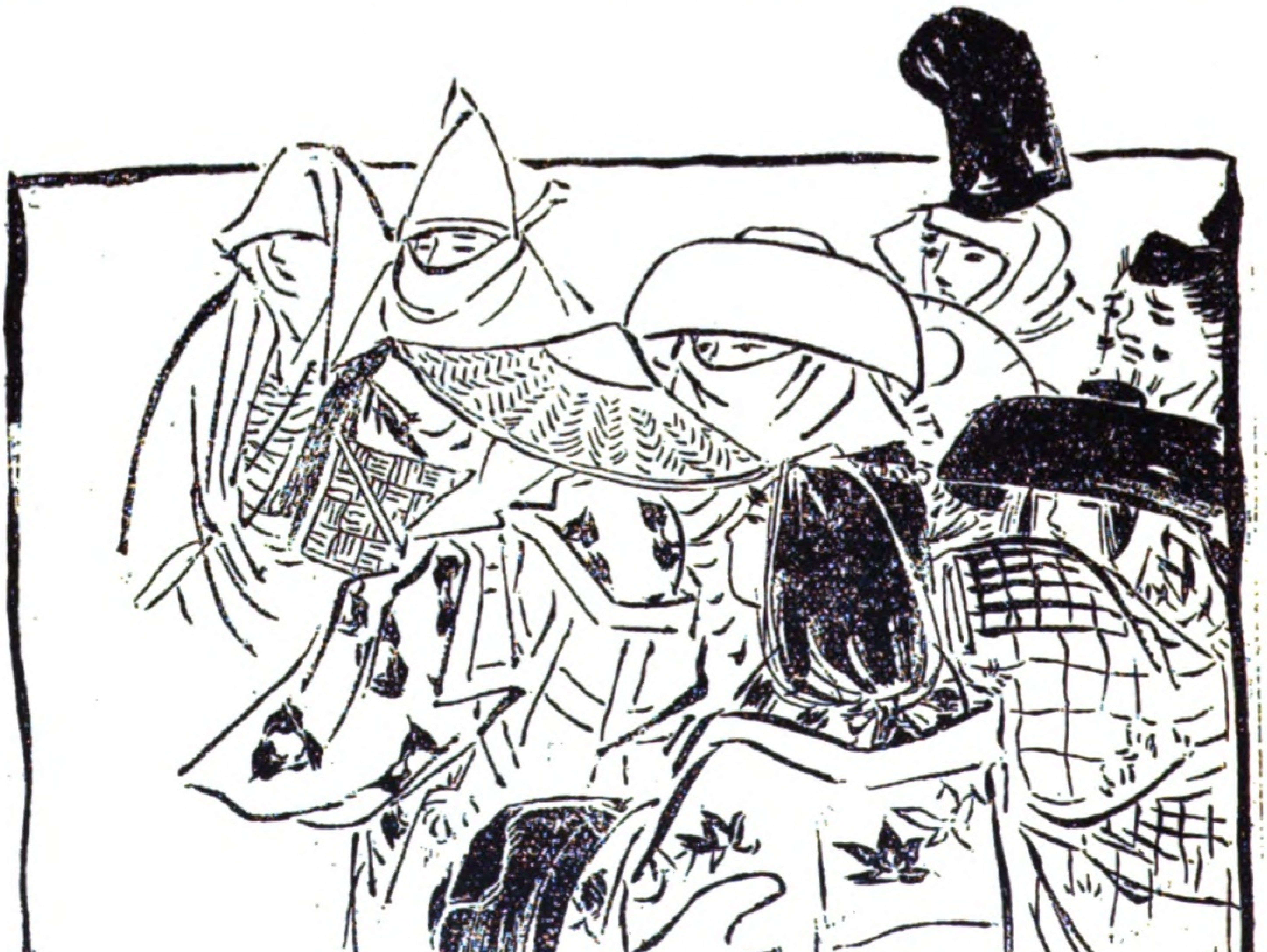
後白河法皇の叡感斜めならず、好うこそ舞へるものかな、龍神も感じ給ひぬと見えて、白雨降りいでぬ、彼の白拍子の名は何とか云へると、傍らに侍ひし者に問はせ給へば、その者急ぎて、遙か下座に畏りたる老女に問ふ、老女甚とゞ喜ばしげに、

靜と申し侍りて、妾が娘にこそ。

と答へぬ、然れば其旨、法皇へ奏しけるに益々叡感あらせられて
實にや日本一の舞の名手かな。
と、褒辭をぞ賜はりける。此の神泉苑の舞雩の折、九郎判官義經も其場に居たるなれば是れぞ静が女一生の面目を施して世に現れ初めし機會なると同じく、軈ては哀れに悲しき運命の初めともなりにけり。

◎堀河の夜討

神泉苑の舞雩にて



白拍子静は、端なくも九郎判官義經に見そめられ幾日も經ず、堀河の館に召されぬ。最初のほどは唯だ徒然の御慰みとばかり思へりしに、名にし負ふ雪を欺く美しさの上に日本一の舞の名手なれば義經の寵愛一方ならず、何時しか情濃やかなる契を結びぬ。此時、静は春未だ淺き十五歳、義經は二十四歳の男盛りなりけり。

一日、静は假日を賜はりて、京の片邊北白河の家に歸り、是れも同じ白拍子を生業とせる母礒禪

師に向ひて、具さに義經の情のほどを語りぬれば、禪師涙を流して喜び、

氏素姓もなき其許が、源家の嫡流にわたらせらるゝ鎌倉殿（賴朝）の御舍弟君の御情を受くることこそ、實に身に餘る幸福なれ、必ず貞節を勵みて仕へまゐらせよかし。

と掻口說きぬれば、靜も同じ胸の嬉しさは面色に顯れて、

妾とて、ゆめ粗末には、爭で仕へまつるべき。

と、又今更のやうに我身の幸をぞ只管に思れて、宛ら春の夢を追ふらんやうに堀河の館へ戻りぬ。

斯くて四歲が程は、何事もなく暮しけり。

此間に、九郎判官義經は、粟津原に木曾義仲を破り、遠く西海に平氏の一門を滅ばし、武勳隆々、朝野を蓋へる榮譽ありしに、兄賴朝は知つて之を妬み、如何にもして義經を誅せんと思ひし折柄日頃義經と仲惡き梶原平三景時、此時なりと進み出でゝ、義經の言葉を讒しければ、賴朝大に喜びて、密かに土佐房昌俊と云へる荒法師を召寄せ、堀河の館に義經を討てよと命じぬ。

文治元年、初冬の日影麗かなる十月十七日、土佐房昌俊鎌倉より上洛しけるが、義經早くも其れと悟りて、急に堀河の館に召寄せ、嚴しく彼れを詰問りぬれど、土佐房故らに沈着きはらひて、此度の上洛は物詣の爲めなり詐りならぬ其が證據にとて、神佛に誓ひ、起請文を認め、圓き顱頭を撫でながら退きけり、義經今は心安しとて、側近く召仕へる武士どもを集め、終日酒宴を張りて、醉ひ倒れてけり。

靜は少時も義經の側らを離れず、夜に入りて不圖思ひ廻らせば、晝の法師が狀こそ甚とゞ怪しけれ、其折の眼光、其折の擧動、何となく故らに沈着を裝ひたるが如く、起請文を認めける折の、幽かに筆の震ひたるも、疑へば疑はるゝ節ぞかし、此は一刻も猶豫なり難からんと、童子を二人召して、五條坊門油小路なる土佐房が宿の邊を窺はしめぬ。

今宵は早く月の昇るべきなれど、空曇りぬれば、館

て外は朧に暮れて、冷たき夜風のみ悲しき音を鳴らしぬ靜は徐ろに高樓に昇りて、曩に遣はせし童子等の、今や還りなんかと眺めけるに、小路を隔てゝ怪しき物の響きの聞ゆれば、愈ゝ胸騷ぎして堪へがたく、更に物馴れし小婢を召して、具さに旨を含ませたる上、土佐房が宿をば窺はしめけり。

軈て程なく彼の小婢、顔色を變へながら走り還りて



たゞ今油小路へ參りしに、土佐房が宿の邊にて、彼の童子は兩兒とも斬捨てられ侍りぬ、門の前には鞍置ける馬など夥しく嘶き居り、門の内には大幕引廻らし、鎧着たる兵士どもの或は甲の緒を締め、或は弓押張り、今にも押寄せんずる狀にて侍る物詣などゝは、眞赤なる虚言にて候ふ

と訴ふれば、靜これを聞きて今更のやうに愕き、義經が醉ひ倒れたる側らへ急ぎゆきて、鎧櫃より鎧を出せ

ば、義經其聲に眼を覺して俄破と跳ね起きさま、
敵や來る。
と、醉眼を睜りぬ。靜、言葉短く仔細を語れば、義經側らにありし太刀取りあげて、
憎き法師奴が暴動かな、此方より逆襲せん。と、館の外を睨みながら起立がるを、靜徐ろに着背長（貴人の鎧）を取りて投げかけつゝ。
縱ひ小敵にても侮りな給ひそ、堤も蟻の穴より崩るる例も侍り候へば。
と云へば、義經實にもと首肯ひ、館の門を悉く開かせ、手下の者共に下知して敵勢今や來ると待ちかけたり。

斯くとは知らぬ土佐房昌俊、夜半過ぐる頃、六十餘騎を從へて、密かに堀河の館へ押寄すれば、此は抑も如何に館の門心地好げに開かれぬるにぞ、土佐房心內に愕き少時躊躇ふ、隙もあらばこそ、俄かに館の內より嚴しく射出し、咄嗟逃げんとすれば、忽ち十數人撃つて出で、追ひすがり、さま土佐房をば斬殺す。

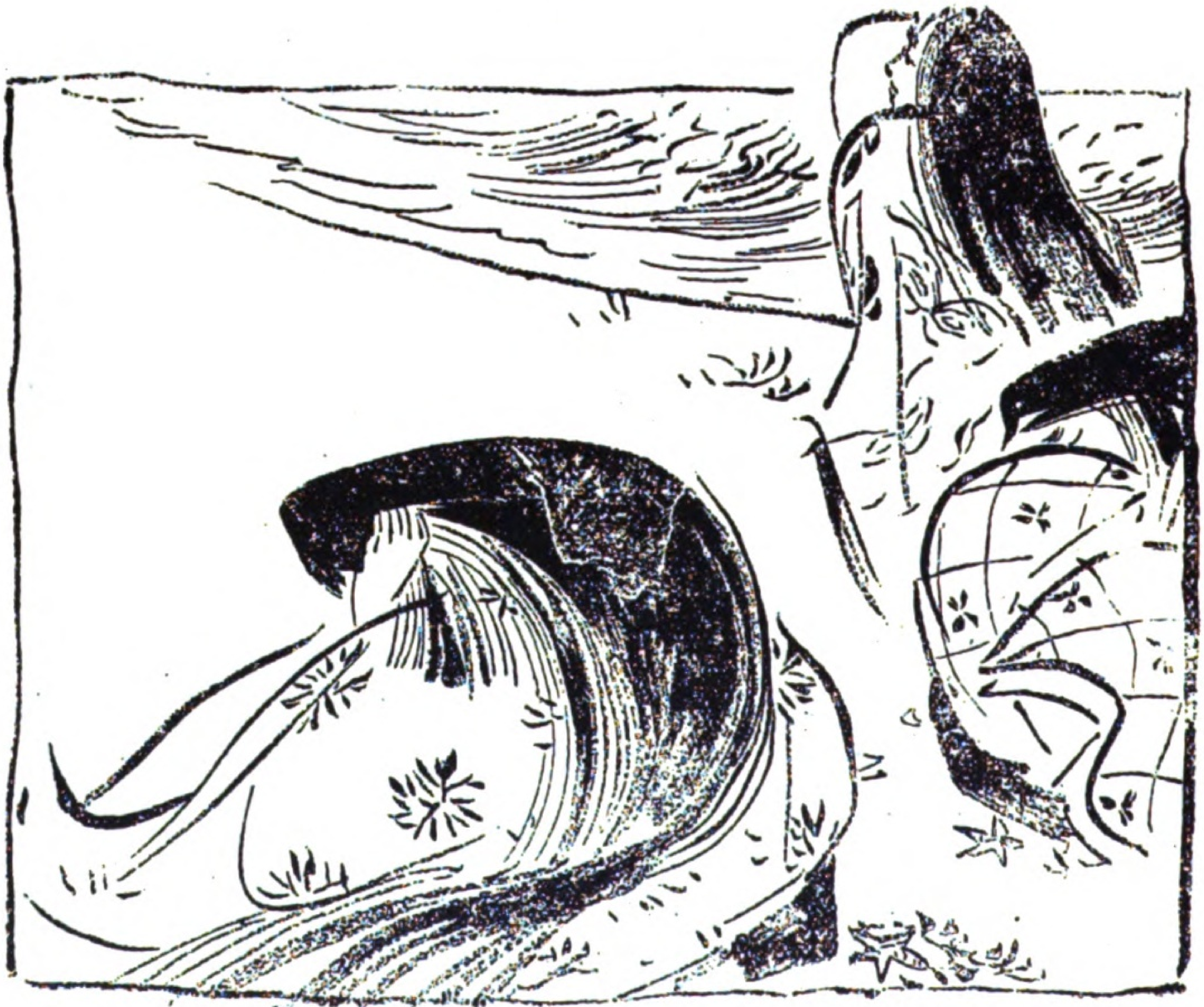
◎大物の浦風

義經、今は一刻も猶豫すべき、直ちに仙洞御所へ參內して、後白河法皇へ咫尺し、四國の地頭並びに兄賴朝追討の院宣を請ひ得たれば、久しく住み馴れし堀河の館を後にして、主從二百餘騎、攝津の大物浦より四國へ渡らんと、舟を出しぬ。

初冬の空清く澄みて軟かき日影船の屋形に射しぬれば、船遊山ならねど、飽は盡きせぬ興はありけり。義經の側らに在りける女房達、彼方此方の島山を指ざしながら、彼れなるが淡路島の岬にて侍り、此方の岬の陰なるが武庫湊にて候ふよなどゝ、皆とも打興じてゐたりけるに、其夜俄かに空掻曇りて、西風どつとばかりに吹起りぬ。水夫ども、眞向に颶風を受けては叶はじと、力を限りに島陰に避けんとすれば、颶風益益吹き荒み、黑白もわかぬ闇夜を、霰さへ音凄じくたばしりぬ。女房ども生きたる心地もなく、皆義經に縋りつぎて、幽かに神佛を念じけり。

斯く徹夜吹き荒みて義經の船の、住吉濱へ漂蕩ひ着きぬる頃は、東方の空に旭日うらうらと差昇り、一天拭ふが如く霽れわたりぬ。義經に從へる武士ども、女房達を扶けて濱邊へ上陸り、少時松の樹蔭に休息ひしに、義經憮然として衆人の者に向ひて。

我れ四國へ渡りて事を擧げんと思へりしに、武運拙く、再び元の濱邊へ打揚げられぬ。最早や船にて海路を行かんこと叶



ひ難ければ、各自一旦姿を隱して、更に機會を見計らひたる後、再び會はんことこそ、却つて心安き策ならめ。

と云へば、女房達は更なり、心雄猛き武士さへ、鎧の袖を絞る。

軈て義經、伊豆右衞門尉有經、堀彌太郎景光、武藏坊辨慶及び靜の四人を從へ、吉野を指して落ちゆけば、跡に殘されし女房達、此所彼處の松の樹蔭、眞砂の上に伏しまろび、或は袴踏みしだき或は袖片敷きて泣きけるぞ、駿河次郎等扶け起し

て、住吉の神官と共に、或は己が家に匿まひ、或は都へ送りにけり。

◎吉野山のわかれ

大路は既に塞りたれば、義經主從の流離艱難のほどは云ふも更なり。山より山を傳はり、溪より溪へ添ひて、辛う吉野山へ入りし頃は、峰の白雪積りぬる霜月の中浣なり、

曩に一度別れぬる武士の、次第々々に集りたれば、聊か心強くは覺ゆれど、時折山僧共の押寄せ來れば、何時までか此處に止り得らるべき。

義經、白雪の降りしきるを木立の陰に避けて、靜の手を執りながら、幾度か言はんとしては聲を潤ませ、斯く何時まで此山に止りたればとて、味方に集る者は少く、折々山僧に脅かさるゝさへあるを、何れ近き中に鎌倉の軍も押寄せんずらん、然れば我れは辨慶等と共に山伏に身を窶して、一先づ北國路へ逃れんと思へど、是れより先は山路嶮しく、迚も御身を連れて行き難し。御身は此處より戻りて。北白河なる母が許へ還れよかし。時世到れば、再び逢ふことの無かるべきかは。

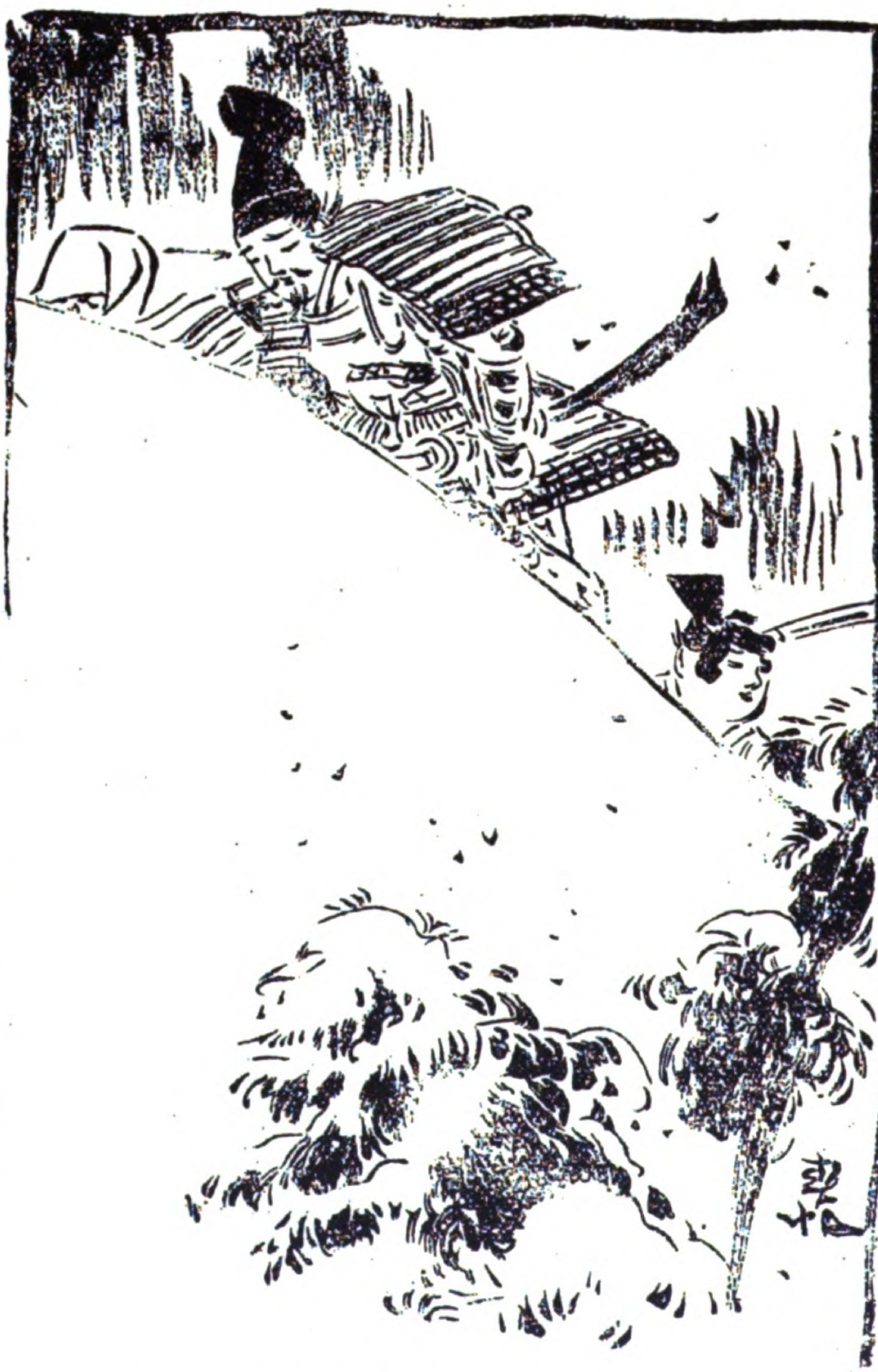
と云へば、靜矢庭に泣伏して、

此は情なき御命にこそ。君の爲めには火水の中をも厭ひまつらじと思ひたりしに。

と歔欷げて泣けば、義經、切なき胸を抑へて、落つる涙を振拂ひながら、

否とよ、御身が誠意を盡されしこと、何時の世にか忘れん。人目を忍びて具し來りしも是れが爲めぞかし。抑や此山は、役の行者が踏み初められし菩提の峰なれば、精進潔齋せでは叶ふまじきに、我身の情に牽かされて、御身を是れまで具し來りしこと、誠に神慮の恐れあり。御身は是れより還りて、母の禪師と共に住めよかし。爭で再び都の月を愛し、花を賞する時の無からめやは、是れより先は深山幽谷なれば女を連れたらんには、唯だ心の煩ひとこそなれ能く〳〵此事を悟りて、强ひて都へ還れよかし。

と、言葉を極めて諭せしに　静、涙に汚れし面を揚げて、妾を具し給ふこと、若し御煩ひとならば、豫ねて命を捧げまつりし此身ゆゑ、此所にて兎にも角にも爲して給はれよ、君が御胤を宿し侍れば、必ず鎌倉にて



も捨て置き給はざらん。御手に掛りて死なんこそ、此上なき希望なれ。

と、顔に袖を蔽ひて、潸然と泣く雄々しき義經も、哀別の情に牽かされて、互ひに手を執りつゝ悲歎に暮れけるを、折柄辨慶聲を勵して、

君には、何時まで女々しく歎き給ふぞ、早く落ちゆく支度召されよ、後

にて口惜しきことにや成り候はん。

と呼べば、義經屹と面を揚げ、懐中より鏡を取出して

此鏡こそ、朝な夕な我が顔を映しつるものなれ。見ん度毎に我れと思ひてよ。

と渡しぬれば、靜その鏡を受取りて、涙ながらに。

　見るとても嬉しくもなし増鏡
　　戀しき人の影を止めねば

と、詠ず。義經も亦た枕を取出して靜に與へながら、

　急げども行きもやられず草枕
　　しづかに馴れし心ならひに

と、一首を詠じて、尚ほ數多の財寶をば與へたる後、武士五人許りに命じて、靜を都へ送るべき用意せしめ今ぞ離別の間際になりて、

然らば是れにて別れなん、必ず又逢ふ時もありぬべし。

と云へば、靜再び泣伏して、甚とゞ幽かに、御命に從ひまつりて、お別れ申し侍れど、重ねて逢ひまつるまでは、必ず變らせ給ふな。御道恙なく。

と云ひかけて、涙に咽び入りぬ、義經なほ別れ難く、更に初音と云へる秘藏の鼓を取出して、之を與へ、扨て天を仰ぎながら悵然として別れゆけば、後ろに從へる辨慶、忠信、有綱等の英雄、等しく首を垂れて愁然たり。

義經達の一行、峰を登り、谷を下りて行くほどに靜遙かに見送りつゝ、軈て其姿の見えずなりぬる時、ひたと大地に倒れ伏して、聲を限りに泣き喚きぬ。

◎藏王權現の法樂

靜が泣き倒れし間に、彼の五人許りの武士は、何時しか心變りしつるか、更に其狀を見せず、甚と慰め顏に、

やよ、何時までか歎きな給ひそ。此山の麓には十一面觀音の立たせ給へれば、必ず宿る所もありぬべし今宵は取敢へず其處に宿を求めて、明日緩々と都へ上る支度仕らん、少時待ち給へ、某達、御宿の所を搜し參るべし。

と、靜を唯ある枯木の下に待たせて、彼の財寳を脊に負ひたるまゝ皆な山麓を指して下りゆきぬ。

稍ありて、夕暮の色迫りぬれど、彼の武士どもの更に歸り來る樣子もなきに、靜は、扨ては欺かれたるかと胸底漸く騷ぎそめ、心も心ならず四邊を見廻せば、十六日の月影清く杉の木立より洩れて、雪は何時しか降りやみたれど、皓々皚々、彌が上に積りぬれば、何處を路とも更に分たず。尙ほ暫時途方に暮れて佇立みしが、空しく時刻のみ過ぎゆけば、今は自から路を求めて山麓へ出づるの他詮術無けんと、雪の明りを便にして、峰を上り、谷を下り、何處とも判らず彷徨ふほどに、耳に聞ゆるものは杉の枯葉を渡る風、目に遮るものは梢を照す月の影、仄かに谷蔭にあたりて人の耳語ぐ聲すと思ひて辿りゆけば、雪の底を潜る溪水の流なり。思へば戀しき人も斯る途にや行き暮れ給ふらんと、悲しき涙せぐり出でつゝ遺物の鏡を取出して眺むれば、涙に曇りて己が姿すら見えわかず。木末岩角に積りたる雪の、折々殊に吹立てられては、吹雪をなして行手を鎖しぬ、靜、なほ進み進めば、着たる笠も風に奪はれ、穿きたる草鞋も雪に取られて、痛ましや足踏み破り、血汐流れて、峰の白雪唐紅に染みてけり今は足かゞまりて呼吸つかれ、一足も得ゆかれねば、唯ある岩陰に倒れたるまゝ、一夜を明しぬ。

明くれば十七日の朝なりけり。靜、疲れたる身を起して、其日も終日山路を彷徨ひ、幾度か谷底に轉び落ちんとしつゝ、夕暮に至りて、辛う遙か彼方に火影を見出し、嬉しやと思ひて痛き足を曳きながら辿りゆけば、其は藏王權現の燈籠の燈火にて、此日、緣日なればや、猿樂の舞、白拍子の舞などの催しありて、道者達數多充滿たり、靜徐ろに神前へ進みて伏拜み、念珠を爪繰りながら、飽かで別れぬる判官殿の御身の上を守護り給へや、今一度御引合せ給はれやと祈りしほどに、側らに伺ひゐたる若き道者、靜の美しき姿を窃しく思ひて、軈て拜み了るを待ち、

御身は如何なる方に候ふや。

と問へば、靜甚と低聲に、

妾は、申すほどの女には侍らず。

と答へぬ。若き道者は猶ほも推返して、

詐りな曰ひそ。斯る山里に御身のやうなる美しき方の住める理由なし、何處に住み給へるにや。

と頻く問へば、靜俄かに應答の言葉も出でざりしを、折柄品好き老僧出で來りて、若き道者を退けながら、靜に向ひて、

藏王權現は靈驗炳然にましませば、若しや御身に願ひごとあり給はゞ。法樂(奉納の舞)をば仕り給へ必ず思へることの叶ひ候はん。

と云ひぬ。靜、初めは固く辭したれど、且つは再三勸められ、且つは靈驗炳然なりと聞きて、起ちて法樂を舞ひけるに名にし負ふ日本一の舞の名手なれば、見る人皆な唾を呑みて感じ入らぬはなし、其舞酣の頃、謠ひて曰く、

ありのすさみの、　にくきだに、
ありきの跡は、　戀しきに
ありて離れし、　面影を、
いつの世にかは、　忘るべき。
別れの殊に、　悲しきは、
親のわかれ、　子のわかれ、
すぐれて實に、　悲しきは、
夫妻の別れなりけり。

と云ひもあへず、涙を流して、衣打被きさま泣伏しぬ見物の人々打驚きて、此は唯の婦人にはあらぬぞと騒ぎあへりしに、一人の老僧衆人の者を制しつゝ、靜を抱き起して、

然のみは歎き給ひそ。愚老は能く御身の上を知りて候ふ、何時かは必ず判官殿に再會の機會も來り候はんほどに、然のみは歎き給ひそ。

と慰めつゝ、己が坊へ連れてゆき、何くれとなく勞はりぬ。

斯くて此老僧は、三十日許り甚く懇ろに靜を待遇し身も心も稍々恢復れたる後、馬に乘せ、供人をさへ附添はせて、都へ送りぬ。

誌友倶樂部

▲五月號面白く拜見致しました、あの卒業生の行會お出しになりました大原あや子樣、讀で無量の感慨にうたれました、君とおなじ願ひの私はまだ高女卒業してから一年にしかなりませんそれでも友のおとづれはとだえがち、永久に永久にとちかつた親しい友のおとづれさへも……私等も卒業の時は感謝のうた歌ひました、そしてクラスメートも三十三人、ほんとにどうしてこんなに似てるのでせうおなつかしくてよ。(新領土の名なし草)

▲河岡潮風さんの作一番面白く拜見いたしました、私も實は外交官夫人志望でした、そして昔柳はる子樣のやうに、敏腕を振るはん事を夢見つゝありましたが、一年に二人や三人ではとてもこれから白晝の夢を醒しますの。(君子)

▲かりがね樣の御ほせの通り、木蘇の三幅對と御はやされ遊ばす其一人の萩香樣の潮吟、非常に面白く拜見致してよ、けれどもがつかり力のぬけたのは、あや子樣のがのりませんでしたの、ほんとに力がぬけましたよ、每月三幅對の中どなた樣でも御一人御かけ遊ばすとなんだかものたりない樣ですね。(小竹)

▲青葉のかげにほとゝぎすの泣く時季となりましたね、花やかな女學校を出てから何一つ樂しみとてはなく、只女學世界を一つの親友として淋しく暮して居ます、願はくば都の諸姉よ御交り給ひてよ。(鹿兒島、瑞末の露)

▲サア〳〵皆樣園藝好適のシーズンとなりました、夏秋の候に亙り、艷麗なる咲花を得んとし給はゞ、種子の選擇が肝腎です、朝顏種珍種一粒に付き、參錢以上當國位のものまで、誌友に限り分讓致します。(信州三留野青木恒子)

▲萩香樣の潮吟はなか〳〵振つてますね、露づさんのいふ事、マダム振つた御容子よりこの方はどうしても處女でかたい方がずつといゝわね、玉露樣のいふこと、どうしても萩香樣より姉樣ね、思想といひ筆つきといひ、私大すきよ物集先生はどうなさいましたの、この次にはぜひおかき遊ばして下さいますやうにこの頃は與謝野樣の御說かたいそうおしづかになりました事ね。(赤坂すみ子)

▲千代子樣度々の御才筆、感服の外はありません。私の見解では當つと女でゐらつしやると存じます、御寓人萬樣との纏綿たる情合など、巧みに描寫してゐらつしやるところ、到底眞の女子でなくては能はぬ事と存じます、無論眞樣とか文學に御堪能な方が、多少援助は遊してゐらつしやるのでせうけれど。其筆の巧妙な事、不知不識其渦中に卷き込まれて、全くチヤームされて了ひますわ。(殘る花)

▲諸姉樣方よ、身にあまる御優しい玉章や美しい名所繪葉書御惠み下さいまして誠に難有う存じます實は直接御禮申上なければなりませんが何分澤山の事ですから誌上で厚く御禮申上ます。(最上郡炭澤後藤文子)

▲玉露樣の思出の記實によろしゆうございましたわ、ほんとうに何時も御上手で、これからもどし〳〵。(くら子)

▲四月號に姉が「ツヶアゲ」の製法を出しましたら、まあ!!! 意外にも入賞で御座いましたのね、姉の喜こびたら記者樣にお見せ申たう御座いましたわ。(長谷場純子)

▲誌友の皆樣の中で、渡米なさり度方々が御出の樣子ですが、私は昨年の八月迄彼の地にて滿七ヶ年と九ヶ月間、苦學致した一人で御座いますが、先づ大平洋沿岸では、自活の道は誠にたやすい事で御座います、けれども女子の方々は決して彼の地に、保護者なしに御出になつてはいけません、それは一度渡米せし方ならでは、判りませんが先づシヤトル市かタコマへ御上陸の方は、シヤトルのメソヂスト教會の婦人ホームを御たよりなさい、同ホームは吉岡牧師夫妻の

監督のもとに、それは親切に御世話が行き屆き升、其の他バプテストの婦人ホームがあり升が是はミス、フアイブの監督のもとに經營されて至てよろしい様子です、又桑港へ御上陸なさり度方は、同港メソヂスト教會の婦人ホームを御たよりなさい、米國婦人の監督のもとに、澤山少女を預り居り升、十歳位ゐより朝夕家事の手傳をさせながら、小學校より中學校へと、順をおうて進學をさせて居られ升が、監督はよく行き屆ています。(中村)

▲すゞしろ様へ四月十五日增刊のさま〳〵の家風の內、二十五圓强盗の生活は非常に感心して拜讀しました、私も御同様薄給者の家內で、日日生活には頭を痛めて居ります、御說に付いて御伺ひしたいは、御主人様の御勤め先きが御近所か、又は市內で御座いますか、御近所なれば全部御說が適ひますし、市內としますと京濱電車(定期又は回數)と東京電車賃(割引又は回數)とで三圓位はかゝりますか、何れの所から御出ましになります、何だか實際に御經驗の御生活とも思はれません、又出來た子供の名前で地所を求めるは甚だ結構な事でせうけれど、御役所の方か非常に面倒で、一寸覺束ない様な氣かします、是れも伺ひます。(日本はしかなる女)

▲記者様、私は女學世界の愛讀者で御座います田舍に居りますので都會の美しい面白い様も味ふ事も出來ませず、唯々女學世界を一番の友と致して居ります、中にも草花栽培法を樂しんで拜見してます、つきましては日頃のつれ〳〵に朝顏を作りたいと思ひますが、どうも作り方を存じませず、誠に恐れ入りますが何うすれば大きう花が咲きますか、どうか作り方を誌上にて御敎へ下さいますやうに御願します。(山の女)

▲記者様、御初に御目にかゝります、私は七年以前より愛讀して居りますが、まだ一度も御挨拶も致しませず、失禮御免し下さいませ、これから少し皆様の御仲間入りをさして戴き度ふございます、何分宜敷御願申ます、一寸伺ひますが、原稿用紙てなくては特別寄書は出來ませんか、亦振り假名も致しますのですか、ほんの田舍者で御恥かしい事ですが、何卒誌上にて御敎示を願ひます。(平塚驛町通り笠波すみ子) ——原稿用紙なければ普通の半紙にてもよろしく、振假名はある方が便利です。

▲純子様、まだ見もせぬ、私の一言に、かくまで厚き御言葉に接し、感謝の外御ざいません、まことと、三とせに渡る御わすらひとや、人ごととは思へません、これで神の結びし緣しかと存じます、どうかして、あなたの淋しみも分ちて戴きたう存じます、大切な誌面ですから、京橋區長崎町一ノ七鹽谷もり宛にして、一ひらの御假り下さいますならば、嬉しくお返し事いたします、さらば幸ち多くお在せ。(夢子)

▲私は何か內職を致し度いと思ひますが、皆様の中で御存じのお方は、お世話下さいませんか御願ひ申します。(弘前市元寺町三四齋藤方佐々木)

▲記者様に伺ひます、婦人にて名のある體操の先生は何と云ふ御方でせうか、御名前と所番地をお敎へ下さいまし。(神田菊子) ——井口あぐり様でせう、お所は小石川區高田老松町四十五番地です。

▲記者様へ御尋ねいたします、普通の投書は、如何いたしたらよろしいのでございますか、用紙その他のことおしらせ下さい。(東京啓) ——一枚二十字詰二十行位の原稿紙に認め、女學世界編輯部宛にてお送り下さい、其の用紙がなかつたら、普通の半紙でも構ひません。

▲諸姉様の御內で、昨年十二月の本誌御持合せの御方は御惠み下さいませんか、御願ひ致します、御禮には新茶を心ばかり進呈いたします、手製ですから御口にはあひませんでせうけれども。ホヽヽヽ。(美濃加茂郡蘇原今井智惠子)

▲河岡先生、此の節は御病氣はいかゞです、昨年よりも本年は天候が不順故、お身にお障りが

ありませんでしたが、蔭ながら心配致して居ります。何卒お身大切に、一日も早くお丈夫のおからだになるやうに、御恙愛遊ばして下さいまし。(群馬縣相生町櫻の一葉より)

▲記者様、寫眞を御送り致したいのですが、御用ずみ次第御返し下さいますか、郵券は添へて差上ますが、如何です。(深川にて楳ばち)―お送り下さい、用濟の上はすぐお返しゝます。

▲今年一月の夢みる花様の御作、四月號のみさご鳥様の若き藝妓何と御よみ遊してこの御二方千代子様が世をしのぶ假の御名ではございませんか、どうも御筆の運びがよく似てますやうれ。(矢すみ子)

▲記者様お手をお痛め遊ばしたさうで、私も原稿をピンでとめましたの、ヘイカツた譯でも御座いませんが、お許し下さいませ、あの、それから、懸賞募集で賞に入つたものでも、賞をお送りになりますのは二三の方だけですか、そんな事は御座いませんでせうれ、それから、五月號の秋香様の鋼時計は今迄澤山拜見したお作の中でも殊にわたくしは好きでした、あや子様の卒業生の行衞、ほんとに仰しやる通りですれ、なぜ多くの女といふものはそんなに水くさいものでせう。(花筏)―記者曰く懸賞は決してそんな事はありません。

▲四月號の田中儀子様の「墓窟の百日咳に寄れし愛兒の命」といふ記事を讀み、實に同情に堪へません、私も七年前生後百日許の男子を百日咳にて失ひ申候、其經過といひ、臨終の様子といひ、寸分違はず、今更の如く其當時を思ひ涙に咽び申候、世には私と同じ運命にて愛兒を失はれし方もあるかと思ひ、實に〳〵其の御心中を御察し申上ます。(愛讀者の一人)

▲花輪ゆり子様の(現實の光)、うれしく拜見致しました、「面かげ」は私もくり返し〳〵て拜しましたの、あの、月波川下の病詩人の君、なつかしく〳〵心からお慕ひ申してゐますの、私も一度、只一度でよろしい、それも御目もじなぞとは願つても迚もかなはぬ事、お手紙でも頂きたいと願つて居ます。(たづ)

▲碌石の町で馬車と別れて、只今つきました、こゝは海拔四千尺、眞黄色な山吹の盛です、遠く甲斐の連山、近くは大淵巴取の山々が手に取る様に見えます、社の後の大きい鐘は夕方につくのださうです、この頃でもまだランプは用ゐません、行燈です、しかし私はこれが又一種浮世と飛びはなれた所の様に思はれてなりません、たまらなくなつかしいのです、西の山がボツト薄暗くなつて來ます、明日はお山のスメンプの有る繪葉書をお送り申します。(埼玉香雪)

新刊紹介

△紅葉遺稿　尾崎紅葉著　尾崎紅葉氏の遺稿修善寺行、病間録、俳草盛を慕むの記、其他小品數篇を集めたるものなり、修善寺行、病間録は簡潔なる日記文の模範たるもの文豪の面目躍如として聲あるが如し、定價九十錢、小石川竹早町博信堂發行

△生田流箏曲譜　吉水檢校著　箏曲に熱心なる増田眞藏氏今回故吉水檢校の遺稿箏曲數十番を剞劂に附して斯道に裨益せんとす、多少箏の手を心得たるものこれを便りにして曲を學ばば親しく師の教へを受くるが如く、造詣すること深かるべし、既に刊行せしは手引草、末の契、黒髪、高砂等の數編にして以下逐次刊行の由青山南町六、生田流箏曲譜發行所

△健康の生活　水野和一譯　本書は紐育教育局長、にして醫學博士ギユーリツク氏の著を譯したるものなり、主として積極的衛生の見地より立説して、活氣、體力の増進を説き健康にして且つ愉快に努力し活動し、天年を全ふすべきの方法と工夫とを説きたる良書也、價四十錢博文館發行

△音樂初歩　天谷秀著　著者が多年教授上の經驗に徴し、音樂の基礎たる樂理及唱歌の一般を極く平易に解説せしものなれば師範、高女の教科用及小學教員の參考書として且つ好學士女の獨習書として適當の良書なり、定價五十錢金港堂發行

募集（六月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數十二册　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

不許複製

明治四十四年五月廿三日印刷納本　第拾壹卷第八號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

通信販賣

博通社特賣品

安心の出來る買物は博通社に限る!!!

佛國式小供夏洋服

多年佛蘭西にて研究歸朝せし裁縫專門技師擔任製作御求めに應ずるのでありますから如何にハイカラ向でも、上品向でも、愛らしい向でも御自由に御指定を願升其の上裂地は佛國品で作るのでありますから染色の確實なる當社の保證する處であります



●地質 舶來セッパル

⊙男子二歳より五歳まで 特價四圓八拾錢
⊙男子六歳より八歳まで 特價五圓八拾錢

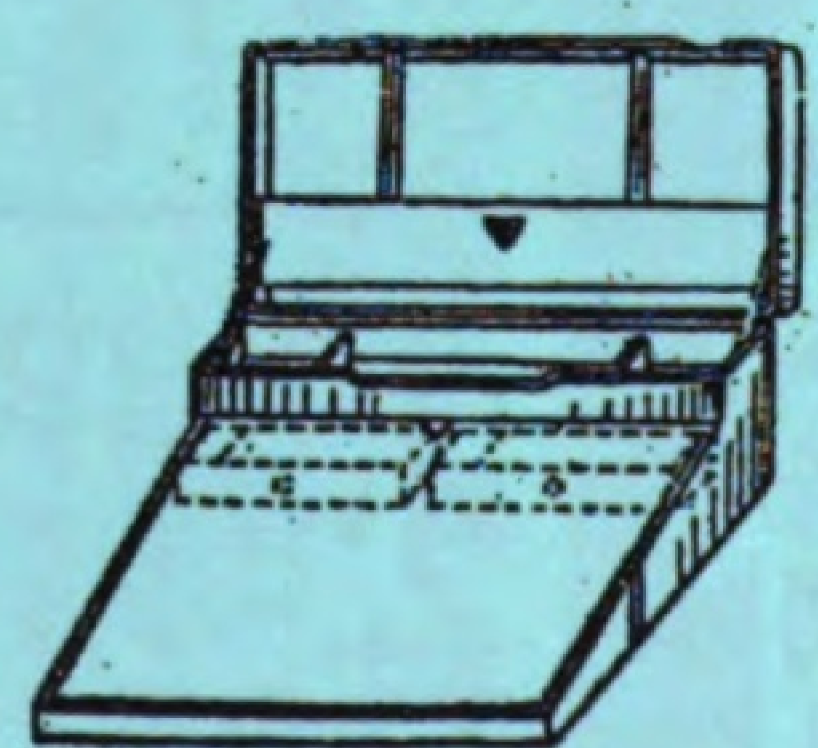


●地質 舶來セッパル縞及模様付

⊙女子二歳より五歳まで 特價三圓八拾錢
⊙女子六歳より十歳まで 特價四圓八拾錢
⊙女子以上十五歳まで 特價六圓五拾錢

▲送料市内八錢内地廿五錢海外四十五錢

折疊自在 家庭用手提文庫



開けば寫字臺となり、閉づれば至極重寶なる手提金庫となる、構造精巧堅牢にして便利有益なる家庭用具としての逸品であります

⊙眞正欅木製全長一尺三寸厚五寸五分 上製 特價三圓八拾五錢
⊙眞正欅木製全長一尺一寸厚四寸五分 ニッケル金具 特製 特價四圓八拾五錢

▲送料市内無料内地卅錢海外六拾錢

新案ネットテニス



野外運動の好季節!!! 本具は圖に示す如く兩手にて柄を握り網を強く開く時はゴムの彈力にて球は高く飛揚し互に落ちざる樣受渡しする頗る興味深き高尚なる運動具であります

手網貳個球壹個美麗函入 特價五拾五錢

▲送料市内五錢内地十二錢海外卅五錢

御手紙一本で何でも御求めに應じます!!!

大橋メール、オーダー、ビジネス

博通社

東京日本橋區本町一丁目

振替口座東京五十番
電話本局六百四十番

女（後付の二）

博文館創業第廿四週年紀念

列強外交時局

洋裝四六判紙數二百六十頁
正價三十錢
郵税（本誌限り）四錢

六月十五日發行

太陽 第十七卷第九號 增刊

□日英同盟の現状及將來
□三國同盟の現状及將來
□三國協商の現状及將來
□獨露の新關係
□佛獨外交の近狀
□近東の外交時局
□清國近時の對外關係
□露國戰役の極東外交
□中東の外交事情
□摩拉哥近狀
□米國近時の極東外交
□獨逸對米國關係
□北米對中米

◎外交家としての獨逸皇帝陛下（月旦）
◎外交家としての新舊米國大統領（月旦）
◎英國外相グレー卿（月旦）
◎デルカッセ氏（月旦）
◎獨逸宰相ホルウエヒ卿（月旦）
◎澳國外相エーレンタール伯（月旦）
◎小村外務大臣論（帝國近時の外交評論）
◎日本遣外使臣傳
◎帝國外交今昔談
◎列國外交奇聞
◎英皇戴冠式寫眞（口繪十八頁滿載）

東京 博文館 本町

中學世界 拾四卷 第八號 增刊

修學旅行

夏は來る。夏の天地は、實に活潑々地の青年獨占の舞臺にして、山容水態、古蹟景勝、到る處、其の寶庫を開いて吾人の智識慾の充實と、心身練磨の機會を供しつゝあり。此時に當り、中學世界はこゝに『修學旅行』の一卷を增刊して、十數萬の讀者諸君を日本本土並びに新領土の各方面に案內し、旅行の目的を極めて有益有趣味に達せしめんとするにあり。而して、これが同行者としては、文學、理學、工學、林學、農學等の諸博士に依囑し、旅行中、各得意の題目、例へば、修學旅行の心得を始め、史蹟、名勝、建築、風俗、海、山、動植物、森林、工業等の興味多き講話を得るものとす。又、別に、當代有數の紀行文家の健筆になれる夏季旅行記數篇あり、且つ、壯快なる世界の名山探險、蠻地探險、不思議國旅行等の記事同時に滿載せらる。洵に季節的絕好の讀物！



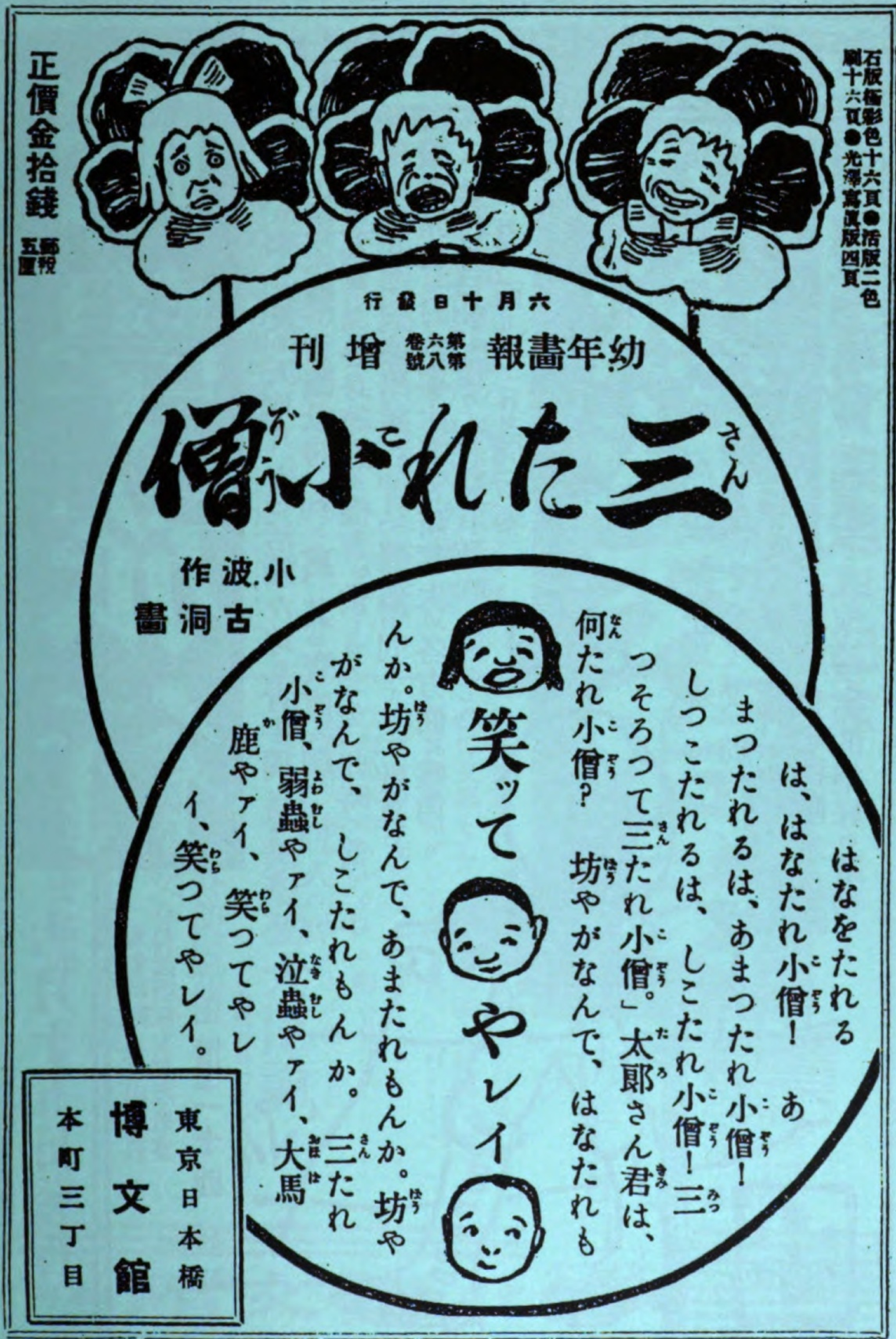
六月十五日發行

菊判紙數二百四十頁
口繪石版寫眞版豐富

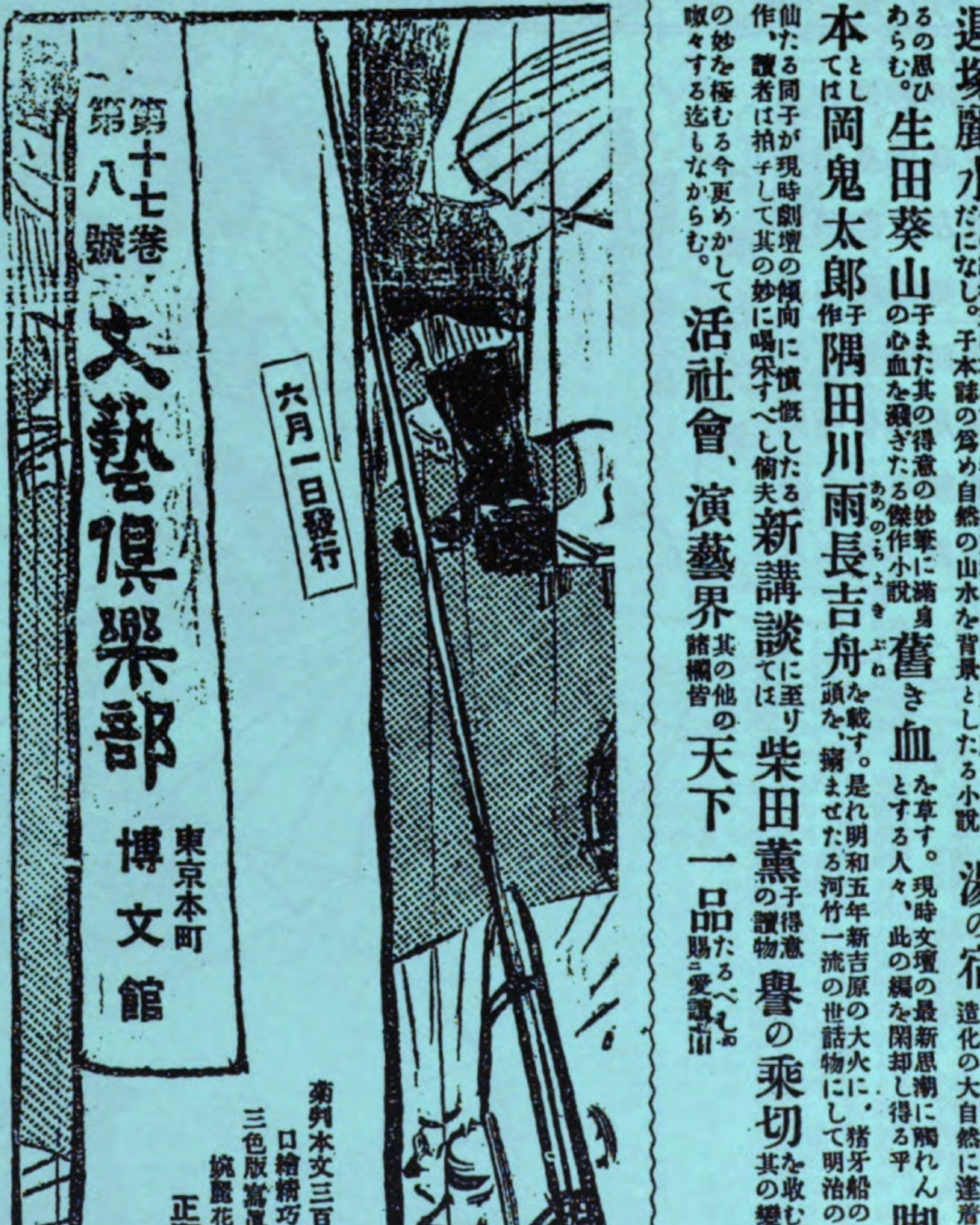
正價二十錢 郵稅二錢

東京 本町 博文館

女（後付の三）


石版極彩色十六頁●活版二色刷十六頁●光澤寫眞版四頁
正價金拾錢 郵税五厘
六月十日發行
幼年畫報 第六卷第八號 增刊
三たれ小僧
小波作
古洞畫
はなをたれるは、はなたれ小僧！ あまつたれるは、あまつたれ小僧！ しつこたれるは、しこたれ小僧！ 三つそろつて「三たれ小僧。」太郎さん君は、何たれ小僧？ 坊やがなんで、はなたれもんか。坊やがなんで、あまたれもんか。坊やがなんで、しこたれもんか。三たれ小僧、弱蟲やアイ、泣蟲やアイ、大馬鹿やアイ、笑つてやレイ、笑つてやレイ。
笑ッてやレイ
東京日本橋 本町三丁目
博文館


第六卷
第八號
六月一日發行
少女世界
菊判紙數百二十八頁
口繪石版寫眞版澤山
正價十錢　郵稅一錢
▼口繪▲
子供の遊び(三色版)……ハンストーマ筆
さみだれの宵(石版)……河合英忠筆
お緣側、天平時代……
學校寫眞、紳田少女會……寫眞版
▼記事▲
梅島先生……巖谷小波
マリア、アットネット……武居敬論
無言の令孃……黒田湖山
少女の涙……西村渚山
卯の花垣……伊藤初音
生の樂園……武田櫻桃
虹の橋……木村小舟
手提袋の編方……石井とみ子
學校だより……記者
手帳の中より……沼田笠峰
はゝそ葉……三宅花圃
關西旅行記……巖谷小波
◎少女會館
は文學、和歌、俳句、筆蹟をはじめ顧問室、娛樂室、談話室等ありてさながら百花の咲き亂れたるが如し
東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇番



遲塚麗水子の紀行文に巧みなる現時の文壇殆ど其の壘を摩するものだになし。子本誌の爲め自然の山水を背景としたる小說**湯の宿**を寄す。讀者は繙きて、造化の大自然に逢着するの思ひあらむ。**生田葵山**子また其の得意の妙筆に滿身の心血を濺ぎたる傑作小說**舊き血**を草す。現時文壇の最新思潮に觸れんとする人々、此の編を閑却し得る乎。**脚本**としては**岡鬼太郎**子作**隅田川雨長吉舟**(あめのちょきぶね)を載す。是れ明和五年新吉原の大火に、猪牙船の船頭を、擲ませたる河竹一流の世話物にして明治の劇仙たる同子が現時劇壇の傾向に憤慨したる作、讀者は拍手して其の妙に喝采すべし。**新講談**に至りては**柴田薰**子得意の讀物**譽の乘切**を收む。其の變幻の妙を極むる今更めかして嘖々する迄もなからむ。**活社會、演藝界**其の他の諸欄皆**天下一品**たるべし。乞ふ賜二愛讀一

第十七卷
第八號

文藝倶樂部

東京本町
博文館

六月一日發行

菊判本文三百廿頁
口繪精巧木版數十度刷錦繪
三色版寫眞版
婉麗花の如き者數枚
正價金貳拾五錢
郵稅二錢五厘

文藝倶樂部 第十七第六號 增刊



菊判紙數三百廿頁
口繪極彩色錦繪
及艷麗なる美人の
寫眞版十數葉挿入

正價金二十五錢
郵稅二錢五厘

口演者氏名

三遊亭圓喬	鳳龍齋貞水
神田伯山	十橋亭りう馬
柳亭燕枝	蓁々齋桃葉
神田松鯉	柳家小さん
柳亭左樂	西尾麟慶
錦齋典山	橘家圓藏
三遊亭圓右	一龍齋貞山

首無女、五人殺、行李詰死人等、兎角世間は物騷です、が天網恢々疎にして漏さず、惡人の末榮えた例は有りません。本誌は四月十五日を以て、「勸善懲惡白浪集」を發行致しましたら、驚くべし世人の喝采は炎天に撒水を撒くが如く忽ち賣り盡して**再版**の止むなきに至れり、乞ふ再び乾き盡らぬ内速かに購求あれ。

女(後付の入)

女學世界
（每月一回廿三日印刷納本）
（明治四十四年五月廿三日印刷納本）第拾壹卷第八號（明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

ほんとに嬉しい此頃私の化粧の出來榮え



▲朝は

クレームレートをつけた其上へレート白粉でお化粧すると乘りも伸びも心のまゝで振ひ付く程きれいになる

▲晩は

レート化粧水の方を用ゐるとすが〱しい心地、芳しい匂ひ、まるで私の體が薔薇の花にでもなつたやう！

定價金貳拾錢●郵稅貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版84
明治44年5月（第11巻第7号）、6月（第11巻第8号）

2010年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3907-1

女學世界
（毎月一回廿三日印刷納本）
（明治四十四年五月廿三日印刷納本）　第拾壹卷第八號　（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）



定價金貳拾錢●郵稅貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版84
明治44年5月（第11巻第7号）、6月（第11巻第8号）

2010年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3907-1